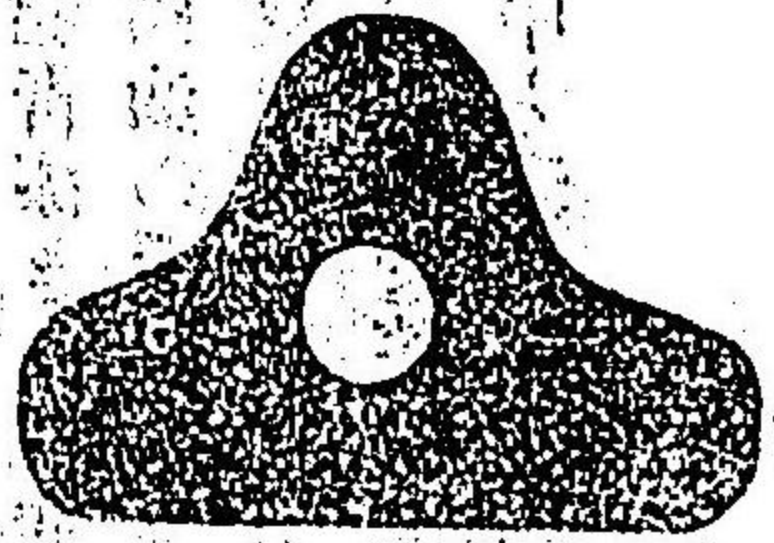
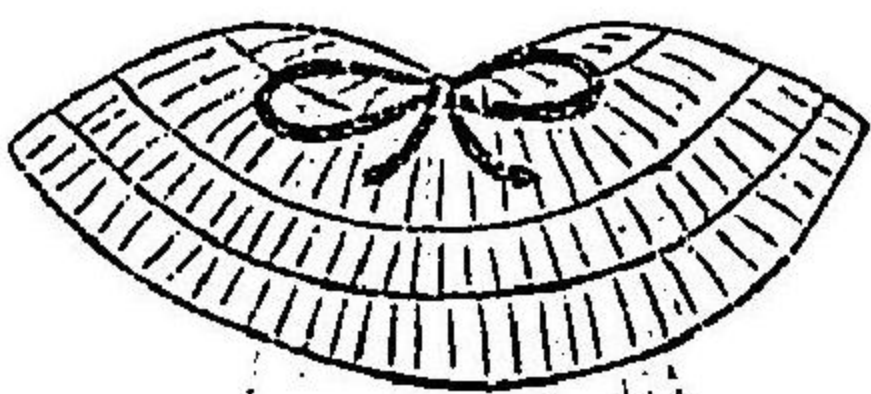
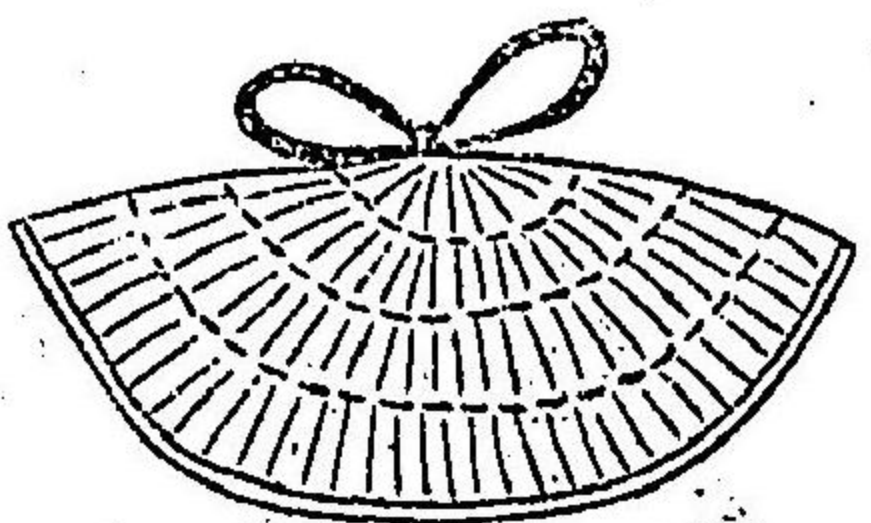


後大笠も拵へたり二尺四寸ばかり甚だおもしろ雨笠



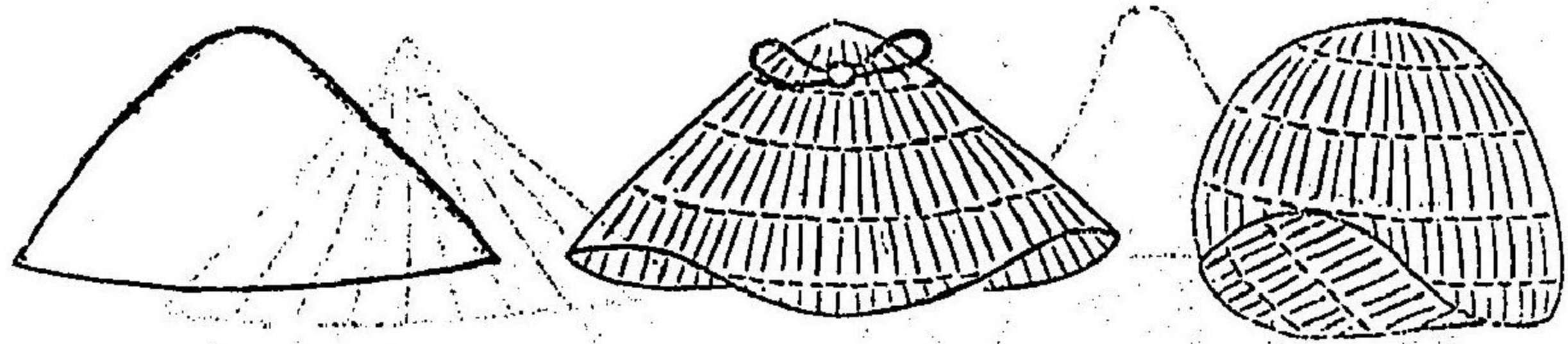
百重はりの陣笠信長公の時作る所なり身に革具足を著し頭に是を冠る雑兵の具なり治世になりて後武家の夏火事に冠る享保中より町人四季ともに火事の節冠る享保年中よりいろは組の火消町々に役を務む依之人足小者等下地竹にて綱代に紐せ紙にて張墨にて染瀝にて止む
延享頃より鉄砂を塗こみ或は模様を置て冠る此笠火事のはれに用ゆるゆへはやるなり

○古來は男女ともに編笠を冠り元文迄餘風有延寶天和より上方下り笠あつて是より平かさを冠るなり



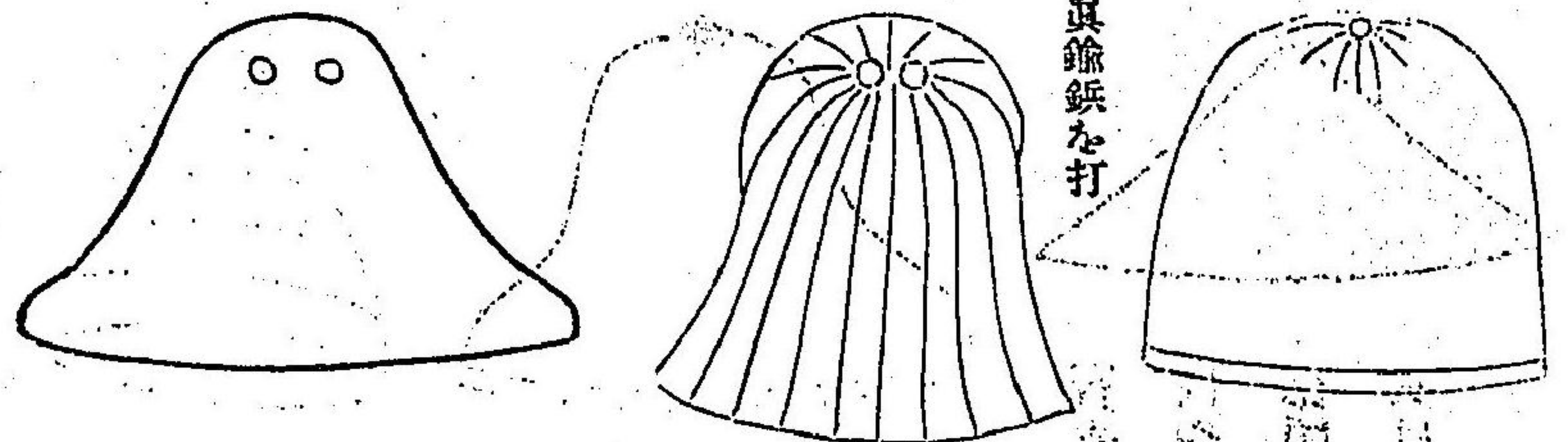
古來より是を冠る女の編笠もみ絹或は淺黄の紐引通してかむる一文字と云延寶の頃までいぬき笠也

男はいぬきの深き笠折形にして冠る男伊達風なり平人は折形なしそのまゝ冠る



小あみ笠ほうづき賣風車賣の子供笠なり鎗持奴は冠るもあり
天和頃より武士熊谷笠を冠る引通しひも白し役者古來は一文字笠をかむる是よりくまがいになる享保年中より丸き儘にて冠る醫師武士計なり町人は用ひず一文字は組引通さず冠る蚊帳賣帷子賣皆冠る熊谷にてはなしあみがさ也
上總より出るでん中と云菅笠なり伊勢より来る貞享よりはやる女も之を用ゆ元祿迄女は紙を四角に折てあごひもへあて口をかくす正徳よりなし武家は賣水頃迄有し

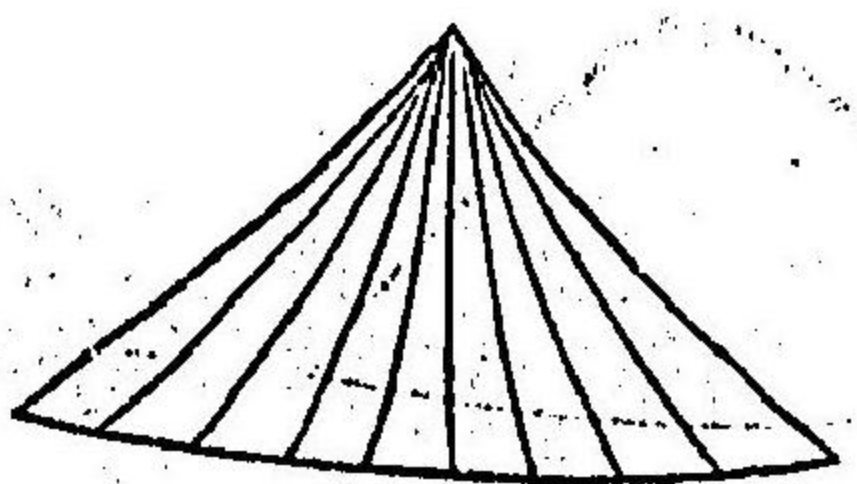
眞鍮鍔を打



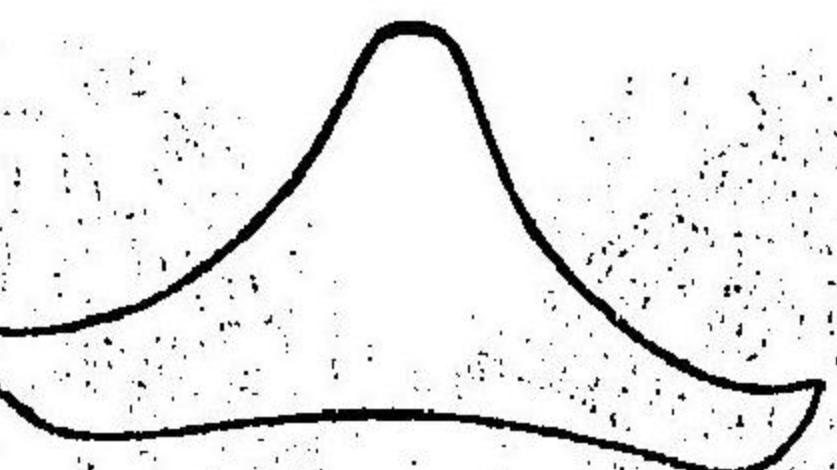
貞享の頃より三度笠とて飛脚馬上にて眠り落馬しても鼻をうたぬやうに深くしたる菅笠旅人がむる者多し享保の末より道中笠に定る

慶長前より經木を以て作る上紙を濫張にしてために塗て上方より下る僧の笠也道心者は不許冠事

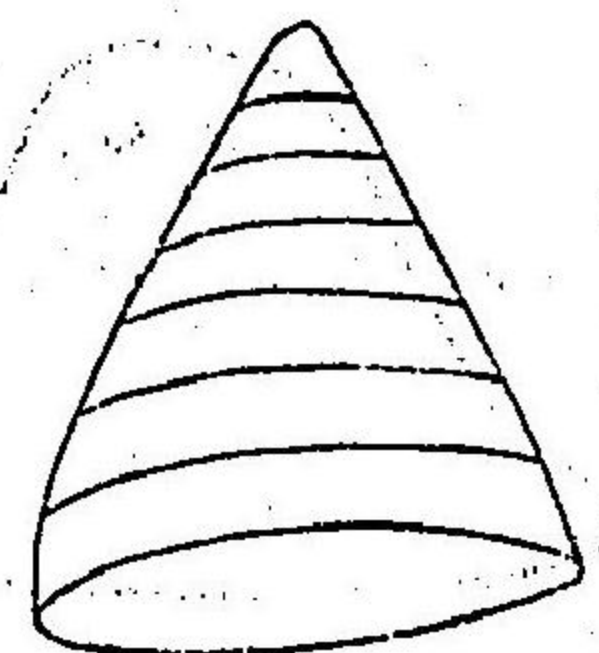
網代笠古來よりあり竹をあみたるなり但濫にてはき漆にて止めたるものあり大方白なり僧のかむるものなり天和のころより上方より下るなり



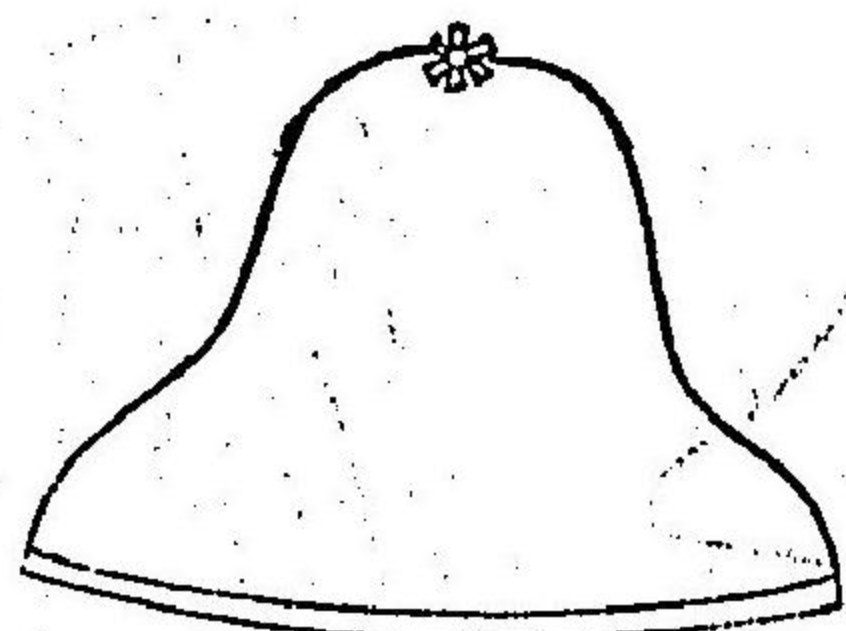
元文元年より經木笠を杉形に作る平人の冠りものとす濫張塗止め両面にしてきれいなりためぬり黒青しつ或は黄あり上方より来る



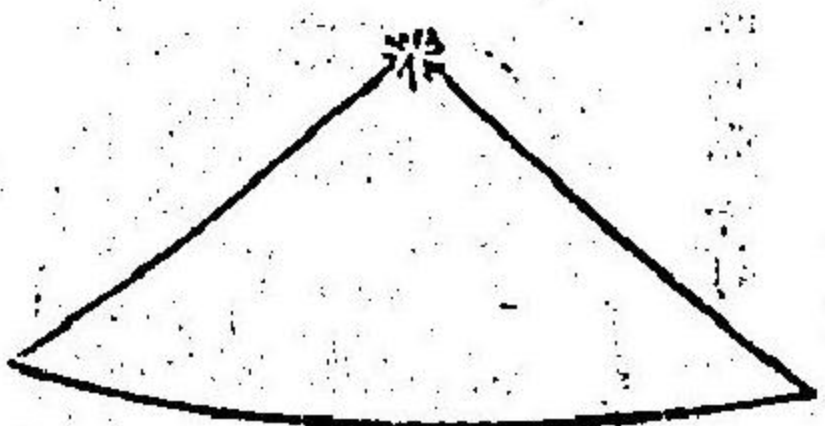
網代ばりとしてふちを反したる笠なり杉形より二三年をそし小身衆馬上みな是なり御納戸衆御扈從衆多し皆赤ぬり延享より陪臣もこれを用ゆ



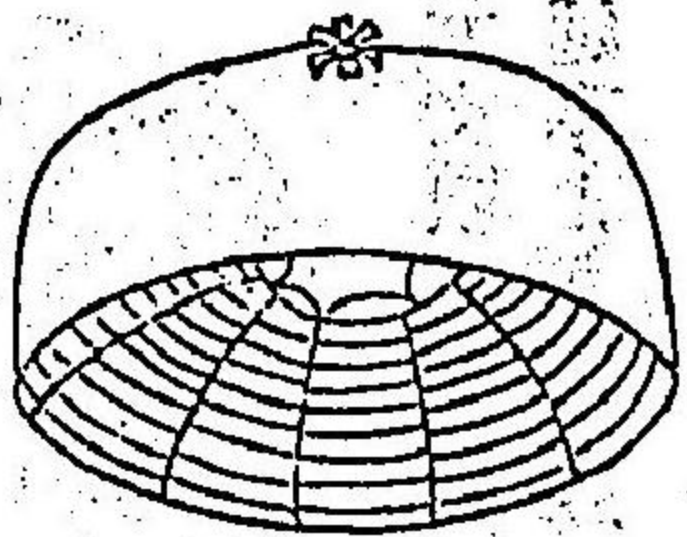
はちく竹がさばいしりと云地にて作る下りはなし元文よりはやる元と釣人の笠なり釣竿のふちへさはらぬ様にした



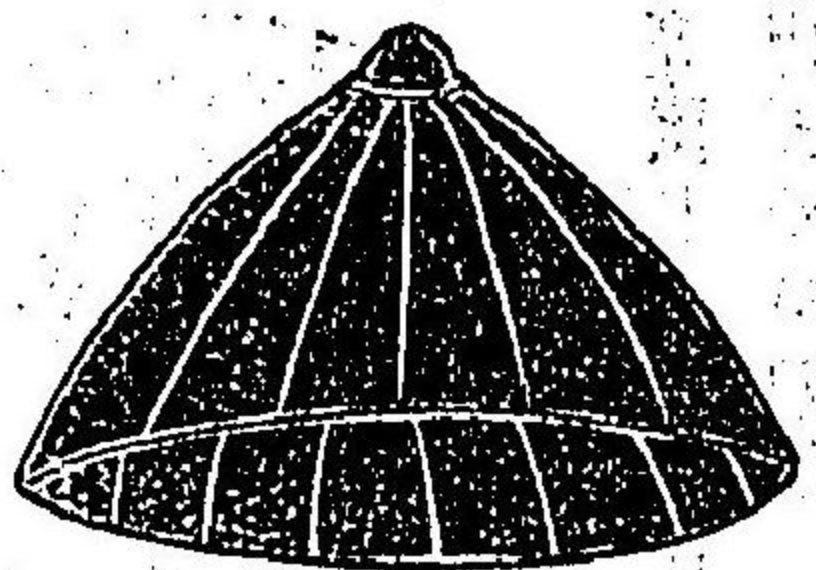
天和の頃より加賀笠大名衆女の冠りもの也前を竹にて止めたり寶永末より縁を針金にて止る上總より出ず天和頃は内を菅にて半分ふきたり正徳より内一ぱいにふく絹糸ぬひ奇麗也



寶永より始て杉形のすげ笠大にはやる武士町人すべてかむる正徳頃上笠出る絹糸ぬひ針金どめ次はあさ糸ぬひ也



寶永以來菅笠の内ふちまでふきたり止り淺黄のはた糸寶永迄は笠あて菅ひも淺黄の加賀ひも細く笠あても尋常也正徳よりもみにする享保笠あて大ぶりになる或表白裏もみの笠あて出る元文より駿河町越後屋にて色々の笠あてを賣る黒ちりめん紅うら緋ちりめん兩裏黒びろうど紅裏等なり

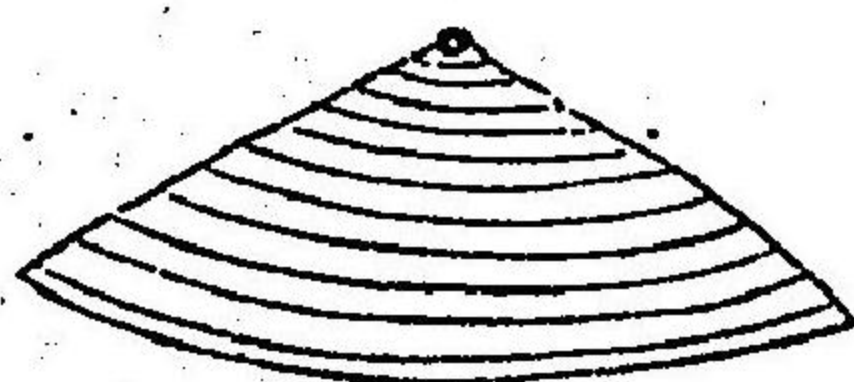


若女の冠りし時引通したり

前に云經木のぬり笠寛永時代若き女冠る文治以來老母計り冠る小兒笠は小ぶりにして内に菊ぼたん梅椿水仙ききやうかきつばた等の模様彩色にかきたり子供笠は紅淺黄のひも引とをし上にて結ぶ寛永の頃

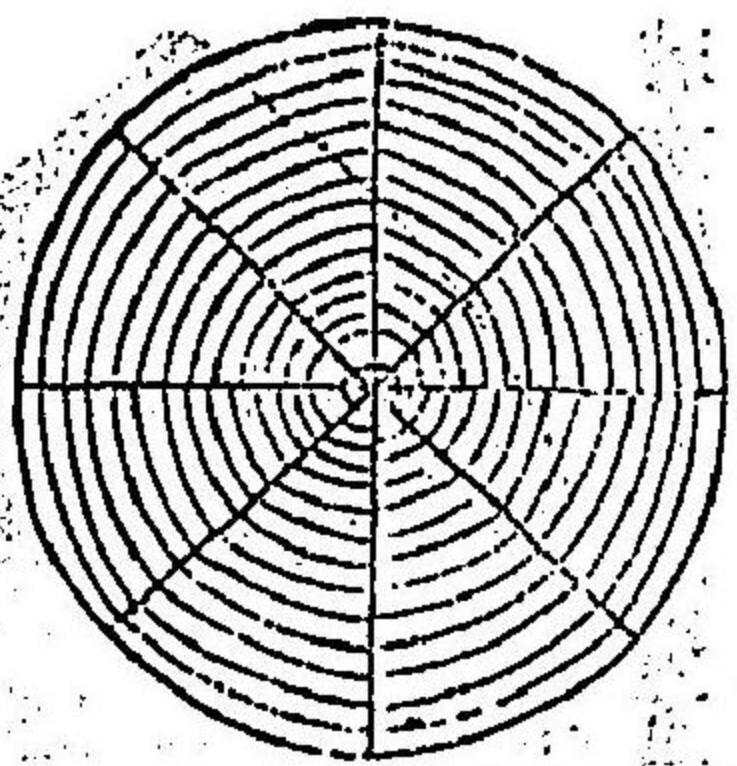


明暦頃よりつら笠出たり若き女冠る紐紅淺黄也ためにぬり内黒ぬりにしたるは老女かむる元祿の頃幸新九郎妻御免の淺黄しらべ家のものにして笠ひもにしたる事あり外に見つづら笠なり



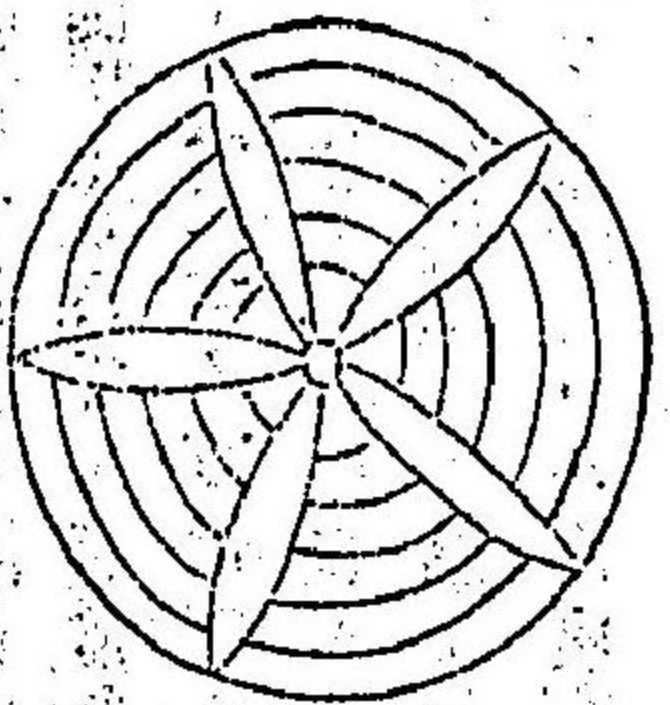
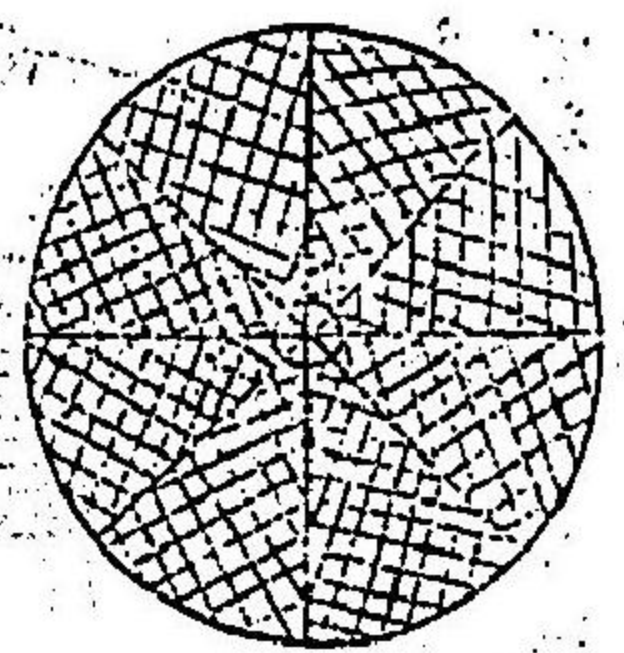
上方よりはちく竹の杉形笠下る細竹みごを押へとし上のとまり黒びろうどあさ糸ぬひ享保より地にて作り出す上作也頭のとめ紫皮也

内かくの如し

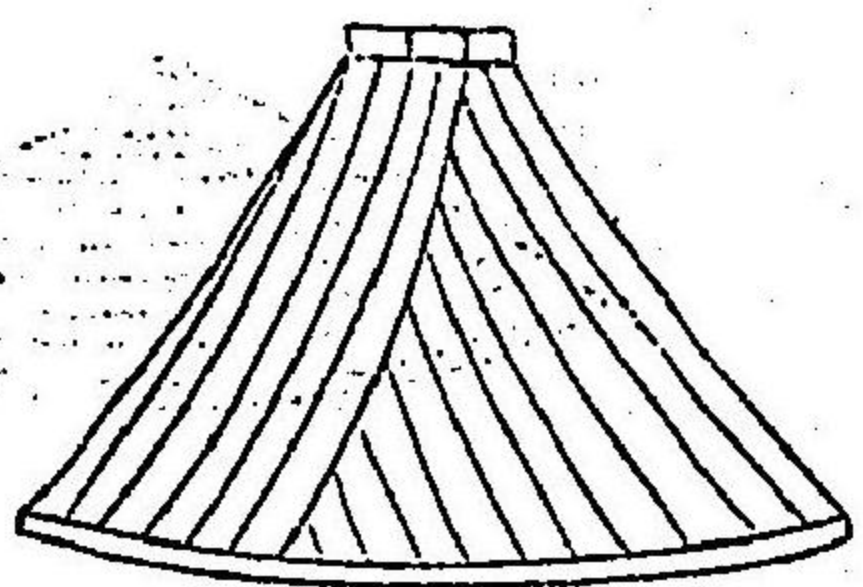


上方下り始代二匁(但一匁六十四文)正徳頃代一匁元文頃四十五文寛保頃二十四文三十二文なり

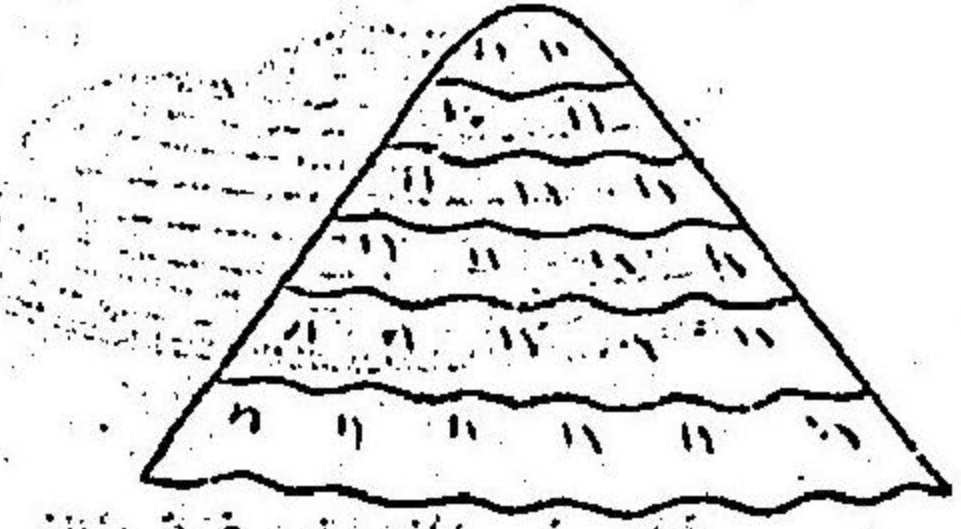
竹笠出しころ地作百五十錢二百文好によりて百足迄皆さぬ糸ぬひ



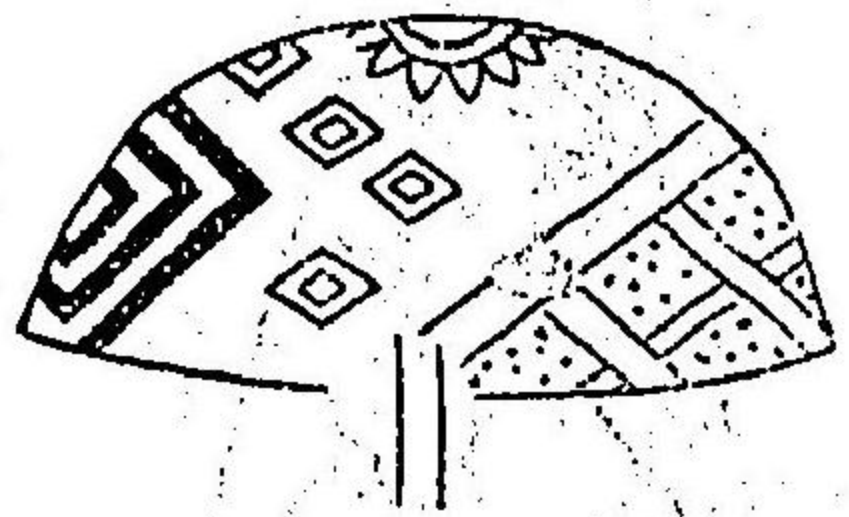
元文頃より内の竹をくろくぬる細工しごくよし延享より内の竹さくにぬる尤上作なり



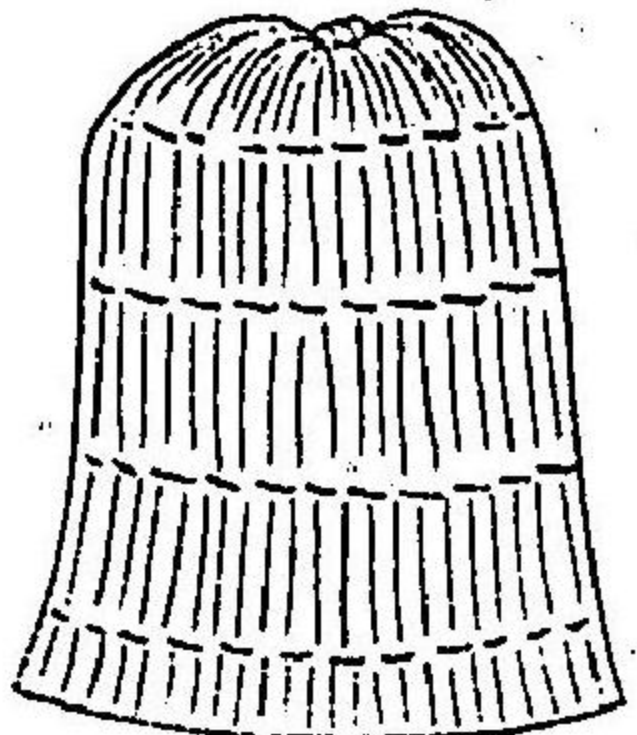
しゆる笠薩摩より出る元祿の頃てうほうしたる笠なり出少くかむるものまれなり三年も五年も用ひて重寶したりしゆるの葉をさらし三枚四枚合せて作るしゆるの葉は間きれて笠に不作是びんろうじの葉なりと云



藤笠ふじをあみて作る元文頃藤細工する人花生がましき手拭かけを作り此笠も作りたり若き武士醫者など御坊主多くかむりたり上方よりも下る細工よし色々もやうをおりて見事也



享保頃上方よりおりたる花笠下る丹緑青紫に彩色す子供笠なりついでら笠のあらきおりものなり

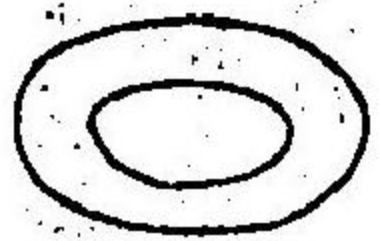


こも僧のあみ笠元祿頃迄は大ぶりにてあさし享保より小ぶりにて深し菰僧の外かむる人なし

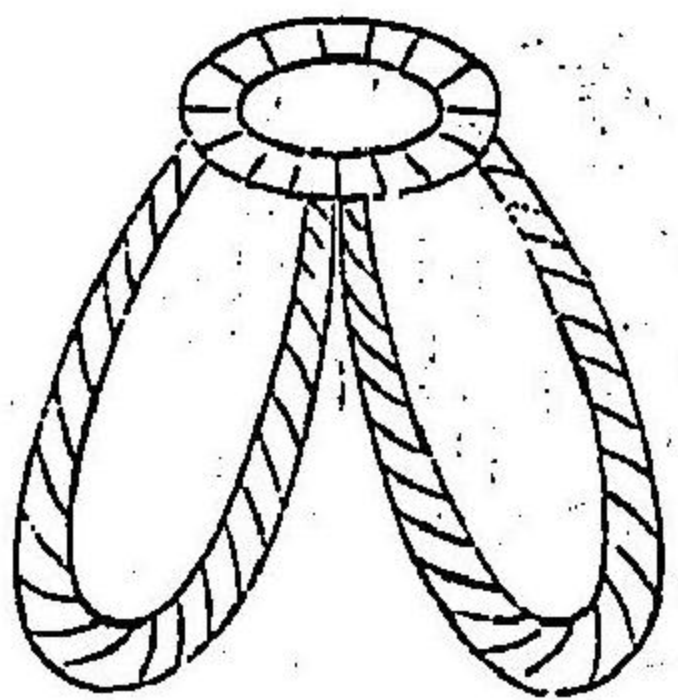
○笠ひもは正徳の頃男伊達はつこうせしをりいぬきの編笠に細く藁にて作り紙を上に巻なひてかむる萬治以來竹の皮にてこしらへてかむる延寶頃もろこしからにて笠の輪に緒を作り付て上總より出す是より前は笠輪わらにて手前ごしらへなり天和の頃上方よ

りもろこしがらに重緒を出す真享より元結一把のままにてかたひもをこしらへたり左右二把にて紐にする寛潤男ならでは不用元祿迄あこの緒は半ざらしの縞にても花色にても有合のものを平ぐけにしてかむる元祿より玉子ねぢの笠緒はやる寶永頃より草の細きを上方より下す是をかむる者多し延寶迄は或はじゆす玉にて作り細竹をくだにしてこしらへ觀世紙擦思々也麻にて平ぐけにしたる緒かむるは上品なり元祿頃なり寶永より笠輪を籠にて緒を鯨にて細くこしらへ出す甚はやる後二重緒にもこしらへたり享保より笠輪鯨にて緒幅廣くこしらへあごをも鯨なる出すまかれども世上奢て上品は不用正徳より上品にて黒絹に綿入にこしらへたり中はさらし元文より笠輪籠緒は細き竹にてくだにし二重緒にして上方より下す下品にて不用寶永迄大名は格別平人に白晒笠緒を付ることは婚禮或は山王の祭禮にかむるより外はせず享保に至ては黒ちりめん綿入になることなり○笠あても古來は紙元祿より有合の麻切裕にして作る寶永より白晒享保に至て黒絹綿を入れてかむるもの多し

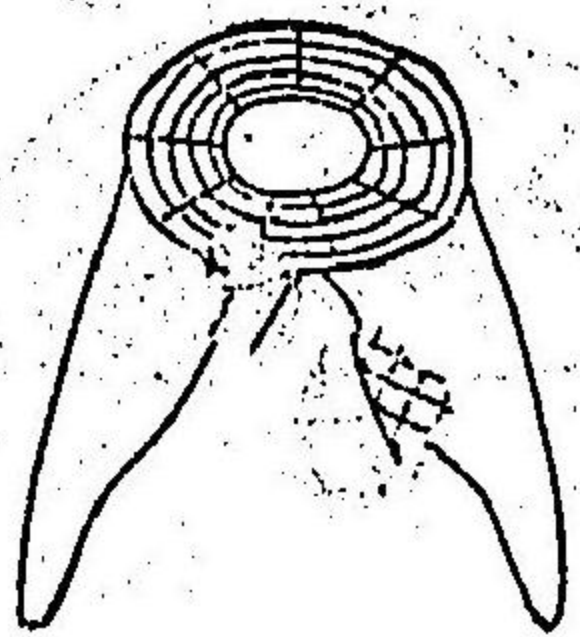
○延享三年六月山王祭禮に色々笠に物好き始る花笠
もじ笠ねりぐり笠扇笠品々あり



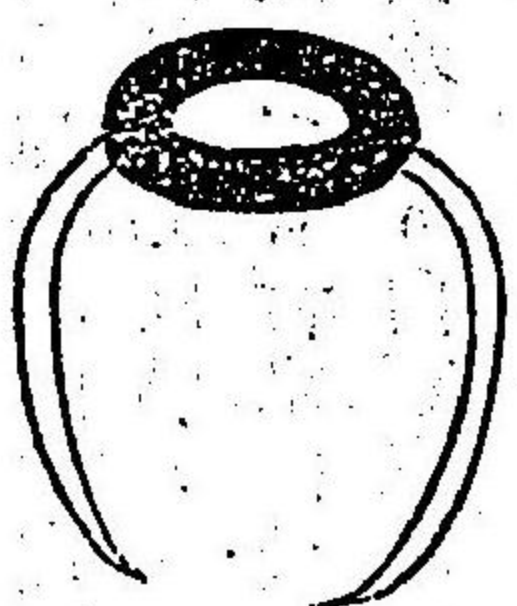
古來笠めてわらにて作り紙に
てつゝむ菅笠に用ゆあみ笠に
不用



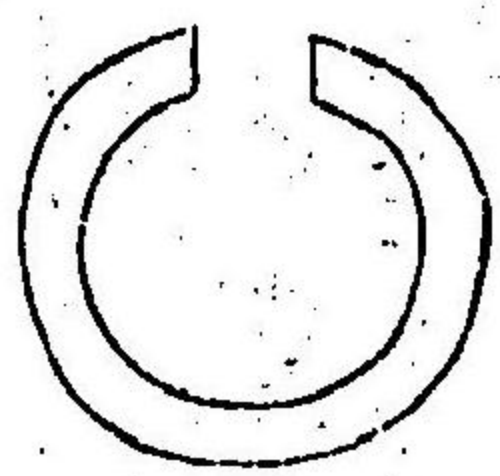
上總より出るもろこし
がらにて作るなり



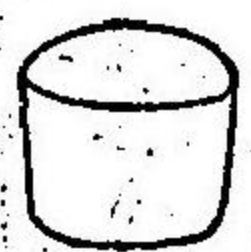
籠輪
鯨緒



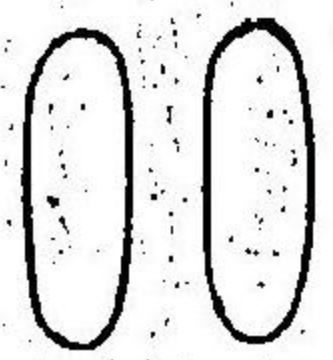
鯨細工に
て皆作る



正徳より笠の輪の後ろを切ぬ
く若き男の大たぶさ髪のみげ
のひしげる故なり



元文頃笠の輪を高くし髪のは
け先にさはらぬ様にするあり
見苦しきものなり

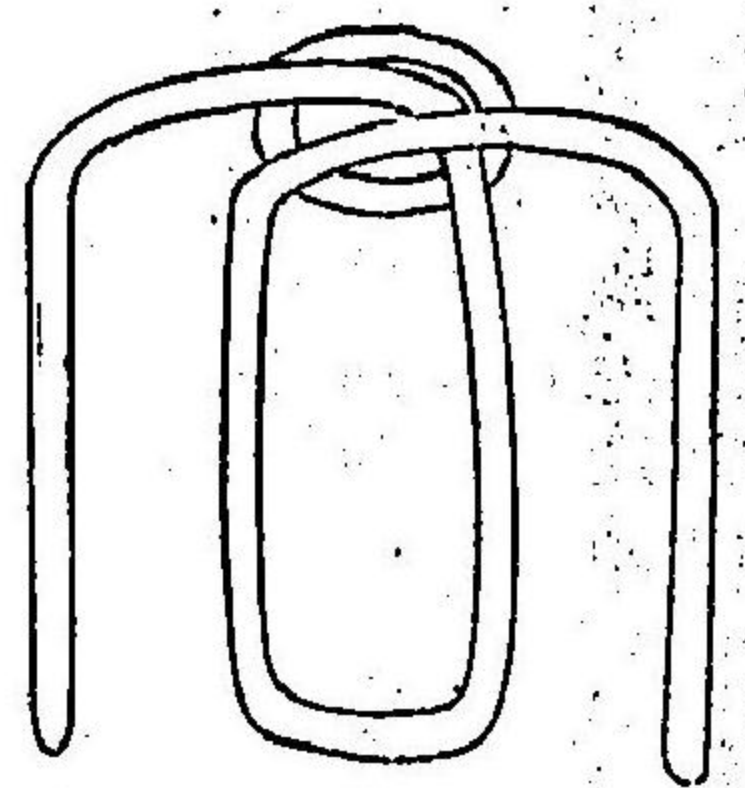


同頃笠輪を不用わらにて中を
作り紙にて巻て左右にわけて
かむるやはりはけ先をいとふ

○享保年中繪師帶刀を免さるゝ是は日光山へ度々細



寛延頃よりひもを
笠のはしへ付てか
むる人もあり



享保頃より笠輪の下へ
丸ぐけひも一筋にして
十文字にとりて輪の方
を前にしてあごの下へ
かけ後ろへ下りたるひ
もを又前へ廻しあごに
てむすぶ女にあり男も
黒ちりめんにてしたる
も有り

工に參候に付道中刀御免なざる是御用がゝりゆへな
り然るに近頃常々帶刀を致し典藥のごとし
○天和頃迄は御用達いづれも帶刀をしたり真享年中
男伊達はやり素町人にも仲間入さへ致せば帶刀を
して熊谷笠をかむる是を白柄組と云大小神祇組とも
云此男伊達にて諸人難儀に及びしゆへ中山勘解由盜
賊奉行の節不殘取控御旗本のれきくまで屹度遠島
改易に被仰付其節町人帶刀の事御用達共御停止被仰
付

○寶曆六丙子四月六日後藤縫殿助計出火の節帶刀御
免なり
○東叡山仁王門享保九子三月三日焼失以後又黒門と
なる寶曆五亥年御門主御願によつて材木山入始る此
事前々は公儀御入用にて材木を出す前當材木は御手
傳にて出る是は寛延四年有徳院様御廟の石を豆州土
肥山より出す時勘定方神尾若狹守始て是を御手傳方
へ被仰付なり
○御手傳小笠原伊豫守寶曆六子四月五日仁王門出來
御門主開眼供養有之暫出入を禁ず二十日御成有て其
節より往來を免す凡三十三仁王門無之處此度成就

す
 ○回向院の事前に有り始は銅佛のぬれ佛を印として後に念佛堂を建道心坊預りの寺にして黒衣の僧院主たり次第に繁昌して格式直り享保年中に至て香衣となるなり

○寶曆四年戌六月京師より法忍と云出家來る諸人はを今弘法と云法忍能書にて大字の名號を書たり同五亥年三月五日より四月五日まで淺草新堀端常念寺にて是を開帳す

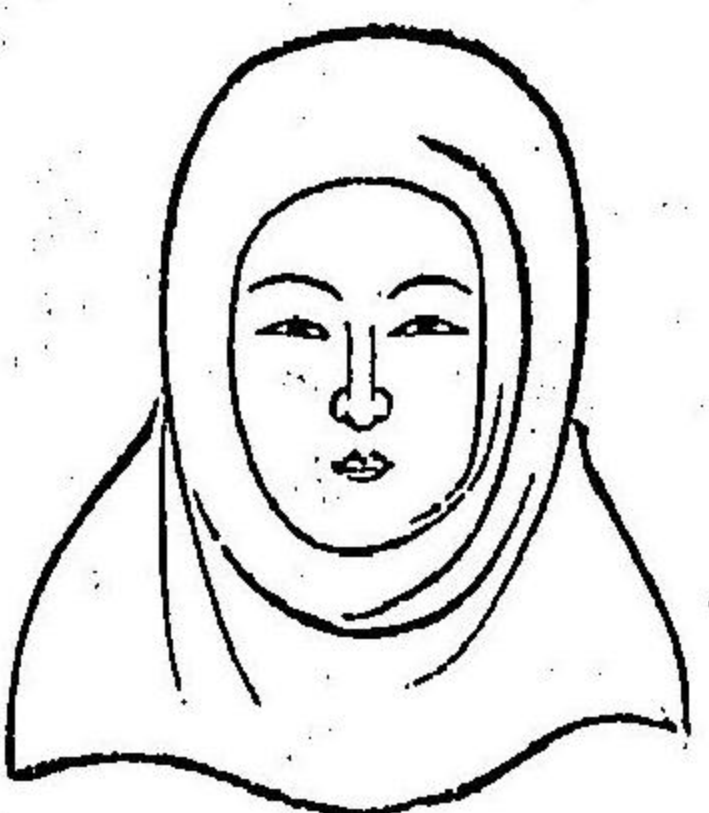
南無阿彌陀佛

字の大き二間四方づゝ總丈け十二間幅三間南無の二字天井へかけ阿彌の二字正面陀佛の二字をたゝみの上にしきをがませたり

○同年夏諸國道運請合の者有之日本橋通四丁目伊勢屋十兵衛と申者願出仰付らるゝ此儀享保年中にも有之鐵砲町に會所有之處不久して相止む

○寶曆五亥八月二十五日見世開駒形へ正直をば出みせを立是は享保の末より馬道にて正直仁左衛門と云そばや本店名代なり

○寶曆元年大坂より中村富十郎と云若女形下る寒風を防がため紫ちりめんにて帽子を製たり時の若き女是をかぶりたり男もかぶるもの有



其時の人はを大明頭巾と云甚だ見ぐるしきものなり

○常憲院様御取立大名松平美濃守(十五萬石柳澤)松平右京太夫(七萬石)松平豊後守(七萬石本庄)黒田豊前守(三萬石)牧野備後守(七萬石)
 ○文昭院様御取立間部越前守(五萬石)松平右近將監(五萬石越智)
 ○有徳院様御取立有馬兵庫頭(一萬石)加納遠江守

(一萬石加納角兵衛)是等の衆中紀州より御供の面々大岡越前守(一萬石大岡忠左衛門)

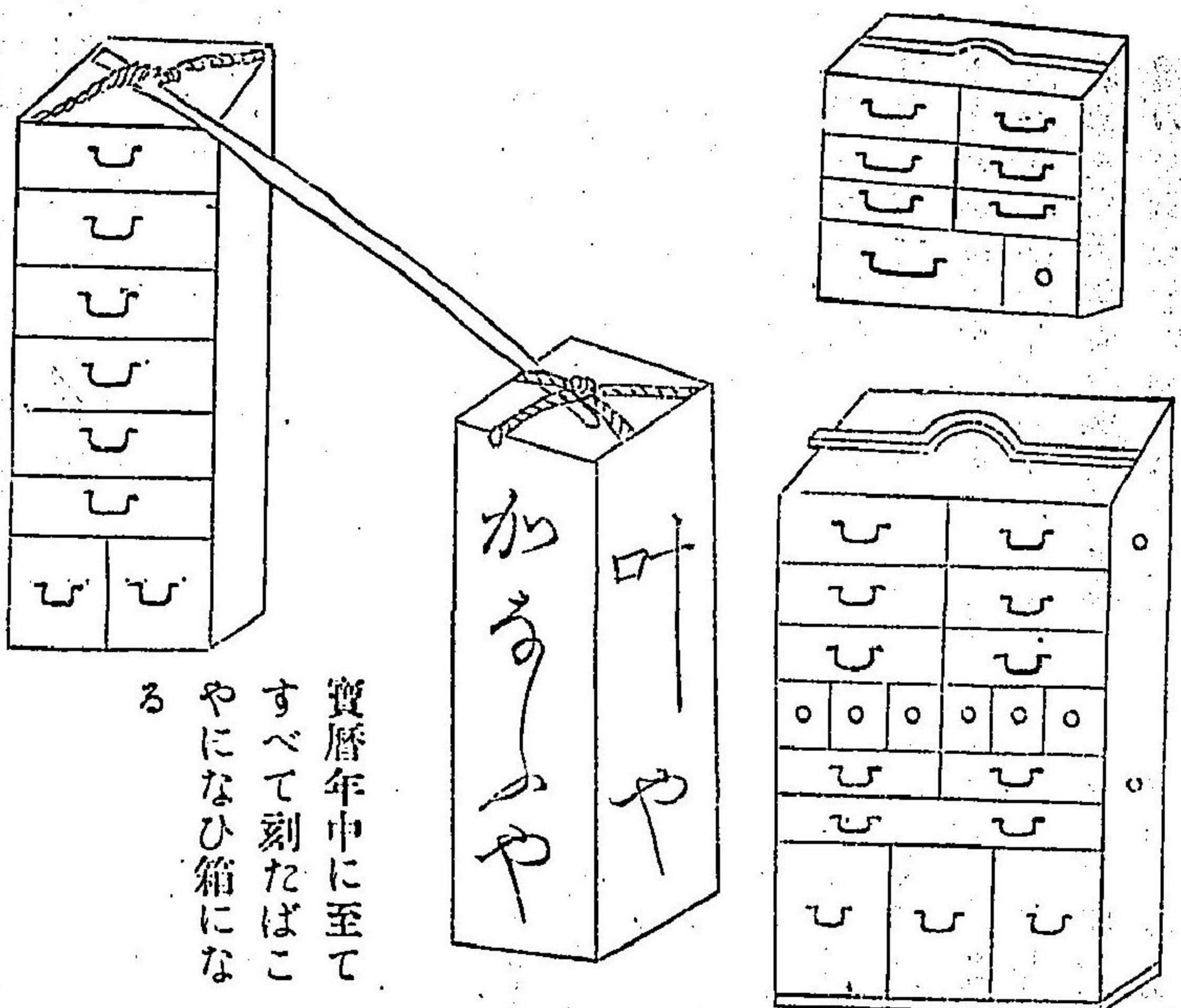
○同子年二月初午のいなり行燈六月祇園の行燈時行化物の繪を書て其讃に曰

目のない化物 とぼく雨に出る
 目出度いものは ほうらいの人をなやます
 大晦日の化物 かりかたにきゆる
 又物でいかぬ物は きれないの舌を出す
 脇指さぬ物は むこし入道
 土で作た物 かあら合點の行ぬ
 銅の化物 やくわん時分に出る

○貞享年中迄刻多葉粉見世賣計にて世利うりなし葉烟草を調べ手前にて刻む也然れども若き女中などの類はやに深きをきらい刻たばこやにて色合黄なる和らかなるを調のみたり元禄年中より刻たばこせり賣出る箱圖の如し

其後元文中神田鍋町に叶屋と云刻たばこや出る十餘人切子をかへかつぎ荷六七荷出す江戸中を賣弘めたり此時よりかつぎ荷始る

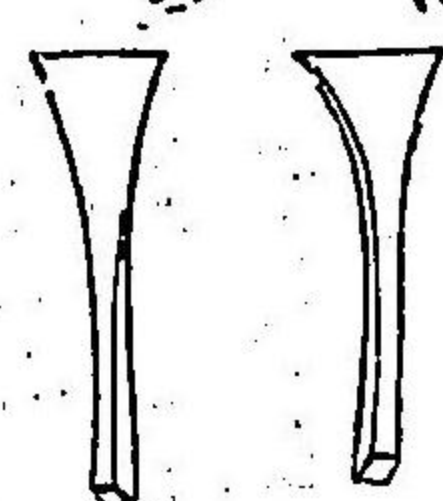
夫より寶永年中に至て世利箱丁寧に致す



寶曆年中に至てすべて刻たばこやになひ箱になる

○貞享年中迄三絃の撥薄手にかるきをよしとす殊に
花奢に作れり 元祿より半太夫土

佐節外記節はやりてば少し大ふりになるまかれど
も薄くさいじりと名付本の所角に
作て上とす



延享年中より豊竹流と申上方節の
撥甚だぶとう大きくなる

○寶曆六子五月京都より紙に蠟を引漆にて斑を入べ
つかうのごとくしたる烟草入下る代三夕位大にはや
る

○同子八月朔日より葺屋町市村羽左衛門木挽町森田
勘彌芝居へ助に参り狂言をつとむ是は寶永年中坂東
又太郎森田勘彌養子となる則坂東又太郎は羽左衛門
師たるを以て羽左衛門芝居へ助に出つとめたる例を
以此度森田座相續成がたきゆへ斯の如し依之大にあ
たる

○同霜月顔見世の節堺町茶屋二十二軒へ淺黄地に團
十郎と菊五郎が紋を染抜其茶屋々々の名前を染新吉
原より進物に致す芝居へも内幕二張進物す

狂言には湯島にかけし松竹梅と直したり然るに丸
山より出火有之太郎兵衛宅類焼に及ぶ依之太郎兵
衛弟小石川南縁山圓乗寺へ参り類焼急火ゆへ諸道
具不殘焼失に及たるよし物語ければ圓乗寺申様幸
地内に明寮もあれば三人とも住はれよ來春になり
普請に取かゝらるべしと云て彼空寮に住せける扱
亦圓乗寺に御旗本山田十太夫殿伴佐兵衛とて若き
人かゝり人と成て居られけるがお七と密通して太
郎兵衛が住ける寮へ晝夜行て遊びける其後來春に
成普請成就して太郎兵衛夫婦お七三人共引移ける
お七は兎角佐兵衛が事忌がたく圓乗寺計りなつか
しく煩出し人の云事も耳に入らず忙然として暮し
ける爰に吉祥寺の門番吉兵衛伴吉三郎とて大酒の
博奕打やゝもすれば喧嘩このみ親の手にあまり終
に勘當してけり町處をゆすり少々づゝの小遣錢を
もらひ暮しける者有八百屋太郎兵衛へ心易出入し
けるお七が煩ふを見ていふ様そなたの病氣我なら
てはしる人なし極て圓乗寺へ行て佐兵衛に逢度き
煩ひなるべし夫ほどなつかしきはあまり不便の事
也我等中立して参らすべし一日々々の小遣錢を給

○享保年中吉宗公御代に大名小名妾を本妻にいたす
事無用たるべき由被仰出

○寶曆五年の頃より江戸町々男女煤竹色の小袖はや
るはをりも帷子もひとへ物何れもすゝ竹なり女中は
五寸もやうと云はやる五寸ぬひもあり同頃紅うこん
ちりめん腰帶はやる其後三寸もよふはやるぬひもあ
り

八百屋お七が本説

一加賀宰相殿の足輕に山瀬三郎兵衛と云者有り浪人
して太郎兵衛と改丸山本妙寺門前に八百屋店を出
し青物商賣をいたしける子なき事を愁ひ旦那寺駒
込吉祥寺(元法華宗)の七面大明神へ深く祈願して
歩みを運ぶ佛力の誓ひむなしからず妻妊娠して女
子をもうけ是偏に七面の加護なりとて名をお七と
付たり生付さかしく手跡などもよし(お七は一體
ふとり肉にて少し疱瘡のあとありしといへり色は
白かりけれどもよき女にてはなかりしと云お七手
跡師匠高浦和尚の事前に書置たり)依之七面へ御
禮のためお七に額を書せ天和二年に奉納したり常
在靈鷲山法華最第一の文字に十一歳と書たり是を

はらば毎日便せんと申けるお七嬉しく文したゝ
め佐兵衛方へ遣しける度々かくのごとく便して
お七方より心付を取り後々はお七も心付成がたく
文計頼みけれども吉三郎中々取次す後には悪心増
長しお七に申けるは何ほど文をやりても佐兵衛に
逢がたかるべし逢ひたくば火事を願ふべし火事故
にこそ圓乗寺へは引越たり結ぶの神は火事なれば
是より外に頼みなしこなたの家をやくならば又圓
乗寺へ立退べし其時佐兵衛に逢給へと云ければお
七女心の事なれば夫を誠に心得て成ほど左様思ひ
ても火の付よふをしらぬ也吉三郎聞てしらすば教
へて参せんかよふくとおしへけるこそうたてけ
れ或時風の烈しき日物干へ出吉三郎がおしへにま
かせつゝ火を放てば何かは以てたまるべき猛火盛
んにもへ上り消すべきよふぞなかりける吉三郎時
分はよしと駈付て家財衣類を引包み立退ける其時
盜賊奉行中山勘解由吉三郎を見付心得ぬ人物なり
とて組の者に申付召捕らせ雜物をせんぎし屋敷へ
引かへる夫より吉三郎拷問有ければ成程盜取たる
也併火は付不申火付は娘お七也と申上る依之お七

召捕れ吉三郎と對決に及けるお七申上るはわたくし火を付候事存知不申あの吉三郎おしへの如く軒へ火をさし候と申上奉行大に立腹ありて吉三郎おのれ火付ぬと申せとも致方をお七におしへ其紛に盗いたしたる條火罪よりも重し先詮議大方に極りたりとて兩人とも獄屋へ入る扱右の譯御老中へ御披露ある土井大炊頭殿被申けるはお七事十五歳ならば科も一段引下げて申付べき間今一應お七が年を吟味あるべしとの事也勘解由畏て退出有りお七親名主共召寄られいかにお七が年は十五歳なるかとくと吟味可致との事也依之名主五人組口を揃へ成程お七は十五歳に候と申上る奉行悦び給ひかつかう成程其年成にみゆる也罷立として其翌日吉三郎を召出されいかに吉三郎お七當年十五歳なり何とて十七歳とは申上たる不埒成と御叱り有り其時吉三郎申様十七歳に紛無之候お七元來戀故の事にてかよふなる事仕出し候十五歳にては戀は致し申間敷候其上礎成證據は七面堂にお七十一歳の筆にて額かけ置候也是を御覽可被下候と申ける奉行聞て額をとりよせ御覽あれば天和二年十一歳書とあり

夫より貞享二年迄算すれば十七歳に當る奉行も悦び給はざれども是非に及ばずして右之段御披露有ければ御老中方にも不便に思召けれども是非に及ばず御法の通り千住におゐて吉三郎諸共同罪にぞ及びける○山田佐兵衛は正徳年中に被召出ける也○お七が紋處丸の内封文は寶永年中勘三郎座にて始て致ける役者嵐喜代三郎(京下り若女形)此喜代三郎が紋^①如此也この紋を付しゆへなりお七が紋はしらす

○金滅金は下地眞鍮臺として其上へ水金を塗其上を金箔を焼付たるなり銀滅金同斷○銀流しは銅にてもしんちうにても松脂をわかし其内へひたし引上て外になまりをわかし其内へ入れば銀流ながしとなる

○應仁の亂に吉水安養寺焼たり其頃源照と云盲人五條坊門鳥丸丸山東へ入處より東山へうつして建立す後小松院御惠み深く始て紫衣を賜る舊記に建菜の福市とありいつの頃よりか檢校と改む其後勾當と名目を立たり

○禪寺の門の札に立春大吉此四文字表裏なし

○寶曆五亥十二月大坂川口淺く或は諸船出入不自由

有之候故此度當地並他國廻船又は渡海船之石錢を以て浚ひ申付候石錢之儀は大小に不依一石に付三錢づつ可差出旨也

川内にて荷物積候は勿論たとへ沖積仕候共大坂川口へ來る船は差出可申候事

諸荷物無之空船出入之節は相斷可申候事

亥十二月江戸町奉行所より被仰出願人大坂鳥羽屋久左衛門江戸石町に會所有之御城米廻船請負人

○軍書講釋の始は赤松法印といへる人慶長の頃東照宮の御前にて太平記の講釋を度々せしとぞ町講釋の始は清左衛門といへる者淺草御門の側に高き處ありしが其上にて人を集め是も太平記を講せしと云

此高き所は今御舟藏前に有稻荷の舊地なりとぞ高照山勝福寺と云天台宗也馬喰町四丁目の鎮守なり清左衛門は京師の人なり大願ありて江府に來る三四年願ひけれども不叶るによつて再び京に歸る事を耻たり其頃講釋など云事甚珍しく日々群集しけるといへり

○風呂屋の始は御入國の始つ方諸見附御門御普請の

最中今の常盤橋見附の外へ又内の土堤とも云)水茶屋をしつらひたる人あり勤番の武家方江都遊覽の始なれば日々に多くつどひ歩行又は丸の内事なれば長屋の住居の齋を晴さんとて五人三人打つて彼茶屋へ來り終日茶を喫て語り合つ夫より段々酒となりし頃或一人の侍の日久敷湯あみせずして身體不淨に思ふ儘に湯あみしたきものと云へる何れも然りと云こゝにおゐて彼茶屋工風をして己が宿所へ風呂を立諸人を入らせけり夫より髪をすく女を置きたり此事一統に流行して夫より鎌倉河岸邊に多く風呂屋出來たりと云

○髮結の始は寛永の頃か里見家浪人在々へ陣幕を持あるき傍の木或は竹などへ結付百姓の髪を結て渡世とす是は何國にても構はず只人通りある處を見かけとする事なり髮結床の長暖簾是に本づく其後江戸の始赤羽根の床最初也是も幕をはりて結びたり其頃はを一文ぞりと云今も上總房州より髮結多く出るは里見家の浪人なればなり老年に及ぶと國へ引籠田地を求め其子又如斯是は上總房州今にかはらすといへり

○世に平家物語の評判由井正雪作なりといへ其實は

増上寺所化廓然が著す處也此廓然博物のみならず劍法早業に熟したり正雪滅後引廻しになる時出雲寺和泉が前を引る、時此平家物語評判の看板を引込せしに廓然馬上より見てあゝ愚智なる奴原かな我心を盡して此書を綴る悪名を得るといへども此書に科なし人氣のしからしむる所にして是非もなし天なるかな命なるかなとて大に歎息して通れりと或書に見えたり

正雪本字松雪なり松の字をはかりて後人面に書に正の字を用ひたりといふ

我衣終

賤のをた巻序

何事も古き世のみぞしたはしきと吉田の法師が申置侍るも實にさる事にて老の浪たゝむ月日のかげそふにつけて立も歸らぬ昔のみ朝夕に思ひ出らるゝも老の習ひなるべしよの中の移り行有さま昔のよき事もあしき事も今の世のあしきもよきもけふより生れ出たらん子や孫らはしらでこそ過らめされば翁の日頃子や孫らしめし侍るは翁などの學問は誠の臍くり學問と云ふものにて只己が心に大むねを辨へて用を辨するのみなり武藝とても又同じ然るに親に生れ勝る子は昔より少きものにて子らは翁よりも又一際學問もせまかるへし又孫に至りては汝等よりも劣りて行へし後には末々の世に至りては闇の夜に牛引出たらん如くにこそゆかめよく／＼心得て子は親よりも一際修行を勵まし其子は又其親よりも一段まさる如くに心得ざれば我家いかなる事にか成もて行べきとて常にいましめ侍り是につけて春の日の暮かたき儘に老のねふりの隙もとめて心に残りしいにしへの事どもかいつかねて子や孫らが生さき遠き世に思ひ合

せてふるきをたつねてあたらしきを辨へ侍る媒ともなり又永き代の末に翁がいにしへも思ひ出よかしと硯にむかひてそこはかとなくつらね侍るも例のよしなし事なるべし

享和二年春の末つかた

埋木の人しれぬ翁誌

賤のなた巻

目録

- ― たぶさし
- ― 豊後ぶし
- ― 日本左衛門
- ― 義太夫節文金風
- ― 延享寛延頃の風俗
- ― 浅黄流行
- ― 昔の人情
- ― 女の帽子櫛おさへ
- ― カツギ
- ― 女の菅笠
- ― 日傘
- ― 衣類の色丁子茶
- ― 朱ぬりの櫛
- ― 花かんざし
- ― 扇屋染
- ― 傳九郎染
- ― 市松龜藏小紋

- ― 十六染
- ― 親和染
- ― 十二てうちん
- ― 開帳流行
- ― 役者の評
- ― 扇地紙賣
- ― 煙草入
- ― キセル
- ― 鼻紙袋
- ― 田沼がけ
- ― ドンブツ
- ― 細身脇ざし
- ― 役替初寄合
- ― 書によりて俗人を笑ひし話
- ― 風
- ― 艸ざうし
- ― 羽織
- ― 豊後ぶし
- ― 正傳ぶし
- ― 三絃流行

女藝者流行

- ― 羽織の紐
- ― 氷川の隠賣女
- ― 藏宿師
- ― 權門師
- ― 頭巾
- ― キザミ烟草賣
- ― 山猫まはし
- ― 志道軒
- ― 隨龍軒
- ― 成田壽仙
- ― 神谷登
- ― 平澤左内
- ― 釋迦ヶ嶽
- ― 居合拔
- ― あめ寶引
- ― 役者の紋附
- ― 書家
- ― 武藝の評
- ― 弓馬の事

林家詩文

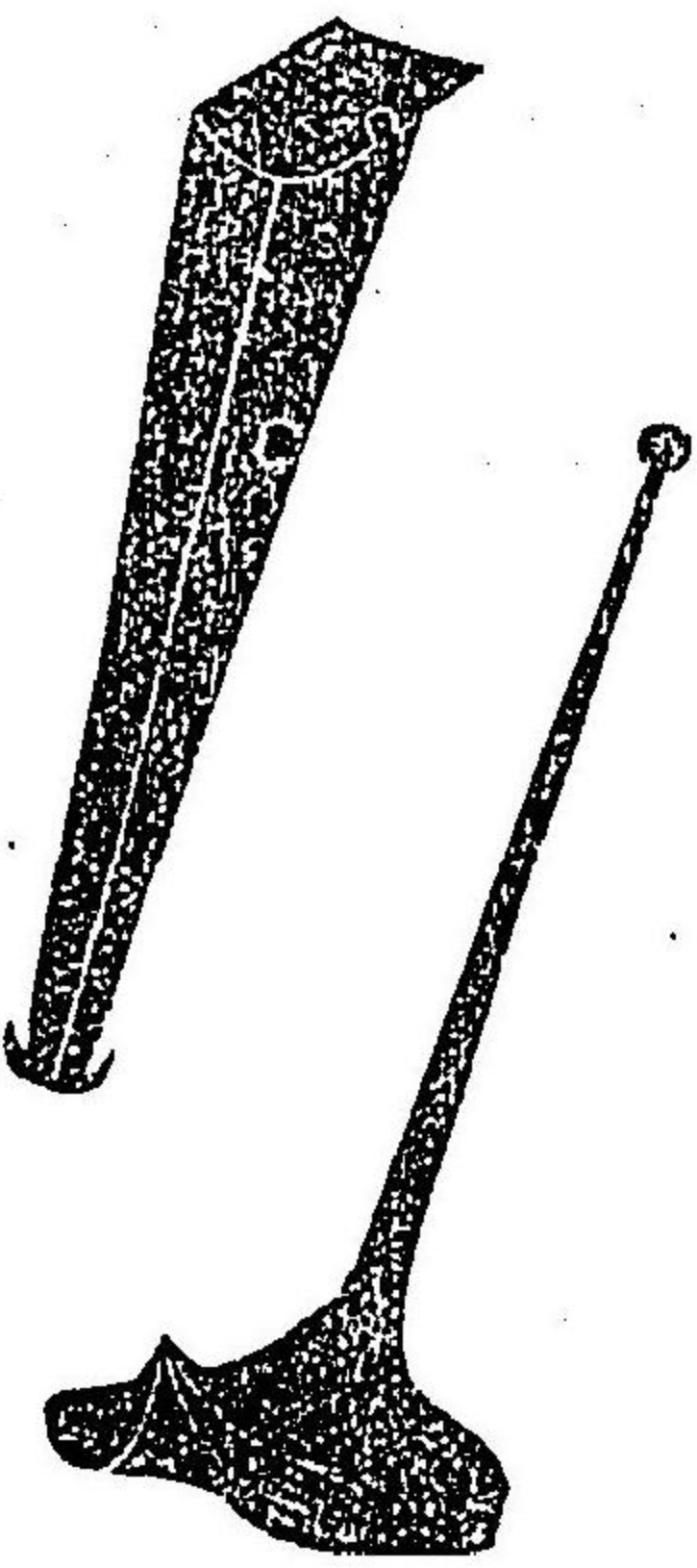
― 武術の話

賤のた巻

一延享の頃なりける(翁が七ツ八の頃)女子のたぶさ
 といふもの初て流行出て父なる人の二條の在番
 に居られけるが便りの序に姉なる人のもとへと、
 のへて下し給ひしを母なる人をはじめ召仕ふ女子
 どもまでめづらしがりてもてはやしたり翁の子心
 にたしかに覺え居たり尤鯨にてこしらへたるもの
 なり今はすたりて誰しりたる人もなし

一豊後ぶしの淨瑠璃は翁が生れたる(元文三年)頃よ
 り流行いでたりといへり延享の頃は頻りに流行て
 しかも今の如き高上風流に作りたる文句にはあら
 ずひらたき事のみをいひつづけたる文句なり河東
 節半太夫ぶしもまだ残りて流行たり三味線其頃は
 まだ本手端手とて三味線の手の根元なるよし至て
 高上なる六ヶ敷事のよし母などの習はれたるとて
 語られ侍りき歌舞妓役者の名人市川海老藏がうい
 らう賣のせりふを若侍どもがよく覺てひたもの口
 ぐせに真似たり彼狂言も其比の事と見えたり豊後

ぶしを語る遊女の京より吉原へ下りて殊の外流行
 て萬客晝夜を争ひたりといふ事を子供の時聞たり
 翁がつまきながらなりける永井丹波守京都の町奉
 行被仰付て理運なる人なりしかば我等奉行にて京
 たぶさし



文金風



都に登りたらば豊後ぶしを停止さすべしとて腕を
 さすりて登られけるが時勢につれて制しがたき事
 なりけるにや次第に流行て其弊淫奔相對死なども

多かりけり

其頃は心中にて相對死も稀には有けり殊に大坂
 にはいにしへより多しといへりされば豊後ぶし
 の心中を作りたる淨瑠璃は大抵は京大坂の事な
 り江戸には稀に有けり今は御制法の行届たるに
 や又は人のさがしく成りたるにやかゝる事もな
 し

一其頃大盗有て日本左衛門と云たり近き頃の因幡小
 僧などの如きにはあらず風説には左右前後上へ五
 間づ、飛たりといへり尤正しき家には入らず邪に
 金持榮ふる家をめがけて入たり手下も大勢有けり
 本名濱島庄兵衛とて御書付にも出て諸國へふれら
 れたり此もの永井丹波守役所へ名乗て出たり則江
 戸へさし下されて御仕置に逢たり翁が子どもの時
 分めづらしき事にて里巷一般に衆口不止けり

一義太夫節は有廟の御代より流行出しといへりされ
 ば豊後節の流弊次第に淫風に移りて遊士俗人の風
 俗あらぬものに成行て髪も文金風とてわけの腰を
 突立元結多く巻て巻髪とて鬢の毛を下より上へか
 きあげ月代のきはにて巻こみてゆひたり衣類對尺

の羽織を著長きひもを先にちひさく結び下駄の齒
 にかゝるやうにして腰の物は落しざしにさし懐手
 して駒下駄はきて市中をぶらり〜と歩行たり其
 は悖廟の御代はじめにて繪にかきて人々わらひも
 てあそびけり今は本手端手などいふ事は其業を
 つとむる盲人藝者などに聞てもさる事の侍るよし
 聞傳へ候と計いふて誰も習引者はなし巻びんも今
 は更に見えずしかれども其時はいまだ世もよく有
 廟の御餘耀残り侍りて今より思へば遙に勝りたる
 やうに覺ゆるなり御奉公するものなどは紀國風と
 て上下の肩を後へゆりこして紋所の肩の先へあた
 る位にして著たり是は紀州の諸士の風俗なりと見
 えたり有廟紀州より被爲入たれば江府の諸士も自
 然と紀州の風俗を真似たるなり

一總じて延享寛延の頃はいまだ昔の餘風残りて家々
 の作法さのみ亂れず小身とても掟は古風も残りた
 り物の差別明らかに分りて先正月元日は小家とい
 へども妻子共にかいどりして召仕ふ女子も相應の
 衣類を著替先齒がためを祝ひ互に祝儀を述べ幾人
 有ても家内一席にそろひて雑煮をいはひ扱二汁五

菜のせちを出し家内盃事して年始をことぶきたり親類知音入来る時はかならず雑煮吸物にて盃事をしたり其供のものへも不殘雜煮をふるまひたり

凡物一度廢しては再本に復する事はかたき事にて昔は我家僅かに四百石の持高にて大御番なりし家の今翁が代に至りては千五百俵の身をもて其代の如く作法をとへの侍ると思ふに中ノ事ゆかす尤我家計りに不限世上一般に如此成行たりとみゆるなり召仕ふものどもの給金も昔は若黨は三兩二分女ははした一兩一分二分茶の間針妙の類は大抵二兩を限りたりしかもみめかたちもさのみあしからず侍もいやしからぬ男ぶりなりしが今は侍に四兩遣して求るに満足なるものは少し世のおとろへなるか人情の辨利に走りて賤しく成たるか大なる違ひなり

一翁が七ッ八ッ計の頃なりし母方の叔父(諏訪左京御書院番)の年始に來られしに母の挨拶に互に事むつまじく行届侍らず隙をも費して却て迷惑せらるゝもはかりがたし故に供の衆へは當春より餅

を焼て振舞ふやうに申付たりとて斷云給へるを側に居て子心にしたしかに覺え居たりいつの程にか夫は止みて今は客の供の者へあたゝか成茶を振舞ふは餘程あるじの心なくては届かぬ事なり

一されば父の札番など被成たる時は多葉粉盆を出し茶を振舞て扱其うちに父は必小用を辨じ手水うがひして袴著て出て挨拶し頓て吸物さかな二種計酒二三度銚子をかへて終ることなりき其代には下戸こそ少かりつらめ今の如く龜相なる菓子盆に黒き煎餅らくがんのたちをそこゝに盛て出し漸煮花をしてふるまふやうなる事はなかりき取あへず吸物を出すにも椀も盆も能露を打て奇麗にして出したたりしを子心によく覺居たり盆も其頃の物好はうすくして風流なるもやうを蒔繪にさせ銚子もわさと小さくして幾度も銚子をかへて座輿のあるやうにして扱盆もうすければさのみ酒も過ず馳走ぶりも能様にしたり今は酒の手へかゝり衣類の爲にならぬ所に計氣が付て盃もふかくこしらへ銚子も有合の大銚子にて膳に露を打などいふ事は取失ひて辨利にのみ成行て雅なることも風流なる事もな

し

一其頃は衣類の袖口も芥子ぐゝりといかにも細くぐゝりて色も淺黄など専ら用ひたりしに翁が八九の頃よりはや淺黄はすたりて昔物とて人は嫌ひたり翁が子心にもねぶたくて好ましからぬ色なりけりましてや若盛の人などは淺黄の衣類をきることなし然るに近頃に至りて寶曆の頃より又淺黄流行出て若き女伊達を好む遊人などは専ら淺黄を用ひたり人の心いかなるものぞや我ながら計りがたし纒に翁が生涯の内なり八ッ九ッの頃淺黄のすたりたる頃はいかにも古めかしき色に子心にも覺えたりしに又廿前後に成て淺黄の流行出たるをみればいかにも當風にて伊達に覺えたり淺黄の色に昔も今もかはる事もなし人情のうつり行有様はかなき物にて我心ながらさらに分りがたし

一程なく袖口もふとぐゝる事の又流行出て父の相組の興頭に河内左太郎といふ人ありしが色黒く小男なれど立派なる男付にてしかも何事も勤めかねまじき人なりしが父は御帳にかゝり居られしかば興頭なれど馴染といひ心易く折にふれては被參た

るに袖口をいかにもふとぐゝりて突袖したる時りんと突立て袖の折れぬやうにして著られたり人によりては袖口のわたの中へ針金を入れてくゝるもありたりとぞ初めの芥子ぐゝりから見れば表裏の違ひにて人情の反覆更にはかりがたし

其後寶曆の末に成りて又袖口を細くくゝること流行出て衣類も一體わたを至極うすく入ていくつも重ねて著ること流行うらゑりの衣紋色々のゑりの五ッ六ッもそろへて十二ひとへとも云べきやうにみゆるをよしとす尤一二年流行て程なくすたりたり

一彼河内氏は奢人にて京大坂の在番にも朝夕小家にてより米にして飯くふほどの事なり尤下々の沙汰なるべけれど萬事其位の奢人なりしかるに父は勝手不如意にてありしかば毎年取人代人にて他の組へ登られしに河内氏は興頭なれば當前の外は登る事もなくて父の方へ土産をねだらるゝに白郡内一疋といふ事なり(今に日記にしるしてあり)其頃人にも沙汰するほどの奢人のねだらるゝ所右のごとし今は節儉といへども郡内などは同心風情のも

のさへ著する事なし翁が生涯今年六十五なり七ッ
八ッの頃までの事は覺へぬなれば彼是五十年の内
外に世は大にうつりかはりたり其むかしとてまさ
こそ有つらめ

一夫より前父の御番入せられて初在番に登られし頃
なるに二條の御城下にて相番打よりて花見をする
とて小屋の庭に定めて櫻をば植させつらめ御城下
の町人共の許より女の小袖を多く取よせて小袖幕
を打て夫にとめ木をするに父なる人の番の役につ
れて伽羅を焼て小袖にとめありくとて香爐の火に
て裾をこがしてその損料金一兩をつくのひたると
語られ侍りき今は中々さる風流なる出會などする
人もなく自分の身にさへとめ木する人は大身にて
も少し翁六十にあまる迄あまたの人に突合たれど
夏匂袋をたしなむ人さへ絶てなし御徒頭より御目
付になり其後佐渡奉行より一橋の御家老になりて
御加増まで取たる横田十郎兵衛が夏冬ともにうす
く能程に掛香を嗜みたり奥ゆかしくて能物なり大
御番頭を被勤たる杉浦出雲守(後丹後守)は茶人に
て風流者なりしが泊番の時夕方判形改に御番所へ

被出とき翁は其組なりしかば末座に居るに三十疊
敷計の御座敷のはるか上座に著坐せらるゝに末坐
までことごとく匂ひたり其後丹州御側衆になられ
て御城中にて行逢に先丹州をやり過して扣ゝあ
とより行に四五間ほどあとへえもいはず匂ひたり
彼小袖幕打て出會するにとめ木などまでするなど
今の節儉質素より見れば方圖もなき奢の様に思は
るれど今の小身のものゝ次三男さへ郡内著る人は
一人もなし龍紋羽二重縮緬の外は著せず縮緬の小
袖などはむかしはまれなることなりしを今は無祿
の人もきるなり然らば昔が奢なりしや今が奢れる
にや左計郡内などは目にもかけぬ高上の人情にて
とめ木掛香などはたしなむ人もないかなる人情
の習ひなるかいぶかし

是に付て思ひ出るは翁が姉の縁談定りて里附の
女を抱ゆるとてあれ是奉公人の目見に來りける
に向屋敷の藤掛數馬と云人の家來の娘なりとて
目見えに來りしが夏の頃なるに玉子色のもやう
のかたびらを著たるが口入人の案内を申込内軒
下にたゞすみ居たり翁はまだそこら欠廻りて遊

ふ頃なれば其邊を通るにえもいはずよき掛香を
入たり子心に家司の取極る沙汰を聞ば給金三兩
と云ことなりき其頃は女奉公人もよがりけり又
近き頃御本丸にてときめかれしが後御改正の頃
故有てわざと身を引て里に下られける御年寄瀧
川殿(武藤庄兵衛姉)は里に下りても猶御宛行は
昔のまゝにて御臺様などは殊に御首尾よくて用
ひられし人なり瀧川どの被申ことは奥向にて
は何事も埒の明事なりしに庄兵衛奥方は瀧川ど
の姪にて翁に歌を相談せられけるにより自ら心
易く成りて娘なりける者へ瀧川どのよりははじめ
て文を給はりける時例の大なる皮文箱と小さき
文庫に細工やうのもの入て來りたるが文箱も文
庫もふたをとればえもいはず匂ひたり扱もく
女はがくこそあるべけれいかなる仕方にてかく
は匂ふやらんと思ふくらゐなりむかしの物語に
えもいはずたきしめたりと云事有を昔の事と思
ひ又は餘情にこそ書つらめと思ひるたるに現に
思ひしりて感じたることなりされば昔の風流嗜
も今猶高貴の家には残りありてしれる人はしれ

ることと見えたり是は近頃のことなれど後は又
常になるべければおもひあたるに任てし侍
るなり

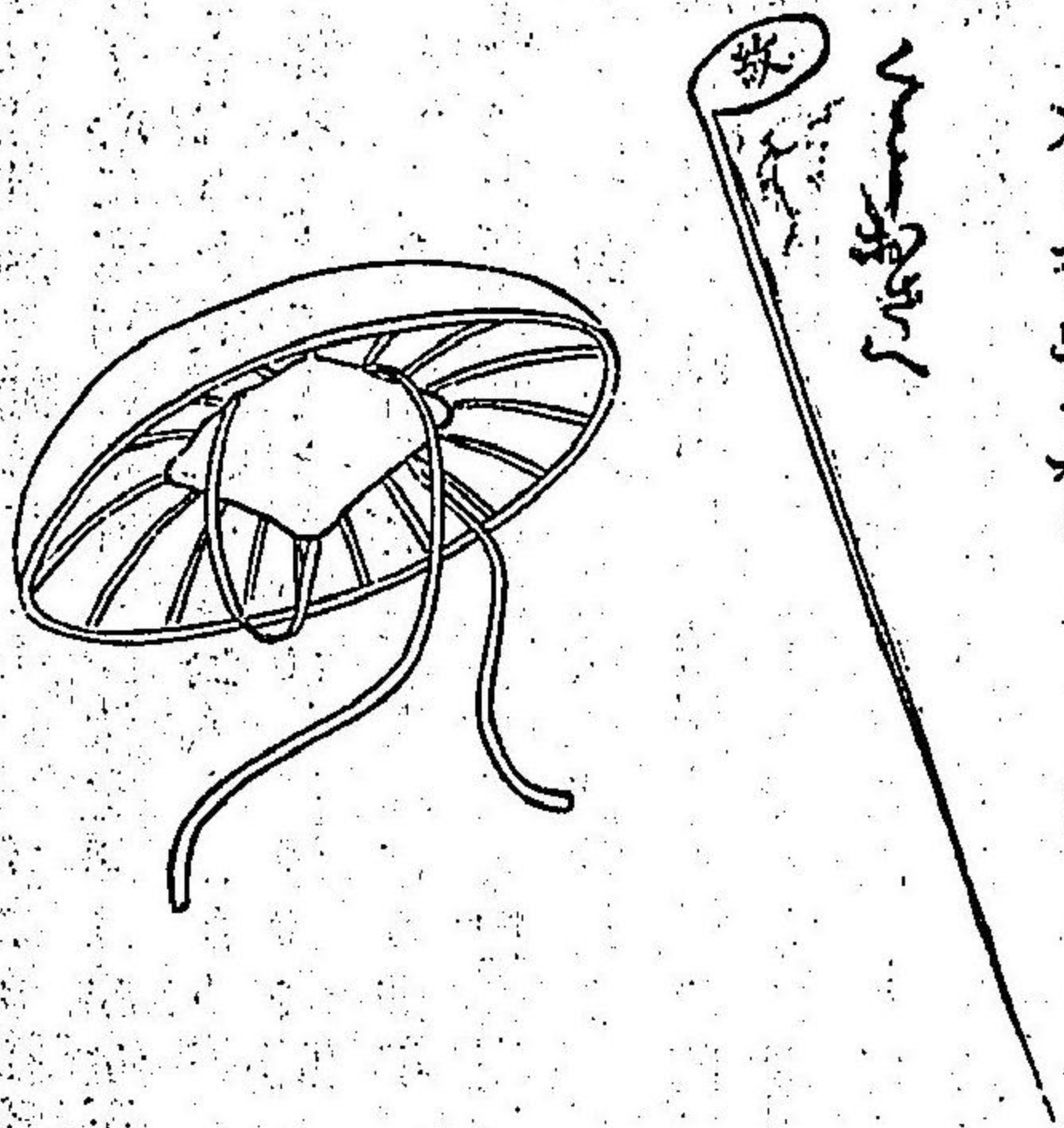
一翁が姉なる人大久保伊兵衛(五百石大御番酒井飛
驒守組)と云人の許へ婚姻有しに道具の役遣並婚
禮の日の腰迎(御先手青木右京)腰おくり(兩番與
頭加藤傳左衛門)の作法習入舅入の時太刀馬代の
取かはし彼是中々當時小身物にて其位の婚禮は絶
てなし久しく聞も及ばず扱一年計り有て彼大久保
氏吉原の遊女を連來りて長屋に圍ひ置たり此事に
依て夫婦の中も睦しからず終に此方より姉を取戻
されたりしが道具はいふに不及土産金六十兩耳を
揃へて使者をもてかへしたるに仲人は父の甥なり
ける依田四郎左衛門とて(大久保相番なり)翁が爲
には従弟なり此時二條の取人に登りて留守なりけ
り此使者への挨拶に父の申さるゝは此金子に於て
は仲人依田四郎左衛門在江戸に候は、御挨拶の申
分も可遣之候へども仲人留守の事に候儘先預り置
候と申やられたり此事日記に記して今に有其頃
はかやうにこそ有つれど今の縁組は先家筋よりも

縁女よりも土産金の多少を論じ又離縁の時も始より彼金の無相違戻らん事を氣遣ひ聲の方にては戻さざらん事を工夫する事になりぬ昔とは大なる違ひにて恥かしき事なり

一昔は女の帽子と云ものをかぶりて歩行たり綿帽子帽子針

故

但し物好次第按摺箱やの
花も有字も有



は年季三四十以上の女のかぶるものにして若き女は白に紅のうらを付てかぶりたり扱其ぼうしをどむる針を銀にて物好に拵へ最負のかぶき役者の紋所などをうたせてさしたり其後又櫛おさへと云もの流行出たり是は櫛の前へ倒れぬ様の爲なりとて櫛の前へたてにさし込たり

一櫛おさへも銀にて紋所あるひはさまくの物好をうたせたり

帽子と云もの浮たるものに非すすて冠は惣髪の上を帽と云ものにて包み其帽を左右よりしめよせて紐にてくくりたる處則冠の巾子なり其紐のたれたる處今の纓なり依之上代より有來て容易ならざるものなり又永享四年富士御覽の記(足利六代將軍義教作者連歌師宗長)に山名金吾の歌に雲やこれ雪をいたたくふしのねはとも老せぬ綿ほうしかな飛鳥井雅世富士の根も雪をいたたく萬代に萬代つまん綿ほうしかなと有是は領主今川範政が綿帽子を獻じたるにつけてよみたる歌なり又女は昔は步障とて木にてわくを拵へそれに絹をかけてかたちのかくるやうにして歩行たり足利家の頃に

見えたり其餘風則かつぎと云ものに成て京都にては今に歩にてありく女はかつぎを着るなり翁も在番にて度々見たりやさしく見入のよきものなり女の形ちをつむむには至極よきものにて昔は江戸にてもかつぎを着たりしに猷廟薨御の時日光山へ被爲入上野増上寺にて御法事有けるに其頃は御法事の時貴賤ともに女の聽聞を免されけるに増上寺にて口間八三郎と云もの女の眞似をしてかつぎをかぶり聽衆にまじり松平伊豆守をねらひけるより御停止に成たり大坂は元來少し彼步障後に是を略して上にかけたる練絹計を用ひ夫も又辨利になりて小袖の着はかりひとへをかつぐことにはなりぬ一條兼良公の雲井の春に薄衣かつぎしてなどこそありしが此頃は今様のこととて小袖かつぎの馴すがたとありかゝる不問語しるし侍るも我ものしりがほに人の笑ふべきことなれど古今の沿革しるらんはいかで故を温て新しきを知るべき猶公務の間にもしはまほしきことあれどもこゝには略し侍りぬかつぎの沿革など大抵の儒者もしりたる人あらず

一又其ころは女も夏は笠をかぶりて歩行たり翁が幼年の頃母の夏の比物語し給へるに笠をかぶり給へるをよく覺へ居たり昔の女笠のたぐひなり

一寶曆の始めより誰人が青き紙にて張たる日傘をさし始めて後は女の菅笠はすたりて今は女の笠をかぶると云ことは絶てなし近き頃の子どもらは女の笠かぶりたる形はしるまじと思ふ位なり元來帽子もすたりて今は帽子かぶりて歩行女は一人もなし櫛押へも又すたりて誰もさすものはなし青傘は其頃ことの外流行て今はすたりたれど猶残り女の髪もそこねず同身日を掩ふ故に暑を避て甚よろし

一衣類の色も其頃は丁子茶と云色流行出て男女貴賤を論せず賤者のひとつ布子さへ丁子茶に染て著たり紙肩衣さへ其頃は丁子茶に染たりけり扱又女の衣類は五寸もやう流行出で縫にも染にも皆五寸もやうをしたり櫛は朱ぬりの山形の平たく横へ長きをさしたり又子どもは花かんざしとて美しく花を付たるかんざしをさせり是は畢竟よし原の禿のあたたまを眞似たるなり其頃の歌に丁子茶と五寸もや

うに日傘米ぬりの櫛に花のかんざしとて貴賤口號
みたり又象牙の櫛笄も流行たり蒔繪なとさせてさ
したり奇麗にてよかりき

一翁が竹馬の頃は扇屋染とて丸く四角團扇六角ひし
などに形を交へ其中に花鳥唐草の類を色入にして
さまざま美しく染たり子供に着べきものにて専ら
用ひたり多分絹なりけり貴賤共に子供は大方扇屋
染なり今の板じめの類なり又横堅筋違に筋を立て
其内に玉を大小いくらも交へ染たるを歌舞伎役者
の中村傳九郎が著たりとて傳九郎染といひ石疊は
若衆形の佐の川市松が著たりとて市松と云ひうづ
まきは市村龜藏が著たりとて龜藏小紋といふ横に
兩ふり是にいろくくの筋を染たるを嵐小六が著た
りとして小六染と云ふて吳服屋者も多くかの染の品
を持來りて人々の最負く其染をとのへ用ひ
たり

其品々の流行して後は餘り誰もめにとめず親和
染とて唐様書の三井孫之允(與力)が筆跡をうつ
してからやうをちらし家書などを交へて親和染
(親和は實名其子親孝)とて殊の外流行たり安永

明和の頃なるべし其頃より女の小袖のうらもや
う流行出で底いたりとやらん心もちにて表は無
別條大風の島或は紋付などの無地にしてうらは
模様を付たりそれより紅裏はすたり紫うらもや
ううらなど付て伊達に著る事になりたり
一其頃は世もよかりけり翁が十五の年(寶曆のはじ
め)本所回向院にて圓光大師の開帳有しがおびた
いしき參詣にて群集したり其時相弟子にいざなは
れて涼舟にて始て出で吉原を見物したり川のつら
をうかくと行くともなしに今戸へあがりて土手
を行爰はいづくぞと問へば日本堤なり今少しゆけ
ば五十間道衣紋坂なりとて友だちの教ゆやがて大
門を入て五丁町の格子を見物して歩行に花やかな
ることなり然れ共はや其頃は茶屋船宿へよりて
腰物袴などを取白衣丸腰にて大門へ入たり其頃よ
り猶三四十年前も前は武士は深あみ笠を着て淺黄の
丸ぐけの笠紐など彼丹前風といふものにて吉原へ
行たりしと云り翁が見物したる頃は風俗もかはり
て町人體にやつして行たり其時花紫と云遊女圓光
大師開帳へ十二灯籠を上たりしに十二でうちん花

紫の紐付て飾りし玉屋の女郎衆かと云流行歌を貴
賤上下共に若きものは口ぐせにうたひたり

圓光大師の開帳に加持水を出したりしが竹の筒
に入て請てかへるものおびたいしき事なり其後
二三年立て古河に水の湧所出來て弘法大師の加
持水なりとおびたいしく繁昌したり江戸より
ぬけ参りのごとく行く人多くて御旗下のうち
も行たる人多し後は山師の仕業なりとて領主よ
りとめられたり

一開帳も其頃は花やかなる事なりき翁が九十計の
頃池の端辨天の開帳有て繁昌したり造り物に大な
るへびを拵へて上ゲたり鱗を文錢をみがきてこと
ごとく付たり又根津の方より辨天の島へ八ッ橋を
懸たり蓮の盛を杜若になぞらへたる心なるへし又
近來筈橋の長谷寺の開帳(本尊は忘れたり)にきれ
にて五緒車を拵へて上たりその前三圍稻荷の開帳
に黒天鷲絨にて牛を拵へて上たり翁が廿五六歳の
時音羽町の護國寺にて秩父三十三所の觀音の開帳
ありしに其頃より開帳もさびれて造り物工みて上
る沙汰もなし辻々の札を見るに開帳さへ今は多か

らぬやうに覺えたり

一歌舞伎役者も上手其數多く有たり市川海老藏(其
頃老人にて七十餘なり)瀬川菊之丞(昔の菊之丞に
てさのみ器量はよくもなかりしが誠に女の如し)
中村富十郎(若衆方にて殊の外御殿の
女中の最負したる役者なり)坂東彦三郎(松本幸四
郎(後市川團十郎)若手にては尾上菊五郎大谷廣次
中村助五郎道外にては嵐音八いづれも最負多くて
取り分け大谷中村は實方と敵役にて男もよくて互
に同座に居てたてををする時はあたらぬ狂言といふ
はなかりしなり中島三甫右衛門は古今悪方の上手
音八は道外の名人にて馬鹿を盡す真似になりて馬
鹿を無理に利口に取廻すふりをしたり一段上手な
る工夫にて感に堪たることなりけりこゝにをか
し咄あり翁が若き時廣次はよし助五郎はかくあり
し誰は出來たりなど若きもの共打よりて咄すに家
司に太田又左衛門と云年よりたる男ありしが夫を
聞て今の若き人達が當時の役者を譽れども中々
昔の神山小四郎などいふ役者などに似るべくもな
し今の役者どもの及ぶ所に非ずとてわらひたりし

に其後大谷中村など死して近頃の仲藏幸四郎などを入々譽る咄しを聞に其代の役者に似るべくもなし彼又左衛門が笑ひたりし心地思ひあたりていとをかし追々出来る役者も其代の者共よりは男も劣り藝もつたなく見え又作者も其頃の作者とは遙かに趣向も劣りたる様に覺ゆ是をもて考れば又行末さぞあらめ其代次第に劣り行なるべし末の代に至りてはいかなること成もて行べきさらでさへ咄につれて人の風俗も次第に衰へ行はいにしへのよき事を後は聞傳ふるものなくなり語り傳ふることも絶ぬべしされば覺えたることは筆に残して子孫の心得にもせまほしき事なり

歌舞妓役者並に遊女の因にしるす翁が大御番勤て在番する頃相番の咄に三浦某(大御番大久保主膳正組翁が番頭と對組なり)若き頃(安永より二三年も昔なるべし)吉原へ行て遊びたりしに其遊女初會とはいへど殊の外よくもてなしたりしにこらへがたくて其夜床花を十五兩遣したり彼女もかたじけなく思ひけるにや明る朝歸る時大門迄送りたり其後ふたゝび三浦行ず友達の

左ばかりよくしたる女を何故にふたゝびゆかざると問へば三浦がいかやうの次第なり金もらひたりとて初會より送り出る女おもしろからずとて其後尋ねもせず置たりと云咄しを相番の咄したり其頃の人の心感するに餘りあり誠の遊びなり今は始めより遊女の方から上まへ取て歸るべき工み計にて其如き筋の立たる遊人は中々なし殊に其辨利を發明と思へり恐なる人情なり又翁が小普請與頭勤る頃大久保矢九郎(千石牛込御門内)とて同役なりしが翁と必易く折々出會にも互に招合てくつろぎたる中なりしが我等は今迄(其頃三十餘四十近し)芝居吉原其外悪所へ行たる事更になしゆかでもすむべきことなればゆかぬなり乍去足下などのさそひ行といはいいかにも行べき心なりとてかたり侍りき是も又めづらしき生質にて其上人愛もよく功者ものなりき

一扇鼻紙袋たばこ入の類まで色々に移りかはりたり其頃は先地紙賣とて四月半にもなれば奇麗なるひとへ物に(極暑といへとも單物足袋を用)足袋雪

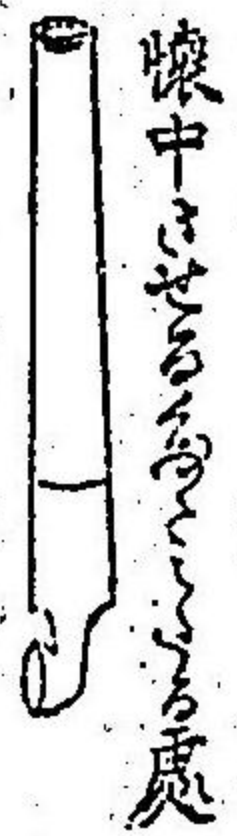
踏をはき地紙の形にこしらへたる箱を三ツ計其間に骨を入たる角に長き箱を組入馬の胸がひにて中ゆひをして肩にかけ地紙とて呼て賣歩行たり屋敷の臺所へ呼込て扇を物好にあつらへ又即席に折もありよき感にて下女はした迄地紙うりの男つきによりて取廻していらぬ扇を折らすものも有けり翁が十二の歳(寛延三年)伊奈友太夫(市兵衛町御小姓組)の劍槍の術の門入しけるに相弟子皆云合て金平骨の扇子地紙一杯に熊を一疋かゝせて稽古の時不殘持たりし事あり今は中々さる模様の扇などは子ども、目には掛ず地紙賣もいつの頃よりか絶て出ずたばこ入翁が竹馬の頃たばこ吞習ふ頃は奇麗なる油紙のひとへなるを櫛形にして廻りをかんせん縫にして紺青にて女は役者の紋所などを隅に少さく書たるを用るもあり男は無地又は奇麗に墨繪など書たるをとゝのへて用ひたり或は柿澁に砂糖を入れて摺交て厚紙へ何遍も引ばあつく成て皮のごとくなるを能頃にあちて廻りをかんせん縫にしてたばこ入に用ひたりおとなしく御役人などの持べきものなりけり又びいどろ紙とて

かんでんをうすく板へながして能かはきたる時へがして紙のごとくなるをかんせん縫にしてたばこ入に用ひたりたばこの色すき通りに景氣なるものなり子どもなどの持べきものなり其頃は女は龍王もきの類男は館服部などを吞たり今はうつりかはりてもき(至て和かく色は黄なり)など吞む女は一人もなし貴賤男女ともに國府たばこならでは吞ぬやうに成たりたばこ入も紙のこしらへ方次第に高上になりて今きれよりも價貴し是等全く今の奢にて貴き價を費す位ならばきれのたばこ入をとゝのへて用る方ましなり

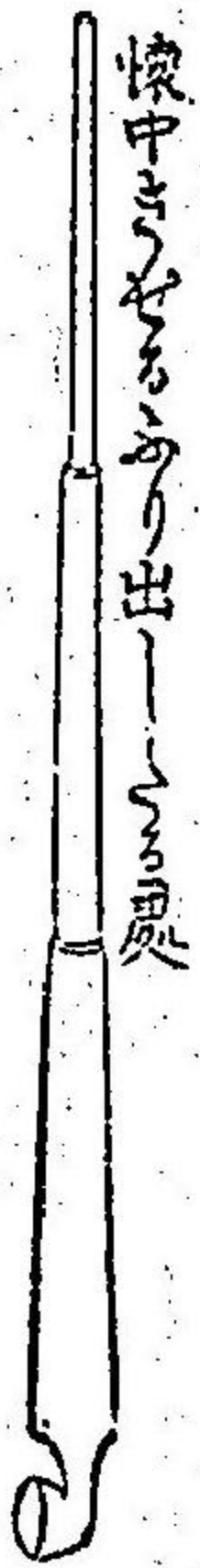
紙たばこ入能なりてきれば餘りうれざる故に次第にきれも心早く上る様にもふるとんすに擬ひなど織出してきれば下直なる紙の方はよくうれるゆる次第に工夫して高直になる買人も其通りに押うつりて用ゆる夫是いかなる人情なるや恐意分ちがたし

一きせるも品々流行たりされども大抵今もかはらす京都の櫻ばりのみ萬代不易の形にてその頃もおとなしき人は用ひたりしが今もかはらす又流行もせ

す其外品々新作いづれとも大同小異にてさして目立たるもなししかしながら昔は打のべのきせるを
 持者十人に三四人も有たり又女は繼らうとて長き
 らうを二ツに切て夫を相口をこしらへ繼て長き煙
 管にして吞たり仕舞時は二ツにして懐中するなり
 (其繼目の相口を角にするもあり銀にてするも
 ありほり物など迄に物好したり) 又懐中させると

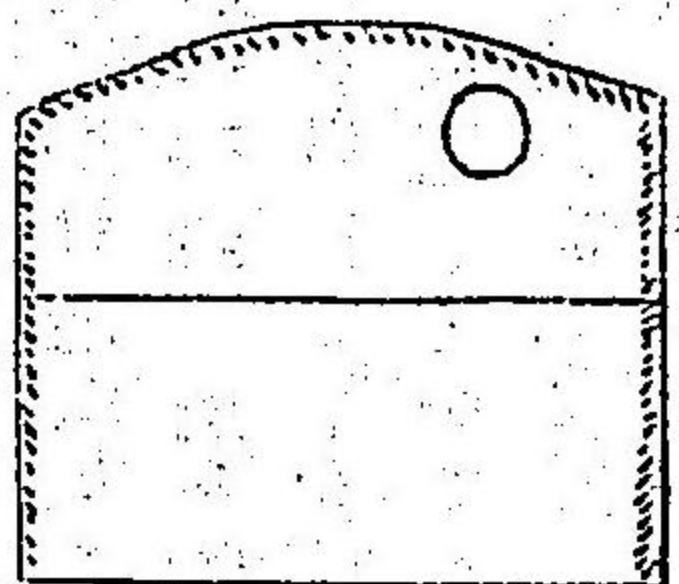


懐中させるところ



懐中させるところ

紙多葉粉入



て打のべのきせるを二繼にて入子にしてふり出せ

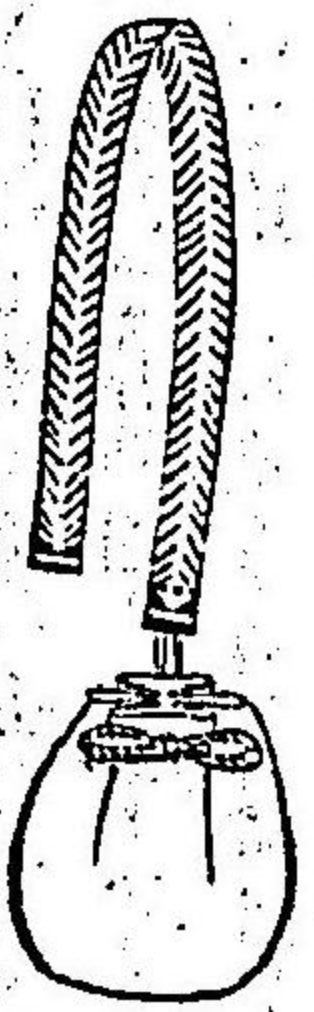
ば能かげんの長ききせるになる様にして納る時は
 吸口より入子にして仕舞やうにしてみじかくなる
 なり一旦はやりて殿中御役人など専ら用ひたり畢
 竟懐中の爲なり
 又瀬戸物きせるもありけり雁首吸口をきれいに焼
 物にしてもやうなども焼付たり是は婦人子供に化
 粧させるともにすたりて今は餘りしる人もま
 れなりきせる袋も其頃は皆衣類のたちあまりなん
 どにて手前縫にしたり
 一翁が在番の頃は(安永)人によりて銀きせるのたつ
 ぶりとしたるにごま竹の白竹のらうをすげ其らう
 にわざとわれを見せ其所へ銀のかすがひうたせて
 持たり又猶たばこ入きせる筒をゑぞにしきなどに
 て拵へ銀のくさりを長く紐にして銀の火はたきを
 根付にして用ひたり近き頃に至り革のきせる筒を
 仕出して男向御番御役つとむる者などは一般に革
 のきせる筒を用る事に成たり是等は革の方おとな
 しくやにも通らず一段と人情の趣く所よるしかる
 べし其作者の形容伊達下手物好は廢りて今の氣向
 は出す入す目に立す殊に辨利にて質素なるを専ら

とする風俗に成たる人のいかなればたばこ入なん
 どのいか様にも可濟ものなるをされより高き拵
 らへ紙を用ひ郡内にはめもかけずしてさやちりめ
 んを著するはいかなる心にかいぶかし所謂こゝに
 賢くしてかしこにうとき類ひ成か何事も其時代に
 むかひて實不實の差別なくうつり行人情こそあだ
 なりけれ
 一鼻紙袋も昔はひとつ口にして脇入を入口のかぶせ
 に銀の大なる平金物に様々の物好して打たりそれ
 を紫の和巾につゝみて胴〆とて眞田の廣きを廻し
 て銀の平たき輪金物をはめ緒じめの如くしめるや
 うに拵へ其先に落し巾着を付て内懐へ入て持たり
 扱はな紙袋は別に其儘入るか又は鼻紙さし鼻紙お
 さへとてきれにて薄く拵へ夫にてはさみ外懐へ入
 たり(細きゐにて疊の如くしてへりをとりたるも
 あり又紙にて拵へたるも有又はな紙袋は今に女の
 懐中するはかはる事なし) 其後三徳と云もの流行
 出てはな紙袋の通り仕立かたは脇入なしに口
 付て薄くして書付楊枝さしなどを入中に鼻がみ
 をはさむ様にしたる物なり今も猶是を用ゆ口の引

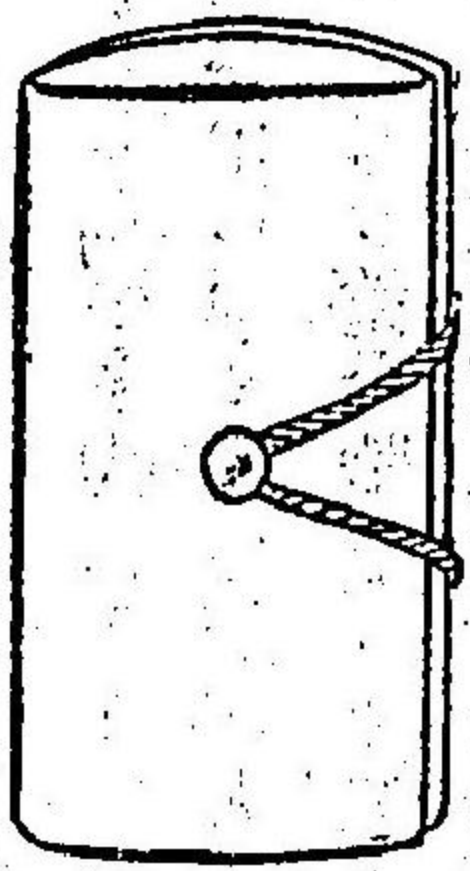
懸は脇入のなき方より紐を付ばたんがけにして
 置たり其後はな紙さしと云もの出来てはな紙袋へ
 は金子其外要用の品を入(其頃若き人の稽古など
 に日々往來する人は小き桐油元ゆひなどを入た
 り並に鏡は多分入て歩行たり是等は第一懐中して
 よき品なれ共今懐中する人あるかしらす) 鼻紙さ
 しに常用の品を入小菊のはな紙をはさみて懐中す
 るなり(前はな紙さしと同様に少し手厚くした
 る物なり今は多分右の二品ツゝ懐中するなり此は
 な紙さしにも品々工夫出来て中の所へ又一ツ淺き
 口を付て楊枝などを入る是を田沼掛と云へり(田
 沼主殿頭服用ひ始められしとぞ) 又さらさ或は純
 子などにて大なる袋を拵へ何と云事なく此袋の中
 へ入て懐中する人も有けり何事も此袋一ツにて事
 足りたり是をどんぶりと號して若き遊人俗客なん
 どは専ら用ひたり(見たる處不人柄なる物にて博
 奕打の用る物と見えたり) 又京大坂の在番にては
 前提と云もの流行で一般に用ひたり
 巾着の上に紐通しを付て帯へ付巾着を前へ提る
 なり印形要用の鍵の類内外朝夕身を不放品を入

るなり是は至極重寶なる物にて能工夫なりしが
江戸にてはさのみ用るものなし

前提



三徳



又楊枝さしも昔は大方女のこしらへの切おしの手紙にしたるやうじさしなりしに次第にいろいろ工夫して黄土佐紙にて小さく拵へたるは又折居にして疊むやうにしたるも有兎角いやみなく無利なる方に成行たり

一腰物も其頃遊客俗士のさしたるはあながち身は吟味せず疵ありてもなまぐらにても構なく細身に

切羽鉏等も焼付にして鏝などの吟味は勿論なし三分糸の花色などにて花奢にまかせ目貫も何にても貪着なく只なこの銀ぶちを専ら用たり今も何にても銀ぶちをさす人ありいかなる心なるか理外の事なり

今も大底俗人の心得は皆しかり拵は何となく物好に相應に對の大小などさすもあれども身に於ては吟味もせず第一大器量の了簡にて士の腰物にて人を切る事にてはなし切てはすまぬ事なりと大悟發明して高をくゝりたるものなり浦山しきすまし方にてしからは吟味するは無益なり一翁か御番つとめたる頃は(安永明和)彼はな紙さしも腰をひきくして鼻紙を三折にして女の如く懐中する事流行たり對客先などにて見るに森川紀伊守(大御番頭)其頃若手にて専ら勤めらるゝにかの三折の細きはな紙さしを入られたるを見るに其時は其時にていかにも懐の形り格好よかりしなり猶可笑は其頃男のうがひする事など流行たり人の振舞出會などに行ても主も其心得にて必膳後にはうがひ茶わんにうがひをどらせ挨拶したり總て

男は女どちがひてうがひするとても手水鉢の水にてする爲めに客ある時は手水鉢の掃除して水をもあらたに入がへさせて置事なるに女は男の如き立振舞はならぬものゆゑ納戸或は仕舞所などへ茶碗にうがひをとらせて口中を清めるなりしかるを懐中さへ女の如くはな紙を三折にして用ひ又物くぶたる上にて茶碗にうがひをとらせて口中をすすぐなど髭くひそらしたる者共が女の如くなる振舞のをかき尤口を奇麗にするはあしからぬ事なれど始終しかするかとおもへば三四十年流行て忽止みたり此時専らうがひしたる男ども今に達者にて御役を勤め御番衆にても居るやからあれども當時はうがひするやうすもなし手水鉢の水にてうがひする事さへ今はせぬなり然らば其時の口はきたなかりしや今の口は奇麗なるや其時も今も口はおのれが生れ付たる口にて同じ口なり其時の看も今の看も魚は同じ魚なりさても人情は愚なるものなりさればかゝる取とめたる事もなく理にあたらぬ情をもて子弟をあつかふゆゑに其時分は入番も殊の外心遣ひをして古番のきげんをとり養子縁

女の類もむづかしく迷惑したるやうすなり

其頃の俗習兩番大御番ともに御番入又は御役成は猶更にて古勤の人に音物をしたり上々の極品の鯉節三連ヅ、或は反物一反ヅ、などいふことにて御番入御番成ともに殊の外物の入たるなり其上に汁番辨當番など有て是も又物も入大勢の古番のくはるゝ様にする事故心遣ひもしたり翁が外叔父の入番の時に冬御番にうんどんを持せられたるといふ事日記には翁が父なる人はそば切を持参されたり酒番の時相泊りの御役人部屋部屋にて夜水とて酒を持来り或は大様の品あんかう汁など持来りて振まふ類は今も稀にはありさてかゝる設並辨當を持来るに寒中には冷夏はあざれてくさくなるに付て後は内々一組申合て仕出しやに總辨當を申付て一汁一菜の膳を持参して請負ひたるものふるまひたり追々諸組諸役ともに泊りのある場所皆仕出しに申付たり世話心遣もなく能ことなりけり翁御徒頭被仰付たる時は御改正後なりつれどいまだ仕出しは不止して御徒頭部屋にて師匠番の御差圖にて一汁

一 菜のめしを振舞ひたり至極勝手にはよかりしなり御徒頭の請負を清水屋と云たり白川侯執政せられて御改正ありしより次第々々にかゝる事止たり今は思ひの辨當計にて茶さへ溢茶より快は飲みがたし

一 翁が小普請與頭被仰付たりし時はいまだ御改正已前田沼家發行の頃なりしが初寄合に同役二十三人招て料理を出す終日の饗應なり翁のみに不限誰も誰も極りて四十五兩ヅ、かゝりたり尤肴一疋ヅ、と思ひても二十三人なれば入目もかゝる筈なれども菓子を鈴木越後が方へあつらへて其拂ひ二十金餘を費したり御役場々々に極て取つけのもの有て肴は何某ならでは不買料理は何やと云仕出し屋菓子屋は鈴木越後ならでは同役不殘不食ことなりしか白河侯出でくだかれしよりいまは其俣もなしいかなる不束ものにて古役古番の取調でからく苦勞なく心遣ひもなく勤馴て行は難有事なりけり酒も數寄屋河岸の矢野の所の山の印ならでは飲ぬといふことにて其酒を用ひたり是は餘り高價にもなく翁が今に至り山の印を用ひるに至極

ろし

一 翁が御番入したる頃(安永大御番頭杉浦出雲守組)大御番組にて自餘の組とは違ひ望月八郎右衛門と云其頃廉直にて量ある人にて殊に古かりしかば一組の取締風俗他の組とは違ひて少しも物入ことなし尤古番にさいなまるゝ事もなかりしが其代り務は殊の外むづかしく御番入して相番五十人の宅へ行て初て面會する筈なり見習御番いろゝといふ日限の有に其外に不殘行て逢ふべしとの掟なり短日の頃などはいかでか行届くべき其上にも宅にて不逢内は何ヶ度も行て宅にて一度は是非對面を交べきよしの掟なり翁が近所にていかに兼て知る人なりけれど伊丹彌兵衛といふ男の所へ十五度行たりしが終に不逢に仕廻たり其外伊丹にかぎらず十七度いたり二十度行たりとも未逢などいふやからありむかじはかゝる事なかりしに今の心易く勤馴ありさま子弟の身にとりては有がたき事なり

食物味を喰覺え茶酒の好悪などを分覺たる事もなし有合にまかせて只毒を喰ぬ計のことなりしに小普請與頭に成て永井求馬が同役被仰付て師匠番は船田兵左衛門なり(永井同役)初寄合の時例の通料理菓子も出て首尾好退散したり然るに重ねての寄合に去同役のいひ出したるは此程永井が出したる菓子は鈴木越後にてはなしといふ一人の同役されば我等も左思ひつると云又一入れば必定他の菓子司にて申付たるべしと云々其尾に付て不殘一同したり然らば差置がたし其趣を尋ぬべしと云ことになりて船田永井を座敷の中に取込同役廿三人列座してなぢり問ふ(船田吝嗇にて鈴木越後は高直なるをいみて金澤へあつらへたるなり)終に船田が數年出入の金澤丹後へあつらへたるよし申出しなりさればこそ越後にてはなかりけりやうかん庵し越後は中々細にてさる味にてはなかりけりと口々に六ヶ敷なりて船田永井兩人も公の御役人なるに喰物の事に付て手を突てあやませたり組支配を引廻して與頭を勉る人の取計如斯頑愚の翁などの了簡には分らぬ事なり此時翁宿へ歸りて

初て風味の厚薄に心付てやうかんとくひくらべて見るに成程あらしくに於て初て發明して世の人の高上なる心を辨へ奢りと云ことを辨へしりぬ是は鯛是はひらめなどゝてつみ入かまばこなどをよくくひ分る人あり追々思ひあたりて味を覺るやうに成たり愚なる生質なれどもいかせん

一 又面白き話ひとつあり其頃同役心易きやから云合て繪をかゝせて夫を會のたねにして寄合話す事なり翁にも參會すべきよし云により一日行たる事ありしに畫は其頃流行したる鈴木源五左衛門とて小十人の隠居にて畫名を隣松とて殊の外世上にてもてはやせし人なりけり其日鹽入大三郎が二枚折の屏風を持來りてかゝせたるに鹽入元來不學なれば虎溪の三笑と云事は知ては居たれどわざと三笑とは云はず僧と唐人と石橋の邊に手を拍て笑ひて立たる所を畫てと望む隣松心得て三笑を書たり墨をかはかすとて立置たるに亭主の親類來りて不苦は繪を拜見仕度杯といふ何かくるしかるべき一席に入べしと彼人座に着ながら彼屏風を見て是は醉吸の三教とやらんにても候かといふ去同役されば候

是は釋迦とて惠遠をさし是は老子孔子と淵明陸子
 静をさして教の中川勘三郎と翁は手に汗を握る心
 地して居たり其後亭主持傳へたる源氏繪を見給へ
 とて一軸を出したりしに伊勢物語の夜も明はきつ
 にはめなての心を書たり面白き繪物なりつれど夫
 を源氏繪々々々とひたものいふて吹聴したりかゝ
 る人もあれば有るものかと思ひ居たりし餘り面
 白き事ども故子や孫へのいましめにもなれかしと
 こゝにかいつく

一翁が子ども時は(延享寛延)世上にて風を上るに
 様々の物好をして尤大風をも上たり翁は生質餘り
 風を好まざりしが夫へ西の内紙十六枚張にして朱
 の洲濱を書きたる風を人の拵てくれたりしを三河
 臺へもち行てあげ付て清水坂を引てかへる屋敷の
 うちへ入れやうなかりければ土屋の屋根へ兩方よ
 り階子をかけ若き侍ども糸を持て長屋を持こして
 庭へ入たり齋藤鞆負(御小性組屋敷は三河臺下)か
 所にては子供はなかりしかど西の内紙三十六枚張
 の風を拵へて上たり畢竟は大人の慰にて子どもの
 所作にてはなし

今の草雙紙又然り古は子供の見える爲に楠一代
 記義經一代記などて實を繪に書或は鉢かつぎ
 枯木に花咲ち、猿蟹合戦又は金平本などと勸
 善懲惡の本意を失はざりしに今はしかるものは
 皆うせて子どもには分らぬ事をつらりて専ら大
 人の玩となれり

其外八ツ花九曜のほし蜈蚣などいふ繪だこをよく
 拵へて家々にて上たり釣合六ヶ敷風を上手にした
 り中々今の子どものおとなくしく一二錢の袖風
 鳶だこを貰ふて子心に上りもせぬにひとり欠廻り
 て樂しみ日をくらす様の事にてはなかりき次第に
 人の心利勘にさとなりて二十年來中々不用のも
 のを費してたこなどに金錢を遣ふことはなし是
 等は人情のおとなしく成たるか又おとろへたる歎
 はかりがたし
 一翁が上下著習て十五六歳になる迄は麻上下はよせ
 ひだとして兩膝の中通りへいかに細くよせて仕立
 たるが流行たり常の袴も今の如く二のひだ開きな
 どいふことはなく馬乗袴の如く手を入れて左右
 へ廣げてすはりたり次第におとなしき風俗に成て

近來は廣島屋が(神田三河町仕立なり)仕立よくて
 勤仕する人などは彼の仕立ならでは著する事なし
 部屋住の稽古袴さへ皆此風を用ゆ麻上下同様にて
 二のひだ開とて居りたる時膝の格好よく扉を廣げ
 たるやうになるをよしとす其頃馬乗袴などは内福
 なる人などは純子縹子などを著たり一とせ十番の
 仙臺馬の初見せを行て見たりしに所の乗人なるよ
 し色白く小さけれど好き男つきなりしが黒綸子
 の袴の裾へ金糸にて村千鳥を散らして縫せて著た
 り馬も達者に乘たり今はかゝる伊達する人は一人
 もなし馬乗袴の十番仕立とて腰の下に紙を入れて仕
 立も其頃より専ら流行出たり(此仕立其頃は十番
 に一軒仕立屋有て馬乗候もの段々仕込たるなり外
 になかりしが近ごろはいづ方にても其通に仕立た
 るなり

一羽織世々に轉變したり延享寛延の頃は今の通り並
 の羽織なりしが(其頃はみじかき羽織は名主の著
 るやうなりとて笑ひたり)彼文金風になりてより
 羽織も長くなりやがて對丈位の羽織を著るやうに
 なりたり然れども天運循環して忽彼長羽織やみて

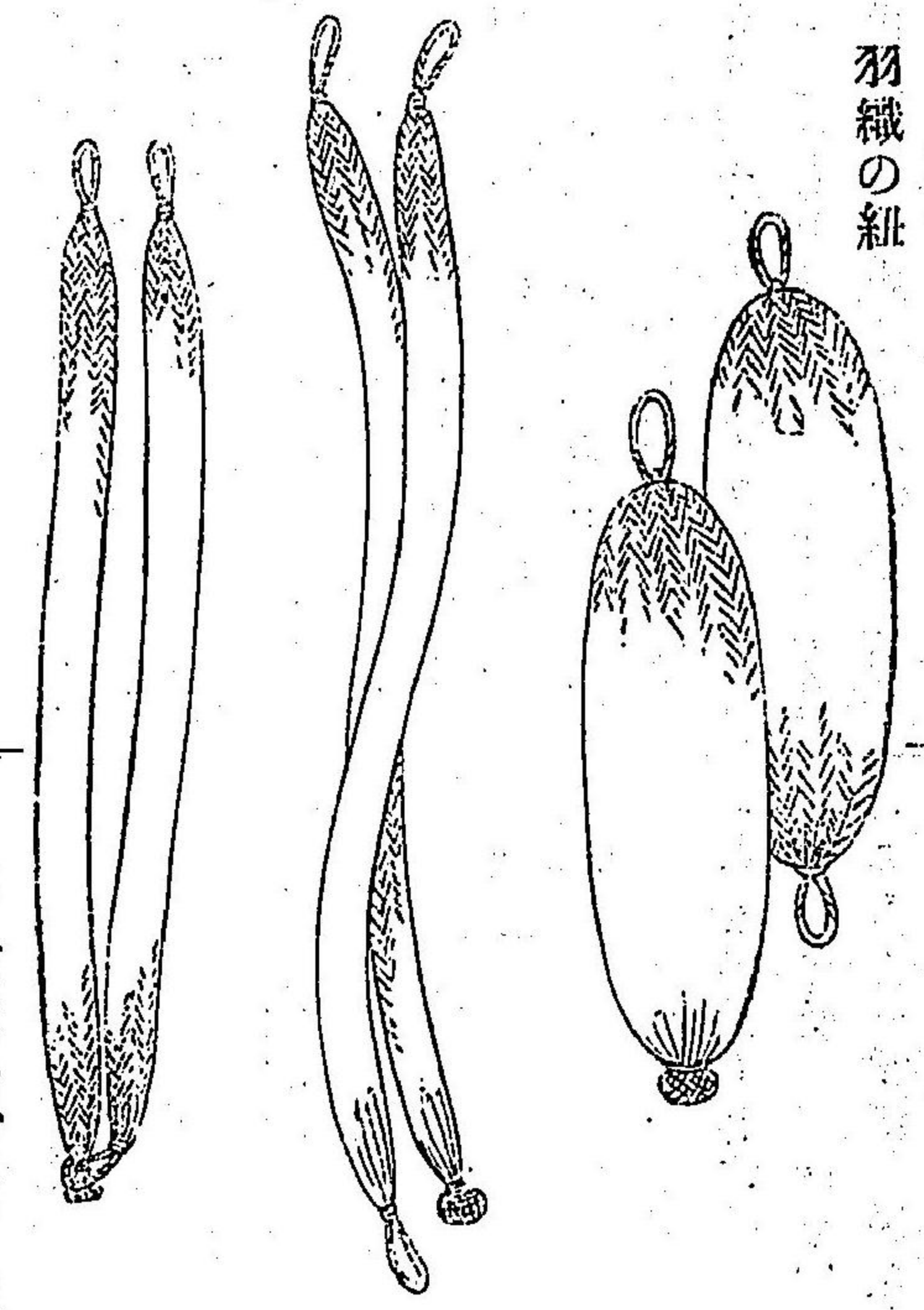
みじかき羽織流行出たり短き羽織の角袖とて袖も
 大きく丸みはわづかに五分許袖形をとり四角同様
 に袖を縫て著たり丈は居りて羽織の裾の疊と摺は
 らひになる位のみじかさなり遊人俗客は専ら此羽
 織を著たりしがいつとなく直りて又長羽織になり
 其後並の羽織になりたり紋所もくづし紋にして色
 色工夫物好に付たり其頃世に鳴たる俳諧の紀逸と
 いふが高點の句に 身代の崩しはしめは紋所と
 いふ句有たり此羽織の轉變につれて次第に三味線
 流行たり

豊後節も次第に高上になり文句も昔よりは風流
 になりて芝居の所作出語りといへばいつも常磐
 津文字太夫とて男もよく聲もよく上手にていつ
 も其狂言當りたり其頃専ら世に鳴りて素人藝に
 ても名を貰て女は文字江文字松などとて此間女
 客などの馳走に雇はれてあるきたり義太夫ぶし
 も殊の外流行たり是は御旗本歴々の人々かたり
 ありきたり其後正傳ぶしといふふし流行出て尤
 上方よりかたり出して江戸にも少しの内かたる
 ものありしが是はさのみ流行らすすたりたり

一扱三味線の流行たる事おびたいしきことにて歴々の子供惣領よりはじめ次男三男三味線引ざるものはなし野も山も毎日朝より晩迄音の絶る間はなし此上句下かたといふものになりてかぶきの芝居の鳴物の拍子を素人がよりたかりてうつなり其弊止みがたくて素人狂言を企て所々の屋敷にて催したり歴々の御旗本河原もの、真似して女がたになり立役かたき役に立さわぐ戯れなり同じく女藝者流行て江戸端々遊所は申に不及並の所にて藝者の二人三人なき町はなし餘りつりて吉原品川の賣女の妨になるにより賣女屋より訴へて高繩邊の女藝者十二三人被召捕たる事有けり皆藝者に極て遊所に行者なかりしなり寛政の御改正より羽織も藝者も三味線も皆止て正風體になりたり阿房に聞苦しくて其頃は扱も迷惑したる事なり寛政御改正よりかゝる不正の事は一切止たり羽織も黒縮緬の當世羽織はいづくへかやりけん皆もめんの馬乗羽織或は麻の羽織なり其頃落首に年をへし三筋の糸の音絶て

一羽織の紐も品々流行たり先平打の眞田紐にして長さ三寸或は五寸位(幅は廣きを伊達とす)むすぶ所はわなに於てぼたんがけなり是は尤流行たることなり又細き打紐をいく筋もよせてこしらへたるもあり是も牡丹掛なり後は銀の鎖を紐にしたる人も有けりかほどの奢なりつれど飯河新右衛門(大御番翁が弓の相弟子なり)と云人五百石取て若くて獨身なりければ折々吉原へ遊びに行に郡内の紺のみぢんじまの羽織と小袖を對に拵て著たり則其頃の遊山の晴著なりけり彼郡内のみぢんじま甚世上流行たることにて遊客は皆伊達著にしたり今より見れば却て奢とは思はれず又其頃は赤坂氷川明神の社地に隠し賣女有て殊の外繁昌したる事なりけり此場所翁が子供の時分三度迄隠賣女追拂れて掃除地に成たるを覺え居たり松平左近將監殿執政の頃なり其後田沼主殿頭どの執政に成て後は運上地に成て殊の外繁昌したり自身番所を置て御上納會所といふ札を打たり天下の君賣女の運上を取給ふとて巷説に

がにがしき事なりけり其後寛政の御改正に至りて又掃除地に成たり又其頃藏宿師とて淺草御藏宿より金を出させ古宿の借金を片付て取續の一助となし其中次をして禮金を取て己が助成としたり又權門師とて權家へ心易く立入て用人と相對し諸士の立身を取持て内金の直段を定め成就の時は謝禮取て助成としたり此兩物師とて其頃多く世上を徘徊したり頭巾も品々流行たり大抵大黒の如きくゝり頭巾に少ししころを付て襟をかくして用ひたり是は翁が生れぬ前よりの頭巾にて先ツ年來の人には役人な

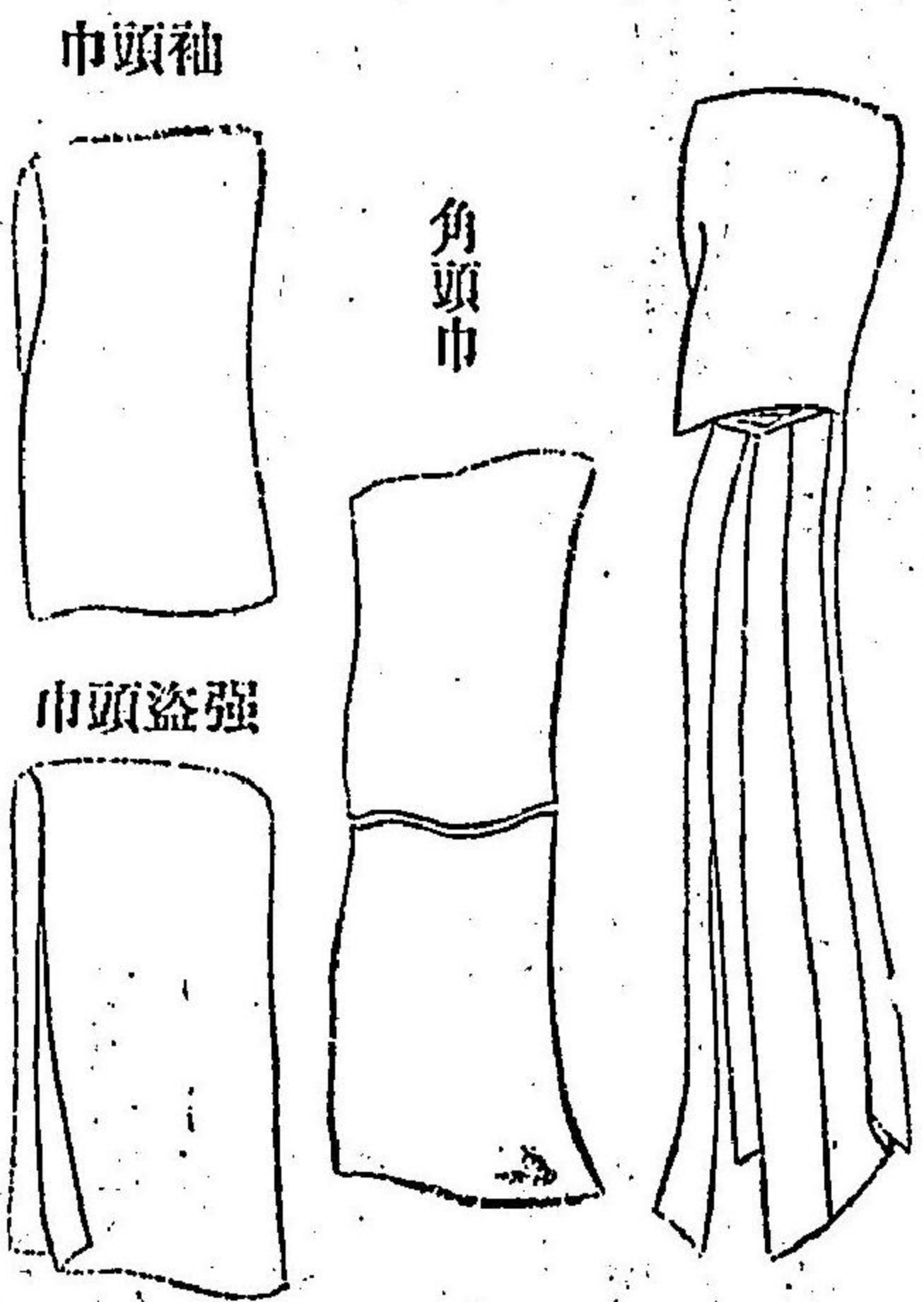


どのかぶりたるなり其後は宗十郎頭巾とて(歌舞妓役者の澤村宗十郎のかぶりたり)四方に筒を長くして後にしころを一尺計下け左右の耳に顔を包むやうに小びんに細きたんざくの様なしころを大きく付たり此しころを左右の頬より取ておごの下にて結べば耳も顔も寒からず筒の餘りは上に巻込又は折て額へはさみたり是はさのみ目立す今もかぶる人は又左右の細きたんざくなしに後のしころ計にて角頭巾にてかぶるもあり又目計頭巾とて鼻の上通り目の下を横にあご迄きれを付て片々にてぼたん掛にするやうにしてかぶるもあり(是は度々御書付出て制せられたり)又はじめのくゝり頭巾に惣廻りにしころを付て其しころの餘りを目計頭巾の如く目の下より廻

してぼたんにて留たるも有是等は餘ほど古き事なり尤火消の火事頭巾も皆是通りなり此しころの付方はふるき事にて昔の頭巾大方しころは十通りなり

又強盗頭巾とて狩人のかぶるごとくちりめんにて拵へかぶるもあり葎(紺染)などにて組たるもあり(紐は内へ付るなり尤昔より狩人のかぶりて歩行たるものなり賤者のかぶるものにて常の用ひては甚不人柄の物なり)又誰人の工夫したるか袖頭巾とて黒縮緬にて大なる袖を縫て袖口より顔を出して顔を能様に袖口の左右を兩方へひろげ耳へかくれば顔計出て頭より襟肩へかけて風をしのご扱袖口の下をとりて鼻へかくれば目計見えて顔はかくるゝなり遊客の用るに至極よろし能興じたるものなり其頃殊の外流行て貴賤ともにかぶりたり是は顔をかくす故無程御制禁に成て今はかぶる者なし女のかぶるには髪はそこねずして甚よかりき又思ひいづるまゝに爰にしるす翁が若年の頃は飛さあやを専ら着たり帯にもしたり飛紗綾の拾羽織は御帳書或は小役人などのおとなし羽織にてよか

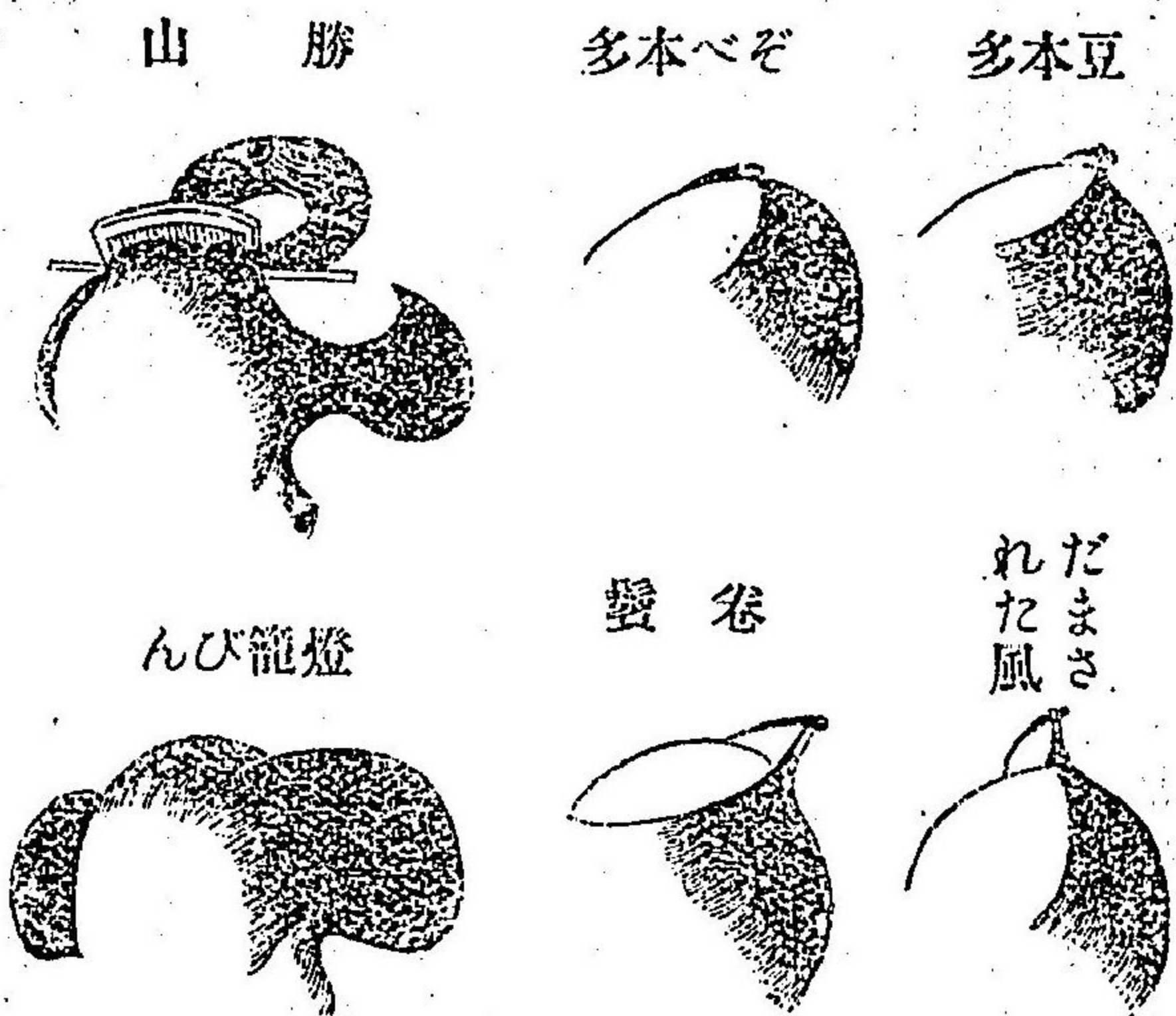
りけり今は飛紗綾知たる人もなし
宗十郎頭巾



一男女の髪も其頃はさまざまに替りたり先男の相應の生れ付にて前髪のあるうちはおさへ元結とて頭の上より元結を掛左右へ分て耳の後より下げ髪ゆはする人が兩手にておさへてもつ是は撥下びんとて若衆はもみ上ゲの所へびんをかき下げ夫より丸く上へかき上て扱髪を物好次第にゆひたり(紀州の小姓如此彼小姓の髪は大そふなる結様なりけ

り)扱野郎あたまはぞべ本多とて中剃をいかにも廣くそり髪の間より中剃のみゆるやうにして根をゆるくつけわけわこんとの間縫にして月代へのぞきたるやうにまさかけて置たり多く堺町邊の歌舞妓者のあたまつきにて歴々にも若き人達は随分其如くゆはせて上下著て公儀勤る有様不相應のあたまなり又豆本多と云は至極髪をつめて尤少くしてわけをいかにも少さく豆粒の如く結ふたるなり又其後遊士俗客ははげを殊の外長くのばして大抵額へ押付届くほどにしてゆひたり又だまされた風とて町家の若者などは鬢口を甚薄く剃下け夫より段々後ろ高にたて髪を結ひたり是をだまされた風といへり又巻髪とて鬢の毛を上へ搔上げきはにて巻込ゆひたりいづれもかの文金風より後の事なり女も昔勝山といふわけ流行たり遊女の勝山と云が結ひ始めたりといへり其後丁子茶の流行る頃は灯笼鬢とて雨様の鬢を見事に毛筋をすかして灯笼の如くに結ひたりゆへにびんさしといふもの流行出て小間物屋など多く持来りたり又男のひたいも小額を置て際を付す上計り額をすこし角を入ぬきたる

が溫和にて若きものは甚見付もよろしきゆへ流行出たり其弊額より髪を厚くしてひたいは横に少しばかり際を付たるか又流行たり



一前に記す地紙賣の歩行時分きざみたばこやとて是も小奇麗なる形をして(是は年ばいの者おやちな

ども歩行たり)いくつも引出しを付たる小篋筒様なる箱を脊負て品々の刻みたばこを入商に歩行たり是は夏に不限四季ともに家々を廻り出入取付など出来て重寶なりき地紙やと同じく今はすたりて知る人もなし

一四月八日には釋迦の誕生として小さき盥へ茶を入中に釋迦の誕生のすがたを建屋根は色々の色紙などにて拵へ卯花などを付ものもらひの坊主が戸々家家をもち歩行たり屋敷へも入たり一錢二錢つゝの散錢を皆上たり又正月十六日七月十六日は爛魔王の形を拵へ右のごとく家々を持歩行て錢を貰ひたり又山猫廻しといふもの有て奉加坊主の首へかくる様なる箱を胸へかけ其箱の中よりえも知らぬ獸を出して子どもに見せ山猫廻しとして歩行たり又願人坊主に一人おもしろきものありけり大なる鐵鉢をたゝいてお釋迦こひと高らかに呼て市中を往來し手の内をもらひたり禪僧と見えて人柄もよく奥ゆかしくすけくゝと世放れたる有様只者とは見えざりき其頃芝三島町邊に居たるよし神道者有りけり小男なれ共能男付にてひれ有て色も白くしかも

柔和なり年は五十計にも見えたりしがあごの髭をかまひげにぬき立て長くのばし油を付て左右へかきわけ小びんの上迄撫上グて角のごとく兩方へそろへて切たり眞黒にして見事なる髭なりけり嶋緇子の上下を着て小ぎれいなる草履取をつれて愛宕下を鈴ふりて中臣の板をよみて歩行たり(尤太刀拵の大小をさしたり)長屋の窓下などを一錢の手の内をもらひて少しもわろびれず立どまりて鈴をふりて中臣のはらひをよみたり草履取は側にうづくまり居る興ありておもしろき事なり名をば大野大隅と云たり今はさ様の人もなし人情のいやしく成たるか又さかしく成たるか

一又其頃志道軒として辻講釋をして世を渡る坊主あり古今の名人にて人物もはや老人にて惣て垢のぬけたる奇妙者にて人をへちまとも思はず記録物を講釋するに初め少しの内實の事を云て夫よりおどけ立とわる口をいひ様々に狂じて人を笑はすること希代の者なり(俗説に長崎にて十八年禪學をしたりと云)八九寸の木にて男根を拵へ夫を手に持て拍子を取(トントントントト)面白きわる口おど

けをいふ皆願を解て開居るなりしかも豆藏如きのわざとをかしまをいふにあらず下卑す上品の事計をいふ毎日淺草へ出たり(觀音堂のわき)日々聞者群集したり常人ならざる證據にはしかる業にて世をわたる者は誰に限らず聞人の多きを歡ぶものなるに志道軒は女と出家が嫌ひにて婦人出家の内來りて聞人に交り居ればだんゝと當て口をいひ出して後は居たゝまれぬやうになる故彼か辻には婦人坊主は來らず至極面白きものなり大名貴人の招かれて客の饗應などに講釋するに辻にて仕る通り狂談を可申よし望ければ其通りわらはせたりといへり晩年には己が像を板行にして賣たりしが諸人我もゝと求て見るほどの事なり其あとにて隨龍軒とて是も流行たり上手にて座講釋杯に所々へ招かれたり是は狂講にはあらず實講なり又成田壽仙として世に鳴たる講釋師あり是も上手にて惣髪な

りひれありて父の許へも呼れて翁が若年の頃たしかに講釋をも聞たり殊の外流行たるものなりけり一相學者に神谷登とて京都より下りて殊の外江府に鳴たりト笹者に平澤左内と云もの出て是も世舉て

もてはやしたり今も市中の笹者の看板に平澤が號を出せるあり

一其頃雲州の相撲に釋迦が嶽(名は忘れたり)大男出來り(天明の頃)おびたいしき沙汰にて落しはなしにさへしたる程の事なり相撲はさのみ上手ならざれども勝れたる大兵にて貴賤寄合て朝夕の咄にも彼が噂のみいひたる事なり其頃翁が番町邊へ行て麴町五丁目通り紀州の達摩門前へ掛りて歸るに二三町先におびたいしく人の集りて行やうすなりいかなる事の有るやらん生醉か狂人か又は喧嘩かけしからぬ人の群集する事也と思ひ急ぎて段々近くなりてむかふをみれば一人腰より上計あらはれて見ゆる故扱は拵馬を乗て行人なるべし足取見事さに人の集りてしたひ行成べしと彌急きて坂を下りて雲州の門前にて廣き所にて人の散たるをみれば釋迦が嶽なり連たる人と別れて釋迦が嶽は雲州の裏門へ歸り入るを始めて肝を潰して彼が大男を感じたる事おかしき物がたりなり

一又其頃松井屋源左衛門と云ふものは齒磨賣なり眞鍮の金物打たる黒ぬりの箱を重ねたる高荷を兩掛

にして小者にもたせ赤坂見付下の廣小路に出て場
 を取彼高荷を兩方へかまへ居合刀（尤及引にてよ
 くみがきたるなり）三尺計なるを第一として夫よ
 り段々寸劣りの刀を品々掛て居合を抜くなり手練
 目をおどろかしたる事なりけり小者は相太刀をう
 つ後は足駄をはきてぬき又は三方の上に登りてぬ
 きたり彼三尺計の刀を自由に取廻して様々の形を
 ぬきたり今は見えす猶相續して渡世するかしらす
 此松井屋と同様に世の人のよく知りたるこま廻し
 の玄水は今に淺草に居て若君様始て淺草邊へ被爲
 成候時は一番に御覽に入るなり冥加なる渡世な
 り

市中の因に思ひ出るまゝに記す昔は兩替屋の見
 世にかるた箱をおびたゞしく奇麗にならべつみ
 立たり又あめ寶引とて辻々橋際などに初春あめ
 やどもが美しき花あめを荷ひ來りて繩をいく筋
 も出してだい／＼をふんどんにしてあめを寶引
 にしたり市中の子どもおびたゞしく寄たかりて
 引たる事なり又紋付とて歌舞妓役者の紋所を集
 めひらにならべて板行にして其中に一ツ紋を別

に封じ張付て扱紋一ツを何錢と定めて戸々家々
 に持歩行或は巡廻して心々にその紋所に印を付
 遣はすなり紋所二ツも三ツも一人にて付るもの
 あり皆紋所主付てかの張付たる封を開きて其紋
 所にあたりたるもの勝にて其品を得たり始はき
 せるたばこ入様の物なりしが後は反物櫛笄袴地
 の類を出したり様かはりたる三笠付の類なり御
 改正後はこと／＼其類は皆停止せられたり

一俳諧も其頃流行たり翁がいまだ生れざる以前父な
 どの俳諧せられし頃は五人すぐれて世に似たる俳
 諧師有て五色墨などいひて世にもてはやしたるよ
 し其中に其水とかいふ組合にて其頃の柳生播磨守
 翁が父など心易くて出會されしよし翁が俳諧する
 頃は慶紀逸とて世話事を聞殊の外はやりたり麴町
 に居たりしが己が高點の句を集めて小冊にして六
 玉川と號して出したり追々繼て十篇迄出し其後猶
 江戸枝折と云小冊を又數篇出したたり力も有て面白
 き點者なりけり大家にも多く組合有て點式を度々
 貰はれたり初の點式は淵明か四時の詩にて冬嶺
 （五點）揚明輝（七點）夏雲奇峰（十點）春水滿四澤

（十五點）書拔は四時雲櫻を押し林家の者といへ
 り并沾山眞明存義田社湖十などいづれも一ふしつ
 つ有て流行たり點者になるには行脚を一度して萬
 句をせざれば點者入ならずと云事なりしが其頃よ
 りはや實に行脚を一度する點者もなく萬句は折々
 有たるやうす成しが今は夫も心もとなし

一書家は餘り世に鳴たるもの見えざりしが近來に至
 りて狩野榮川が法印になりて殊の外世に鳴たり
 （是もわざ／＼田沼家の隣に屋敷を拜領したる位
 なればこゝろあるものには底澄はせず尤書もよか
 りけり）其弟子に隣松とて前に記す書を書いて歩行
 人ありて大小家ともにもてはやしたり書もよく書
 たり

一書家は多く文人とも出たり細井廣澤（文三郎實名
 知慎と云有廟の御代與力にめし出されたり廣澤先
 生通稱次郎太夫なり博學にてきみまぐらと云うた
 をつくり出したたりいろは、無常を示したる語にて
 生ひ先きある子ともに學ばするは本意ならざるよ
 りおこれり）佐々木玄龍同文山關思恭（源内）阿保
 壽鳥石などいづれも見事なる事なり關思恭が子を

其事と云（餘り宜からず）又親和とて（三井孫十郎
 是は與力なり）近き頃迄殊の外世にもてはやされ
 て衣類の染に迄筆跡をもやうにしたる程なり親和
 死してその子を親孝と云餘り世に鳴らす鳥石も甚
 流行たる者なり（黄石公白石翁などに對して鳥石
 と號しけるにや）石に鳥の形有を見付出して鈴か
 森に祠を建鳥石社といふ堂上衆の手にて書たる額
 を掛たり（後はいさゝか御答のこと有て京へのぼ
 り京にて堂上家へ立入弟子も多く出來御覽に入た
 りとて天覽の二字を關防の印におしたり）其弟子
 に師道とて（芋洗坂の組屋敷の與力屋代某）是は翁
 か歌よみ習ふ頃石野廣通の續柄にて彼宅にて折々
 出會て歌をもよみこゝろ易かりしが其頃専ら世に
 鳴たるものなり

爰にひとつの懺悔物語侍るは翁が次男にて稽古
 歩行廻る頃養兄と連立つ所々に行く兄もと鳥
 石が弟子にて麻布一本松の氷川の麻布惣鎮守と
 云額は鳥石が書たりと語られし故彼邊往來する
 頃心を付て見ればいかにも鳥石が筆と見えて見
 事なりしが近頃翁が嵯峨様を書ならひて（自讃

するにはあらず) 聊筆意をも辨へ年來も老とな
るに随ひて彼氷川の額を見るに若き時見たると
は大に違ひて拙し澁川伴九郎(伴五郎が弟)鳥石
は拙くて筆意見えぬ様なりと云ひしが此頃思ひ
あたりて能々考へればひたすら形容計にて筆力
の實意はなし奇妙なる事なり

一扱武藝も翁か若年の頃はいまだ有廟の御餘輝残り
て(翁が十四五の頃薨御なり)諸藝とも實の稽古に
て今の如くうきたる事には非ず今は若くても免許
さへすめば弟子を扱ふ弓馬にてもあれ槍劍にても
あれ器用にて業の利たる人には例より貴様になら
へば心易くてよし第一近所なれば往來も心遣なく
てよしなどいふて忽弟子と成あつかふものも何
の心得もなく人の下墨も思はずさらばとて弟子に
して何を教るやらんひた者あつかひをするなり藝
術書上などにも何の某倅何の誰門弟など書て功も
ゆかず自己の工夫ひとつニツ發明したる事もなく
(總て藝と云もの何程皆傳免許なりとも夫は傳
授といふものにて數百卷の書物をゆづられたりと
てあてにはならず御宿申迄にて預り居るなり數年

辛苦して修行し傳授等をうくる中より其力にて教
の外の事理の己より發明したる所ならねば手に入
て自由自在の所へは至らず)先生と呼ばれて事の濟
は心易きことなり部屋住にて年來の人有りとも先
多くは若年なり大抵修行のたけも有るものなり既
に僧家は廿年修行せざれば出世をゆるされざる御
儀定なり然るに又廿前後の人の弟子をあつかふも
有又藝こそ達者にもせよ不埒不正なる人の弟子に
成ても習ふ人も有師を立る心も心にて弟子にな
る人も人なりけり何と云差別はなき心と見えたり
昔は弟子も師をえらびて當時の如く子共同様の人
にも習ふ人もなく又免許さへすめば弟子取する
と云事もなし總て人は歳廿五をこさればは定りた
る了簡はなきものなりと古人も云置たりましてや
弓馬などは第一六ヶ敷藝にて士の表藝なれば重き
事なり槍劍術とてたとひ一分の働は免許にも有
れ習の外に如何なる濫矢あるも知かたし又は勝負
の上にかなる理外のことあらんも申かたし年を
つみ功をかさねてこそ人をも道びくべきに何の辨
へもなく無念無想に師を立るは藝の廢たるといふ

ものなり

近來學問藝術御世話有て度々藝術見分に立合て
見るに昔よりは新流甚多く出來たり可笑歎息す
べき事なり古流の元祖は皆血臭きめに逢て仕お
ふせて然も自分流儀を立師を立んとしたるにも
なく其人の名人なるを諸人慕ひて衆人より押あ
がめて師と立流名も師を尊んで關口流花田流萬
流など、世間より付たる流名なり夫を今の人情
力も學力も劣りたる疊の上の工夫にて我と流名
を立ると云は途方もなき事なり

一其頃弓術には安富軍八(御先手與力被召出孫の軍
八今御留守居番與力になりて御普代になりたり)
竹中惣藏(田安へ被召出幸田彌五右衛門(御先手與
力に被召出)など云もの共皆京射手にて(京堂の矢
敷をしたる者共なり)江戸へ下りて出世を求めた
り馬は齋藤青人(俗名主税翁が九ツ十許の時死し
たり)名高くて世に鳴たり元來鹿嶋の神庫より古
の馬書を申出して段々潤色して五馭にわかち(常
取相取禮取軍取醫取)一馭濟たるを免許とし五馭
濟たるを印可とす青人名人にて百馬の圖を改ると

て四ッ谷へ三年移宿したりといへり(四ッ谷は小
荷駄の多く通る所なり)一生の内落馬四十八度門
弟三千人有て世上にて馬孔子といへり(實は千五
百人なり)大名高家貴賤ともに其頃彼門人ならぬ
はなかりけり翁は弟子の主税が門人なりけり(後
しる人といふ流儀は大坪本流といふ)其頃は世も
よくて齋藤が稽古始といへば大造なる事にて例年
二月朔日なりしが(始は木挽町馬場と三番町馬場
と兩方にて稽古を立たり後木挽町計になり彼所御
用地に成てあたご下馬場にて稽古あり)大身小身
弟子申合て我もくと馬場の兩頬に銘々幕を張棧
敷をかまへにしめ蒸籠酒肴は中に不及棧敷にて取
廣げにぎやかなる事なり初は花乗とて去年免許と
りたる弟子一人必一騎先をわたす(地道二へんの
り十へん納の地道一へん)夫より免許假策(中免な
り)平の弟子順々に残らず乘馬終て扱主税自身軍
取をしたり錦の小手をさし伊達なる櫛をかけて三
所へ歩行達の打太刀をたて小太刀大太刀槍長刀組
打弓の扱ひ迄をして相濟て達者なる門弟思ひく
一さんを馳て仕廻たり花やかなる事にて能見物

なりけり青人の年忌に一とせ主税が競馬を興行したり繪にかける加茂のくらべ馬のごとし兩方に萩の塚をゆひわたし場中二所に竝如此割を堀(三所共にもやうは違へり)其通りに砂をもち主税素襖鳥帽子にて馬に乗り古の形を首尾有て中より静に乗わたし終に祝詞を高聲に唱ふるなり三所ともにおなじ(下手にてはのれまじきものなり少しも筋を不違のりたり)是のみ古實と見えたり同じく其時齋藤が印可の弟子飯野彦作は木挽町馬場にて八ツ的を興行したり同杉原源太左衛門は三番町の馬場にて艸鹿を興行する翁もしろ人が棧敷にて見物したりし人則素袍鳥帽子にて馬に乗見したり皆何れも一世一代なり(彼も是も花やかにめづらしき事なれば見物群集しておびたゞしき事なりけり)

一 倅廟の亂舞をこのませられて其頃殊の外流行したり(寛延三年の事なり)觀世太夫(元章)奉願之筋違御門外明地にて一世一代をしたり新規に舞臺を建晴天十五日といふ事なり四座の御役者ども集りて珍らしき見物なり巷説おびたゞしく能くもいひ悪

しくも云ひたり此觀世は上手にて謠を校訂して改め新板の謠本を(此本の出来上りしは明和二年なり)出した(田安君の御心を加へられしとなり)林大頭一代の詩文章は必板行にする筈の事なるよしなれ共羅山文集の外は世上に行はるゝ集は聞不及難費届かねてせざるなりと彼家士の咄したり觀世は古へ慶長の頃江城御草創後觀世太夫金春勸進して其後は寛文七年京都に於て觀世太夫勸進能を興行する江戸にては同年寶生太夫興行して此時觀世廢れたるを起して漸めづらしき勸進能を興行し謠も校訂したれども夫も今は知人もなき様になりたり

一 扱武人には小南市郎兵衛(紀州様の御家より被召出大島流の槍に達したり代々御師範たり)をほじめ澁川伴五郎武光柳風軒(平太左衛門兩人共に柔術を指南したり)今枝丈左衛門(槍術)山岡丈左衛門(種田流の槍を指南したり)御旗本には伊奈友太夫(御先手伊奈友之助甥養嫡となる劍術は肥田流槍術は圓明流)など上手ども多かりけり澁川伴五郎と齋藤青人などは對客をつとめたりといへり

青人は御家の望み不叶して子の主税代に黒田家へ出て用ひられ其子の五六郎は馬術を止めて用人を勤む馬術は常人とて若黨有しが志有ものにて晝夜馬術を精出して後は稽古をゆづられ師を立て森川紀伊守家の馬術師に成てし人の門人數多隨從して時めき歩行たり奇特なるものなりけり

又青人菩提所は目黒の口口寺と云寺なるが生前に大なる自然石に青人の筆にて武備萬代石と彫付て門外の土手に立置て於今有依之門弟は皆彼所を萬代石といひならはせたり澁川は浪人にて道場を立よくしまりたる稽古なりけり翁も門弟にて往來したりしが實にいにしへの師弟の格をたて殊の外嚴重なる事なりけり是も御家の望不叶して其子伴五郎代に有馬家へ抱へられたり

一 儒者は聞及ざりしが翁が幼き頃は徂來はや古人になりて其弟子の南郭并に太宰彌右衛門が暫く残り居て子弟を導きたり

思ひ出るに任せて記す弓袋など翁が稽古する頃

は紺の木綿を二筋に裂て袋にしてはつし弓にして口より入て結び置事なりしが帯佩する人の淺黄木綿の巻袋を用ひ始めて夫より一統淺黄の巻袋になりけり今は又一變して菖蒲草染の萌黄の大袋を用る様子なり大的も昔は的番にあたりたる時は土藏のかべなどへ張付て銘々張立ゑどりにぎり墨などにて書たりしが今は見事に張たてゑどりもよく辨へて立派にゑがき賣様に剩尺二的もはり立てゑどりしたる出来合有扱もく自山なる事なり

昔はかゝることなかりつれど年を追て世かはり時うつりて去る事する人をばいらぬ事なりとそしり不益の費なりと嘲りて只目立すふしだゝさりげなくもて行くことを第一に心掛る風俗に成たり人情のおとろへたるかはたさがしく成たるか至極中庸の曲尺にて果は質素に落てよろしき俗習になりたれど其かはりには弓は只時服取爲計りなれば修羅前堂前などいらざるほね折なりとて奇麗を表に射かけ槍劍元來人を突又は切べき事はなき筈なればとて吟味もせずいにしへの上手名人の名さへ今

の若き人は知たるは少きやうに思はるゝなり後は孫等が代々隔りては終にむかしを取失ひ行形のみ一生を暮すやうに成ぬべし古きを尋て新しきを知るは昔のよき事あしき事をよく辨へ思ひあたりて今の戒ともなし心得ともなしてこそ功者にもなりあやまちも少なるらめその人情はたゞ利辨のみに流れて古今の辨へもなく義理も薄し

可耻事は町人の習俗は昔も今もかはらず出入やしき知音など吉凶の附届け今も猶かはらず不違武家よりは中々成實なり

畢竟むかしよりあしき事をすればあしきといふはしれたる事にていく度も其ためし有て人の上に見聞事なるを幾百年のむかし有たる事を今もかはらず同じ事悪き事をするといふは詰る所教へず習はずして昔をしらざるよりなす事なりされば永き日の慰めに翁がわすれがたきむかしをしるし置て未代に懐舊の媒共なれかしと筆にまかせてしるし侍るなり

くりためし賤のをたまきかきつめて
昔を今にのこすことの葉 花押

塵塚談

目次

上の巻

- 傀儡師の事
- 女合羽の事並夏火事羽織
- 女夏笠の事
- 不忍池八ッ橋
- 同所龍巻の事
- 狗の子を見て小兒を撫育すべき事
- 火見櫓を井樓といふ事
- 古井毒ある事
- 男色樓の事
- 月見の事
- 儒醫風俗の事
- 氣をかへて病を治する事
- 上におなし
- 甲陽軍艦並將軍家譜の事
- 頼朝墓の事
- 孕婦のこゝろうへき事

- 朝士水馬の事
- 芝居役者の事
- 同切落し中の間の事
- 義太夫節の事
- 御新造かみさまの事
- 淨瑠璃本並平家物語の事
- 白山御殿迹の事
- 館屋の忤異病の事
- 病犬にかまれし女の事
- 兩御番衆召仕若黨の事
- 下女下男給金の事
- 僧に眼病まれなる事
- 香椒に毒ある事
- 氣の事西洋四行の事
- 三派中洲の事
- 氣付といふ藥の事
- 官醫の事
- 鍋わり板の事
- 宮様圃の事
- 俳諧宗匠の事

道三狂歌の事

ガチャ／＼多葉粉の事

羽織長短の事

髪附油の事

大師遷座の事

吉原遊女衣服の事

忠直なる武士の事

油揚うりの事

勸進比丘尼の事

ケゴロの事

役者似顔繪の事

澁墨塗の事

蟬殻屋根並月役の事

青物魚賣の事

朝鮮人參の事

屋形船の事付船持の事

下の巻

鳥居坂出火落首の事

大商人の家断絶せし事

年玉扇子箱の事

男子髪カミの結ひやう替りし事

朝士アサシ總髪カミの事

粕漬マカヅク鯔魚ウラハの事

新酒ニイサケくばりの事

染井シヅメにて石佛イシブツを掘出せし事

白山御殿シラヤカ礎イソの事

駒込コマゴ富士フジまうしでの事

同所ドウジョ神明祭シラヤカ禮レイの事

堀ホリの内ウチ祖師ソウジの事

吉原ヨシハラ鏡屋キョウヤ嘉兵衛カベエが話

同所ドウジョ俄ワザ狂言キヤクワンの事

木綿キヌうりの事

綿帽子ワタカサうりの事

河豚カマクラ鯨魚クジラの事

餚ウヅマキ餚ウヅマキの事

古札コサタおさめの事

厄ウチはらひの事

松右衛門マツサウヱモンといふ非人ヒトの事

非人ヒトに上下ウヘソノある事

孟宗竹モウソウタケの事

浅草大川橋の事

八文字屋ヤチモジヤ浮世ウキヨざうしの事

扇地紙賣アヒラギの事

本郷肴店ホンキョウヤクテン並附木店ナミツキヤの事

浅草觀音市アサカス観音市の事

糲御藏アヒラギの事

浅草菰アサカスモの馬場ウマバの事

薩摩芋サツマヨの事

椀飯ワンイぶるまひマヒの事

享保元文年間諸品價キョウホウゲンマンシヨウモノバの事

鱒賣マスウの事

瀬戸物セトモノ焼繼ヤクヰの事

志道軒シヂョケンの事

ある諸侯アルシヨウの事

榮川院エイケン畫エの事

巢鴨ネズ菊見物キクミモノの事

倭製砂糖ワシヤシの事

ヲクタントヲクタントの事

松魚マツイサの事

菊キクの間御マ變應ヒカエの事

多葉粉刻やうの事

女髮結メカミムスの事

立花侯タテハナ稻荷イナリの事

下町シモマチを江戸エドといふ事

あま酒アマサケの事

法名ホウメイに院號インガウを付る事

嫁娶カヨウの節小謠セツコウの事

吉原ヨシハラの遊女ユウメ張りありし事

殺肉コロシク小便コノシとなる事

米穀コメ高直タカナの事

江戸エド自慢ジマンの異同

貧ヒナシは士の常トコなる事

掘貫ウツク井戸イダの事

斷食ダンシキして服藥フクヤクの事

袖工スエの事

俳諧ハイサイ前句マエク附ツケの事

頓智トウチ謎メ春雪ハルユキの事

町火消チヨウカシヨウ組クミ悦次郎エツジロウの事

因州インシュウの農夫ノウブ長壽チヤウジュウの事

春木町安五郎ハルキチヨウアノイロウ異病イヒヤクの事

- 藝者に藏を持ちし者なき事
- 肥鮮瘡の事
- ヒルゴ玉の事
- 江戸遠國者命に長短ある事
- 砂糖は諸病を和らぐる事
- 味噌直し草の事
- 千本鍵百姓の事(以下採樂記の抄録なり)
- 富士の人穴の事
- 蠟燭を知らざる田舎の事

目次終

塵塚談上の巻

○顯道元文二年丁巳閏十一月朔日巳の上刻小石川
白山御殿迹邊中屋敷にて生れ今茲文化十二年甲
戌七十八歳に至れり其間の世の風俗を思ひ出す
にまかせて書つらね其時々流行する事都鄙こ
れ一なりといへとも久しからずして迹かたもな
くなり侍る事水の泡の如くにして世の常なり且
保生にかゝれる事をも載す醫をしらぬ人の道し
るべにもなりなんと次てに記す

○傀儡師を江戸の方言に山ねこといふ人形まはし也
二人して小袖櫃のやうの箱に人形を入背に負て手に
腰鼓をたゝきながら歩行なり小童其音を聞て呼入人
形を歌舞せしめ遊観す淨瑠璃は義太夫ぶしにて三絃
はなく蘆屋道滿の葛の葉の段時頼記の雪の段の類を
語りながら人形を舞したんゝ好みも終り是切とい
ふ所に至りて山ねこといふ脚の如きものを出してチ
クワイゝとわめきて仕舞なり我等十四五歳頃ま
ては一ヶ月に七八度ツ、來りしが今は絶てなし

○婦女の雨衣の事寛延寶曆のころ迄は御家人の妻女
下女等は浴衣を雨よけに著たり大なる紋を五つ六つ
も附たるもあり伊達模様を染しも有り近歳は下賤
の女も浴衣などは著るものなしみな木綿の合羽を著
る事になりぬ又男子も近年は夏合羽とて葛布芭蕉布
の類をもつてつくる富饒の人は琥珀吳路服連等にし
てこしらへ著る此夏合羽も寛政頃はなかりし事也吾
大人寶曆十三年癸未六月十三日六十三歳にて没し給
ふに夏合羽夏火事羽織の設けなし是にて二品の久し
からざるを知べし婦女は夏合羽はいまだ著されとも
遠からず著る事になるへきにそ

○同夏笠の事同時頃までは女笠とて管にて大きく飛
脚の三度笠等様なるを用たりひもは後のかたを輪にな
し髻の下へかけあごの下にて結ぶなりこれも浴衣と
同様に今は被るものなし近頃は卑賤の婦女も青紙に
て張る日傘になれり又體様をつくる婆々などは簾に
て編みし笠を用ゆ此笠は高價にして卑賤の婦は用が
たし又近歳は町醫者出家なども青傘を用る者多し我
等明和年間京大坂遊歴せしに公家侍醫師出家等は皆
青傘なりき近來江戸も京都より移せしと見へたり

○東叡山の麓不忍池に寛政年間新地出来根津の方へ橋をかけしなり新地は下谷仲町うらより根津茅町うらまで池の廻りを築出しこしらへ橋は辨天堂の後より茅町の方へ橋を四ツ折にして掛たり水にうつりて八ツに見ゆる故に入ッ橋と異名せり新地には料理茶屋楊弓場講釋瑞龍軒など出たり其外家居建つらね非人豆藏まで出て繁昌し賑かに有りしが右新地出来しにより池中の鯉鮒の類多く死けるよし宮様の御聞に達し御心に不叶して問もなく取こぼち元の如く池となれり

○同不忍池より天明年間龍巻ありけり佐渡越後越中の海中には夏の日龍騰る事度々有と其節は虚空より黒雲下り来れば海中の潮水瀧を逆に掛し如く逆巻のぼり黒雲中に入る其雲の中に龍の形の如きもの見ゆると傳聞り其如く不忍池より黒雲逆巻のぼり龍騰りしと見へ近邊家屋を損し火の見櫓など倒せしなりその次第を聞に北海にて龍騰るの形勢に少しも替らず同様なり是をもて見れば小しき池底にも龍蟄伏し池水時氣に乗して發達し上よりは應して雲下り上下相感動し龍昇るものなるへし唐土には井中より龍飛出

し事五雜俎に見へたり中古武州金澤に一寺の和尚硯を所持す或日大雨す時に硯破れて龍昇りしとかや是等の事もあれと不忍の池などに潜藏すへきものとは思はさりきかく書ぬれと龍は雷にひとしく奇なる物吾黨のさらに測り知る所に非ず

○狗は人家の床下に多分は子を産す其生子床下に住の中は日を経るといへど足腰も弱くして生育おそきもの也床下を牽出し天の風氣を暫く受ると見る所にして足を延運ひ健に成るものぞかし是等の理を考へて小兒を撫育すへし世人は日月の光耀風寒暑雨の人身を養ふをしらすたゝ毒と思ふにより病もあり天死も多し夏の蟲の火に入るに似たり風寒暑雨も一通りに避るかよし

○阿部福山侯藩中にては火見櫓を井樓と號す火見櫓といはす元和寛永頃の遺語なるへし丸山下屋敷は最初廣大なる屋敷にして井樓北の隅白山淨雲寺坂上に有しよし即中仙道の出入の口にして火を見るのみにあらず深き主意あるのよしすへて御譜代大名衆の下屋敷は多分諸國へ街道の入口に置給ふ事なるにや

に熱酔數升をそゝぎ入或は鷄羽を落し見て入ものなりといふ愚老願に毒あるにあらず年を経る事久しきゆへ井の底は洋濁積りて凝聚し水土の氣のみになりて天の氣底まで通はさるにより人を殺す人は天地の氣を得て保生するに天氣といかす水土ばかりの偏氣の中へ入るにより死す海川にて沈溺するも水氣のみ多くして天氣陸地の如くかよはぬかゆへなり糞室穴倉にても時により呼吸息迫する事あり又金銀銅山にて金掘が穴中へ燈火をともし持入る深く穿入て天氣通はざる所に至れば其燈火たちまちに滅て人も死すゆへに燈火きゆると急に逃出るとかや是等もみな古井に入て死るも同じ理なり

○雪月花といふて古より人々心を月の光明と雪花と同じく遊覽する事淺からず唐土にては唐の代より盛なるまゝのよし顯道思ふに日月は天地の中の至尊なれば尊奉し拜禮すべき事なり然るに古へも詩に賦し歌に詠じ翫物とせしなりこれ天を輕侮するの甚しきといふべし中秋十五日を月見と號し翫ふ事延喜の時始りしよし久しき事也人々賀するにも祝するにもあらず貴賤とも遊興の樂みなり近年安永天明の頃は甚敷貴富は人を大勢集め招きほしに宴飲するを飾りとせり願ひ望みある人は權貴の家へ月見に付込臺の物を拵へ食物は臺といふ言譯に少し計りにして金銀を費し端物キセルたばこ入翫具の類を積かさね月見臺と稱し贈る事也天明八年申年の頃より此事少しうするぎし様なりたうとみ拜すべき尊き物を樂し

み疵物となす事かへすも恐れ多き事ぞかし
 ○今世の儒者醫者世に遇なざる輩を見るにどれも
 どれも權貴豐饒の家に匍匐して街らふにより是が種
 となりて用ひらるゝ事と見へたり夫故に書を著せど
 も聊も世のそしりねたみにならん事を記さず唯小
 かしき人の氣に應ずるやうに繕録す元祿享保年間の
 儒者醫者の如く凡俗のなすところをいとふやうなる
 者はさらになし皆音曲の藝者封問の類の渡世の便に
 せんとする者に似て儒醫の風俗悪しくなり行たり唐
 土に賊儒奸醫といふもこれらを名付ていへるもの成
 にも今世の儒醫にも實學の人は其品行を慎て徳を修
 め便佞はなきがゆへに俗人にいはれて平々たるも
 のと思はれ時に遇さる人も有べし俗言に盲千人目明
 千人といひしが今世は盲千人盲千人三千人とも盲な
 りといふよし左もあらんか今は士人も輕薄の風俗に
 移り實意を失ひし者多しる歌に
 世の中はさやうで御座る御もつとも
 と武士の行ひまさにかくのことにし全く商人の身ぶり
 心持によく似たり

○我等武州金澤にしばらく住居せし事あり其節荆妻
 妊娠にて惡阻強く食も給かね嘔吐もあり平素すける
 多葉粉も手にとらずなやみけり然る所せん父柳原理
 榮垂死のよし安永七年戊戌四月二日江戸出の狀七日
 に到來す不得止事急に支度し九日朝室の木村船場へ
 行の處五大力船出拂ひ小船一艘四時過にも出船の
 よしに付しばらく待居其船に乗る處折よく風もなく
 少しの風にて四時半頃に乗船しけるに十三里程の海
 路を八時前に品川驛八ッ山下へ着船す上陸せしに氣
 分よろしく食も能給べきらひける多葉粉を吸誠に常
 體に快復しけりそれより暮時頃に湯島へ到着惡阻の
 氣更になく平素の如し船中食事も給べす小便もせず
 女の事なれば恐怖の心はありつらん二月惱みける
 病ひ一時に癒たり西洋の療治に氣をかゆるといふ事
 なるへし十月二日辰中刻男子出生即松野嘉兵衛是な
 り
 ○享和三年癸亥四月より江戸麻疹大に流行貴賤多く
 是を患ふ予が外孫内藤義一郎十三歳吾家にて養ひけ
 る處五月十三日曉より頭痛發熱面手部足麻疹一面
 に出少し重き麻疹と見えけり其日近隣組屋敷鐵炮稽

古日に有けるに見物に行き度よし望に付よからぬ事
 とは思ひながら病人の事其意に任せ差遣しけり自分
 にも玉數廿二丸放し夕方歸る所麻疹過半癒たり家内
 の者大に驚き土間といひ冷へたるにより内攻と思ひ
 我にも心痛せしが氣分よく食事も常體何事も平素に
 替らざれば少しは安堵しけるが即日癒ける故心を
 痛めしが如何にもせんすもなく其日を過しけり
 十四日朝全く癒ていさゝか障もなし鐵炮自分も放ち
 玉音を多く聞るゆへに氣を替へたゞ一日にして癒け
 り西洋の療治に痘瘡傷寒は勿論諸病氣を替るといふ
 療治あり牀蓆を日毎にあちらこちらと替て病毒の氣
 をはらひ病牀を清淨にする事なり世人は是に異なり
 戸障子を閉し屏風を立廻し毒氣息氣をもらさぬ様に
 看病す故に病毒息氣益々鬱塞して重病にもなり全
 快も遅くする事と思はる義一郎荆妻兩人は思ひ設け
 ずして早速に全快せし也顯道此度の麻疹病四月廿一
 日より七月朔日迄他の病人百廿三人親族家僕十九人
 養生所病人の内十六人都市百五十八人内に孕婦九人
 あり百五十八人死せし者一人もなし義一郎か如き一
 日に癒し者も只一人なし

○甲陽軍鑑は高坂彈正昌信著述なり彈正天正六年
 戊子三月より隔症煩ひ此年彈正病死月日知れずこれ
 より以後は昌信父方の甥春日惣次郎書つきしもの也
 惣次郎は天正十三年乙酉三月中旬四十歳にて病死す
 其後小幡勘兵衛景憲集成せし書なり武家は文詞にう
 とければ七書を始め唐土の書籍を讀み曉す事あたは
 す此書を熟覽すへし外に將軍家譜(信長より秀吉迄)
 林道春の編集なり彈正道春ともに開卷より卷末まで
 まのあたり見たりし事を記し君上に捧けし書にして
 實録なり右二書は御家御武功の事を載たれば武夫は
 よく知覺すへき書也後人述作の書は我が好む所によ
 せて附會し記せしもの多く事實は十が一也具眼の者
 にあらずしては辨明なり難し
 ○頼朝五十三歳正治元年末正月十三日薨逝せらる鎌
 倉に墓あり予十七歳の時參詣せしに長三尺許の苔む
 したる五輪の石塔なり然るに薩州の太守小石塔を見
 苦しと思ひ給ふにや安永年間に八九尺の五輪の塔に
 建替られたり薩州先祖の墓も東の方二十間奥に有
 けり同時に建直し給ふ日本總追捕使頼朝の墓の小石
 塔をそのまゝに置給ふ時は古しへ質素の證迹にして

諸人の教訓にもなるべきに建替給ふは餘り心なき事ともいふへし

○孕婦臨月に至り腹痛むやいなやはて、穩婆を呼ぶべからず頻りに腹はり痛強くなり分娩と思ふ頃に呼ぶへし穩婆早く呼と役にもたぬ事を云ちらし彼是と差圖をなしたり産婦をなてさすりすれば産婦は今に生るゝ事と心得無理に生出さんとして難産に變する事まゝあり産は天地を大父母として生るゝ事なれば人力の及ふ所にてなし俗言の天道様次第に任すると大安産疑なし是天道をたうとみ身を大事にするの術なり婆は出胎ありて後に呼てくるしからず生兒をしばらく草座に置のみにていさゝか害なした時候に相應し嚴寒などは冷さぬやうに手當すべし然るに貴人富家は醫者と婆々のみをちからにして臨月に至れば穩婆を呼て附置もあり産月の事なれば少しの悩みは有へきに早速に醫者は藥劑を用ひ婆々はひたものひねりさすりして却てこれが爲にそこなひやぶらるゝ者多し田舎者貧賤の者は諸事無造作故に自然と天理にかなひ安産也又物種を土に植るに萌芽至て柔なれども堅き土を分け砂石を除きて生ひぬ此

等を推て曉すべき事ぞかし古人の病ありて治せざれば中醫を得るといへり病ありてさへ醫藥を用ひざるをよしとす況や産は病にあらず醫者か藥を以て大便を下すやうに藥にて生るゝものにてなし必しも醫者婆々を力にすべからず且生産をうむとはいふまじうまるゝ也うむは人力の所爲なりうまるは天地造化の妙にてうまるゝなり鳥獸を見るべし一産に五ツ六ツもつらね生るれども難産なく支離もなし是私智少しもなく天の生々地の養の理に自然とかなふかゆへに無難なる也却て人は私智の才覺にてうまんとするにによりて天地生成の理にそむくが故に難産有なり此理をよくゝおもひめぐらすべし穩婆を早く呼寄ざる事愚老が考へなれど試験多ければ爰に記しぬ

○朝士水馬御用稽古の事實曆五六年の頃は御書院番野澤半平大御番和田千太郎などを始として漸く十人計も出し様に覺たり場所は兩國の橋下元柳橋一ヶ所に限れり初心の人は深川越中島橋際にて渡せしなり扱馬渡乗様は往返共乗込乗揚にして始終馬に跨り聘馬の如くに乗渡しけり鞍置馬并腰刀を帶し渡すは上手の所作とせり近頃の様に乗出し乗揚に馬に付添ふ

やうなる見分のあしき乗渡しはさらになし今は淺草川の泳越も出來ずして御船と馬をたよりにし乗渡す人もあるよしさてゝあぶなき事の限りといふべしたゞ判金の所爲と見へたり且寶曆の頃は甲冑を著し馬渡並幼年の者の馬渡しは決てなかりしに近頃は甲冑渡し九歳十歳の馬渡數人これ有水馬功者になり指南に練磨せし故也甲冑渡しは土井主税工夫にて初めし事なり稽古場所は近來三ヶ所に定り兩御番乗駒形町新御番大御番元柳橋小普請衆は大川橋にて馬渡し有し也當時三ヶ所の人數部屋住共に五六十人も是ありよし寶曆の頃と違ひ多人數になれりかゝる安穩の御代にして武を忘さるの古訓にかなへる御事こそめてたけれ(大川橋は安永三年はしめてかゝる)又歩行水泳は野澤半平弟十次郎水馬に打交り稽古せし事也御徒五番組河内新助伴藤五郎といふ者御徒二十組にて一人の名人なりしを半平頼にて出十次郎などを取立たり扱手泳に調子を切といふは此藤五郎が始めし業也

○堺町ふきや町木挽町三芝居役者には立役女形實惡道外若衆形親仁方敵役花車方と分り銘々主役の藝の

みを勤めし事にて有し然るに三十四十年前以前女形名人中村富十郎木挽町にて立役の勤る工藤左衛門の役をじ實惡中村仲藏女形の勤るしのお賣をし立役坂東三津五郎曾我十郎を勤し次の幕には太郎といふ道外をしたり三人ともに大當りにて有し是主役にあらざる藝を勤めし始也此後主役にかゝはらず狂言する事になれり是皆昔より上手になりしと思はる主役に有さるの藝を勤る節には衣装は座元より渡し來れるよしこれ主役の藝にあらざれば也今は狂言ことに右體なれば自分ゝに拵へる事にや

○三芝居に切落并中の間とて舞臺際より鼠木戸まで追込にして切落一人百三拾二文中の間一人百文にて見物を入たり二三十年以來舞臺際へ土間さじきを拵へ残りは切落中の間にて追込にせし處近頃は切落中の間はさらになし不殘土間さじきにしたり故に切落中の間といふもの絶しなり

○義太夫ぶしといふ淨瑠璃の事實曆安永の頃は江戸中一めんに流行し小者調市迄も語りけりされとも人形芝居へ出る太夫は不殘大坂ものにて餘國の者は一人もなかりし事也たまゝ江戸出生のよく語るとい

ふ者が芝居へ出る時は給金もなく紙二枚計かたせらる江戸は何業にても似せる事は器用なれど義太夫節に限り出来ぬ事にて有しにちか頃は義太夫節甚おとろへし故に江戸出生の太夫も大坂上手の太夫の語りし段をかたるよしなり

○我等十四歳の頃は御家人二三拾儀高の妻女をかみ様と皆人稱せりまして商人は富家にてかみ様とよび子どもか親兄へはと様か、様に様あね様といひけり然るに二三十年以來同心渡り用人の類の妻町人も相應にくらす者の妻は御新造様と稱し又は一日くらしの者の子共も御と様御か、様御あに様御あね様といふ事になりたりいはんや富家の淺草札差は心至り禮儀武家をまねて娘をおじやう様妻を御新造様と稱す大名の嫡子の室を御新造様と稱する事をしらすして僭上無禮なる事惡むべし世の中奢れるより言語までおごりて實儀は薄く輕薄になれり諸商人の卑賤の者へも賣物をうり附んとてあがめうやまふより移り來りし事成べし

○上の條々顛倒なる言語ありすべて謠や淨瑠璃は諸人に善を勧め惡を懲しめんと風諫を作る物成に然る

に近年の淨瑠璃本を見るに今世いさゝかもいはざる不敬至極の卑賤の者の言語多し大名の奥方或は御籠中など夫子に向ひ某どのといひ姫君が親兄へ對しと様か、様あね様とよび其餘諸事の言葉至ていやしき者の如く後世に至り右の本ともを見て當時高貴の人の言葉かくありける事とさぞかし笑ふべしににがしき事といふべし既に平家物語は後鳥羽院の御時に信濃前司行長入道作り盲目生佛に教て語らせ生佛歌詠すと云り全く俗の謠ものにてありしが後世に至り實錄のごとくになれりいかんとなれば右物語を見れば平家の人々は各入水し或は誅せられ一族ごとく斷絶に及びり然るに肥後國極山中に五ヶ村といふ所有て平家高貴の人は入水と披露其實は此山中に隠れしその子孫今數千萬人に成じとなり東鑑に壽永三年二月十五日經正師正教經以上遠江守義定是を討取とあり又俗説辨に建久九年十二月二十七日頼朝相模川橋供養に出給歸路に能登守教經女の姿に似せて近付は刃刀を抜て頼朝を馬上より切落せりといふ見たり又筑前國に寶劍山白龍寺といふあり開基を日の御子といふ寶劍一振あり神と祝ひあり全く日

の御子は安徳天皇にして寶劍は十握の御劍なるべし此外西國邊諸所に平家の遺跡と思ふ所多く有とかや此説伊勢の御師金右衛門なるもの、話なり是等の説を以て思ふに平家物語は跡方もなき事を俗のおもしろく思ふ様にあはれに作り置しもの也故に事實を失ひ信用するに足らざる事明らけし閔人これを覺えずして實錄と思ふ事誤りなりされども今の淨瑠璃本とは雲泥の違ひ教訓ともなるべき事多し近世の淨瑠璃本は言葉いやしく無禮不義淫愛の事のみ多くして人をそこなふ事なり後世に貽り今の世をけがす事歎かわしき事いふばかりなし

○白山御殿坂上かとより元瘡守稻荷前まで四町程の間を大通りといふ御堀を埋し跡往來となれり故にむかふ側を享保の末迄は皆人御堀端といひけるよし御殿跡のかた片側にならび朝士の屋しき三拾五六間もあり五六十年以前迄は屋しきごととに土藏三ツ宛は有けり二藏有もあれと一藏これなき屋敷はなかりしが今は四五町の間土藏一ヶ所も見へず屋敷主は其ころの家も過半残れり

○品川驛三丁目館屋長次郎悴市太郎十二歳最初醫者

とも風濕と名付療治せしよし兩脚腫物出来膿水夥し出蒲團は勿論疊迄くさり病蓐より毎日菌生す荒和布の莖の如くにして黒くかたてて手にてはきれず凡三ヶ年程惱みて天明元丑年夏病死す死後背肉のこらす隕骨計になる手足はばらばらに離れ膝もはなれ六ツになれり腹のみぞ皮肉あり頭は離れ奇怪の病也右長次郎隣家加賀屋武右衛門が妻物語此婆々父は藤澤宿大坂屋勘左衛門俳名梅舎が娘也女には稀なる生質にして空言をいふものにあらず

○天明二寅年九月十九日晝七時頃藤澤驛領家町小糠屋平左衛門下女はつ我等寓居座敷脇にて病犬に左の手の腕一握り程喰とらるたばこ二三服含む程過て灸治せんとするに右疵の所さらに見へすきれいに瘡たり只喰取し廻りに針にて突し如くにあちこちに赤み有のみ也夫を見當に梅桃程の灸炷凡一時餘り致す所一向熱痛なし灸治半より夥しく水流れ出たり右女はいふ迄もなしすへる者も退屈してねかす所暫く過惡寒強く瘡疾の如し其後毎日灸治三四十日なしけり天明七未年迄は無別條存世せり其のちの事はしらす

○兩御番衆召仕若黨の事我等二十歳頃迄は並高の人
にても二人宛抱置一人は外出に召連一人は宅に差置
客の取扱をせしなり近頃は若黨一人も不召抱外出に
は中間一人召連て歩行き若黨入用の節は雇侍をして
勤候衆も間々有之様に見ゆる也これらは古へに復し
たきもの也

○下女下男給金の事實曆年間迄は若黨金三兩也主人
の髮月代にても致ものは三兩一分も遣したり故に皆
人三兩侍といひ又見苦敷侍を見ては三ビンの様だと
いへり中間小者は二兩立派なる男は二兩一分に限れ
り下女は御張返し物は御差圖をうけ候は、仕立候と
いふが一兩二分位紗綾縮緬裁縫を致といふが二兩位
にて五節句祝儀などには小青を著たりはした女は一
兩或は一兩一分也故に節句なども木綿著物也近歳は
中間小者三兩二分針女は二兩二分三分はしたなども
三兩位針女に限らずかく給金高價に成し也渡り用人
は六兩に二人扶持七兩に三人扶持四十年前以前も今
も給金替りなし此渡り用人は妻子もあり熨斗目差替
大小も所持いたし扱を廉なるものにてよく取廻す事
なり定ていか敷事もあらん歟

○僧に眼病ある事まれなり禪宗などはわけてなきや
う也魚鳥の肉膩厚味の物を多く喰さるが故と見へた
り不如法の僧一向宗の僧にはそこなふ者往々これあ
り又力つよき者己か分量に過て力業を事とし大石な
どの重きを擧るもの或は過分の荷をつねに持ものは
盲となるもの多し乘馬には盲馬になる事たへてなし
小荷駄馬は重荷を附る故敷盲馬多し是等にて推量る
べし

○蕃椒は齒牙を損するの毒ありと思はる喰ふべから
ず人毎にすぎ好む者多し是を嗜む事甚き者を見るに
壯年にして齒も弱く或は脱る類の人多ければ喰ふへ
きものにあらす記して識者の是正を待也(後藤左一
郎が蕃椒説あり新奇にして僻説多し)

○文化三箇年の冬小石川橋戸町駿河屋庄兵衛といふ
酒肆あり毎冬濁酒を造醸しあきなふ或時酒庫にて四
斗樽の空樽へ濁酒を充滿に入れて酒飲の集る場へ持出
し置けるに暫して酒氣沸激し蓋を吹飛し肆中白雨の
如くに飛散りて桶中に酒一滴もなく空樽となりけり
此酒樽の蓋はいかやうに振動しても離れぬものなる
に酒氣の慄悍の猛なる事を恐るべしすべて萬物に氣

のはなる、事なしされとも氣は形なく目に見へぬに
より心付さる人多し素問靈樞を始として諸の書に氣
の説出たりわけて醫者は知らでかなはぬ事なり故に
西洋にては五行をとらず水火氣土と四行に建て氣を
専らにして萬の事業をなすとかや

附今世の人士瓶を底の破壊さる様に新らしき時に
底に小穴を穿ち明て用ゆ是火氣その穴より漏るゝ
によりて破れさる也又濁酒を陶器へ盛に口を窒塞
するに藁を用ゆその藁の透より酒氣洩るゝにより
沸激するに至らず即ち栗を熱灰の中へ入て焼に剝
目を入て投するに同じ又火消壺の中へ炭火を納る
に蓋すれば速に消或は古井にむざと人いれば即死
す或は人を長持などに入て蓋を掩ふ時は死るなと
これみな天氣の通ひなきが故に火も消へ人も死す
是等を考て氣の道理を知るへし亦格致の二端也

○新大橋の際三派といふ洲の事天明の初年比に酒井
侯屋敷前より永代橋の方へ凡三四千坪築出し新地出
來新規に名主も被申付料理茶屋水茶屋杯その外家居
建續き夏は涼船も此新地に計かゝり賑にありしなり
其節は兩國橋前後の原も至て淋しくなり兩國邊の商

人迷惑せし也天明八申年頃取拂仰付られ元のことく
三派とはなりぬ

○氣付といふ藥の事延享寛延寶曆の頃迄は卒倒或は
垂死の時延齡丹を用ゆ寶曆の末より熊膽を專要と
し延齡丹も用ゆ寛政以來目藥の沃雪を用ゆ熊膽をも
用る事となれり人身に古今の差別なければ療病に今
昔のひとしからざるべきはづはなし醫道も時勢によ
り定らざるは疑ふべき事也又紫圓備急圓滄痰丸石膏
附子の類は寛延寶曆の頃迄は恐れてむざと用ひざり
し藥なり庸醫には方銘をも知らざりしもありしに近
頃は右の攻撃の藥を庸醫までも陳皮甘草などを遣ふ
ことく用ふる事となれり

○官醫の衣服の事我等二十歳頃迄は御城の外他行の
節は脇差計御紋服は各別自紋は殿中にて坊主に紛る
るとて決して着せず無紋の衣類を著したり自紋の衣
服は絶て持ざりし事也故に皆人官醫に定紋はなき事
と思ひしなり寛政年間迄は脇差のみにて歩行し人も
ありけり家内にては旦那様と稱しけるに近歳に至自
紋の服刀は離さす其上に殿様と稱し若黨は定袴にて
召遣ひ全く武家の様體になりしなり御番衆の省略と

あちらこちらにてきやうくしく見ゆ心有らん人は
いかと思ふにや

○養生所門前の坂を皆人病人坂といふ本名は鍋割坂
と云なり養生所御建立は享保七寅年にして十二月よ
り病人御呼入なり然るに我等八九歳のころにはもは
や鍋わり坂といふもの一人もなし皆人病人坂と號す
御建立より僅二十年ばかりの中に本名を知れる人は
無之様になり本名亡失せしなり

○本郷新屋敷の事宮様圃といふて四方丸太柵にて人
家はなく皆圃にて野菜物を作れり中にもやし物を
第一に造りて須田町連雀町へ出し賣れる事にてあり
し寶曆六七年比不殘町屋となり初めは非人豆藏或
は淨瑠璃芝居などにて人を集め其後あやしき茶屋な
と數十間出來たり近頃退轉しさびしき町家と變した
り

○俳諧師宗匠といふ者元文年間三十六人ありければ
夥し珍らしきとてちの秋といふ俳諧書出たりとか
や今世は俳諧宗匠二三百人もこれ有よし皆風雅の道
は露しらす暫間にして口辨を以て渡世とする事也是
に限らず今世遊民の夥しき事享保元文の頃に百倍せ

り歎息するに餘れり
○曲直瀬道三の歌に

心をは遣ふ事なく休み置き

身をは隙なく遣ふべきなり

養生は飢る事なく飽かずして

物おもはざる外はあらじな

痛き針苦き薬にあつき灸

くるしまんよりかねてつゝしめ

右の歌を守れば生涯無病にして長壽なる事うたがひ
なし

○ガチャ／＼多葉粉賣の事我等幼年頃は藥篋筒のや
うなる箱に引出しを附けて引出しの中に仕切りを入
二行に刻多葉粉を入巖拳の鑲を引出し毎に附肩へか
たかけにして賣歩行けり鑲がガチャ／＼と鳴により
其音を聞て呼入かひけるなり此箱にて商ふもの五十
ヶ年以前より絶たり

○羽織長短の事實曆四五年頃は伊達男は短羽織にて
袖より下はやう／＼四五寸もありて袖はかりのやう
にてありし明和二三年の頃大坂より吉田文三郎吉田
文吾などといふ人形遣ひ下り長羽織を著せしを皆人

わらひけるか其時分より段々と長くなり文化七八年
に至り又々短く成しやうに見ゆ袖口の太細帯の廣狹
も羽折に准じいろ／＼に變化したり

○髻附油頭髪へ附る多少の事我等二十歳頃は若男は
堅き油を多くつけて結たり其後は水髪といふて油を
少し附てゆひ近年は多くもなく少しにもあらず附た
りこの頃は卑賤の者には油を少しも附す誠の水髪に
成しも多し

○東叡山大師遷座送りの事毎月晦日夕方有之共せつ
遷座御供とて明和の末安永の頃までは愚俗人のみ百
人も有かなきかのやうに覺へたり近年は上野山内に
空地なく群集するよし中には歴々も出と聞り

○新吉原遊女衣服の事延享寛延の頃迄は紗綾縮緬羽
二重を著し中の町へ出るこれを道中といふ衣服も品
々ありて毎日取替へ著し同じ衣類は決して著ざりし
となりさて多葉こを少しつゝ紙につゝみ禿に數多く
持せ茶屋にて一服のみ残りはそのまゝ茶屋にさし置
て立なりたち寄茶屋毎に右の如し故に中の町茶屋と
もは右多葉粉にて一年中多葉粉を求る事なしとなり
然るに遊女とも三四十年以來羽二重紗綾等は更に用

ひず錦繡の如き美服を著る事になりぬれどたゝ一ツ
にして中の町へ出るに毎日同じ物を著し著替は一つ
も持ざるよしなりたばこなども高價の物を用ゆれど
少しも人に吞する事なし時勢の然らしむるの人情か
くいやしくなれり

○本郷御弓町に忠直なる人在せしなり憲廟の御代よ
り倅廟御代迄重き御役勤仕給ふ致仕の後嫡君勤仕
の所寶曆三四年之頃病死なりその嫡子五歳ゆへ親族
衆家來までも年増の事を老君へ窺ければ以の外立腹
にて我等事は迄偽を申上候事一言もなし若短命にて
家斷絶する共是非もなき事なりとて正直に五歳の書
上なり家士薄氷を踏が如くなりしが誠に正直の頭へ
神やどりと在といふ恙なく成長いたされけり白山御殿
跡にも我等十二三歳頃までは憲廟被召出の衆現在な
るも多くありけるがどれ／＼も正直なる人中にも
愚直なる人も見えたり憲廟御取立の人は皆正直なる
人のみにて有しと見えたり

○あぶら揚賣童の事我等二十歳頃迄は貧民の子ども
十歳十二三歳なるが提籠へ油揚のみを入賣歩行しが
近年絶てなし其頃見苦しき童を見ては皆人あぶらげ

賣のやうだといひけり

○勘進比丘尼賣女比丘尼の事我等若年のころは年頃なる比丘尼びんざらならし歌をうたひ小女比丘尼を召連みだれ箱様なる箱を抱へ小尼に柄杓をもたせ門々に立米錢をもらひ行かふ事なり賣女比丘尼は芝八官町神田横大工町にて美服を著し賣けるよし是につゝきて下直の比丘尼は淺草田原町同三嶋門前新大橋河端などにて家毎二三人つゝ出居たり右兩様の比丘尼共今は絶てこれなし

○けころといふ妓女の事天明の末迄下谷廣小路同御數寄屋町同提灯店(異名なり)同佛店(此も異名なり)廣徳寺前通り淺草堀田原邊其外諸所にあり是も一間の家に二三人づゝ限りに出居る事なり花費は貳百文づゝにていつれも容貌をゑらび出したり毎月大師縁日三日十八日には未明より出居あきなひせしなり寛政以來此賣女絶てなし

○歌舞妓役者寫眞畫の事實曆の始の頃畫工鳥山石燕なる者白木の庵末なる長サ二尺四五寸の額に女形中村喜代三郎が狂言の似顔を畫して淺草觀音堂の中等香爐の脇なる柱へ掛たり諸人珍らしき事にて沙汰に

と號すとなり享保延享のころはのぢはみな月役にて今の小舞貫を用ひざりし也伊豆國七島などにては經行を他屋と唱へ住吉を隔て小家を村々に作り置經行の砌又は臨産の節は右之他屋へ遣し置事とかや經行のものは七八日産婦は五十日も過て家にかへるよし也

○近年は薯蕷牛房其外青物類を鍋へ入煮計にきれいに洗ひ賣なり最初日本橋にてはじめしが今は何方にても右の如し調理に世話も薄く手廻しよし豆腐屋の買人の望にまかせでんがく八盃どうふなど手間とる事を刻みて賣れり魚屋魚賣は何に拵へませうと聞て指身にても切刻み尾首もすてず丁寧にしらへて賣事になれり我等十四歳の比迄は魚賣はいそがしそふに早脚に往來せりわけて松魚賣杯は俠客の形氣にして魚を截事杯は指置價を下直につくれは首計もうらぬのわたしはうりたけれと魚がいやだといふなど、難言を吐ちらし出行し也然るに近歲は江戸の諸町人昔の實儀にして外の飾りなき風はいつれへかうせて四民ともに家居器物言語迄奢りに長し心中はいやしくなり只利慾にさかしく輕薄の風に押移れり老子曰

及びしなり是江戸にて似顔畫の濫觴なるべし其頃迄は一枚繪として役者一人を糊入紙を三ツ切にして狂言の姿を色とり三四返摺にして肩へ市川海老藏瀬川菊之丞杯と銘を記するのみにて顔は少しも似ず一枚四文ツゝにてうりたり近頃は右體の一枚繪はさらになし浮世草紙迄も似面になれり錦繪と名付色どりも七八返摺にするなり歌舞妓役者にかぎらず吉原遊女水茶や女角力取までも似面繪にしてうる事になれり

○濫墨塗の事荷擔桶に濫を入灰炭を合せかつき歩行板扉したみなどを一坪に付何分と價を定めぬる事なり此墨塗安永天明の頃までは江戸中に十七人有けるよし近頃は三四百人にも成しよし也

○蟻殻屋根並月役といふ材木の事我等廿歳頃迄は江戸の端々は武家町家とも多く蟻屋根にてありし也白山御殿近邊御家人の家はみなこけら葺にて蟻屋根也月役といふて長サ一間に幅一寸四五分のわり木をのぢにしそれより板にて葺そのうへに蟻を敷ならべる事也養生所惣屋根など十四五年以前迄は蟻屋根にて有し也月役は田舎にて婦女の經行之節は別居して其節の仕業に屋根へつかふわり木を拵へしもの故月役

禮は忠信のうすきにして亂の端なりと曰ひしも此等

の事なるにや覺束なき行末也
○朝鮮人參座寶曆明和の頃迄下谷新し橋通りに開き門構にして門の正中に朝鮮人參座といふ額をかけ住居せしか今は如何なりしや斷絶もせしと思はる寶曆の初の頃か浪人の類御旗本の人參判鑑を目方の多少により金錢を出してもらひ受人參座へ行人參を請取直に買請人有之金錢をもふけし事あり

○屋形船の事享保の頃は江戸中に百艘有けるよし菊岡沾涼か編述江戸砂子に見へたり増補江戸砂子には見へず最初の板にあり寶曆七八年頃は吉野丸(一番の大屋形也)兵庫丸夷丸大福丸川一丸など大屋形船にしてすべて六七艘も有けり予水稽古に日々見たる所也然るに當時は二十艘計も有へし皆小屋形のみなりたし家根船(本名日よけ船)猪牙船多く有家根船は四五十年前は五六十艘有けるよし今は五六百艘猪牙船は七百艘も有べしといふ十四五年以來夥敷なれり船宿六百軒餘も有之よし也それ船船は萬民の歩運にくるしむを助ける物にして天下の要具也家根船猪牙船は人力を助るの國用に聊用立す遊民のみの乘

船にして無益のもの日に増月にまし多く成事歎かば
し、屋形船は遊船の如くなれと要用の節は屋根を取
拂ひ數百石を積入事なれば無益の物にあらず
附り江戸中に右船持百三十四人此外に本所深川に
船持十九人江戸に右船數三百艘も有へし本所深川
船數しれす兩所にて運上一ヶ年に六百艘毎日三艘
ッ、差出す事のよし右連上の願文化七年願差出し
同九年申年願の通相濟右の通差出す事となれり

塵塚談下の巻

○白川侯御年十二三歳田安御殿に在せし時麻布鳥居
坂戸川内膳屋敷より出火僅の火事にてありしが焚死
人多く有ければ時の落首に

この火事に人の命をとり居坂
これより上の戸川内膳
といへり御醫者此歌を御話申ければ身が詠はさうで
はないと仰せらる此醫者と遊ばさるゝと伺ひければ
いはぬゝと仰なり達て伺ければ

怪我の事なら戸川内膳

と仰せられしとかや人を救ふ仁慈の御意誠に徳廟の
御孫也御餘風残りし事いと難有し
○近年大商の呉服店斷絶せし者數軒有本町に大坂屋
壽の字越後屋本郷に十一屋糺町に伊豆藏屋いづれも
大商人にて有けり其外にも三四軒有しがしかと覺へ
す忘れたり小商人の相續せざるは理といふへし予が
覺へて出來し吳服店は芝新橋松坂屋神田明神下澤の

井此二軒のみなり且人のしれる分限者あり芝かはら
け町に小川平八柳橋にめくら平八今戸に瓦師平八こ
れを三平八といふて諸人知る所也然るに小川平八ビ
ロクし馬喰町紙屋五郎兵衛かぶを居ぬきに文化十酉
年十一月買請五郎兵衛と名乗り紙商賣せし所同十一
戌年十一月店仕舞斷絶す大名高家の如くゝらしける
に夢の如く水の泡のやうなりし

○正月玄關に年玉の扇箱を飾る事商醫が業をうらん
として専らにせし事也武家町人にもまゝ有けり年玉
にもらし扇子箱を井桁に積重ね高きを伊達にし内よ
り持出し飾るも有し也然るに近來は諸町人扇子箱を
配るはまれにしていさゝかの品にて有用の品を配る
事になりしより扇子箱を積あがる事絶てなし

○年老前髪の人髪結ひやうの事我等若年の頃は武家
の前髪の者はかき鬘年老の人はあはせ鬘といふに
結束けりかきびんは耳のうへより前髪の際迄かきあ
げて束ねあはせ鬘は左右の鬘髪を鬘の下へ合せてま
げは別に束ぬる也此兩様の束髪近年は更に見へす絶
たり今も歌舞妓狂言の由良之助は合せ鬘にゆふも有

○朝士總髮の事徳廟御代の始の頃には總髮の人兩三
人も有けるよし聽傳ふ惇廟凌廟の御代には絶て一人
もなし當御代より諸侯朝士に總髮の人出來たり香月
翁云年老ては元氣耗て髮をすれば風に感じて咳嗽を
生す四十以上は月代をそらすしてひとつに束ねたる
によろしといへり

○粕漬鰯魚の事毎冬樂種屋共醫者へ歳暮に定式の配
りものにて有ける安永の末より鰯魚絶て江戸へ來ら
ずと見へて樂種屋とも更に配らず

○江戸中酒店毎年十月大坂より新酒下り來ると早速
に場末の小酒店迄も出入の屋敷并町屋までも一升二
升或は五合ッ、も洩さず相應に配り送りし事なり文
化五辰年冬新川新堀の酒問屋共より向後酒配り止せし
きのよし酒店へ觸出しそれより一統酒配り止にせし
なり

○文化五辰年藤堂侯染井下屋敷にて石地藏大なるを
掘出すよし銘に左木曾海道右奥州海道と彫付有之と
なり此事虚實しれず尋べし

○白山御殿礎石残りありし事御殿御拂之節人歩のか
かる故御殿坂上に大礎石四ッ五ッ坂下新福寺のうら

田の端と往還に四ツ五ツ捨て有しなり大森與兵衛御勘定組頭の節取計にて鍛冶橋御門類焼し右石のこらす鍛冶橋へ運送し石垣に用ひしなり

○駒込富士権現祭毎年五月晦日より六月朔日迄參詣夥し予若年の頃は俗間の童子等參詣には皆髪をあらひ油元結を不用ちらし髪にして詣でしが多かりし近年右體の童さらに見へず移り替る世の有様如此

○同所神明宮渡り祭禮并若年の頃は隔年に懈怠なく渡り祭禮あり此祭に鹿島踊といふもの定例に出たり又山車一本に警固とて若者とも女の衣服をかりて着しぢぢいばしをりをして女の腰帶を帶の下にまとひ竹杖の頭を手帕にて包み車に付歩行けり此祭に限らず白山水川赤城渡り祭禮の警固同様に有ける神明の祭禮寶曆年間より絶てこれなし

○四谷堀の内祖師我等三十歳頃迄は地名をしれる人もなかりしに近頃に至り祖師堂はもちろん堂宇の設も伽藍の如くに造建し新宿より寺の門前迄水茶屋料理茶屋其外酒食の店數百間齋をならぶ日蓮宗にかきらす諸宗門の人も尊敬して年々月々に賑しく繁榮なり雜司ヶ谷鬼子母神予若年の頃は夥しき參詣にて

ありしが近比に至り殊の外淋しくなり只堀の内のみ參詣多し佛神にも盛衰あり不思議と云へし

○吉原茶屋に錢屋嘉兵衛といふ有り養父嘉兵衛より予がしれるものにて我等四五歳も年増にて有し右嘉兵衛が實父は二丁目信濃屋といふ遊女屋の召仕若者なりしが嘉兵衛五六歳のころ遊客の前へ連出小謠を二ツ三ツも謠ふと小判一兩ツ、貰ける事數度有しよし右親掃除番に當り朝二階を掃除するに小粒一步二歩ツ、はいつも拾ひけるとかや近年は右體の事不及聞候安永の頃にて有りし嘉兵衛が實母の物がたりなり此婆々質朴なる生質にてありし

○よし原毎秋八月に俄狂言の事茶屋桐屋伊兵衛といふ者あり今現在せり此者歌舞妓役者の眞似を喜り安永天明の頃にや角町遊女屋中萬字屋といふ同氣相求の者二三人寄合けるが或時風と思ひ付て俄に狂言をこしらへ中の町を往返しけるに遊客とも見物してこれは風流なり面白しと評判しけるにより彼等も乗か來てそれより引續て二三日も狂言の趣向を取替引替して中の町を往返し樂みけりこれ俄狂言の始にて段段と増長し毎秋の定例に成しとなり

○高荷木綿賣の事余若年の頃は高荷といふて木綿一反ツ、段々に積み重ぬ高サ一丈程にして脊負て賣歩行ける買人あれば竹竿をもてあげおろしをして取出しみせけり白山小原町に伊勢屋徳兵衛といふ商人あり文化五辰年正月十七日八十歳にて病死此若き頃は高荷木綿賣にてありし妻當成年七十七歳現在せり右高荷賣止みて兩掛にして賣歩行けり是も近年はなし當時は木綿賣絶たり木綿といふては手拭をうり歩行者のみ也

○綿帽子賣の事我等若年の頃は瀬川ぼうし船綿帽子其外流行のぼうしを賣歩行けるこれもいつか絶て近年ぼうし賣なし帽子うりのきたりし頃迄は武家の婦女禮服には勿論他行の節はかぶりけるが近年ぼうしを被る女さらに見へず諸侯の奥方他行の時供の女ぼうしを用る家多し又一向宗門の婦人角かくしとかいふて綿ぼうしに似たるものを寺參りには必被る事是綿ぼうしの遺風なるべし

○河豚鯨魚我等若年の頃は武家は決して食せざりしもの也鯨魚は此城を食といふ響きを忌て也河豚毒魚をおそれて也二魚とも卑賤の食物にて河豚の價一隻錢

拾二文ぐらい鯨魚は二三錢にて有しが近歲は二魚とも士人もてはやし喰ふゆゑに河豚は上市一隻二百銅三百銅にして賤民の口へは思ひもよらず鯨魚は今世も士人以上は喰はざれども魚鮮にして士人も婦人も賞翫しくらふ河豚も乾ふくは貴富も少しもおそれず喰ふ鯨魚のすしに同じ

○飴餉の事小兒には忌べき物也宇治田先生も厳しくいましめ給ふ予おもふに造餉屋には餉を製する場所に蚯蚓の生ずる事多し故に蚯蚓を堀て渡世とする者は餉屋へ行買求る事なりとぞされども蚯蚓を賣と家の零落の本なりとてうらぬ餉屋もあるよし

○古札おさめといふ非人予若年の頃は毎年十二月に武家町家を御祓おさめよ古札納とさけび歩行ける年中佛神の札守の溜りしを錢を付て右の非人にやりし事なり近歲絶て來らず

○厄はらひといふ非人節分の夜は御厄はらひか厄拂ひましよとさけび武家町家を歩行く事は今昔かはりなし文化元子年頃より大晦日正月六日同十四日夜にも除夜の如くに御厄はらいといふて來るなりしかし節分の如くに大勢は來らず

○松右衛門といふ非人あり江戸中武家町屋に面々の持場有て朔望五節向其外吉凶の家へ來りて松右衛門に御祝ひ下されと錢を乞事也其衣服も引にて腰に鼻捻とて二尺計の棒をはさみめんつうといふ曲物を腰に提て持場々々を日々の様に廻り歩行事也此めんつうはもらひし酒食を入る器にして酒を入ても漏すとかや奇なる細工もの也近頃は右のめんつう鼻捻りを持って歩行松右衛門さらに見へず一統に止めせしと見ゆ

○非人にそくばくのたがひあり人の一切しらざるの事也或時非人に藥やりける所樂取に女非人來るその人品賤からず容貌もよし歸りし跡居合せし人々急度女太夫なりと評判せり其翌日は外の女來りし故きのふの女は女太夫かと問しに女太夫に出るとよき家へ縁組できずそのうへに人柄あしく成により律義なる親は女太夫には決して出さぬといへり非人に高下ある事を初てしれり非人の次手に左に記す寶永六七年の頃青山火事といふて大火あり傳通院最寄の者のいふに大火の節は傳通院山内へ立退と焼死の患なしとかね／＼いひ傳へしにより人々山内へ進入て皆々焚死

せり予が祖父先考は山内へ入らずして虎口の難を逃れしと茶話席上往々これに及べり此火事に美談あり山内に非人小屋あり傳通院門前に藥店大坂屋三右衛門といふあり今も此家あり右非人小屋に年來寄宿の非人有り焼止りし翌朝右の三右衛門方へ來り且那は山内に焚死なりまづこれが氣遣ひと金の入し財布を渡しけるとなり非人にはいと難有き心ざし士君子にもはづまじきなりしかるに世に聞つたふる人のなきは不便なりと父祖の折ふし語り給ふ

○孟宗竹近頃は江戸に大なる竹藪諸所に出來たり明和の頃は皆人珍らしく思ひし竹にて有しなり四五年来笋も太くして一尺四五寸二尺廻りの大なるが夥しく出て八百屋毎に賣事なり何地より出るにやしらす薩摩國にては此笋を紙に漉よしなり寛政十年午六月出板せし西遊記續篇に云薩隅の邊に唐孟宗竹あり人家に多し此竹冬笋を生ず味甚美也寒中にも平皿一ぱいの笋を生る事他國にはいまだ見ずとみへたり

○淺草大川橋(俗に云吾妻橋)明和元辰年二月晦日目黒行人坂より出火し江戸三分一も焼亡す其節は此橋なし一筋道にして眞崎千住をさして逃たり故に老人

小兒は歩行思ひもよらず押あひける此中へ屋敷より追放の馬も來りしにより怪我も有しなり此橋のかゝれるは出火の節の大なる裨益也

○京都草紙屋八文字屋の浮世双紙五冊物役者評判記三卷の事自笑其碩といふ者述作にして毎年正月二日定式にて大傳馬町鱗形屋孫兵衛といふ繪草紙問屋賣出せり五冊物には名文も多し評判記は京大坂江戸芝居歌舞妓かはら者の顔見世狂言の善惡を評せるものなり顔見世狂言は十一月朔日よりはじむれ共二三日の内は式のみにして狂言省略すやう／＼五六日頃より取締る狂言の評判を京都にて梓行し江戸へ下し正月二日に江戸にて賣弘む誠に速なる事驚入たる仕業也延享寛延の頃は兩書とも皆人待兼見る事にて有しが五冊物は寶曆の末より絶て梓行なし評判記は京都にて作りて今以出れとも正月二日よりは出す程過て江戸へ來るなり其故に折ふし江戸にて江戸役者計の評判をこしらへ梓行し賣れども江戸作は人々さらに賞翫せず

○扇地紙賣の事予若年の頃は夏に至れば地紙形の箱を五ツ六ツも重ね肩へかづき賣歩行ける買人ありて

直段極ればすぐに其坐にて折立て賣し也又持歸り折立翌日持來るも有り近頃は地紙賣一切來らず皆人京都下りの折扇を持事になれり近頃は扇に伊達を飾る人はさらに見へず右の地紙うりは伊達衣服を着し役者の聲色或は浮世物真似などをして買人へあいきやうをしてうれるが多く有しなり刻多葉粉賣にも此類有ける

○本郷三丁目肴店同四丁目附木店と云地名肴店は予十八九歳の頃迄は木戸際より兩側ともに不殘魚屋にてたゞ角の藥種屋(皆人おもたかやの齒磨といふ名産也)一間のみ外商にて有ける片頬は伊豆藏屋の地面にて有し伊豆藏屋商賣繁昌し建廣めたく魚屋とも明返し候様に申けるに魚屋共數年來渡世罷在し所ゆへにあけ返さず不得止事町奉行沙汰におよびけり伊豆藏屋も餘義なくして六七尺の庇にこしらへ魚賣場に貸けり魚屋共は通ひて庇下にて賣しが一兩年過て不殘明退き伊豆藏屋の住居となり向側の魚屋も段々と退轉し近來に至り魚屋不殘斷絶し肴店といふ名のみ遺れり同附木店も予十七八歳頃は一二間有之しか是も絶たり一丁を隔て兩所ともに跡方もなし

○淺草觀音の市十二月十七十八兩日也諸人正月のかざりの物を吉凶をいはひ此市にて求る事なり外に江戸に市なし故に並木町より雷神門内までは老人小兒の通行思ひもよらぬ事にて俳句に市の人人より出て人に入るといふ句も有しに近ごろに至り神田明神深川八幡芝愛宕麴町天神に市はじまり人も相應に出て賑かなり麴町はわけて群集なすよし其故にや近歲觀音の市先年よりは淋しきやうに見ゆる

○糶藏下谷新し橋へ寛政元酉年歟御建立これあり貧民御救を第一にし且町屋敷所持の者へ安利の御貸附金有之御勘定衆町與力出役し執計也此地これまでは大的場と馬場なり左の方は往還にて有し代地淺草堀田原にて出來其後新大橋のむかふへも糶藏御建立あり都合糶藏二ヶ所になる此地はあやしき茶屋とも住居せし所にて有けり代地深川高橋の脇にて渡り町名を常盤町と號す又其後柳原土手下へ糶藏建此地は元町屋なりしが焼亡して火除地にてありしところなり

○淺草觀音境内塔中地面の中に藪の馬場といふあり馬喰三人住居すむかしより毎冬南部より御用買上馬

乗立所にして馬員數不定百疋百五十疋もひき來る皆二才三才の駒也御買物二三疋もありて御用相濟御暇被下事也御暇出ると四五日の中に残り馬十二月中旬頃に初見せと稱し馬市有諸侯御旗本も見物にこし給ひ馬を求められけり馬直乞にかゝり直段決せざる内に馬主をまけろ／＼とそば／＼の者迄もた／＼くなり下直なる馬三十五兩位より段々高下あり五六兩位格別なる馬は百兩に立物などいふあり賑なる馬市なり故に上好の馬を率來りし馬喰は御買上は一番三十五兩二番二十五兩とか定御直段を以御買上に成事故迷感に存じ馬御吟味の節は病馬と偽り不差出のよし也此御用馬凡二百年程も藪の馬場にて乘立し事なるべきに文化二丑年頃より南部屋敷内へ牽附乘立る事になれり仙臺よりも同時に御用御買上馬麻布十番馬場へ馬喰牽附來り乘立しなり馬數初見せに至りしまで諸事南部馬の通りにて有しが是も同時頃より仙臺屋敷の内へ牽附乘立る事になりし

○薩摩芋の事日本には寶永元申年より琉球芋薩摩より種渡り長崎にて専ら種たるよしなり青木文藏名敦書號崑陽(當時百五十俵青木岳太郎祖父か曾祖父なり

るべし) 蕃諸考といふ書を著し享保二十年乙卯二月十五日上書す書中に薩摩よりも蕃諸種藏の法を上書せし事を載たり最初唐土より琉球へ渡り來り琉球より薩摩へ渡りて三十四五年程に相成よしに見へたり

同年三月文藏に植立候様被仰付小石川養生所内へ圃をこしらへ造り元文辰年御止になり同二巳年三月三日養生所勤役の者へ芋割賦し芋畑引拂被仰付其後諸國へ流布して人毎に食し朝夕の助となれり寶曆年間に至りては上總下總銚子岩槻伊豆大島其外諸所より多く作りて江戸へ運送す銚子を上とし大島より出るを島芋といふて絶品なり近歲に至り大なる國益といふべし

○正月碗飯饗應の事古しへは正月に限らず吉事には碗飯と稱し饗應する事東鑑に見へたる由我等二十歳頃迄は板橋巢鴨村邊の百姓相應に暮す者は毎年正月碗飯といふて親族並近邊の者を招請し饗應せし也右の田舎にても近年は一統に無之よし聞及ぶ當時我等しれる所には兩町奉行にて正月四五日比に組與力同心に碗飯と號す饗應あり外には一切聞及ばず町人なれど後藤本阿彌茶屋三谷等のむかしの規矩を亂さ

る家には碗飯あらむと思ふ縁なくていまだ尋ず

○享保元文年間諸色の價の事祖父笹船君隱宅小遣帳に近歲の物價と相違せしを抄出す

享保十五年	十一月二日	白豆	四升六合
	同日	白木綿一反	新兵衛へ祝儀に遣す
	同日	岩附霜ふり木綿一反	新諸白二升
	同日	上餅米	三斗六升
	十二月十八日	上々白綿	一斗
	同日	酒五升丹次方へ饗應	七文半
	同日	九文半	さらし足袋六十三文
	同日	九文半	四十八文
	同日	四足	治右衛門へ遣す
同十六亥年	正月十九日	白米	三斗九升
	七月十一日	絹二疋	ねり代
	八月 廿日	絹二疋	ねり代
	十一月三日	ふとり絹	五丈三尺五寸
同十九寅年	九月廿二日	飯田町壺より	かご貸
		赤羽根橋迄	

十月 三日 一分に錢一貫二百六十文に調
 十二月十九日 二百廿四文 大まぐる片身
 骨付頭とも
 同二十卯年
 四月十一日 四百五十六文 極上池田酒五升
 同 晦日 二十四文 櫃の油五勺
 五月十八日 一五十二文 白砂糖半斤
 一百文 りうけい橋よりかこ貨
 赤羽根迄
 元文三年年 一文金一分 七百五十文調
 三月 朔日 延享元年年
 七月 九日 一百十文 尾張町よりかこ貨
 白山迄
 十月 朔日 二分 二貫六十文に調
 同二年年
 正日 九日 一四百四十四文 弁印醬油一樽

○鯛魚子若年の頃は夥しく取れしと見へて毎日鯛魚多く来れり四五十年前よりいはし賣選近來る也五十年前迄は相州三浦三崎安房國邊には大網といふありけり紀州邊の大商人獵船數艘こしらへ船はたらしきの者數百人召抱置鯛を取て油にしほり干鯛にして諸國へうり出し鯛拂底に成しゆへに取績がたく皆々大網をしまひ家居諸道具等までうり拂ひ國々へ歸り

る大網斷絶なり
 ○陶器燒繼の事寛政二戌年迄は江戸に燒繼といふ事はしらざりしなり京都には其頃燒繼有けるよし近頃は江戸に燒繼を産業とするもの夥しく出來しなりこの故に瀬戸物屋商ひ薄く成しといふ程なり
 ○深井志道軒といふ講釋師淺草觀音堂脇三社權現の宮前に霞篋張をしつらひて數年出居て糊口せし也無一草とて半紙六七枚計自分述作の書を立寄し人に賣たり一奇物にして小兒の手遊にもかれが机にかゝり講釋の形を近頃迄賣ける此者が講釋は終日おかしく取しまりもなき事のみをしやべりけりいかゞの譯やら僧嫌ひ出家が目の前に脚躓すれば雜言をいふてそしりけれ共いむ出家に一人もとがむるもなかりしなり元來禪僧にて達識なりと評判せり明和二年乙酉三月七日死號は無一堂慕は觀音境内金剛院に有すべて高名のものゝ迹は繼もの有ものなるに一世にて絶たり同時に滋野瑞龍軒といふ舌耕あり此者の講釋は今世の如く天正慶長年間の頃の軍記等を講じけり其頃志道軒瑞龍軒とて兩人とも高名にてありし瑞龍軒は甚藏といふ倅あり父の名跡を繼舌耕せしな

○享保十九年甲寅三月十三日

主計頭總領 數千太郎
 御小性組 主殿頭總領 田沼龍助
 小十人組 内膳正總領 岩本式部
 右西丸御小性被召出御切米三百俵被下御役料並之通被下之

此節主殿頭住居屋敷は本郷丸山木妙寺坂上余語古菴再隣家也我等十八九歳の頃は龍助主殿頭御側衆勤仕猿樂町通り土屋侯の向に住居夫より段々昇進にて高五萬八千石御老中に至り給ふ令息山城守若年寄勤仕父子其威海内に並ぶ人なし安永年間に稻荷堀にて下屋敷拜領し普請出來の上一覽に御城退出より參られ池を見られしにあらたにうがてる池なれば魚はこれなし是を見給ひ鯉鮒の類を入しならばよからんと戲言に申されけるとかや夜に入て歸り給ふにその已前に何方より到來にや鯉鮒の類おくりける人有之よし其權勢強大なる事筆に盡し難し然るに息山城守は横死を遂らる顯道五十一歳の時には一萬石に減祿屋敷は駒込追分是迄の下屋敷を上屋敷にして住居し

給ふ當時の支藩頭は意行侯の末子なれど代替は七世程替れり顯道生涯に見聞する所にして皆人かくの如し田沼侯の事より思ひ出て表裏なる物がたりあり本多彈正少駒殿若年寄勤役の節或時麻上下の上を着し時服の袴にて登城し給ふ事あり是言すして費を省き奢を退るの遠慮なり是よりして今庶人は勿論朝士も時服の袴に麻上下の上を着る人多し所謂其身正不令行也といふもの也誠に御政務を沙汰し給ふ人としてはかくこそ有べけれ一人の風俗萬人にうつるものなれば有がたき教なり
 ○狩野榮川院畫の事現在にして絹地三幅對書放しにして價拾兩位也扇面墨繪にて金一步宛の賣買なり我等草書山水の扇を持ける所骨董舖來り一步に拂くれろと望けりしかるに死後は賞翫する人さになく骨董舖にかけありて至て賤售なれど求人なし書畫とも死後には高價なるに榮川院畫に限りあちらこちらなり其由來を尋るに榮川院千賀道隆兩人は田沼侯の側さらず晝夜出入せしにより青雲の志有る人々は此兩人を珍重せし事也畫上手にての價にあらず田沼の光りにての價なり

○巢鴨村植木や菊の事我等二十歳頃は花壇長サ七八間或は十間程巢鴨根生の四郎左衛門は拾二三間にて皆々中菊のみ造りし事也菊を愛する人多く好みもてあつかひてより其變態百出せり文化初年の頃より大造りといふ事始り一本の菊花にて富士山屋根船島壱帆かけ船衝立ひらき扇二見が浦岩に牡丹獅子の類其外種々の物を造れり誠に樹藝の奇巧を極む文化十年癸酉に三十五軒にて造る村中にて百姓商人も交り造れりこれがために遊觀の人東は鶺鴒ヶ窪西は大塚より往來群集市をなせは酒食の店數百軒出來巢鴨村開けしよりの繁榮一村の潤となれり

○倭製の砂糖始りし事安永の頃迄は異國産來のみを用ひし事なり唐土には唐太宗の時外國より是を送りける是よりしてもちしに始て砂糖ありとかや平賀源内が述作せし物類品鑑に砂糖の製方を委しく記たり寛政元年の頃川崎驛葛西さかさ井邊にて造りしが夏に至れば膠飴の如したゞ飴弄にするのみ商物にはならざりし然るに近頃は紀伊國四國邊にて造り出し氷砂糖まで製造す別して讃岐國は産雪白の如く舶來にいさゝかおとらず文化元年の頃よりして菓子類

に商人ども専ら用ゆ同八九年よりは藥種屋は舶來に交て商ふ事になれり向後異國より來らずとも吾國に差支さらになし同十年癸酉には江戸中十の物七八分倭製を用ゆ近年迄皆人砂糖に限り舶來の物とのみ心得たり農業全書(元祿九子年の刻本なり)甘蔗の條に云是れ常に人家に用ゆる物なる故本邦の貴賤財を費す事尤甚し中略未そのたねさへ此國になきものなれば今こゝに略すと載たり

○ヲクタント文化十四年西尾隱州侯の家臣高森惣右衛門一名觀好君命により新に製作す木品金具等に金十二三片程かゝりしよし是吾國にてヲクタントを製作の濫觴也司馬江漢が編述の天文圖解文化五年戊辰の刻板の書に云ヲクタント日本にてはいまた製せずと見へたり

○松魚といふ魚は伊豆相摸水戸岩城平邊に多くあつまりし魚なりけるに文化七午年頃より南部松前邊にて多く取れる様になれり同十酉年の夏は伊豆相摸には至て少し水戸岩城邊はかはれる事もなきよし伊豆相摸の海をば遠沖を廻り東海へ出しと見へたり是天地の氣の南より北するともいふものによ

○菊の間御變應の節は兩御番衆給仕なり頂戴の衆は布衣已上法印法眼の醫師等なり是等の衆の中には出生もしれざる人きのふ今日迄町醫師畫工も有也御給仕の兩御番衆の義はいづれも始祖は身命を授うちての御奉公にて武功の衆多し討死の家も有り諸侯の末孫もありて皆名家の歴々多し出生も知れざる畫工醫師の給仕すべき人に非ず右の衆の中には先祖へ對し面目なければ心中に憤りおもふ人も有べし慶長年間後藤又兵衛黒田の臣なる時伴を能役者に打交らせ鼓を打せ給ひければ又兵衛大に憤り黒田家を立去りしとかや後に大坂に籠城し夏御陣の節いさぎよく討死し美名を後の世につたへたり

○多葉粉刻やうのかはれる事我等二十歳頃は五分切といふてあらく刻を伊達にせしに近年は至て細く糸の如くに刻む也四五年已來はそのうへにこまかになりこすりとかいふを賞翫す刻むに押ゆる板をこまといふ其こまの木口をすりてのみあるやうに刻む事なり

○此二十年來女髮結といふ者出來たり遊女は此女にのみ結する事のよし此已前より女髮ゆひありし事に

や予しらす此頃は江戸町々其日暮しの婦女迄も結する事に成けり油元結等は此方より出し一度の結賃百文づゝなり昔より相應に暮す者の婦女は毎朝髮結粉飾する事にて今以かはらす右髮結に委ぬる者は持髪とて五六日に一度結よし上方筋は一ヶ月に一兩度も結ぶよし度々結ぶものをばふたしなみと笑ふ事なりとかやされど女髮結ひに委ぬる事には有べからず自分々々にゆふ事なるべし近き年は四民とも髮結事のみにあらず上方邊の惡風俗にうつり人氣甚いやしくなれり

○淺草海禪寺の後の方に立花侯下屋敷に稻荷の宮有此屋敷拜領已來勸請有けるよし宮の床下に狐穴あり其外にも狐穴ありて狐四五疋もこれあるや白晝にも屋敷中を走り廻るよし享和三亥年いかなる故有しにや諸人參詣群集し近邊酒食の肆夥しく出來賑やかにありしが半年も過ければ參詣人まれにて元の田舎の如し俄に盛るものはひさしからずといふ理なり

○我等二十歳頃は白山牛込邊の人神田邊或は日本橋邊へ出る節は下町へ行の家來は下町へ使にやりたるなどいふまた淺草近邊のものは神國日本橋邊へ

出るをば江戸へ行といひけり山の手淺草邊は近年迄田舎に有けるの通言なり近頃下町へ行江戸へ行といふ人絶てなし

○あま酒は冬のものなりと思ひけるに近頃は四季ともに商ふ事になれり我等三十歳頃迄は寒冬に夜のみ賣廻りけり今は暑中往來を賣あるき却て夜は賣もの少し淺草本願寺門前の甘酒店はふるきものにて四季にうりける其外に四季に商ふ所江戸中に四五軒も有りしならん

○百姓町人死去し法名を見るに士大夫の如し中古まで農商はいふに及ばず武家へもむさと院號は付ざる事なりしに六七年以來時世とはいひながら諸宗の住持た、金銀のみに目が付て武家農商のわかちもなく院號を付俗人へ與ふるなり後年に至り士大夫も賤民も辨へがたく成こそ口おしき事にあらずや是みな出家の惡風より起れり根を斷ち葉を枯し賜ふの御制禁を願ふ事なり

○嫁娶の節祝言に小謠の事我等若年の頃迄は庶人町家の婚禮に親族盃事の時には必ず一座の者小謠を諷ふ事定式にて有けり近年小謠の沙汰絶てなし田舎に

に千疋なりしなりかくよし原の女郎は意地強かりしが今世は金錢をつかふものを上客とし御髭の塵をとるよしなり

○小便は世人は勿論醫者も湯茶の飲水下るものと思ふがおほし左にはあらず尤湯茶飲水より起るといへど湯茶のみにてはなし穀肉の食物が小便となる物也予五十二歳の時養生所へ本郷五丁目より四十三歳の女來り我等治療す此もの病といふは煎藥は勿論湯茶一滴もすゝる時は即ち吐し飲水少しも口中へ入る事あたはず飯を喰ふに箸を汁へひたし飯へふりかけ喰ふ外に疾病なし此一事のみにて小便の通じ壯歳の婦女の如したゞ遠きのみ也予いろく考へ藥を用ひけれど治せずして歸りたり或は寢小便する若輩ものを見るに大食なるものにて飲水はすこしなり馬を豆葉枯草糖大豆のみをばませ飲水はあるかなきかにして小便は夥しく通す鼠なども右の如し又石藥鹿角の類のうるほひのなきものよりも脂をとれば出るなり是等を以て小便の飲水のみにあらざるを推て知るべし世人の小便は飲水のなる物と思ふもむべ也香月先生云小便は湯茶の飲水より小便となると説り名ある

はこれ有事もあらんや是等の故にや其頃の小童の手習師匠は稽古終には小童に謠を教ゆる事一統に有しが今は謠を教ゆる稽古所はなき様子なり

○京の女簡に長崎の衣装を着せ江戸の張を持せ大坂の揚屋にて遊びたいと古き俚言也よし原の女簡に限り金銀にて動せざりしなり仙臺侯三浦屋の高尾を身請し召連賜ふに申合せし男へ操を立て候に從はざりしかば淺草川三派に於て船中よりさけ截にし賜ふあまねく人の知れる事也又七十年程已前豊後節語り文字太夫といふ有手迹なども俗筆にあらず名筆にて有けり三芝居にて専用ひられ最負の人も多し或時よし原へ人々を具して上通りの女簡を買て我しり顔にて居たり女郎暫く有て文字太夫なるを知り座席をばづし金子千疋臺にのせ少しながら御肴にあげ候ゆるゆると御遊なされと禿にもたせ出し其身は出す馳走しけるとかや流石の淨瑠璃かたりなれど赤面し立歸しと也其ころ専らの沙汰にて有し都て上通りの遊女屋歌舞妓河原者には女簡を決てうらぬ定法也又何節によらず芝居に出る淨瑠璃語りを呼てかたらずには金貳兩貳分定りし價也三絃ひきは外にやる事なり故

良醫なれど穀肉より小便の生する事に心付給はず知る者の一失ともいふべし

○米穀高直の事予東海道藤澤宿に寓居せし所天明四年甲辰春米穀高價也都て田舎は極貧困の者といへど正月松の内に飯米を調る事は大なる耻辱とし冬の内に調へ貯置事也然るに懇意の麥屋喜三郎方にて當元日二日に白米四斗賣れり變事なりといへり正月十三日白山へ参りがけ品川三丁目加賀屋武右衛門方へ立寄昨十二日一兩に付玄米四斗四升に調候よし小賣は百文に付六合いたすのよし話也聞正月四日小石川邊白米百文に付六合五夕に賣よし少し下直なりといふ廿日小網町町人共申合粥の施行をいたす廿日一日に玄米拾六俵焚けるよし也

二月廿六日藤澤宿穀物直段 (二六の日市なり)

金一兩に付

玄米三斗九升

から麥五斗二升

錢百文に付

白米六合

大豆八合

小麥四斗一升

春麥四斗

春麥六合五勺

小麥七合

三月六日

金一兩に付

玄米四斗

春麥四斗

大豆五斗三升

錢百文に付

白米六合夢屋三郎方にて春麥六合五勺

小麥八合

金一兩に付錢五七五拾文金壹歩に付壹百四

百三十六文

三月廿六日藤澤宿穀物直段（相場有之賣人のみにして買人これなし）

金一兩に付

玄米四斗三升 小麥六斗

から麥七斗五升（景氣は壹石也）

大豆六斗五升

錢百文に付 白米六合五勺

油壹升に付 四百六拾文

金壹兩に付錢五貫八百文

此節藤澤宿貧賤の者食物種糠麥二番糠かじめところ

百合根藤の葉桑の葉椶の葉まゆみの葉大はらの葉松の皮草の芽は何によらず是等の類を食物とせり予が親く見聞せし所也

○江戸自慢世にいひ習はしたるもの△紫染△色摺錦繪△釣鐘の出来合△針金賣△らうのすげかへ△縫針賣△印判墨賣△火打鎌石賣△ほうづき賣△右針金賣より以下は錢二三文より十文位わづかの價にて求人もまれなるを一品持て賣廻るもの多しその餘かゝるたぐひの商人數多有り江戸の廣く萬民の多きにより父母妻子を撫育し店賃を出し渡世をなす事偏に御膝下なる故也有難く敬ひとうとむべし此餘予が江戸自負あり今こゝろみに左に記す△火事△馬鹿者△癩病△蠅蛇△齒磨賣△織紋熨斗目△無筆手習師△無算勝手役△無庖丁料理人△文盲醫師△占卜者△風呂屋△火事春夏秋冬日として火事なき日はなし冬春は一日に三四ヶ所もある日あり△馬鹿物産生神の渡り祭禮には齋戒して出べきに無慚に妻子を賣て衣服をこしらへ祭禮に出る者有り又是に似たる者あり漁釣を以て樂みとし海路三四里小舟に乗て網を打釣に出る者多し吾樂みに君親妻子を忘るゝにより神明の罰を

蒙りまゝ暴風吹起り命をうしなふもあり或は困苦して十里二十里の遠所へ漂流しあやうきめに逢ふもあり中には水泳の心少しもなく所謂鐵砲玉にて狗死するも有也陸釣といへど四五里も田舎の遠き所へ行事も江戸は芝深川大川通り八九月頃は釣人萬を以て數ふべし兩國より小日向迄千人同五ツ目迄千人有べしといふ生涯にたゞ一日の日をよしなき樂みにおくるはなげかわしきことなり祭禮に妻子を賣るとひとしき大馬鹿ものといふへし△癩病數千萬人の中に有事なし愚老若年の頃江戸出生の者に只一人ありけり其餘はみな他國の産也今時乞食等に此病にて臭穢の折ふし見れど江戸産かつてなし江戸を離るれば多く有よしなり△蠅蛇江戸四里といへど六七里の内は絶て生せず六七里の外には生ずる事多くして人を痛苦しめむるよし也△齒磨賣一袋六文八文なり求る者は一袋を一ヶ月二ヶ月も用ゆる物なるに賣店夥しく名産も數軒有なり然るに賣廻るもの數百人有べし△のしめ地に織紋を附て呉服屋にてあきなふ求る人は吾家の定紋の附しをとゝなふ事なれば賣捌も稀なるべきに仕入置なり△祐筆手習師匠に一向に文字をしら

す短日を丹日と書の類多し故に筆は錐を立るが如し左清右濁の書法もさらに辨まへず永字八法など有事は夢にもしらすして彼は何流是は何流と區々にいかめしくいひ罵り誇り師匠となりまたは祐筆となり仕官するも多し△勝手役に八算を知るやしらす無算にして主人の諸入用を取扱勘定役となりて祿を取もあり料理人に鯛鯉鮓鰯雁鴨の類を切刻むすもしらす無庖丁にして主人の臺盤所に居て食物の調理をなし祿をはむ者あり△文盲の醫者およそ醫としては書に博く理に精しからん事を専らとするに余醫は醫書の題名並に古今名醫良醫の名も知らずして家居を飾り美服を着てもものしり顔をして祿を食る者有り△占卜者人相家相劍相墨色見に猶類多し諸所に居住し渡世とするもの數百人有べし中にも高名なるものは立派にくらすなり又辻の往來へ出て活計とするもの一町毎に一人宛は極めて居れり千を以てかぞふべし皆親妻子を撫育しにくらすなり此卜者とも我身の未然をすることあたはずいかでか人の事をさすべけんやこれらを以て思ふに江戸は皆愚盲の人のみ多くして己が情欲を遂ん事をおもひ惑亂して吉凶を卜者にあ

つからしめて心を動すとの便りとする事也賤しきものは理にくらければさもあらんかし武夫のかくの如きは見る目さく耳も猶うたてし淺ましき事といふべし他國にはかゝる事をきかず△風呂屋(湯屋といふ錢湯共いふ)江戸中に六百軒餘これ有り明ヶ六つ時より夜五つ時迄浴湯の人有り皆湯函一度に二十人宛も入湯する事也京大坂その外賑かなるの地に湯屋あれど湯函小さくして一度に四五人ならでは入湯ならざるよし然のみならず晝時頃より湯を焚暮頃には仕舞ふよしなり江戸の如く成は餘國には絶てこれなきよ

上方筋の豪富なる者は皆諸國に出店を置事なり江戸は過半彼等が出店多し城下々々はいふ迄もなく地利をよく考へ知りて少も賑に三四百軒も有地へは必店を出す事なり上方者は商賣上手にして慈愛もあり柔和なるにより田舎者は馴染に自然と店繁昌し其近在のともしき金を眞綿にて咽をむむといふが如くにして取集るか故に己れは本國に住居し諸國の金銀を以て家内眷屬ゆ〜とくらす事ぞかし天明甲辰の春米穀高直にて世の中諒しかりければ東國出店の

有金を秘に本國へ運送しけるなり因て思ふに事あるに至らば諸國に散在せし金銀皆上方筋へ集るべし米高直の節武家の悦びは暫時にて間もなく下直になり文化元子年より下直になり同六巳年のみ少し直段よく夫より當十一戌年まで打續下直になり種々御世話あれとます〜下直にて武家一統のくるしみかぞへ盡しがたく古人の貧は士の道なりといへりされとも近頃の武士の如くには有べからず高直は半年或は一年の事成べきに御世話餘り行届し故に却て下直になりしにやいかほど高直にても江戸に於ては諸人の患はいさゝかなした〜一日暮しの者のみ苦患なり當時下直なれども卑賤の者悦べるいろもなしかはらず困窮する體也されども産生神の祭禮開帳佛の送迎喧嘩の中直り等の無益の事に新たにそろひの衣裝をこしらへ幼年者迄も對の衣裝對の手拭を持せ或は歌舞伎役者藝人をやとひ過分の金銀を費し無益の樂みをするを見れば飢饉にても諸國は如何あらんや江戸は飢寒にせめらるゝ者は決して有まじ江戸は貧困の武家が金箱金元にして繁昌する所也商人は金銀有ても江戸の潤に少もならず江戸は武家豊なれば下民くらし

よし武家の困窮は諸人の困窮となりて江戸立がたしこれに付ていふ事あり諸商賣に問屋の仲間といふものあり多分かの上方者也黨類多くして世用宜しきに似たれども此者其時をはかり申合せ利潤の便りをなし諸色の直段を極め土農のいたみとなり世のわづらひとなる事多し淺草札差とも起立の節は武士は用辨宜しと悦びし事ならん今に至りては甚しき害となれり問屋仲間もこれにおなじやうになれり近年かくの如きの類多し武家は人を治め商人は治めらるゝの法なるに今は町人が人を治る世の如し當時學問の御世話ありこれ等も行届き過しならば毛々吹て疵をもとむの患あらん武夫みな學問を第一の要務と思ひ學者になり歌を詠し詩を作る者多くなりしならば武勇拙なく柔儒者になり武備おろそかにして終に城郭甲兵の守りうすくなるの階も成べきにや中古大内左京大夫義隆の華車を好みしより國をまつたうするの備へおとろへたりしを考證すべし此已後學問おこなはれ黑白わかたぬいやしき者も地獄極樂怪事妖物もおかしく思ふ様ならば馬方船頭車力火消人足の類減少し其せつは國の用辨差支る事もあらめや

○掘貫井戸の事先年よりこれ有しが武家には更になし金子貳百兩ほどもかゝる事故大商ならでは掘ざりに有りしが二三十年以前大坂より井夫來りあほりとかいふ奇器を以て無造作に掘る事を覺へしより價も至て下直なり我等しれる極樂水と云ふや井戸かわ共三兩貳分にて出來しよし其向にみつまたといふ湯屋は最初掘抜せしによりて貳拾兩程かゝりしよし夫故にや近邊第一の井戸となれり近頃は江戸中掘抜井多くなり一町の内三四ヶ所もこれあり室鳩巢翁江戸に水道の諸所へかゝりければ已後火災多からんと思ふ掘抜井の多くなりしも水道に同じかるべきにや

○斷食して服藥の事釋迦如來の病を療る方也七ヶ日斷食にて藥を飲み七ヶ日後は生死によらず藥を用ひずと佛經に説給ふとかや今世も律僧の正しき人は長病なれば七ヶ日服藥し八日目一日休藥して又服藥す七日々々に一日づゝ休み藥用するよしを聞り此斷食して服藥の方藥治より萬病に最上の藥也痢病食傷蟲症泄瀉腹痛積聚嘔吐の類の病には別して驗し多し既に大七氣湯などは絶食にして用ゆべしと古人も云り

予しばく效驗を得たる事なり疑ふべからず然るを俗人は喰さへすれば全快なるものと心得て不食の病人に強てすゝむわけて婦人は無理無體に飯せしむこれを介抱と思ふ甚しきひが事ぞかし又世俗は水を望む病人に水をあたへざるが多しこれも食をすゝむるにひとし食をすゝめ却てこれか爲に命を失ふもの少なからじ卑賤の者には水ばかり飲みて醫藥におよばず全快するもの多くあり醫法の祖たる張仲景曰く水を望む病にはあたふべしと又却温經に曰く水をのぞむ病に水を飲すべしと説給ふまた新汲水は天然の白虎湯なり樂にあつべしと本草に見へたり是等の語を見て思むべからざる事をさとし少しもいとす飲すべし釋尊仲景の教ある事を知らず歎しき事也是にかきらす俗人の私智のならばしには實要をうしなひ忌むき事を返て養生になると思ふの間違のみありて害となる事多し歎くに餘れり

○拙工の事江戸中に當甲戌年百人有之毎年三度づゝ寄合をなし人数を改め自分勝手のよき事を申合せりよし御作事方小普請方兩定小屋へ日毎に三十人相詰る山かど立たる御普請有之節はその餘數人出る事也

平日三十人相詰残り七拾人江戸中に散在して渡世をなす平日の定御普請江戸四五里四方普請の三分一出るを以て上の萬事廣大なる事筆に書盡すべきにあらず

○俳諧に六玉川前句に柳樽といふ双紙有り人の舉動心のよしあし尊卑の人情上下の人心の有様其外世の中の事情をざれ句にいへる者也されどなぞの類に似たる事ありて早速は解がたき事多くあり奉行頭人は人の邪正事變人情を辯知する事専務なれば此双紙の句ともすらくと解す人をよしとすべし安藤冠里公へ其角にて有しか其人を忘れたり常に出入けるに或夜公の御側に寝けるに公戯れて自分は知らぬ事なしとの給ふ其者御知り遊されぬ事こそ有れブリカレンと云事御存有ましくといふ公暫くして考へこれは下賤の合言葉ふてうの類ならんとの給ふ其者肝をつぶしいかゝして御考へ遊され候やと申れば我等所司代を勤し節吳服屋の出入にてふてうを聞けり流石吳服屋也しほらしき符帳にてブリカレンとは言葉いやしそれゆへ下賤の符帳ならんと仰られるとかや又公の御句に初雪やあれも人の子樽ひろひといふ句

あり諸人よく知れる所也かく下をあはれみたまふ御人といひふてうの考へ諸侯執政には珍らしき難有御人といふべし陶淵明が我子のもとへ下男を遣しける時の如し

○當戊午十月より淺草觀音境内奥山へ頓智なぞと云看板をかけ盲坊主二十一二歳と見ゆるもの出たり見物一人に付錢十六文宛にて入る見物人よりなぞをかけるに更にざし支る事なし解けずといふ事なし若解けざる時は掛し人へ景物に蛇の目の傘などをくれる事也故に見物の人景物を取らんとなぞをかける人多したまゝ解さるなぞ出る事も有よし此者の才覺頓智なる事を感心驚ざるものはなし奇なる盲者にて奥州二本松の産なるよし檢校保己一か類の奇人と云べし

若者に不劣火事毎に無懈怠能出出精いたし組の内は勿論他組迄も差配り是迄喧嘩口論等いたし候儀無之其筋に居合候もの制方も行届其上平日正路に家業向并出火場消防の者專一に心掛數年眞實に出精いたし候段奇特成義に付御褒美鳥目拾五貫被下之

○因州鳥取領主松平因幡守領分

寛永九年出生 松原村百姓 仙右衛門(當時百八十三歳) 同 妻 (百八十一歳)

正保元年出生 同 妻 (百八十一歳)

天和癸亥年出生 梓 佐右衛門(百三十歳)

貞享甲子年出生 孫 三(百三十一歳)

正徳元壬辰年出生 妻 留右衛門(百三歳)

享保二丁酉年出生 彦 ね(百一歳)

寶曆乙亥年出生 彦 三十郎 (六十歳)

寶曆十一辛巳年出生 妻 いく(五十四歳)

安永七戊戌年出生 妻 やし(三十七歳)

天明五乙巳年出生 同 妻 ちよ(三十歳)

文化六巳巳年出生 同 妻 一の(六歳)

文化八辛未年出生 源 太(四歳)

○文化十四年六月

町火消一番組の内 伊勢屋庄次郎店

い組人足頭取 悦次郎

此者儀四十三箇年已前明和八卯年より爲人足にて出精いたし火事場働方差配り等宜敷十七箇年以前寛政九巳年十月中人足頭取申付候處及老年候ても

右は此度御勘定奉行曲淵甲斐守宅へ罷出候由近々御庭へも被召出由也

文化十一戊年十月

右之通流布の書付に見ゆれとも虚實しれず追てたすべし

○養生所へ甲戌十一月十日來病人之事

本郷春木町三丁目嘉右衛門店

安五郎

戊四十一歳

右之もの戌七月便毒を煩ひ平癒の後に陰毛中へ大豆程なる腫物出來膏藥にて早速に癒たり其後骨痛を發し養生所へ願出逗留罷在の所十一月十五日湯風呂屋の縁側にて尻餅をつよくつけるが聊のさほりもなく入湯いたし部屋へ歸りふせりけり其夜小便に起立しに頭骨がたたくからみしとつよき音いたし痛強く眩暈しそれより起臥出來かねおきあがると頭がまへにたれ下るにより頰杖を兩手にてつき頭を抱へ起坐す食事の時は横にふし左を下にし喰なり頭骨三つの内中の節くじけし様に覺ゆるよしを申聞る十二月中旬に至りいたみこゝろよく兩便常の如く食事

よく氣力もよし頭の前へ垂下るの病ひのみになれり醫經に大椎骨の上の三節を頭骨とし大椎より下背骨とす顯然たる理なり此病人全く頭骨の離れしもの也

○歌舞妓河原者の曲藝を以て事業とし糊口する者を男女ともに藝者と通稱す江戸中に二萬人の餘これ有よし女を羽折といふ親兄弟をやしなふも多し二萬人餘の中上手高名なるものは一ケ年に束脩二百兩程つとも取よしなりされど倉廩を拂しものは一人もなし淺草邊にてきねや庄次郎といふ者一人のよしこれは親庄次郎建し倉廩なりといふうへもなき賤き業にして弟子皆無頼放蕩もの而已の寄合なればくらのなきも理り也

○肥癩瘡は野鄙の民間の瘡にして連に傍人に染傳するなれば貴賤ともに忌嫌ふの瘡なり高貴奥向にては婢女に少にても濕瘡有時は即日宿元へ下る事ぞかし故に貴族の家に此瘡有事なしされど此瘡にて手に箸を持事もならぬほどなやみしもの或は年久しく煩ひし者は極て無病息災にして長壽なる者おほし此瘡は身をそこなひ命を失ふ病にあらざれば餘りに忌避

るの瘡には有べからず

○痔疾の奇藥に深川邊の方言にヒルゴ玉といふ海虫あり味噌汁にすこし許煮て喰べし神効有よし海中淺利貝のある砂地に深く穴して居る品川邊の方言に海脱肛といふあり乾肉沙塵に似たりといふヒルゴ玉の事にやヒルゴ玉は冬に至ればわけて深く蟄居す春末より暖になれば穴中を出るゆへに淺利貝の中に交りて得る事これあるよし物音すれば速に穴中へ入るよし鰻鼠のごとく早しといふゆへに得かたし漢名石槿ならんか猶識者に尋べし

○江戸住居の者に遠國出生のものと江戸出生の者と夫妻になれる者あり江戸の者は先に死し遠國のものは後に死る多しといへりさもあらんか江戸出生は嬰兒より厚味を喰ふが故に腸胃も虚弱にして元氣充實ならざれば短壽にして長くたもちがたしと思はるなり

○砂糖は諸物をやはらぐるものと見へたり天門冬生姜佛手柑の類は齒の隕し人は喰がたし然るに右三品の砂糖にせしは老人もたやすく喰ふものなり之を以てみれば積聚などの病には極てよろしきはづなり

○味噌直し草又狐のビンザ、ラともいふ江戸巢鴨村雜司ヶ谷邊に多くあり一兩年已前なるべし堀田侯の乳母水腫病にて田舎へ保養に行けるに右の草を以ておほひとせし味噌汁を薬になるとも知ずして數度給けり右草が薬に成しにや全快せしとなり夫よりして江戸の醫者水腫に奇効有と沙汰近頃の流行薬となれり官醫専ら用る事なり松前吟味役荒井平兵衛などは屋敷に圃を作り多く植立蝦夷地へ持行きしよし廣大和本草に木藜蘆和名ウシグサ本草藜蘆の附録に見へたりそんじたる味噌の蓋にすれば三五日の中に直るなりと記せり是狐のビンザ、ラの事なるにや

○諸州採藥記に云大和國十津川千本鎗の百姓居住す則此所にて御朱印千石被下置地所長十九里程横三里ほども有之といへり田畑山林あり百姓共御預りの鍵千筋鐵砲千挺弓千張今に有之御上洛の節二條御城の表御門へ相詰ると云其節鹿の革千枚奉獻之也又順見其外公用にて此所へ罷越候面々をは彼御預りの武器悉く百姓持出し行列をなし慎て是を送る總して此所の風俗にて農業に出るにも又親類其外參會の席へも御預りの鍵弓鐵砲銘々持參傍に置之片時も是を怠る

事なしといふ

○駿河國富士の人穴予此穴に入る事三十間計内の様子を見るに譬のほとり迄泥にひたり中々先へ行事を得ず寒き事雪中に立居るが如し甚凌ぎがたし昔仁田四郎此穴に入るといふ説あれども當時の有様中々人の行へきとは見へず此穴の有る所を人穴村といふ彼人穴を此村の氏神なりといふ其神號をしらすいかなる故にや富士山より三里脇にあり富士山の内に人穴ありといふにはあらず此村の事なり東照神君の御朱印あり

駿州富士郡人穴村中事

右田畑ともに爲不入之旨守此旨可致居住者也仍如件

天正十一年七月十三日 本多平八郎奉之

其時拜領するよし御持の御扇一本あり銀砂子金の横筋其上に富士の繪あり常の御扇の通り要は白ほうの木なり又御直鎗一筋長サ二間

右兩様拜領のよしに今其所の名主是を所持す同村續き上井出村間屋場一所に其節御朱印被下之旨是は甲州へ御打入の節の事也といふ

同國阿部郡上田村海野彌兵衛といふ者の方へ旅宿しけるが此者の先祖東照宮の御代御茶役人御藏預りの由其節の御帳面上書

慶長十七子御茶詰候御壺口目録

一 玉虫の御壺 一ツ

遠江宰相様

一 楊柳御壺 一ツ

一 阿茶様御壺 一ツ

一 御まん様御壺 一ツ

一 御なつ様御壺 一ツ

一 御龜様御壺 一ツ

一 御かち様御壺 一ツ

以上

總合拾六渡申候

慶長十七子五月五日 書 判

海野兵左衛門 書 判

海野彌兵衛殿 書 判

朝倉六兵衛殿 書 判

但御部様方例の通相渡右に記す

右彌兵衛方に其節東照宮様より御直に被下置候忍冬酒白鳥徳利にあり予彼御酒を慎て少し頂戴する所に味ひ于今相替らず奇異の事なり上田村の入口大井川の上なり此所に釣はねばしあり長さ四五拾間高さ水際より十間ほど其水速き事矢のごとしその釣り橋をわたるときはゆれ甚し魂身にそはずこのはしの仕様兩方よりはね出し中は柱なし此橋をわたる間召連たる従者は渡る事を得ず廻り道をして翌朝跡より來る駿河一の難所なり

○飛騨國田畑殊の外少き深山なり六七月迄も村々に雪あり酷暑の節も朝夕は綿入を着す甚寒國なり稻をうへるに實のりあしき故に田に稗をつくりつねに農民の食物藤の根をほりて食とすまた栗の木などのやとり木を採りて其汁を煎じ食す予此山中に宿す夜中蠟燭をともし髪月代を召仕に申付る時そのところの男女これを見て奇怪の事とおもへる有りさまにて殿あれ大根に火をともし頭を面にするといひて甚笑ふ二三十人も立寄りけしからぬ事のやうにこれを見る男女の形状分れがたく和國の容とは見えす甚邊鄙なり此邊人死するときは名主年寄にて是を引導し葬送

するといへり總てこの國甚下品にして六月土用中にも二三度宛は雪ふる事あり仍て田畑にうへ付て久しく有物はつくる事なしといへり

右五冊は享保五庚子の夏より初て採藥の命を蒙り奉り諸國を巡行する事數年に及へり其間草木の事及び經歴せし山海驛路の事迄も悉く書記して奉れとの小笠原石州君より仰ありて九卷になして諸州採藥記と名づけて奉り其後命ありて卷數事繁ければ珍敷事ばかりをついめ記よと有に依て毎々抄録し奉る事しかり

享保五年より寶曆三年に終

奉 寶曆五亥年改 植村政勝謹録

右書は駒場原御用屋敷預り植村左平次といふ人也採藥記は見ざる人多ければ珍ら敷事を少し計り爰に加

七十八翁

文化十一年甲戌季冬 小川顯道書

後はむかし物語の序

南野英才古をこのむのあまり近世の俗事といへども今世にのこることのまれなる品はうがちて其世々のおもむきを察しからかみ表紙のきんびら本のたぐひ古き戯場の番附青樓の細見などをさへにあつめてたのしみ給へりある日何人のあつめ置けるにや寶曆中の戯場の櫓下てふ書をかすくあつめたりしをめぐらしとて見せ給へり其中には我見たりし狂言あるは聞及びたるもまた見てももひ出たるもありおぼえぬもあれどその役者は我しれるものどもにて侍ればめづらしとおもはねどもわかへりたるころに愛であるはとしのつもれるにはおどろき侍り我このころのやうにおぼゆることも四そちのみたぬ人々には古き世とも見たまふらんと思ふにつけて我七つ八つになれりけるとしよりこなた寶曆のころまでの事耳の底に残り或はそら覺に覺えたりしたはれごとの忘れたるはわすれたるまゝにかいつけて南野高才子のわらひにそなへ侍る

享和三年癸亥九月盡 平澤常富六十九歳(享保二十年乙卯閏三月廿一日生)於虎耳窟たはむれに誌

附記

●石川七左衛門考
×ハ曲亭馬琴考

後はむかし物語

目録

- 一 略曆大小の始
- 一 本所大水
- 一 長唄
- 一 流行唄
- 一 十二挑燈
- 一 土佐ぶし
- 一 女郎の髪
- 一 二枚五兩の小脇差
- 一 紀文老後の宅
- 一 煙草
- 一 向島菱斗庵
- 一 生島又藏高麗屋宗十郎改名數度
- 一 芳澤あやめ嵐小六初下り
- 一 役者繪彩色の始
- 一 小六染
- 一 菅原忠臣藏狂言の始
- 一 本町伊豆藏富山壽の字越後屋釘貫越後屋大丸屋
- 一 現金掛直なしの始
- 一 つら見世
- 一 こはいろつかい
- 一 騒といふ唄
- 一 むかし芝居の躰
- 一 鮮賣
- 一 今絶たる品々
- 一 能役者の事
- 一 團扇賣
- 一 せりふ
- 一 京の人情
- 一 京丸山諷講
- 一 吉原始て焼失
- 一 材木屋大申
- 一 眞崎のでんがく
- 一 巴屋逸志
- 一 巴屋岩こす
- 一 扇屋岩こし
- 一 傾城名目

- 一 吉原女藝者
 - 一 樂研堀不動流行
 - 一 狂言の古今の變化
 - 一 幕明の口上
- 以上

後はむかし物語

てがらのをかもち作

○八つになれる年かとおぼえたり(寛保二千戌本所大水のとし)土岐丹後守所司代より御老中になり給へりその代は牧野備後侯所司代なりしそのとしは小大小大小小大小大と九月よりみな大の月にて四月間かとおぼゆそのとしの大小は土岐丹後守京都所司代牧野備後この有偏大無偏小はよきおもひ付なりなど人のいひしをおぼえたりこのごろより大小は好きと見えて覺たるをかし

●としく大小てうものをかうがへたくむをたのしみとする人ありしがひとせ無の一字を楷書に書なして板行せしをれいのごと知人のもとにおくりけるが其文字の點畫全く十二あれどもいづれを大小ともわきがたかりければ或時其人にあひたるまゝに彼大小の見わきがたき事を云出つゝ點畫いづれか大小ならんをしへ給へとありしに其人いひけるは去年の冬はいつよりもいとまなくて大小かうがへぬべきひまもなかりしまゝ今年はなしとい

後はむかし物語

ふことはりのこゝろにこそ無の一字をば木に彫りてくばりたれとこたへられしとなりされど此人の大小は年久敷うちつゞきて一年もかく事なかりしまゝ此無の一字もゆるこそあらめとふかくおもひ過しとひあきらめんとしたるはいみじきふかくにてありしとそのひとかたられける

○本所大水の後そのころの路考がむけんのかねのめりやすを直して

●去年うせたりし瀬川仙女いまだ菊之丞といひし時上京せしが京坂ともにさまでの手際もなかりしほどに其間伊勢の古市なりける芝居へ出て無間の鐘の狂言せし時或日仙女其役にて石の手水鉢に向ひひさくふりあげつゝ三百兩の金こそほしけれといひたりし時見物の中に仙女が金たくはへ持て大江戸に町家敷などある事を知り人にやありけん左程にこがねなくてかなはじとならば江戸の町屋敷一箇所賣ねかしといひのしりければ仙女はとりあへずといふて今夜の間にも逢まじと狂言ながらにこたへしかば流石は江戸芝居のたてもものほどはありていしくもこたへたりとて皆人其頓智をか

んじあひしが夫よりのちは京大阪とも此事を開傳へて評判をとり返したりとなりこは近き頃の事ながら年月歴なば又知る人もまれになりゆかまく思へば書加へつるなりこは無間の鐘の因に思ひ出たる也

本所にはどうした水の出ること、今ぞ知らるゝうやつらやいかに風じや時節じやとていやな屋根にも住まねばならぬ山ならかうしたうきめはせまいとし妻子はあゝまゝならぬ上みのお慈悲やたすけのみふね無理な渡しはどふやらこはい「忘かさなり流るる人を見るのつらさにナ流れしよりも水で流るゝ人のこゑいつか出水を引かせてほんにほんの住居と落附ならば今はむかしの茶のみ草」菊之丞が無間は大當りと見えて此唄も殊にはやりたりと見ゆ無間も元文中なるべくや（傾城かつらぎ菊之丞名古屋山三宗十郎助高屋也奴八兵衛廣治）寶曆元未年秋狂言に戀女房の跡へ路考が追善を出し（かつらぎ菊次郎路考か弟仙魚山三郎はやはり訥子也八兵衛幸四郎木場の親玉也）これは我も見たり長唄路考が時は坂田兵四郎仙魚が時は松高庄五郎なり此兩人は此ごろの唄の

上手なり此後富士田吉次出て一家をなす（是楓江初は佐野川千藏といふ女がた也）繼て荻江露友出るといへ共楓江にはおよばず
○はやりうたといふものを聞ておぼえそめたるは「さういたさくらアになせこまアつなぐといなこアまがいさめればはアながアちるちらくするわいな」是なり其後だんく覺えたるはやり歌多し咲た櫻は元文の末なるべし見れば見渡す竿さしや届くなせに届かぬ我おもひといふうたこは寛保元二の頃富士郎が夜の編笠の内にあればその時のはやりを入たるならんてんく天徳寺は愛宕の下よといふも同時也「傾城湯女白人躍子呼出山猫比丘尼飯盛綿摘夜發蹴轉舟饅頭」如此てにをはの一向なきうたも此ころの事なり
○大文字屋のかぼちやといふうたは流行甚しかりし寶曆二申年とおぼゆ三圍稻荷開帳もその年と覺ゆ其前年の淺草觀音の開帳に玉やの花紫（太夫なり我覺えては此一人にて其後太夫といふ物絶たり）挑灯を十二つらねて奉納せしより十二てうちんのうたあり花火の十二挑灯を十二といふも出所はこれなり此

かぼちやぶしにてよし原の女郎のうたあまたありとおぼえしが多く忘れたりあらまし左にするす

十二挑灯花紫の紐付て飾し玉屋の女郎衆が戀の巢ごもり紋は鶴の丸ヨイナヨイワイナ

その名總角戀の染衣上總やで器量はよし巻高松に顔も澤瀉のみんな紋所戀の瀬川の深い情をまつ葉やの便りを松風其梅におもひ染川ちらと三つ柏めぐる紋日の巴や巴豊山にこがれておほ里しつぽりと二世をかたばみと契る紋所

のぼりつめたる天満や定家小式部にお客が通路川岡の君は中の町へほんにむかふ梅

右五章は江戸町一丁目なり

角の葛やをみさを三州一文字丁山金山蒔ちらし身請故郷へ飾る錦木はなびく玉やの女郎衆も静しつぽりと

此跡不審何れ二丁目なり此外二丁目めと覺しくて上の方忘たり（女郎衆が戀路も丁子やに客がからみしほんに蔓葛や戀路も丁山平野やへ客がよせくるもんは波桔梗）といふもあり
右同断（てうちんを三浦の金山は家の富田やほん

にます錢や是は京町成べし）
右同断（其名は山本山城屋のぼるお客文は長崎屋是は新町也又角町にて）

戀の山口ゑびらと名を得し竹萬字をとらぬ菱やはつ梅の花の姿海老やのほんに色競色の情の中萬字やと名をゑびや（跡忘たり前と此歌は角町也）

間夫にあふ夜は嬉しきかなや越前や替らぬ妹脊の中近江抱て根笹は家の紋所（新町）

千早振袖鈴木屋伊勢屋の神かけて一夜は手枕拍屋の君に指でも髪でもしんぞきり菱や」右一章は京町二丁目を連ねたるが此外（お客に太田屋信の屋は酒に海老屋のほん魚の色）是等は皆忘れたり

○我父の友に小久保萍也といふ老人あり是も乙卯の生にて我に六十とし上にて十歳より十三の年まで此老人の話を聞たることあれども今おもしろしと思ふほどの話も覺侍らず土佐節を好みて常にかたりき定家といふ淨瑠璃などよほど聞覚えき親土佐は上手なりなどいひしは元祖にてもや有けむ憲廟の時あやつり上覽有しと也と酒吞童子と現在松風といふ淨瑠璃二流れきかせ給ふといへり尤あやつりなり御操とい


ふ庵り看板は其時よりなどいひし誠なるや土佐節の人形は裾より手を入てつかひて足といふ物はなく手摺の下より人形計見せてつかふ人の容はあらはに見せざりしと見えたり素よりさしかねにて左を別人のつかふ事もなかりしと也後に至りて臺事とて碁盤人形の如き出遣ひも有て其時は足を遣ひしと也あまり動かぬ人形をば胴串とて今の手あそびの如く如此にて遣ひしと也働く人形ばかりつみみとて是も短くしてつかひしといふ且淨るりの間々に間の狂言といふ有是近來とり出たるのろまなりのろま米平など人形の名にてのろまは治兵衛といふ男の人形米平は碁右衛門といふ男の人形也とぞ

○此隠居は我父にも年十上にて今の傾城の髪は油を澤山に付て堅めたる髪也と親が云ければ以前左様の事はなき事也女郎の髪は水油にてすきぬき手を以て撫ればさら／＼としたる物也といへりされば昔繪の傾城の髪も思ひ當れり

○几帳といひし傾城は紀伊國屋文左衛門に請出されたる女郎にてもや有けん此几帳に馴染たる士は此隠居が覺たる男と聞しが名は忘れたり几帳紀文に請出

されて力を落せしを世の人半太夫節に作りて語りたりとて隠居もかたりき過し年青樓にて五町も其淨瑠璃をうたりたりあまねく傳はりしと見えたり(舟の着たにサア起されふつゝりばつたり寝入られぬ寝られぬまゝにつく／＼と宿の首尾のみ案すれば我黒髪はしらがとなり樂しみ盡て悲しみのなんだ袂を濕ほせり几帳にはだまされて二枚五兩の小脇差純子三本もみ五疋綿の代まで取揃へ霜月半に贈りしに終に夫とて見せもせず今は文左が寶ものといふ文句也二枚五兩の小脇差は傾城にやりたるやうに見ゆいにしへはかゝる事もありしや寸錦雜綴に紀文が脇差の鞘の所に世に二枚五兩の小脇差といひしは是なるべしと有小脇差には鞘も長もやう也いかなる故にや

○我十三四五のころ成べし存義小網町より深川の一の鳥居の北側に越して住す父と共に行しこと有又點取の懐紙の即點のために我計行たる事も有此庵は紀文が衰へて後住ける所也と聞て少年の時ながら少小心を附て見たるに替りたる事もなかりし天井は一枚紙を只やたらに

 此趣に張たるやうに覺し其後三十年計後に存

義が嘶せしとて晩得物語りけ

るは彼一の鳥居の天井破れそこねて見るしければいかやうにも繕ひてよと門人の内に經師の有ければ頼みけるに彼經師損じたる所を委敷見て横手を打て感じていひけるは此天井もとの如くつくろはんは甚難義の事也紙の色いろ／＼に少づ／＼替りて見ゆれど皆同じ白紙にて粘は色々粘にて張たる也百年に及ぶ粘有五十年に及ぶ又三十年或は十年經たるもあるべし今かく百年を経たる粘を持たるものなし奇也奇也とて感じたりといひしとなん世にもさま／＼かゝる話しも有ることながら信じがたき事か紀文にはさまざまおもしろき咄しも聞侍りき

●江府の俳諧宗匠神田庵小知が家に紀文が涼の酒盃と稱する物を收めて有しを予も往し年見たりしが工せる事もなき朱塗の盃にて世にいふ所の小原の形したり内は鐵線からくさを描畫にしたるもの也き神田庵主の話に昔紀文盛なりし頃一年夏の事なりしがその日紀文淺草川に船遊びするよし世間にいひもてふらせしかばいかなる遊びをするならんと是を見物せんとするともがら其日に至りぬれば我おくれじと競ふて船にとりのりしかば川の面

は水のいろさへ見えわかぬまでに所せくむやひつれ今や紀文が船は來なんと待居たりしが夕日かたむく頃にも成ぬれど夫ぞとおぼしきも見えねば後には爰かしこや船をさ／＼せてたつねめぐるもおほかりや、燈さす頃にしも成ぬるにこゝにも盃こそ流れよりつかしこにも取上たりなどいひのしりて頓てどよめきつ後は酒のみ歌謡ふ事もせで川面をのみ守り居ていづれの船にてもたゞ盃の流れよらん事を待て先のみあらそひ興じけるこはまさしく紀文がわざ成べしみなかみをたづねて見ばやとふねを隅田綾瀬の邊りまでもさしのぼせ至らぬくまもなくさがしもとめけれども其夜はさらに紀文がふねを見當らざりしかば夜ふけ興盡て皆人歸りぬとぞ其日紀文は船遊びに出るとのみいひふらせぬるばかりにてみづからは家にありて盃ばかり流したるよしのちに傳へ聞て其風流を稱しけるとぞ

○我が初て芝居見たるは六歳か七歳ばかりならんか市村座に海老藏がじやごせ赤右衛門と云面打の狂言なりおのれがかほをさま／＼の面にして見するなり

けり其時の團十郎は(幼名升五郎といふ實は三升屋助十郎が子にて今團十郎といひき父と共に上方に登り歸てのち没す)鎌田又八にて赤き顔にて出たり宇左衛門は(羽左衛門と書しは後なり)吉田の少將海老藏粟津の六郎坂東彦三郎は山田の三郎なり中島三甫右衛門寂まくの善右衛門といふ人買なり松本幸四郎(木場の海老藏なり此時病氣にて松本四郎三といふもの代りをつとむ)六十六部が歎討の狂言なり後の羽左衛門は滿藏とて猫の所作をしたりといふ何もろくに覺侍らす東の棧敷なりしが後に六十六部が此うしろを通り此前の花道を通るといふ事を聞て氣味わるくなりて早く歸りき

○彼洋也といふ隠居が云近頃は薩摩國分といふたばこ所々に見ゆ火附のよきたばこなりといへり其頃は和泉新田とて白く麻色なるたばこを女は多分のみたりと見ゆ傾城もこれをのみたりと聞く

○近き頃は秋葉に庭をつくりてよくなりたるといひき其後零落して今の庭ははるか後に出来たりむさしや權三は初め麥飯計を焚て喰せたりと云我十五六の頃なり麥計庵といふ計を斗の字と必得てはくけいあ

んとは云はずばくとあんと唱たるもをかし其後年を追て繁榮し今の姿になりてもぶら挑灯の抱澤湯の脇に麥斗の字を書たり其後是もやめてむさしや權三にて通りぬ今も秋葉より來る老人はばくとくといへり權三が家内のものは却てしらぬなるべし

×麥計の二字の書は紀文の筆と申事承及候如何や承知仕たく候今に傳へ有と承り候權三にはなく他人の家に藏すと云々

○我十五六七の頃生島又藏といふ中役者有後大井川又藏と改めまた萬屋又藏と改む名を立盡して苗字を再三改たるもおかし新高麗屋もたびく改めたるものなり寶延の頃は瀬川金吾とてよき若衆形也角みを入て瀬川錦治と云結綿を付たり元服して市川錦治其後市川武十郎其後市川染五郎その後市川高麗藏其後松本幸四郎男女川京十郎にて終れり今の源之助が祖父の宗十郎は竹中歌川といひし女形也紋は竹の打違ひの中に歌の字也凌廟の御幼名竹の字を憚りて瀧中と改む(紋所如元)元服して名を姓に換て歌川四郎五郎と云紋龜の丸也其後澤村宗十郎と改また四郎五郎と云し頃一度宗十郎といひしは澤村春五郎とも云し

もの也名人宗十郎師の名長十郎に改て春五郎宗十郎となりしが世を早くせり長十郎ははじめ染山喜十郎と云けるよし其後澤村宗十郎後長十郎夫より助高屋高助也門人染山喜十郎後澤村喜十郎夫より長十郎と成俳名は喜長也姓を改名を改る事鼻をかむやうに覺たるものどもなり

○延享二丑か三寅かの顔見世かと覺ゆ市村座へは芳澤あやめ初下り(中村富十郎と芳澤崎之助か兄なり)大根漬の狂言をしたり上手なれども評判どつとなし楠が妻菊水の紋にて大名題は女楠粧ひ鑑とあやめを立たる名題也其時中村座へは嵐小六初下り也是は藝はあやめより劣りたれど美しく評判もよき也(上手雛介が父也後嵐三右衛門と云)されども見功者はあやめは上手ころくはお下手といひけり是も下手にはあらねど下りの顔見世女にてしばらく也請は栢庭にて淺黄頭巾の上へ冠をのせたりとか聞し小六着付鶴菱にて暫の着附と見えたり掛素袍計にて肩に栢庭が筋ぐまの角前髪のかほを畫きたるを顔にあてゝにらむといふ趣向也其頃の能案しと云なるべし我その一枚繪を貰て持たりしが漸彩色摺の初りたる時也され

共鬘と紅と草の汁と三枚板にて所々喰違もありき小六が野郎帽子の紫の所は紅と草の汁とをかさねてすりてむらさき色にこぢ付たる物なりき奥村文角政信が繪かと覺ゆ畫の上に書たる發句にかほ見せや鶴の巢ごもり小六染とあり其時は鶴差繫を小六染といふにやとおもひしがのちに思へばしばらくの着附の定式の形也その後左り巻を小六染と云そめて流行せしは其翌年か翌々年かいつれ乙卯の年也小六と中村七三郎がおふさ徳兵衛の狂言也(斯いひながら思ひ出るに翌年にはあらず其故は此時あやめ小六同座也されば兩人初下りは丑とし也)夢結ぶねくらの蝶といふ淨るり(常盤津文字太夫)にて所作のはたぬぎ紅白の左巻なりしより云初めたる也少長も同様の左巻なれど流の名は小六に取られたり此年菅原傳授の淨るり出たるが大芝居にて初菅原傳授をせしは翌辰のとしかと覺ゆ(又云ながら案出たりやはり卯のとし也)忠臣藏を初て大芝居にてせしは翌辰のとしと覺えたり菅原忠臣藏ともに初めのは役わりもおぼえたり事しげればもらす

○本町一丁目の角の伊豆藏は根強きものゝやうにい

ひしが今は岸部一久の暖簾を少し残せしまで也本屋が見世の脇に町一丁目は伊豆藏二丁目は富山に花色のうれんの壽の字

×富山の呉服物通箱とて古く傳り今に所藏いたしおき候御仁あり今の製とは甚異なりと云々

越後やかき暖簾の釘貫越後やいづれもはなやかなる廊にて朝鮮人來聘の棧敷の躰いかめしく

覺えしが壽の字はいちはやく仕舞釘貫も其後跡は

見世のみ残りも朝鮮人の頃は新廊と見えてめ

づらしげに人はいひきしも十四五の頃にて伊豆藏の

手代喜兵衛といふもの壽字釘貫などはからくり身上

にて大なる尻をひれば潰れる身上なりといひしに果

して二軒ともにあとなく成りぬ其ころ喜兵衛は大人

頭になりしとは聞しが左云しいづくらも何人のひり

たる尻にや跡ありともいひがたし町家のいかめしき

は頼み難し壽の字越後やが安賣の引札せし事あり花

色暖簾の壽越後やと段々御最員被成下といふ文言な

義に死の字末期や惣七と出したるも壽の字越後やを反したりと覺ゆ彼隠居の咄しには現金懸直なしといふは駿河町の越後やよりはじまれり也その頃の唄に越後や現金かけねなしとて座當などがうたひて三絃を弾たりといふ咄ありき

○彼隠居はかほ見世の事をつら見せとのみいへり昔はつら見せといひしと見えたり小野寺十内がふみとて妻のおたんが許へおくりたる文をあつめたるを見し事あり此文の内に幸右衛門も此間若衆と同様につら見せを見物にまわり候とか書たる文ありき父がけふはでんつくでんの前を通りてなといひしでんつくでんとは芝居の事也堺町を通りしといふ事也芝居の仕かけを道具だて或は大道具など見物のかたにて黒人の通言を覺ていふも我覺ての事なりたてなど云もむかしの見物は知らぬ詞也人形つかひを手摺とのみいふも右に同じ

×顔見世を昔つら見せといひけるよしは自笑が云つら見せとは連見せにてつらなり見せるの義か面見せる云々自笑が説は役者大全か役者綱目の中に有と覺し

○こはいろをつかふに「請取たりや其次は是も同じく役者にて市川海老藏で頼ますそこの仕出しは市川海老藏でと留た所でつかひ出すなども今は古風となれり雨の降夜は一入ゆかしなどは先なき事也又こはいろを五人とか七人とかつかひ仕舞て留めに短きせりふの様なる事をむかしのこはいろつかひはいひけり是も今は聞ず其云かた「そいはる有明の——こころでちもつと留袖や振袖様へのおいとまごひとホホうやまつて申すといふやうなる事をいひしなり

○今も騒ぎといふ唄は江戸にも上方にもありて忠臣藏の七段目の幕明きの類あれども親などがいひし土佐節頃のさわぎといふ物は今の趣とは異也奴の騒ぎ鼠のさわぎ何のさわぎといふ事有我も鼠の騒ぎいふを十二三の頃父に習て覺たり鼠のさわぎといふは

「嬉し〜側いこ〜しんぞ〜〜けんぼ〜
〜さすは盃君様へ戀け戀慕きやしやふる花よい
〜側こそつと寝よか〜替らぬ思はいいさまろ
ろかのうきにうきたつひよんきり瓢箪戀風がばつ
とふいて来てあなたへはからころりこなたへはか

らころりからころ〜からころりつときそいのうかれ姿のおもしろや年の始に春駒を祝ふたお厄落しに厄拂節分豆蒔年男やんさんさてんかおてんか屏風の棧敷大分込んだと南無奇妙長久治めて置て頼朝のお前でひよつと望出した法樂法樂の舞じや程にいざ舞ふよ拍子を揃へて獅子亂曲を舞ふよおどるまいと思へどきよひよんおどるまいとは思へどきよひよん伊達な姿を三河の澤のお澤の騒ぎに三界をはしり〜〜の八橋に八つ拍子を揃へてきよひよんもすそ小つまの〜まつびらびら〜ひらり〜ひらりしやらりとうき世うかれめ

何故に鼠の騒といふや鼠の詮は見えず

×催馬樂に老鼠といふうたひものあり鼠のさわぎもおい鼠より思ひよりて名づけたるか十年ばかり昔予京師に遊びしころをか崎めくら法師があれ鼠といふさわぎをひいてきかせたりその唱歌は忘れられどこ〜にしろし給ふ鼠のさわぎに似たる様なり如此文句に入つ橋に入つ拍子を云々又三河お澤の騒ぎなどいふ事あるを思ひあはするればをかざ

き女郎などいふとおなじ事にて元は三河ぶりの唄
にやかしこにてはあれ鼠といひ江戸にては鼠のさ
はぎといひしかも知らず

○むかしといふもをこがましけれど享保の頃までの
人は今の入よりも心長く思はれ侍り河東節の松の内
は役者の所作もなく只みすのうちに素淨瑠璃にか
たりたるを百日とか半年とか續たるといへり見物お
となしく聞て居たればこそかくは有けれ狂言ありと
ても灸すゑの淨るりなとも長きものにて所作もさの
みなくとらが十郎に灸をすゑてやるまでの事也寛保
にいたりて夜の編笠は富十郎市松杯が所作は格別の
おもしろみもあるべけれど今かゝるまだるき事を見
てゐる見物はなし豊後節なども初め暫く役者の出ぬ
前素淨るりの事あれ共是は近年は見物の退屈せぬや
うにと思ふ故にや三くだりも語れば早せり出し杯に
て役者の出るやうに節を付る也見物も功者にて爰は
もはやせりだしに成節なりと聞覺て其節を聞や否ま
た拍子木も打たず太刀の柄頭も女形のまげの先きも
見えぬ内より其役者を差て譽る事になれりその心よ
りしておなじ狂言を二度も三度も見る人はなくて一

度限ればこそ大中りといふ狂言も近年は三十日とは
續かず十日もすれば跡を出すやうになりて昔の如く
半年同じ狂言をしたるなどやうの事は更に無し人の
すくなく成たるにはあらず江戸の土地のだんふに
場末までも家を建つらねたるをみれば人は極めて多
くなりたる也人は多けれ共貧しき人多くてかくなり
たる也一面に切落しにて土間棧敷と云はなくやう
く繩張など鶉の下に少計有たる頃は棧敷の外は二
百錢にて事足りたるを今は輕き身にても其倍にても
足らぬやうに成たる故は棧敷の食類とても昔は今の
様にはなかりしと見えたり惣じて衣るいを初め奢は
昔に倍し人々の樂しめる數も多て成て芝居も昔のや
うに見る人なきと見えたりむかしの春狂言は正月二
日初日也是は我も覺し也今おもへはいかなる人が二
日より見たる事じやとあやしむやうなり青樓も又同
じされど芝居ほどにはおとろへすと覺ゆ是また奢り
て物の上品になりたる事は昔に倍せるなるべし
×青樓は今いたく芝居よりおとろへたるやうなり
いかにとなれば芝居は棧敷代昔にかはらず且切お
としなくなりてわり合七間となれば昔の三倍の價

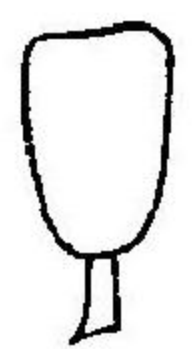
なり青樓には太夫といふもの絶て久し且近きころ
は七十五々の女郎郎中只兩人に過ずとか聞り是に
ておとろへたることもおもひやらる

○おまん鮮は寶曆の頃よりと覺ゆ京橋中橋おまんが
紅といふより居所の地によりておまんすしと云たる
なるべし此ころまでも當座鮮を賣事は稀也鮮賣とい
ふは丸き桶の薄きに古き傘の紙をふたにしていくつ
も重ねて鯨の鮮鯛の鮮とて賣ありきは數日漬たる
古鮮也

○今なくなりし物傀儡師すた〜坊主地紙賣木綿の
高荷帷子賣乗物行器籬の道具と賣ありく杯也

○我幼年より亂舞を好て考るに能役者といふ人の藝
も戲場の役者の如く昔は上手にて今は下手なりとい
へば夫にもなれども一體拍子の合ひ方等委敷微細に
なりて云はハ利口に成たるといふやう也昔と違ひ素
人には上手多く成たると見えたり是を考るにむかし
は素人には惜みて委敷意味は傳ざりしと見えたり前
に云如く今の人はこらへ情薄く成りて素人にもよき
事を傳ふるよりして素人にも功者多し近年遠き諷と
いひし物の近き諷となりたる物多し是又立廻るもの

は珍らしからぬやうに覺て遠き諷を能にても囃子に
出す様に成りぬたとへば神樂なれば龍田三輪のみに
て巻絹は遠き方にて何方の能に巻絹有しといへはめ
づらしき物出たりと云様にありしが今は三輪龍田同
様の朝夕の喰物と成る盤沙の早舞なども融海人稀に
當座も出したるを今は絃上須磨源氏なども不斷遣
ひしと樂は唐船郡郡久敷物なりなどいひて三笑枕慈
童などを不斷着におろし亂なども常の事になれり素
人も遠き物をも突掛りに打つて手柄として早く家本
の弟子と成り傳授を多くすますを旨とし家本も謝禮
を取事なれば望に任せてゆるす族多しされば傳授物
を濟たるには不相應なる下手もあれども能く穿鑿して
學ぶ者は素人に劣らぬ者多し昔の素人は師深き意味
を教ざる故これにて能きことゝ覺て仕舞たると見え
たりいづれ素人は今のかたよろしと覺ぬ
○我が十歳ばかり迄はさらき團扇や奈良うちは本漣
團扇ならうちはとて賣りしなりさらき團扇といふは
青紙にてへりを取うちは板行にて丹と雌黃の彩色な
り形は今の團扇形に似
如此形なり是はふ
ちも白き紙にて繪



ちも白き紙にて繪

は板行彩色は蘇枋と雌黄なりたま〜吹繪も有さら
さうちにはよりは少し品のよきといふ取扱なり團扇の
繪も合せ板行に成たるは一枚繪の合せ板行よりは一
年も遅かりしと覺ゆ奈良久ちとはいふは役者を書て
せりふなど書たるありさらさ團扇にはなきかと覺ゆ
我持たりし奈良團扇に海老藏が植木賣のせりふ書た
る有て覺居たり栢筵がせりふは皆自作也といふ外郎
賣を初め矢の根五郎白酒うりのせりふは能く人の覺
たるせりふなり植木賣は抑うゑ木の功能は先朝顔の
目をさまし蟲一道の根をきり鳥退屈氣鬱を保養の松
常盤の樂しみ居ながらに嵯峨や吉野をせき臺へうへ
野の花と三升の紋顔に紅葉の龍田川唐紅の女中方な
びく棧敷のはなやかに色を呼つゝ(いろをよひつゝ
と覺候此句おたやかならず)物の媚柳の腰元引連て
紅梅白梅庭櫻海棠一はい見物は井出の山吹藤波のか
かるめでたき君が代の草木國土太平樂らいでんぼく
のあくまはらひとホ、うやまつて申
とかく昔はせりふと云事すき也何狂言にもとかくせ
りふをいふ事

○今は朝比奈の出端も故實の通り鬼かイ、ヤ人かウ

ウエへ小林の朝比奈だもさと大薩摩にて出る事も略
したれば曾我兄弟對面のせりふのみ也暫は定式せり
ふなくてはならず昔はせりふとのみいひしが今は多
く常の言葉を書り付くと云てせりふをばつらねと
いふされども中賣が賣るには今も暫々のせりふなり
八百藏せりふやなどいへどもつらねといへばわかる
様也くさすり引などは殊更今はせぬなり一體一番目
の大詰といふ幕顔見世にても春狂言にても是非騒々
敷短く賑かにおもしろくなき幕有是も見物のはらに
合はぬ故いつしかやめたり昔は是をも面白がりて栢
筵何江などが不動愛染明王關羽の像達摩等を嬉しが
りたる事也古今の人氣見るべし今のこゝろにておも
へばむかしの人は今の小兒の如しといふとも可なら
んされども前にいふ所作も藝もなき松の内の素淨瑠
璃を一段おとなしく聞て居たる心は今の人の耻る所
なり

○京都の人はうはべ和らかにて心ひすかしなとさみ
す人多し江戸ものゝ心持にはさ思ふべき道理もあれ
ども又江戸ものゝ及ばぬことも多しおもふに物の流
行江戸は足早く京都は足遅し十年跡に京に登りて見

たるに帯の幅のせまき筭の長き等江戸にてむかし流
行せし事其まゝにて有やうに思へり主人と下女の髪
は是非おなじうせず頭に物かむらぬは道のものに紛
るとて只うどは帽子をかむり町家の外は被を着る也
尼も是非帽子かぶりて頭を顯さず山下惣右衛門とい
ふ男京よりはじめて江戸に來り其尼の物かむらす羽
織着たるを見て驚きたり況手拭をかむりたる女など
は曾て無き事なり是守りの正敷所なり道にて火皿を
合て煙草の火を貰ふ時はこなたの煙草を一ぶくひね
りて先の人にやりて火を貰ふといふさほどにも有ま
じけれどもこまかなるを賤しめていふ成べしされど
全體の氣象はたばこ一ぶくたりとも人に損をかけて
は本意にあらずといふ所なり去によりて一二錢とい
へども算用を正し人にもやり人より取る事をも速に
するなり江戸のものは其場によりては先より來る金
ありても百疋ばかりの事いふてもやられずなど損を
して損にもおもしろ向ふの人も深く心にかげぬ故に
忘れても仕舞べし京の人は百錢といへども來べきも
のゝ來ぬは義理を知らぬものゝやうに覺て催促もす
べし一體の氣どりの合ぬゆる也

○京の丸山の貸座敷杯に諷講といふ事あり尤素人に
て諷を好む人いひ合せて番組を作り座敷を借りて諷
ふ蔭の間或は縁がはにもあれ番組をばり何シテ誰
ワキ誰など張出し置て蔭にて謠ふに諷を好ける人け
ふは丸山に諷講ありといふ行て聞んとて好きの人と
いひ合せ辨當杯こしらへて一間蔭にてあるひは縁が
はにて(其素諷を六番も七番も聞て歸ると也)これら
の心の人は人多き江戸には一人も有べからず彼の松
の内聞て居たる如き人心よりも猶堪忍強き事也これ
らを聞てはちと耻敷も思ふべき也

○よし原の初めて焼たるは明和五子年四月の初旬也
その時までありしや其前に潰れたるやは忘れたれど
江戸町に巴屋といふよき女郎屋あり(前の歌にある
めぐる紋日の巴やともゑ豊山に云々)此家にてとら
といふ女郎初て出來その末に海老や二軒並であり其
末の海老やに少將といふ女郎出來たり二軒ともに額
の内に海老やの字ありて手前の紺の暖簾のは庄七ゑ
びやといひ先のを少將ゑびやといふ少將はよき女郎
お職にてはやりたる也巴屋虎は一向客のなき女郎に
ていつ見ても見世にばかり居る女郎也其頃豊里大崎

などいふはよき女郎にてはやりたり此巴屋一軒計外の女郎やと異にして至て能相なる見世つきにて有し其頃より大上總やまた天満屋などばかりは見世のうしろ格天井の如く光りて美々しかりし巴やは長押をも付けず見世のうしろも常躰の障子を切ぬき格子の外の方に三尺の格子戸のひらきありて其中に及一人居たり入口もせまく奥へ長くはるか奥に紋もなき短き暖簾かけてあり見世の正面にさしわたし六七寸ばかりの黒き三つ巴の紋を額のやうに掛置たり其頃も古風なる見世と云へりむかしは皆かくのごとき見世のさまなりしやしらす中の町の茶屋の二階も初焼の前までは惣格子なり揚屋町の茶屋計は今の中の町の茶やの如く二階取拂ひ欄干に障子を内へたてたりよし原大全をみれば二階を取拂ふは揚屋町の茶屋に限る事なり中の町の茶屋は取はらふ事はならぬ事の様

に有と覺たりあげやといふもの絶て揚屋町衰へ中の町に勢つきたる事と見ゆよし原に限りては二階の格子へ貫を通さず長短に子を並べて外より貫の様なる木にて一面に押へ柱々へ釘かくしを丸く打つけ長押のやうに拵たる事なりしが今は皆子を通したる常躰

の窓と成れり右の如く作りたるも今も稀にはあるやしらす右豊里が頃の事なり材木屋に(居宅忘候八町堀邊か名も覚えず)表徳太申といふ者有尤豪家と見えたり太申の名を弘めたき

太申太印 此

餘りに太申染といふを作る如

×太申は三十間堀の材木屋にて和泉や甚助といひしものなるよし聞傳ふこゝにしろるさるゝ如くもつばら職名を好て夥の金を遣ひ失ひしものなりとぞ嘗聞太申ひそかに烏石に千字文を書せて太申書と落款し是を墨本に板行して賣せけりその法帖今稀に見る事あり又俳諧の樂評をせしに五點の所へ五匁銀十點の所へ十匁銀十五點へは金一分かきぬきへは小判一面を張付て景物とせし事ありといふ又淺草の境内へあまたの櫻を植て太申櫻と唱へ芝居へ頼で太申櫻といふ淨るりを作らせ又道中の雲介に金をあたへてお江戸のナ太申さまはさくらがおすきといふうたを唄はせしことあり又醫者に月々扶持米を送り門の表札に太申内何某と書くれよといへば此醫師心得て太申内の三字を篆字にかきお

のが名計楷書にて書て出せしといふ此事虚實しらす此外茅場町の樂師などへ額を奉納せし事もあり如此虚名を求めしが名の爲に産を破りて家類退すしかれども今太申を知るもの稀なり彼龜戸の鬼の禪も近頃修復の時禪を虎の皮にしかえたれば誰かは太申が寄進としるべきおのれ此春敵討仇名物數奇といふ三冊もの、草双紙を作れり是ひそかに太申が事を擬したり出版の時一覽をたまへかし

巴やの豊里に馴染て此形を豊里に着せ一枚繪にも豊里が此染の小袖を着たる所をかゝせて出す(春信頃か)芝居にては中村傳九郎が衣裳に是を(染か縫か)作りて與ふ其後龜井戸の天神に參詣せしに爺と姥との人形のうしろに鬼二つ立たる(昔より今以あり江戸砂子にも有)其鬼の禪虎の皮の場を太申染にしたり是も寄進なるべし又松平西福寺の本堂のうちに高く掛たる太鼓ありその撥面に太申の二字を漆にて書たり寄進せし上にて常におのれが名を撥にて打るゝもおかしと笑ひき

●太申龜戸天神に連歌堂を造立し高辻中納言額を給ふ事江戸砂子にみえたり太申著す所の 江島大

草紙 太申夜話等の二書は刊本にして今もたまたま見あたる事はべり

太申染もはや世上に廣まりたる頃ならんとゆかしくて呉服やに行き太申染を見せよといふに呉服やの手代知らずいかなる形ぞと問ふ太申か様の形なりとて書て見するに手代夫は傳九郎染と申すなりといひしとなん望の如くいかにも相應に名は弘まりたれど馬鹿ものとして人の物笑ひの爲に弘まりたればかゝるむだ書にも書事にはなりぬとも躰しき名は取難ければ臭き名にても金なくては取がたき事なり

○眞崎稻荷はやり出て田樂茶やの出來たるは我二十二三歳(寶曆六七)の頃なるべし鳳岡先生の會日に其はなしを初て聞けり江戸町の名主は先生の門人にて其男が別て甲子屋と申茶やの田樂はよしと申也など先生に語りしを聞けり其後大に繁榮し青樓の婦人をいざなひて遊ぶ人も多かりき向ふ島の秋葉は今信仰薄くなりて淋しけれど茶やの賑ひは替らず眞崎は神威とゝもに茶屋もおとろへたり眞崎は手前の角若竹や(後袖すりや)又甲子屋川口屋玉屋いね屋仙石屋きり屋(道を隔て)八田屋などいづれも繁昌なりき

○鳳岡先生の會日に立派なる若者の入門ありかれは巴屋なり巴屋没落の後俳諧の點者と成る宗梅といふ後淨阿後雪堂是なり點者にならぬ前は逸志といへり渠が萬句の時もと亡八なるを以て可因が氣象には甚悦ばす萬句の日も病に託して其席に出ず頃は秋なりければ祝て贈る發句に「よみ上る萬句の聲や轡虫と云やる亡八をあて、轡虫といひたるなれば世話する人甚氣の毒がりて俄に代句して其句は宗梅には見せざりしとなり可因が俠骨おもしろく侍り

○其巴屋に岩こすといふ傾城は秀たるものなりき渠はもと越後信濃あたりの深山のものにて山女術行かかりて見れば老女只一人六七歳の小女とあやしき家居に住むあり立よりて問へば此小女は父母におくれて我手に育侍るといふかゝる所にあらんよりは我江戸に連行ん我にあたへまじやといへば山奥のかゝる所にありて若我死せば狼の餌食ともならん夫いと幸なりつれ行て命を全くし給れといふ女術癖びて金貳分を老女に與へければ老女も悦びけるとなん是後に巴屋の岩こすとして全盛の君となりたるといふ事を年經て聞けり其虚實はしらす同藩の大山氏なるもの此

岩こすに逢けるに夏の頃なりしが幘の外に來りて禿を呼で水を取よせ其半吞て暑しやと問ふ大山暑しと答ふ其時その茶碗を持って幘に入りのみさしたる水のまする心かとおもふにさはなくておのれ一口吞て大山が寝たる顔に向ひてふつと霧を吹かけたり顔より髮襟のあたりまで水にぬれければ驚きて起上る岩こす笑て吞たるより涼しからんといひしとなり凡妓の氣骨にあらず一談を聞ても察すべきなり

○是は遠からぬ事にて扇屋に岩こしといふ傾城有このこしは七こしの越の字なれどもいはこすといふ名のある故に文盲に聞えてわろし墨河が心は岩こすと云名に近きをもておもひより付たるかしらねど夫は案じちがひならん新に御所に参りたる婦人に名を付よと清少納言に仰ありしを此女琴をよく彈るなれば琴柱の名どころに思ひよりてとみに岩こすと名づけしといふ事ありき巴やのいはこすも琴をよく彈て初め斯く名付たるやさもなくつけたる名にや其事は聞かず

○唱へにがと云ひならはしたる所とのと云ならはしたる所とありてをざさが原うき島が原あさちが原の

類あまたあれども何の原といふは猶多し角力取の和田原はじめは和田の原といひしが近年頃は和田が原といへりもじが關などもじの關なるをがといひならはせりされども和田が原程耳にはたゝす参議篁和田の原と小兒も覺たる事也是に限らず角力取の名傾城の名誤れる事おほし和田の原といふより和田が原といへば強く聞えてよしなどいふ評議かも知らず棧にシの字を送りたるもをかしさんともかけはしともよむまじきをまた傾城のむつきなどもをかし我若き頃すみ町の和泉や(二米屋なり)に附廻しの女郎にてまつとしといふあり松年といふ心にもあらず行平の歌に文字にて待つと聞かばといふを字のたらぬゆゑにし文字を入れて引延したる虚字なるを待としと付たるはをかしきに禿をきかばと云へり其後また附廻しの女郎出て是は和泉きと云ひ禿をとてかと云へり此歌は和泉川といふいづみのいつよりいつ見きとてかといふ事をいづと濁りたる拙しかゝる事算へも盡す

●廿年ばかり以前新よし原町丁子や抱へに新造か禿かの内にひなさきといへるがかりし或人丁子や

がもとに遊びたりし頃此名を聞てこは和名抄莖垂の部に吉舌とありてヒナサキと訓じたるは女陰の名なりあまりなる名にこそあれとてあざみわらびたりしかばあるじもはじめてそのころを得させ名をばかへたりとなりかゝる事世には多かるべし

●何某殿の家臣に設樂九二郎といへる顔はもがさの跡多くこえふとり髪はそりさげてむかふよりは法師かと思ゆ使者にて行先毎に名のりすれば忍みをふくまぬ奏者はなかりき或殿に使用して新たなるやつくりなれば壁いまだかはかず九二郎あまりに會釋するとして下りざまに脇ざしのこじりを生壁へつきいれたりされどいまだつかひのことばをものべつくさいりければ少しもあはてず事をはりてのちくわい中より疊がみを出しごしごととおしもみさやをにぎりしごきぶきにさやを引てこじりのさきとくぬぐひ二つのゆびをりてそらざまにかの穴へおしいれそこつなる義恐入るよしを謝し名はよくつくべきものに穴賢々々々

○よし原女藝者といふもの扇やかせんに生まれり歌扇た一人なりし寶曆十二年頃なり其後おひくに

外の娼家にも茶店にも出来て細見のやりての前の所にげいしや誰外へも出し申候と書たり夫よりはるか後に大黒やの秀民けんばんを立たり藝者をどり子を肩書して見世へ傾城同様に並べて客を取たる娼家もありき新町の桐びしやなどにありと覺き尤かれらほうしる帯にて廊に並び居たり藝者といふものはなく傾城のうちにて三味線をひきてうたひし事なり多分新造也三味線の成る新造を揚よ杯ひひてひかせたる事也夜見世にても皆うたをうたひて三味線をひきたてたり是はむかしよりのならはしにはあらず其頃風と初めたる事かと覺ゆ江戸町一丁目にはあまりなし二丁目は此事多かりし中にも角窩屋静玉屋などは必ありき玉屋の巴といふ女郎見世にて琴ひき三三人三絃にて高々と奏せし事みなく見たりき

○我十二の時かとおもふ市村座にて淀やの狂言を見たり若大夫龜藏淀屋辰五郎淀屋古庵中島三甫右衛門(天幸か親重笠也)あねはの平次中村助五郎(今魚樂が父也)梅幸女形の時にて刀屋半七の若衆形をせり山城國伏見の喧嘩三十三年忌なりとて水仕合の大たてありき相手は馬士にて澤村喜十郎(喜七なり)大谷

龍左衛門(二代目也)おはなは澤村重の井(後小傳次其後森田勘彌後は十郎其子森田勘彌は今の坂東又九郎也)おはなを葛籠の中へ隠して荷に付て旅をする夫をかぎ付られたの大喧嘩と成たるやうなる事なりあねはの平次身を遁んために葛籠を明ければおはな出る故お花を追やりて其葛籠へ入る半七夫を知らずにお花と思ひ舟にのせて中川の御番所を通る是切幕也船頭は親音八也關の番人は宮崎十四郎水木九十郎なり荷物を改て中を見んといふを梅幸はお花と思ひ深く否むを番人きかすに刀にて葛籠をつけば血流れ出る其上にて出たる所お花にあらず魚樂が出るといふ狂言也中川とあらはに云はねと幕明きは通ります通れと云て行所杯全く中川を擬したるなり今なれば是非呵らるゝ狂言成べし又其頃の狂言なりき萩野伊三郎など出大谷鬼頭(後廣治駿河や十町が事なり)さつまいも賣にて出しなり其道具立は樂研堀の不動にて其頃はやり出しの頃なるべし幕が明くと口上人出て東西々々此所は樂研堀不動の體にてござります左様に御覽被下ませうと云けり是等も律義成事也今はかゝるやぼな事は無き事なり

○此程見せ給ひし番附のうちにも見えたる嵐和歌野が道成寺の狂言鐘入妹背の條といふ淨瑠璃にて小松川の文字太夫志妻太夫造酒太夫也龜藏和歌野が袖を火鉢にくべむとする時切幕の内にてなうゝ其袖焼給ふなと聲をかけて誰が出ると見れば常盤津文字太夫長袴にて花道を出舞臺へ入り三尺計の衝立へひつたりと背中を付るとカチ／＼と衝立廻りて和歌野幽靈にて出る夫より狂言ありて文字太夫が淨瑠璃となるなり何故文字太夫が出たるや其故をしらす其等は昔と今は中頃の氣取を考べき所なり又夫より二十餘年も過ては親王様へといふ手拭を親玉様とよみて團十郎が所へ持参したちまち悪事の顯るゝと云狂言などは茶番狂言にて嬉しがらし見物も有しが其實は見物を馬鹿にしたるといふもの也

○幕明の前に出ていふ口上今は其男の姿を見ると口上と云て先譽るなり扱其口上を聞く人はなし口上人は只役割を成たけ早口に紙を目紛らはしき様に巻込巻込早々によみて入る是も彼の今の人は面倒がりて早く幕を明させて見たき心なれば其心を察して早く讀て仕舞ふ事を善とす寶曆頃までは左にあらず中に

も市村座の口上いふ親仁は上手なりと云はれ勘三の下手なり杯評しき其市村座の親仁がよみかたは東西々々とあたりから云せて高うは御座りますれど是より御断を申上ます則此所は梅幸榮嫩曾我第一番目の三立目役人の次第を御耳にふれまするやうに御座ります右大將頼朝公市川新四郎と如此靜に切り／＼によみたりわや／＼したる見物口上云出ればしづまりて聞て居たる事なり今よりは人がよいといふべし○是も寶曆の頃勘三の顔見世かと覺ゆ右の如く口上を云かゝる時頭巾をふくめんにかむりたる男切落より出口上人の脇より舞臺へ入らんとするゆゑ口上云谷めてさゝえてとめるをとらへて殺し頭巾をとれば中村助五郎にてわツ／＼と聲かゝる其時紅の器を出し左の手に鏡を持顔を眞赤塗口上人の上下をはぎて着し死骸を幕の内へ押やり其口上の紙を取て役人改名の次第をよむ衛士の五郎に中村私杯とよみ何の誰に市川海老藏と讀てなめらさんぼうと云てあたまをかきたり是等をも見物嬉しがりたれどもなに／＼其袖焼給ふなの類にてわからぬ事なりき此助五郎が役もし淵部伊賀守なりしやちと胡亂なり

右の類思ひ出せばいくらも有べけれど一つも面白
き事もなければ御退屈なるべくと是迄にいたし候
又何ぞをかしき事思ひ出し候はゞ跡より可入御覽
也

俊江雅君

月成

立花侯臣西原市助初名新左衛門號松蘿館

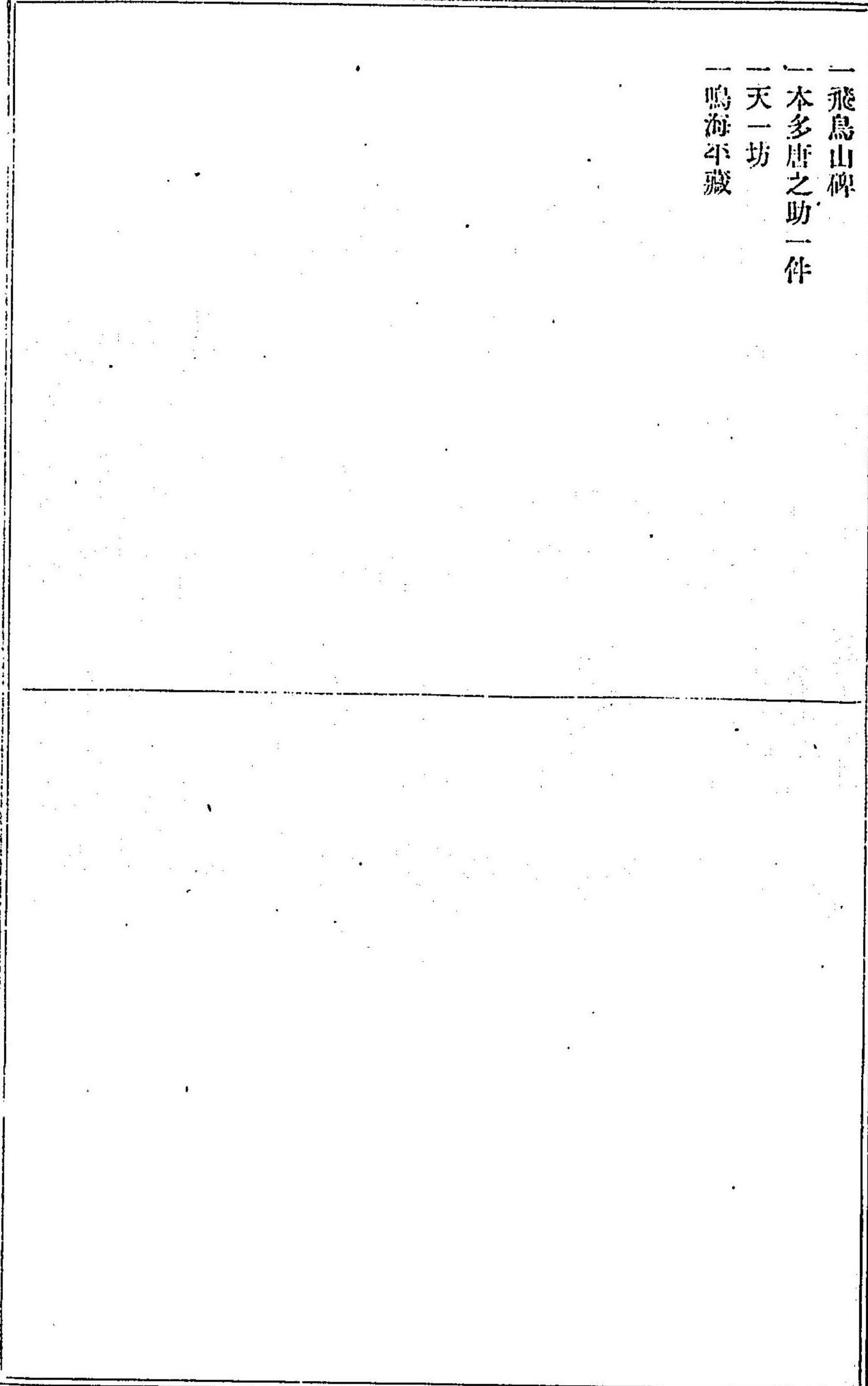
瀬田問答

目次

- 一新武藏
- 一常盤橋を昔は大橋と云
- 一淺草寺の繪馬
- 一川村瑞軒の事
- 一總泉寺千葉氏墓
- 一虎門の事
- 一山猫
- 一裏付上下の始
- 一白山御殿白銀御殿の事
- 一玉川上水の始
- 一久米平内
- 一濱御殿
- 一高割辻番
- 一元旦日蝕
- 一本所屋敷割
- 一四ッ谷新屋敷
- 一公人朝夕人

- 一神田川堀切
- 一伊達騒動
- 一伊賀上野敵討
- 一由井正雪
- 一新井白石
- 一柳澤氏
- 一太田の名字
- 一牛込御徒町
- 一遊女高尾
- 一山鹿甚五左衛門
- 一大猷院靈屋炎上
- 一根來組
- 一英一蝶
- 一於營中元服
- 一室新助
- 一青木文藏
- 一軍談講釋の始
- 一竹之丞寺
- 一水泳稽古
- 一歌學者北村季吟

- 一 飛鳥山碑
- 一 本多唐之助一件
- 一 天一坊
- 一 鳴海平藏



瀬田問答

太田 覃問
瀬田 貞雄答

一 兩國より東の方本は下總國葛飾郡なりしを元祿の頃豊島郡に被改て武藏國に屬せしと云元祿は何年に候哉

答曰何れの書留にも元祿の初と計記して慥に年月を記さず候此事其所の百姓杯へ御觸有て本所を武藏と書出候事御郡代伊奈氏の舊記杯には慥に可有之と數年心掛候得とも手寄無御坐打過申候但御書面には豊島郡に被改候よし御認候へ共相違に候中川を堺として(巴王曰中川にあらず利根川なり庄内二合半東西葛西領も此時より新武藏となる)西の方(則本所深川也)を武藏の葛飾郡と唱へ東の方を下總の葛飾郡と申せとの事にて武藏下總ともに當時葛飾郡はあるは此故なり

覃後按本所中の郷林諸鳥(鹽瀨和介)別莊の庭に建る碑有其文に曰萬葉集十四下總國歌云

爾保村里能可豆思加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之伎乎刀爾多氏米也母

葛飾郡本下總國也貞享三年丙寅春閏三月割利根川西屬武藏國云天明二年壬寅冬十月林居士諸鳥得陸奥國牝鹿郡石建之

重棟曰葛飾郡隅田村木母寺の鐘の銘に豊島郡とあり一たび豊嶋共唱へしか又豊嶋の郡界故誤りしにや此鐘の銘は近衛信基公の文なり

一 常盤橋を本橋はいひし故新大橋の名もありと云何の頃より常盤橋と名付られしにや林春齋の湘秦行記は明曆二年丙申四月上京の記なるに常盤橋の邊まで細谷重時等が送り來るを返してとあれば餘程久しき事にや

答 大猷公の御代正保の初大橋を常盤橋と被改候由申傳候是も年月慥には相知不申候拙者所持の寛永十三年の江戸繪圖には大橋と有明曆三年の繪圖に常盤橋とあれば正保に改められし事正説ならんか但正保四年改板の武鑑には伊奈半十郎どの常盤橋の内と記し候へば正保も初の内改られ候と被存候

一 淺草寺の繪馬草をはみ候由申傳へ候畫にて俗に古法眼と申候はいか

答 古法眼が筆にては無御坐候狩野主馬尚信が筆に相違無御坐候草をはみ候と申説も據有之候尙信數年の懇望にて黒川氏より馬の骨相の秘説を請其後馬をえがくと云初ていきたる馬を畫き候とて悦び奉納せし繪馬の馬なれば諺には彼馬いきてゐるなど、申せしより草をはみ候説も起りし哉に候

重棟曰繪馬筆者不知寛永の者のよし裏に確としるし有之由の説あり

一 川村瑞賢川々の水を治めし事人皆知處なり何年頃に候哉

答 川村瑞賢は材木を賣て渡世せし商人なり自ら入道して川村瑞賢と名付悉才ある者にて元祿十一年三月七日新規被召出高百五十俵被下若年寄支配被仰付大坂表川々御普請被仰付候後又歸俗して川村平太夫と云

覃後按天和二年癸亥二月稻葉石見守彦坂壹岐守大岡備前守畿内の河道を巡察し勘定官三人伊奈半十

郎手下の吏二人并都下に住る川村瑞賢なる者を遣し便宜を計らしめ貞享四年丁卯五月迄都合五年にして川々の事成就せし由瑞賢が畿内治河記に見えたり又瑞賢が著す所漢家歴代治河の事一卷あり名付て疏論提要と云又本朝六國史の内水利の事を集て一卷とし名付て本朝河功畧記と云後其功により召出されしと見えたり右二部の書家に藏す又奥羽海運記一卷あり又湯原氏日記に元祿十一寅年四月十日大坂表川通見分被仰付之

御小姓組松平豊前守組 御目付

永井喜右衛門 中山半右衛門

瑞賢

川村平太夫

同十四日の記に去十日大坂川通見分被仰付候先年大坂川通御普請川村平太夫被仰付候其後此度被仰付候により見分被遣之由

一 小田原記に武州石濱城主千葉次郎内に須藤と云者木内宮内少輔家老峰月内藏助と云者をねらひ石濱の總泉寺と云會下の寺の中にて行達差違へて死せしとあり今の端場總泉寺成べし今俗總泉寺に千葉

介の墓ありと云は此武州石濱の城主千葉家の墓に候哉

答 御書面御察しの如く墓は石濱の城主千葉守胤の墓なり是を江戸砂子に前板の誤りしを後編に書改候なり彼墓左の如し

總泉寺殿長山昌懃大居士 弘治三年丁巳十一月八日卒 桓武天皇廿四代千葉守胤孫

重棟曰武州豊島郡下赤塚村に千葉の城跡と云あり今御林なり此城も守胤の城なり練馬赤塚殿と稱せしと云同村に松月院と云禪院あり守胤は此貞秀が近き族ならんか

松月院殿南州玄參大禪定門

永正三丙寅六月三日千葉介貞秀

一 虎御門の御櫓焼失後出來せずと云何頃の火事に候哉

答 享保十六亥年四月十五日西北大風にて午下刻目白臺夏目吉五郎宅より出火右近邊不殘關口古川町改代町赤城邊松平兵部酒井讚岐守中屋敷の邊組屋敷寺々牛込寺町中若宮邊山伏町御徒町富士見馬場邊逢坂上下町御堀端通焼失同刻過麴町二町目横町野一色外記表物見より出火伊庭伊十郎久志本左

京東後長屋迄燒此所より六七軒東頗へ移り巨勢大和守宅より麴町一丁目御堀端迄燒澁谷隱岐守より北の方屋敷は殘る南側麴町一丁目二丁目御堀端火消屋敷邊御堀端通り不殘井伊掃部頭松平安藝守同筑前守前後の衆共に皆燒虎御門渡御櫓とも燒落内外の大名衆悉く燒失内藤能登守邊不殘但櫻田にて上杉家計殘る櫻田御殿外櫻田の内日比谷御門外御成橋御門芝田川町邊火先は海邊へ燒拔但愛宕下中不殘愛宕の社家より南の方は殘る暮六時過消る

右出火に虎御門燒失後御再建無之候

覃後按小松軒曰此御門の材木切組有之候處有徳公御尋有之此御門は西の持退の門なり首實檢の門なり堀重ありやなきやと御尋有ければ青山に住せる御大工棟梁の隠居無之由を申上其材木猿江に有て請負の者毎年八十兩づゝにて覆致置候處近頃火事の節餘の御普請に御用と云々

一 江所の神社の地に山猫とて隠賣女を置候事根津など始に候哉何比初り候哉

答 初めはをどり子にて橘町其外所々牛込行願寺

邊の方の類ひより事起り候哉に候寺社境内にて猫の號を顯はし候は元文の初より寛保年中へかけ專に覺申候

一裏付上下並に色の替りたる肩衣を著し候事何頃より初れるや享保の頃よりなど申傳へ候は實説に候哉

答 裏付上下の始數年糺候へ共慥成説を得ず候凡大猷公の御代かと被存候享保の頃と申候もことわりなき事には無之當時繼肩衣など、申候ても夏かた衣に裏を付用ひ候は有徳公の御代享保の初被仰出用ひ候事の由申候

一白山御殿白銀御殿の始終いかゞに候哉

答 白山御殿地は大猷公の御代松平右馬頭殿へ(常憲公の御事)御下屋敷に被進候事也嚴有公の御代添地を被進たる事寛文元辛丑年三月廿三日なりと御日記に相見え候天下相續の、ち御樂園などに成し也白銀御殿も右同様松平右馬頭殿へ(清陽院様御事)御下屋敷に被進之候是又左馬頭殿御嫡男文昭公天下御相續の後御樂園などに成しなり一玉川上水出來たるは大猷公の頃よりと申傳へ候年

月何頃の事に候哉

答 東日記曰承應四年の條下に江戸の西に清冷水あり是武藏の名所なり北に流る水を江戸へ引渡し諸民の渴を助させ給ふ鈞命にて山を崩し岩をうがち若干の田畑を費し多くの年月を経て今年中に成就し長流城下に來ると云々是玉川上水なり如此侍れば大猷公の御代に起りて嚴有公の御代に漸く成就せし事と見えたり

一仙川上水の儀中興よりかゝり候事の所自今相

止候間其段向々へ可被申達候來十月より上水取不申筈に候間可被得其意候

寅八月

一久米平内の石像淺草寺辨天の境内にあり何もの、像に候哉

答 江戸砂子などに出す所みな妄説なり氏久米にあらず兵藤平内兵衛なり平内兵衛が妻は久米氏の娘なり平内兵衛菩提寺は駒込鰻繩手大智山海藏寺なり彼寺に青き生石の夫婦同念の石碑あり

無關一素居士 兵藤氏

松室盤壽大姉 久米氏

如此切付あり併此碑平内存生の内建置しを死後に死去の年月を切入されば死去の年月知ざる所淺草の石像の後ろに是また同念の石碑あり是に見えたり

無關一素居士 天和四癸亥年六月六日

是は追て切入し時の書損なり

癸亥は天和三年なり

松室盤壽大姉 貞享二乙丑年十二月十三日

かくの如し

耳底記曰平内兵衛は青山主膳と云人の家士にして強勇の者なり今此像淺草觀音地内にありと云々ある書には人切にて赤坂に住し千人を切て供養をなし鈴木九太夫入道正三の門人と成て二王座禪の法を修行せんと有是正説ならん

一御濱御殿は何頃に出來候哉寛永年中の江戸繪圖などにはみえ不申候様に覺申候

答 濱御殿地甲府綱重卿へ(清陽院様御事)進せられし御下屋敷なり坪數七萬五千三百八十坪内一萬七千五百坪海中のよしなり凡慶安承應の頃被進

候事と被存候寛永の繪圖には無之筈に候綱重卿御誕生正保元年甲申七月二十四日也

一高割辻番は何頃より初り候哉

答 高割辻番所は寛永十三年に初て大小名共に小路小路に辻番所を建て其外町中端々木戸を拵へ番人差置べき旨被仰出候事前撰集に見えたり定て萬石以下の分は此節諸懸高割に成候事と被存候

一來午年元日日蝕なりと承候公にて御禮御坐候哉いかゞ

答 來午正月元日日蝕皆既午の一刻西の方よりかけ初め午六刻甚しく未の二刻南の方に終る如斯に候へば御禮明七ツ時より初り蝕已前退散の事と存候

正月元日日蝕の例

元祿五壬申年 未申の時食七分半

同十四辛巳年 卯辰の時食八分半

享保四巳亥年 酉の時食二分

明和四丁亥年 未の八刻より申の刻迄

如斯に候右の内元祿十四年の蝕御禮刻限に候其節も食終りて辰の中刻より御表へ出御右の外は皆

御禮の刻限の外なり右の趣を以相考へ候へば食の内は迎も出御は無之來春も食以前御禮相濟候積未明より御禮始り候と被存候

一本所の地武士屋敷に成候事何頃候哉

答 本所邊屋敷に被下候事古繪圖を以相考候に明曆三年回向院へ地面被下候砌より下屋敷など被下候事も可有之候へども大川に橋もなく只渡し船計にて不通用故居屋敷など被下候儀は無之萬治二己亥年初て兩國橋を被懸候て已來追々屋敷被下候趣に相見え候しかし寛文十年の圖延寶八年の圖などにも道割のみにて屋敷は甚少く御座候

一四ッ谷新屋敷はいつ頃ひらけ候哉

答 四ッ谷内藤新屋敷邊武家屋敷に被下候事は又古繪圖を以相考候に貞享元祿の頃より追々被下候趣に相見申候

一公人朝夕人は何を勤仕候事に候哉

答 公人朝夕人は御目付支配にて當時無役同意の事に承及候此勤向は御上洛の節など御供被仰付御參内の節御束帶にて御小用難被遊其小用筒

同人

同日 家督無相違被下置神田川堀切被仰付候

松平龜千代

一伊達騒動記の實説いか

答 正説傳り不申候

一伊賀上野の敵討の實説いか世に行はれ候殺法轉輪と申俗書の通りの事にては御座有まじく哉

答 正説傳り不申候

一由井正雪が實説いか根元記叢海雜錄など申候俗書は定て偽多き事と被存候

答 正説傳り不申候

單曰ある人此書付を示す是由井の實説成べし故にこゝに附録す

慶安四年卯八月十日叛逆人御仕置

丸橋忠彌 長山六左衛門

渥美次郎右衛門 茅原五右衛門

茅原七兵衛 酒井河内守右衛門 櫻井彦兵衛 郭龍

彌五兵衛 久兵衛 權十郎

右十人正雪徒黨

(銅の筒なり)を持役目なり已前は日光御社參の節も御供にて御宮御參詣御束帶の節彼御筒を持候様承傳候得ども是も去る申年御社參の節は參り不申候やう及承候此外勤役筋何も無之者のよし及承候一神田川何頃出來候哉

答 神田川堀切被仰付候は萬治三庚子年二月十日松平陸奥守綱宗へ被仰付同年三月四日に鐵初にて二三年も懸り出來申候此御用最中綱宗遊宴に長じ三浦屋二代目高尾を手討にまで被致隠居閉門被仰付右の堀切子息龜千代へ被仰付候

御日記面左の通

萬治三年二月十日 牛込より和泉橋迄船入

堀切御普請被仰付候

同年七月十六日 逼塞被仰付堀切御用は可相勤旨

同日 上使太田攝津守を以閉門被仰付之

同年八月廿八日 隠居被仰付猶又閉門可能旨

同人

正雪兄 岡村彌左衛門

同人 辰之助五歳

同弟 岡村彌兵衛

正雪伯父 次右衛門

彦兵衛父 櫻井三太夫

正雪 女 房

彌五郎 母

久兵衛 母

市郎右衛門 同

加藤龍之助十五歳

彦兵衛 櫻井三右衛門二歳

權十郎弟 吉十郎

忠彌召仕 八 藏

右七人死罪

大岡源右衛門忠彌宿いたし候に付父子三人死罪

右二十五人磔

市郎右衛門 同

加藤龍之助十五歳

彦兵衛 櫻井三右衛門二歳

權十郎弟 吉十郎

忠彌召仕 八 藏

右七人死罪

大岡源右衛門忠彌宿いたし候に付父子三人死罪

(茂按遠嶋也後子共被召返しが文化の比御代官を勤し大岡源右衛門は其子孫と云り)

叛逆人正雪忠彌諸事訴人

五百石 浪人 林理左衛門

三百石 權之充弟 奥村八左衛門

三百石 奥村七郎右衛門

銀百枚 田代次郎左衛門

米二百俵 弓屋藤四郎

本知五百石 松平伊豆守足輕頭 奥村權之丞

今度改加増伊豆守より給之

公儀より大判十枚 時服二被下

右の通御褒美被下之

一白石先生新井筑後守昇進被致候次第いかゞに候哉

答 初は高三百俵なり新井勘解由と云御儒者なり寶永六己丑年七月六日二百俵御加恩都合五百石地方に被成下正徳三辛卯年十一月十一日朝鮮人來朝御用掛相勤候に付諸大夫被仰付同年十一月十六日五百石御加恩都合千石を領す或人の云白石先生若

年の頃大にとら者にてもてあまし^テ入差候處圈内にて學問致し見申度由願にて段々書物あたへ候へ共文盲故文字よめ不申候に付字引をあたへ吳候様願はれ如斯圈内にて學問し善惡自得ありて其後昇進被申候よし承り候

一元祿の頃柳澤美濃守殿昇進被致候願いかゞ

答 常憲公館林に被爲入候節小祿にて被召出候人に御座候父は柳澤刑部左衛門安忠元高百六十五石柳澤彌太郎と館林御分限帳に相見候即此彌太郎後に出羽守保明其後松平美濃守吉保是なり御家御相續の節被召運御小納戸被仰付天和元辛酉年四月二十五日三百石御加恩同四甲子年正月十一日二百石御加増都合千三十石と認め有之候貞享三丙寅年正月十一日千石御加増此節は柳澤出羽守と申候元祿元戊辰年十一月十二日喜多見若狹守列に被仰付一萬石御加増同三庚午年三月二十五日二萬石御加増同年十二月二十九日二本道具御免同五千申年十二月十四日三萬石御加増同七甲戌年正月七日一萬石御加増川越城地被下同十丑年七月二十六日二萬石御加増同十四辛巳年十一月二十六日

御稱號御一字拜領改松平美濃守吉保同十五壬午年三月九日二萬石御加増寶永元年十一月二十一日五萬石御加増昇進被申候趣右の通御座候右昇進に付ては色々の説實録など、申書物見候儀も御座候得共慥成事無御座候自然に御意に入被申候處實録と被存候何様わづかの内に大祿に成被申候當時田沼主殿頭殿など何が格別思召に叶候と申儀も無御座候御身近く被勤候奥向の衆は乍

恐上の御氣性も能知りて被居候儀に候へば人々昇進は油斷は有之間敷候得共主殿頭殿につらく人も無之候へば角のごとく衆に勝れて昇進被申候味ひは此故と申譯も無之自然にして理外かと被存候

覃按武家諸録曰柳澤出羽守保明貞享二十二月十一日任叙氏名乗不知とあり又武家補任類聚には小異同あり左に記す

武州川越(領九萬二千三十石)刑部左衛門安忠嫡男彌太郎奉仕館林綱吉公御小納戸役勤御本丸へ入御已後二千三十石を領す貞享二年十二月二十八日叙爵元祿元年九月十二日御側牧野備後守列一

萬石被下同三年三月有加倍同十二月二十五日叙四品同七年正月十八日七萬三千三十石を以川越城主被仰付同十一月侍從同年有御加賜而任左少將

一太田の名字出所むさしの國多摩郡小郷こひがくほより出る侍なり姓は藤原朝臣と家傳書に申傳へ申候戀が窪と申候は何れに御坐候哉

答 貴家御名字出所多摩郡戀が窪の儀吟味候處府中六所明神の十七八町も北に當り申候略圖別紙認懸御目に候是は尋候迄も無之隨分相知候所にて候由(地圖は略す)

覃後按道與准后廻國雜記に曰此關をこえて戀が窪といへる所にて

朽はてぬ名のみ残れる戀がくほ

いまはたとふも契あらんや

此次にむねをかいへる所あり曰ほりかねの井見にまかりてよめる今高井戸と云

係はかたるにのこるむさし野や

ほりかねの井に水はなけれと

重棟曰戀が窪村君が松の事村老の口碑に残れるな

と古松軒が四神地名録に委しく記す

一牛込御徒町元は市ヶ谷牛小屋の邊にありしが今の所に移りしと古老ども申傳候何の頃にて候哉

答 牛込御徒町市谷牛小屋の邊に有し事を傳へ承らす候承應年中か明暦火災の砌かに牛込當時の所へ引移候哉に被存候富士見馬場などは元御廐にて今の松下權兵衛屋敷拜領候節は彼御廐の御普請其儘拜領致し候由に候其頃までは田安御門内に屋敷有之住居せし由に候是は田安御門内に明暦三年の大火に類焼後田安御門内屋敷被召上富士見馬場にて拜領の由申傳へはれば此砌の事ならん歟

一新吉原三浦屋遊女高尾六代程も續き候哉初代よりの傳いかい

答 高尾が傳はよく原武太夫盛和委敷候ひき傳へ請候筈にて終に不果残念に候淺草山谷寺町春慶院に轉譽妙身と有之碑萬治二己亥年十二月五日と切て辭世にさむ風にもろくもおつる紅葉哉とあり塔の屋根 此紋切付たる四面塔の碑は全く初代の高尾に候是を土手の道哲にて似せ碑を造り二

代目高尾と稱し人を欺きしを不吟味にて江戸妙子に二代目と記し候なり

單後に諸書を參考して高尾考を著す

一軍學者山鹿甚五左衛門事淺野内匠頭へ御預被成候由大石良雄など其法を學候由何頃御預に被成候哉且山鹿氏生國何れの人に候哉

答 寛文六十年十月三日御沙汰書に浪人山鹿甚五左衛門(年五十)任我意聖學異見の書籍作之不屈に被思召古主に付淺野内匠頭へ御預被仰付候の旨甚五左衛門を北條安房守宅に招き御目付嶋田藤十郎列座右の趣安房守申渡之甚五左衛門は内匠頭家來へ渡遣す但屋敷は只今迄小日向に罷在候とあり元は安房守軍法の弟子今は不和の由儒學は道春弟子なり聖教要録と號書作之右の外委細は不存候

單後按 先達て蒙御各候山鹿甚五左衛門御免は延寶三己卯年六月廿四日 當四月御法事に付御預御免淺野又二郎へ御預山鹿甚五左衛門然ば十ヶ年程の間なり

搦檢校曰山鹿氏の胤は江戸諸侯の家三軒に残れりと云へり所謂松浦家藤堂家今一家は津輕家など、か中にも松浦家の家老山鹿甚之丞は甚五左衛門弟の家なりと云

土津靈神言行録曰寛文六年丙午十月三日置造言者山鹿甚五左衛門於播州赤穂先是靈神謂老中曰當世有造言者是惑世誣民之賊也可嚴禁之老中頷之

一上野大猷院様御靈屋焼失何頃に候哉

答 年代炎上鑑曰元祿十一戊寅年九月六日新橋南鍋町より出火千住掃部宿に到るなり南風甚敷上野御佛殿炎上す(横四十町長三里程)此日上野勅額江府へ下着す此外委敷留相見え不申候

一 根來組與方同心の來由いか

答 根來組の儀駈と相糺置不申候相知れ次第追て可申進候

先達根來由緒御尋の處不分明故不申進候處荒増承糺候處左之通御座候

根來組同心衆家筋は紀州根來山法恩寺の衆徒にて三河御陣の節軍功を顯はし神君御當地へ御歸

陣の砌御供致し夫より中の御門勤番被仰付出家にては如何敷候故總髮に被成候由右同心衆右法

恩寺開山上人の懸物所持致居候由根來同心山本又三郎方より此趣申來候なり 一英一蝶初は多賀長湖と申候由大嶋へ被謫候年月何頃に候や

答 一蝶事書留無御座候猶又可相尋候凡元祿寶永正徳時分の者と被存候 單後按に古今人物志英一蝶姓多賀名信香字曉雲稱曉雲堂北窓翁號一蝶又稱篋笠翁又號潮湖齋攝津人以石州侯命師事狩野安信意匠運筆巧妙遂作一家承應三甲午年生於攝州有二子長男信勝長八次男源内享保九甲辰正月十三日夜沒享年七十一初居深川長堀町葬東武麻布二本榎承教寺内顯乘院

辭世

まきはらすうき世のわさの色とりも ありとや月の薄墨の空 直政按一蝶三宅嶋へ被流候は元祿十一寅十二月なり時四十六なり表徳和央吳服町一丁目新道に住す

寶水六丑九月九月御赦免夫より深川に住す
一細川家坏於營中元服いたし候此外にも此通り家筋
誰々に候哉

答 簡様の儀も古書に折節見當り候儀も御座候元
和日記に曰元和七辛酉二月十五日奥平美作守信昌
様松平攝津守忠政の子今日於御前元服賜御諱字
松平飛騨守忠隆と號左文字太刀拜領右の外にも
有之候は覺申候得共差當り相見え不申候
一加賀の儒士室新助被召出候はいつ比に候哉

答 室新助父は備中生國の醫師にて室玄朴と云後
に江戸へ來り天和三癸亥年十一月二十四日病死也
新助は江戸にて出生寛文十二壬子年松平加賀守殿
へ被抱其後文昭公御代正徳元辛卯年三月十五日
御儒者に被召出二百俵を給り席は寄合の跡御醫
師の上へ着座可致旨被仰付有徳公御代享保四己
亥年九月十八日八代須河岸高倉屋敷へ罷出講釋可
致旨被仰付同乙巳年十二月十一日西九奥儒
者被仰付御役料二百俵被下席は御小納戸の次
御醫師の上へ被仰付同十九甲寅年八月十四日病
死今此曾孫室孫次郎小普請組坪内左京殿支配な

り
但高倉屋敷は今の笹本鞆負屋敷なり
重棟曰今坂部山城守屋敷となるなり
一青木文藏被召出候年月いつの頃に候哉甘藷も此節
ひろまり候と承傳候

答 文藏事尋出置相知次第可申進候さつまいも元
文寛保の頃出申候
椿亭按青木文藏は元文四年三月八日被召出被仰
渡の趣左の通

浪人儒者
青木文藏

右學問宜敷自分編集の書物其外古き書物を取
し度々差上之自今も右の筋御用可相勤旨依之
十人扶持被下之御留守居支配申付候旨於焼火間
本多伊豫守殿被仰渡之
覃按敦書命を蒙りてさつまいもを種る事を家牒と
壽藏銘と載る所の年同じからず今併せてこゝに附
入す

青木敦書壽藏銘
碑右

享保二十年青木敦書蒙命種甘藷因人呼予曰甘藷
先生甘藷流傳天下無俄人是予願也今作壽塚曰甘
藷先生墓

碑左
君諱敦書字厚甫源姓青木氏號昆陽元祿十一年戊
寅五月十二日生明和六年己丑十月十二日終壽七
十二葬于下目黒村別墅南(君爲儒臣賜葬地於此
故也

家傳に曰其先攝津國多田社の神職飯倉權守末國が
孫青木半右衛門末官處士となり江戸に住す是文藏
敦書が父なり文藏初處士たりし時蕃薯考其書の國
字譯を著せしによりて上聽に達し享保十九年三月
小石川の御樂園において試に蕃薯を作らしめ又伊
豆七島佐渡等へも教て作らしむ其蕃薯の書は官板
をもて世に行はる元文四年三月被召出月俵を賜ふ
五年九月旨を奉じて甲州に至り古き書物古文書の
類を尋ね後また此事によりて多摩郡秩父郡金澤其
外相模伊豆三河遠江信濃等にも行延享元年紅葉
山火の番と成四年四月評定所儒者と成月俵を改め
て廩米百五十俵を賜ふ寶曆四年西城の御婚儀を賀

する詩を獻じ時服二つを賜ふ此後嘉儀ある毎に此
例に従ふ明和四年二月御書物奉行に成六年十月
死

一今の講釋師をむかしは太平記讀と申て大平記古戦
物語をのみ講釋いたし候處享保の頃瑞龍軒志道軒
など願ひて今の三河後風土記などよみ候事始候由
承傳へ候左様に候哉

答 被仰下候趣に可有御座候瑞龍軒は相願候儀
と被存候志道軒は願候儀には有之間敷候子細に淺
草馬道大長屋と申に住宅申候其頃あの邊に拙は懇
意の者御坐候て承り候處店主より書上には志道軒
と申氣違坊一人と書上有之由咄承り候右の趣は
講釋致し候内にも種々雜言など申候事右答めなど
有之節いかいと存じ氣違と書出候由物語承り申
候右志道軒墓は淺草勢至堂金剛院に有之墓の寫も
致置候と覺申候
追て彼墓の圖尋當り候まゝ記上候

正徳二年、
右ノキ妙通信女五月廿六日
延享五戊辰
左ノキ順覺信士四月三日

明和二乙酉三月七日

梵 一無堂榮山大徳

妙光信女

一竹之丞寺の由来いか

答 右者安永の昔の頃自性院の和尚と心安くして度々参り直に物語を承り記置候まゝ則右一帖懸御目候

開山は七代目 本所登川通龜井戸村 市村竹之丞也

自性院略縁起

抑當寺は元境内に鎮座ある所の稻荷の別當職なりしかるに吹屋町歌舞妓狂言太夫市村竹之丞若年にして太夫元となり幼少より佛乘に入て自性院の弟子と成頻に天台學をなせり十八九歳の頃は狂言も上手ながら手に付かずたゞ自性院へのみ通ひて親族の輩へも兩度迄出家得度の願有ける故一時も早

く妻を迎へてほだしもてる身にならば思ひ止りもやせんと色々諫むれ共終に承引せず二十二三の頃又願けるは此ごとく今佛乘に入迎も家職の狂言も手につき侍らねば甥(茶屋某の甥河口宇左衛門也)をもらひ養子として太夫元を譲り隠居仕たしとぞ願ひける今は親類もてあまし是非隠居と成頓て日光御門主の御剃刀をいたゞき得度をうけ京都叡山に登りて勤學し段々出世して終に法印權大僧都阿闍梨の官階を給り叡山の宿坊安住院の住職となれり夫より後年に及び江戸に於て先師の自性院の毫ぬれば一度古郷に赴き養育仕度と御門主へ願ひ出るにつき御許容ありて隠居被仰付けの故急ぎ江戸に下り自性院に入りて諸堂悉く再建し或は百姓地を買求て寺領のごとく附屬し終に先師入寂以後自性院の後住とはなれり是の日光御門主の御意に叶て上野へもひたすら召れ剩新宮の御師範と迄被仰付けの故歸依の人多く寺中にて減罪もいつとなく執行けれども御門主の御威光にてたれ答る人もなく終に寺とは成ぬ因て此自性院を以て當寺の開山と稱し今以て安住尊師と唱て木像を安置し

尊敬す希代の名僧なり寂滅以後遺骸は本堂の下に葬て今に其石碑本堂の内安住師木像の下の袋戸の内におり其脇に其養子(市村宇左衛門初名竹之丞)富士見西行の木像あり是等の故に竹之丞寺と云々

一御徒方水泳稽古いたし候事何頃より初り候哉大猷院様御代下乗橋にて水泳上覽被遊候よしなど申傳候享保年中有徳院様中川御番所において初て上覽被遊候節私祖父太田源八など罷出候其後は連綿として書留等も御座候へ共初の儀相知不申候

答 正保四丁亥年六月廿五日大猷院様角田川へ被爲成御船にて御遊御供の面々へ水練被仰付此砌堀田加賀守殿を以御徒頭衆へ被仰渡候は御徒の輩水練達者稀なりと被思召候是常に水稽古不致候故なり自今已後毎年夏中は川端に小屋を懸非番の者は毎日泳を稽古可致旨被仰渡候是より夏御徒方水稽古初る右の趣前撰集に有之候

單後按御徒今井與十郎舊記書留寫

正保元甲申正月廿五日大猷院様龍の口より御乗船角田川筋へ御放鷹の節於川端雁御拳にて被爲

合候處御鷹共川中へ落候御腰物番本目權之丞大小を脱ぎ川中へ遊び付雁を帯に挟み御鷹を左の手に居上右の手計にて遊び上候に付御機嫌快然暮時還御翌二月朔日權之丞被爲召水泳等心掛候段神妙に被思召爲御褒美金三枚時服二ツ被下之且御老中堀田加賀守殿を以自今已後御旗本の御番衆年若の面々并御徒の輩水泳不可怠の旨被仰出候

正保四年丁亥六月九日大猷院様角田川筋へ御船にて被爲成候節於淺草川端假屋を建御供の面々へ水泳被仰付御近習外様并御徒方まで水泳上覽畢て還御
重棟曰正慶承明日記本目が水練の事を記す
一歌學方北村再昌院季吟より初り候哉

答 上代は御家に歌學者と申ものも無御座候大猷院様御代などは鳥丸光廣御被召呼一兩年づゝ在江戸致され御稽古被有之候處其後北村季吟歌學宜敷候に付父子共に元祿二己巳年十二月二十二日新規被召出二百俵被下置悴湖春は二十八扶持被下之御醫師並の趣にて勤候様に承り及候其後

元祿七甲戌年三月十一日三百俵御加増被下同十二己卯年十二月八日被叙法印候此已後右北村氏代々歌學の家となり當時季春は小普請組前田安房守支配に候へども武鑑などには歌學方といはし名前出申候

一 飛鳥山出來候事元文の頃と相見え申候中野桃園なども此頃と相見候御書留等御座候哉

答 如仰飛鳥山碑の銘に元文己未秋九月と御座候此頃の儀と被存候中野桃園の儀も少々其後の儀にても御座候様覺申候

一本多唐之助一件の儀はいかに候哉何頃の事にて候哉

答 右は幼少潰れにて候唐之助病死の節弟養子本多喜十郎代に七歳未滿にて享保八癸卯年十一月死去に付斷絶に候

本多美濃守忠政三男

本多能登守忠儀四品

同下野守忠泰

同能登守忠常四品

同唐之助忠村高十二萬石大和國郡山城主 同喜十郎忠列

右の通御座候

享保八癸卯年十二月六日の御日記に曰

雁の間 松平紀伊守

右は此度本多喜十郎相果幼少故及斷絶領知被召上候に付大和郡山城請取並三萬五千石の引高を以て在番可仕旨水野和泉守申渡之

一天一坊が事實說御座候哉

答 天一坊が事實說に御座候

享保十四己酉年四月廿八日

天一坊 改行 西三十一

右は偽の儀共を申觸し浪人共を集め公儀を不憚不届に付死罪の上獄門に行者也(右は於評定所)

右の通御日記に相見え申候其頃の狂歌に

天一は天上に生れけり

むくろは下段首は中たん

椿亭按改行肩書南品川御傳馬役次郎左衛門地借常樂院方に罷在候と云々改行連座の者被仰渡左の通

改行宿 山伏

常樂院

改行申旨にまかせ浪人共集候儀其分に仕改行宿乍仕諸役人へも不相届重々不届に付遠島申付者

也

神田平永町清右衛門店浪人 本多源左衛門

本所相生町文左衛門店浪人 南部權太夫

同 次兵衛店浪人 矢嶋主計

改行事體成儀も不承札其身一人にあらず無筋儀を申觸し浪人大勢引付公儀を不憚仕方不届に付遠嶋申付者也

此外浪人十二人江戸拂山伏町人十人餘有之

銀子五枚 橋町小兵衛店十次郎方三居候浪人 本多儀左衛門

改行事跡出候と申には無之候へ共伊奈半左衛門家來方へ參り承合候故一件相知候に付右の通被下之

一 鳴海平藏と申もの慈眼大師の隨身の者にて御座候寛永通寶の錢鑄はじめの節江戸にて錢奉行いたし候よし今に其子孫御坐候哉右の由緒を御存に候哉

答 右平藏事色々相尋候へ共子孫斷絶も致し候哉相知れ不申候八丁とは別家と被存候御一笑御一

笑

右は天明五年乙巳六月廿八日より寛政二年庚戌の頃迄の間答なり寛政己酉八月廿五日瀬名氏御祐筆部屋詰奥御祐筆組頭格被仰付(元高五百石百俵御足高)藩翰譜書繼御用等にて公務繁かりしかば問答しばらく中絶せり

杏花園

瀬田問答終

奴師勞之序

和名抄に紙鸞を師勞之と書しは其頃の方言にや都にはいかのほりといひあづまにはたことよぶ長崎にて婆羅門と稱しびいどろよまをもて彌生の十日に金比羅の山にて互に婆羅門をたゝかはしめかのよまといへる糸にびいどろの粉を引て糸をきりてかちまけをあらそふもその國々の風俗なるべし老のねざめに思ひ出せるくさゝをそこはかとなく書さしぬるはじめにやつこだこのことあれば奴だこと名づけて雲のはたてにかいやりすてぬ

文化十まりいつのとし

卯月のはたちむゆか雨の日

七十翁蜀山人

奴師勞之

目録

- やつこだこ
- 大橋三ツまた(大抵御覽)
- 針がね賣
- 十九日并山猫
- 蓼太が句
- 同狂歌并蓮花會
- 卯雲が落首并松平攝津守殿の發句
- 同狂歌
- 同狐を落しゝ歌
- 狂歌會の始并橘洲大人弄花集の序(狂歌四天王)
- 木網が狂歌會
- 菅江が和歌并狂歌のいはれ
- 寶合の記
- 孟宗竹
- 藥草吉兵衛
- 植木屋伊兵衛

花林抄

福壽草

礫川

富ヶ岡并きげ川

金猫銀猫并兆殿司涅槃像

渡宋の天神

聖堂再建并前句

しやちほこ

鬼狹頭

牛門四友

東江先生戲作の書

天明調狂歌集の始

萬載集

若葉集

狂歌并摺物の始

入花の始并木網黒人兩子評

蒼妓の訓

物産會の始并平賀源内傳

日本魚譜

風來山人戲作の書

神靈矢口の渡

同文句の評

十八羅漢并十八さゝげ

ほふづき程な血のなみだ

茶店の般若面

蕎麥振舞

温鈍に胡椒付檢校の衣

藝者の振袖

をどり子(辨天おとよ) 新宮 妓者呼子鳥 祇徳の名

廻し方

長崎初午の行燈并稻荷の多少

そるは千年

遠近の宮并みてのみや

客人権現

石のゑびす并天道の宮

うなぎ

長崎の柑類

卯雲が述懐の狂歌

小松屋百龜著書

小紋の羽織

文武丸

五かぼう

品川青樓の勘定日并焼失

加保信士

淺草寺千本櫻

蜀山先生懷舊の狂歌

以上

奴師勞之

○やつこたこは鳶だこの形をうつして足を尻尾にしたるもをかし是は安永の始より出来たり其頃木室卯雲(二鐘亭と號す後白鯉館と改む)發句に

初午や地に白狐天にやつこたこ

○夏の頃枝豆をありきながら喰ふは明和の頃三ツまたに築出しの newly 出来し時よりなり誰やらが句に

冬はなく夏は中洲の涼かな

椿軒先生(内山傳藏)の狂歌に

大橋のある上にまたかけたかと

啼やなかずにくほとゝきす

此地を三ツまた富永町と名づく深川の名主の持なりきわづかに十九年にしてもとのごとくの川となれり朱樂菅江(山崎氏)著す所の大底御覽といふ小本にくわし是中洲の實録なり

○明和のはじめまで針かねく二尺一文針かねとよびて江戸中を賣あるく老父あり子が若き時牛込に

居りしに此邊へは毎月十九日に來りしなり風説には此老父隱密を聞出す役にて江戸中を一日ツ、めぐるといへり

○馬鹿ものゝ事を十九日とよびしは牛込赤城の縁日十九日なり其頃赤城に山猫といふ娼婦ありしが此處にていひ出せし隱名といへりむかと書て十九日といふ字體にちかきゆゑともいへり

○明和九年壬辰二月二十九日の大火の時通鹽町に大島蓼太といへる俳諧宗匠あり(稱雪中庵)火さかんになりし時文臺に草稿を載せ藥罐に白湯を入れて心静に立のき深川六間堀要津寺の庵にゆきて文臺を直しおき發句をして火のために問來る人をとめて一夜に百をみてしといふ今はかばかりの宗匠もありやなしや其發句

緋ざくらをわすれて青き柳かな

○子が牛込にありし時此蓼太清水の藩の谷田貝左傳次といへるものを介として酒一陶をたづさへ來りて

高き名のひきは四方にわき出て

赤らくと子どもまでしる

といへる狂歌を持來れり其後深川要津寺に毎月蓮花會といへる會ありしが招かれてゆきしに一席皆禁酒なれどもひそかに蓮社の禁をゆるして酒などすゝめたりき

○木室七左衛門(初名庄左衛門後改七左衛門)卯雲はもと御徒目付なり延享年中八月十五夜殿中にて板倉氏細川侯を害せし時細川の紋九曜の星なれば名月やけふ近星も間にあはず

といふ句を戯れにせしが其句ひろまりて迷惑せしといへり其後小普請方にうつれり一とせ濱御殿に浚明院様成らせられし時其頃の若年寄松平攝津守濱御殿のうち船番所の柳かげに立とまりて眺望し給ふ時卯雲たち御そばにすゝみて今日はよき天氣なり御發句はなきやと問ければふところ紙に矢立の筆もて書つけて給ふ發句

しばしとて日かげをつくる柳かな
それより御やしきにも立入てしたしくまわりけるとなむ

○卯雲久しく小普請方をつとめし時年老て頭はげ赤くなりければ

色黒く頭の赤きわれなれば

番の頭になりさうなもの

此歌執政の御列座にきこへてやがて御廣敷番の頭になされけり

○卯雲の狂歌を集めしものを今日狂歌集といふ其中

あがたのものに狐つきたりし時
きつねならきつねならぬぞ心得ぬ

其のち落ぬやらさたなしとかけり此古注尤妙なり
○江戸にて狂歌の會といふものをはじめてせしは四ッ谷忍原横町に住める小島橋州なり(源之助と稱す田安府の小十人なり)其とき會せしものわづかに四五人なりき大根太木(山田屋半右衛門といへる町人辻番請負なり飯田町中坂下に住す松本氏俳名雁奴)馬蹄(後に飛鹿の馬蹄と號す咲山氏田安府の士なり)大屋裏住(金吹町の大屋なり後萩の屋と號す)東作(四谷内藤宿の煙草屋なり稻毛屋金右衛門といふへづ)東作なり)四方赤良等なり(予はじめは赤人といひしが後に赤良と改む)其のち大根

太木きり金を請とり市令の腰掛にありてかたへに湖月抄をよむえせものありしを尋ねれば大野屋喜三郎といへるものにて京橋北紺屋町の湯屋なり是もとの木あみ事なり此妻もまた狂歌をたしみて智恵の内子といへりそれより四方赤良を尋ね來り太木もくあみともなひて橋洲をとひしなり橋洲の唐衣といへる號を付しは椿軒先生なり

○岷江はじめ觴をうかぶる計なるも楚に入てそこなし予額髪の頃より和歌を賀郎先生に學びはたちばかりより戯歌の癖ありてしかも真柳ト養が風を庶幾せずたゞに曉月の高古なる幽齋の温雅なる未得が俊逸白玉翁の清爽なる姿をしたひことにつけつつ口あみをになひ出し侍りし中に臨期變約戀といふことを

今さらに雲の下帯ひきしめて
月のさはりの空ごとぞうき

とよみて先生に見せ侍りしに此うた流俗のものにあらず深く狂歌の趣を得たりとほと／＼賞し給へりしは三十年あまりのむかしなりけり其頃は友とする人わづかに二人三人にて月に花に予がもとに

つどひて莫逆の媒とし侍りしに四方赤良は予が詩友にてありしが來りておほよそ狂詠は時の興によりてよむなるをこがましくつどひをなしてよむしれものこそをこなれ我もいざしれものゝなかま入せんと大根太木てふものをともなひ來り太木また木網智恵の内子をいざなひ來れば平秩東作濱邊黒人など類をもてあつまるに二とせばかりを経て朱樂漢江また入來る是又賀郎先生の門にして和歌は予が兄也和歌の力もて狂歌おのづから秀たりかの人々より予がもとあるは木あみが菴につどひて狂詠やうやくおこらんとす赤良もとより高名の俊傑にして其徒を東にひらき菅江は北におこり木網南にそばだち予もまたゆくりなく西によりてともに狂詠の旗上せしより真顔飯盛金埒光の輩ついでおこり是を狂歌の四天王と稱せしも飯盛はこゝとありて詠をとめ光はやく黄泉の客となり金埒は其業によりて詠を専とせず真顔ひとり四方歌垣となのりて今東都に跋扈し威靈盛んなりまことに草鞋大王なり又一己の豪傑ならずや是につぎて名だゝるもの淺草に市人玉池に三陀羅をはじめと

して枚擧するにいとまあらずついで尾陽上毛駿相
 奥羽總房常越より其外の國々のすき人目を追ひ月
 を越て盛なりかく世にひろされるは實に赤良菅江
 がいさをしにして予はたゞ陳涉が旗上のみなりさ
 れど又臭きを追ふの徒すくなからざる中に尾陽は
 すべて予が門葉のみにして他の指揮をうけざるは
 まさに雪丸田鶴丸玉浦金成桃吉有文の諸秀才よく
 衆をいざなふゆえなるべしこの頃東都の諸大人の
 餘國の歌に評するにも尾陽を甲とし上毛駿河これ
 につぐと聞はべるに予鼻うごめく計なるはげに我
 をおこす輩といふべしこたび玉浦翁此冊子を人に
 託して四方の諸君の詠をこひ弄花集と題して序を
 予にもとむもとよりいなむべきにもあらねば繁文
 のつたなきをかへりみず筆を醉竹菴にとるなるべ
 し寛政九丁巳仲夏

こは橋洲大人の序文にて弄花集といへる書に
 載せられたる前の條に因れば書をへつ

○天明三年癸卯正月十三日京橋伊勢屋勝助方にも
 くあみ狂歌の會をせし時集りしもの三十餘人あり
 き勝助が綱の破損といふ名は木あみよりゆづりし

名なり(後ち靜廉と稱す)其時の着到帳おのゝ自
 筆にて記せしもの予が家におさむ(天明樂事の卷
 物に入たり)

○朱樂菅江は市谷廿騎町にすめる御先手與力なりも
 と内山先生に學びて本歌をよみし人なりはじめの
 名を景基といひしが家基公の御諱を遊て景貫と改
 む靜山先生年忌の時内山先生の出題に

古寺鐘

なく鹿の園のわかればさらぬだに
 かなしき秋を鐘ひやくなり

とよみしを先生鐘ひやく聲と直し給ひき其時はじ
 めて菅江の歌よみなることをしれり「菅江」といふ
 名ははじめ俳名を貫立といひし故皆人貫公々々と
 よびしを菅江と書したり中頃菅江の名憚りあるべ
 き歟とて漢江と改めしが日光の宮(公遠親王)の聞
 せ給ひて菅江にても苦しかるまじと仰せられしよ
 り又もとのごとく菅江と書したり是に朱樂の字を
 加ふる事は安永の頃我やどにてもろ人酒のみし時
 戯れに行燈の紙に我のみひとりあけら菅江と書し
 を始とす

○市谷左内坂の名主島田左内酒をたしなみ面白き男
 なりき狂名を酒の上熟癡といふ安永二年寶合とい
 ふ戯をなして狂文を書しことありき牛込原町惠光
 寺に談義のありし時此書院をかりて寶合をなせし
 時長持に寶物といふ札をはりて惠光寺にはこびし
 かば皆人まことの寶物と思ひてうやく敷物せし
 にあらぬ物ともなればあやしみてかへりしものも
 ありき此寶合の記一卷市谷左内坂富田屋新兵衛
 (會荷堂といふ狂名文屋安雅)板行にして世に傳ふ
 今は此本すくなし其のち天明三年萬象亭竹杖爲輕
 兩國橋の邊河内屋にて寶合をなせし本三卷あり
 ○わが若かりし頃は孟宗竹至てすくなし大久保外
 山やしき門前腰掛外繁場といへる石の榜示たちし
 所の農家に植ありしを見にゆきし事あり(内山先
 生もともなひたり)其後麻布六本木の植木屋にあ
 りしを見きはじめ薩摩よりうつして吹上の御園に
 植られ其のち四つ谷大木戸の邊の田安の園に根を
 わかち給はりしより所々にひろまれりとぞかの太
 久保にありしは四つ谷の園よりわかつてるにて麻布
 にてみしは秋月侯の屋敷より出しなるべし一とせ

秋月侯にて孟宗竹の莖を食ひしに味ひことに美な
 り是は薩摩よりうつせる種によりてなるべし其後
 染井の植木屋根岸邊にひろまりしは暫時のことな
 り大久保百人町の速水運藏といへる屋敷はことど
 とく孟宗竹を植置しなり

○明和の頃四谷に樂草吉兵衛といふ植木屋あり樂草
 多しとて内山先生大森見昌などもなひて見にゆ
 きしはわが十六七の年の頃なり(吉兵衛揚梅齋に
 て苦しげに案内せしなり)

○染井の植木屋伊兵衛がもとに享保の頃拜領せしと
 いふ躑躅の大きなるが三本あり面向無三唐松とい
 ふ木なり其のち尋ね見れば其木もいづちゆきけん
 みえず伊兵衛は地錦抄つくりしものなりしが其子
 孫おとろへて植木もすくなし花屋十軒の内小左衛
 門八五郎などが植木よろしくありしが是また久し
 くみざればいかゞにや

○地錦抄の外に長生花林抄といふありつゝじのこと
 計書しものなり淺草御藏前のさうし見世にて半本
 をみし事ありき

○福壽草に八王字よりいづる一種よろしきあり巢鴨

の植木屋彌三郎にてみしことありき(彌三郎は齋田氏なり近頃此種多くなりて所々にあり)

○彌三郎物語に巢鴨の古文書に小石川のことを礫川とかけり詩人の礫水といへるも是によるなるべし

○深川八幡を富賀岡といふはフカ川フカ岡なるべしといふものあり木下川淨興寺に室町の頃の古文書ありて龜下川とあり江戸砂子に龜毛川といふもこれらによれる歟

○天明の頃まで兩國橋の東回院前(高野山大徳院やしき)に隠し賣女あり金一步を金猫といひ二朱を銀猫といひしなり其頃川柳點の前句附に
回向院ばかり涅槃に猫も見え

といふ句ありしもをかし京の東福寺の開帳に兆殿司の涅槃像をおがませしに下の所までみへがたければ札をさげて此下に猫ありと書しもをかしかりき文化二年乙丑の冬長崎よりかへりがけに立よりてみしなり

○同じ開帳に虎關禪師の草本の元享釋書に黃山谷の眞跡の巻物などもあり渡唐の天神の像に渡宋の天

神と書しもをかし徑山の無準に衣を授り給ひしなどは渡明の天神なるべし

○寛政の年聖堂御再建ありて神田明神の前の町家を拂はれ聖堂の圍ひ廣くなりし時前句附の句に
將門の前へ孔子は尻を出し
又其のち

公家悲の前に魯國の實事仕

といひしもをかし明和九年の大火に聖堂の孔子の像と神田明神の神體とともにあたり近き櫻の馬場にうつして一夜あかせしもをかし夜もすがらいかなる物語りかありけん其頃の人笑ひ興しき

○すべて城門の渡櫓の上の鴟吻は(御作事にて鴟吻といひ小普請方にて鱸といふ)棟の上に向ひあひてたてり大成殿の屋の棟に鬼狛頭は外を向てたつ御作事の人夫ども是をあやしみてしやちほことは違ひて外を向きたるはいかるといひしに一人の人夫のあざ笑ひて宵の内は背中合せしても曉にはこちらをむくべしといひしもをかし

○元祿の聖堂は小普請方にて建しが寛政には御作事方に仰付られしなりもと小普請方棟梁を勤めし中

村七右衛門といふもの(本所の馬馬が兄なり)庄内侯酒井家の作事奉行たりしが大成殿の地割の圖といふものを持ち其繪圖に鬼狛頭とあり舜水談綺の板本には鬼狛頭とありまた鬼狛頭の瓦の下に猫のごときものありて鬼龍子といふ是は談綺にもみへず

○明和のはじめ牛門の四友と稱せし岡部平次郎(名正戀字公修號四溟後剃髮號素觀)大森見昌(名彝倫字君叙號華山)菊池角藏(名禎字叔成號匡廬)など東江先生をむかへて目白臺の潺々亭といふにあそび酒もりせし時此あたりに白馬道人といへる醉客來りて座中の客をのしりしかば我ひそかに其兄を呼びてかへせしことあり東江は至て臆病なる人なりしかばかゝるもの又も狗竇より來りてさわがせんもはかりがたし早くこゝを立さるべしとて牛門山伏町の岡部氏の嘯月樓にかへりて又々酒くみかはせし時予狂詩を作れり

諸君斜曲背 白馬横推車

已及戰場處 逃歸岡部家

○東江先生八町堀地藏橋に居りし時門人いまだすく

なかりしかば正月の會はじめに岡部公修といふに來るべきよしをいひければゆきしに日向氏其外十餘人なりき吉原大全といふもの作りしとて坂下のまゝ見せられきかつて唐詩選の句と百人一首の下の句を合せて青樓の事をしるし異素六帖といへる小本を著し置るなど物語あり其座にて池の端須原屋伊八が番頭迂平といふものに逢しが萬載狂歌集の約束してつひに其書をかきておくれり

○萬載集徳和歌後萬載集は須原屋伊八が板なり才藏集は萬屋重次郎が板なり萬載集よりさきに唐衣橋洲茗葉集を選ぶ其後朱樂菅江が故混馬鹿集(本名狂言鶯蛙集)あり是を狂歌集のはじめとして其のちの集とも數しらす

○萬載集の跋は橋の八衢(千陰の隱名)にて自筆也此集あまりに行はれければ橋の八衢の跋をのぞきて市中に行ふ我家に其跋ある本を求めおけり

○茗葉集は内山先生の長子の隱名にして置木とあり實は先生の文也集の中に椿軒とあるは内山先生淳時の歌なり

○酒の上熟寐は狂名のはじめにして大根太木は狂歌

の歳旦摺物のはじめなり二人とも先立てうせぬれば木あみ菅江橋洲赤良が門人の盛りなるをみるに及ばず

○木あみはよき男にしてすみをぬきたるあとさだかに常に居士衣のごとき物を着て紫の服紗に包みし物を脊負てあるけり其頭本芝二丁目の三河屋半兵衛といへる本屋剃髪して齒を黒く染め青き道服を着たり色黒くふとりたる男也狂名を濱邊の黒人とよぶ人皆黒人とあだ名せり此人狂歌の點をして半紙にすりて出す板料を取るを入花といへり(今の狂歌の點料を入花といふのはじめ也)時の諺に本網は兼好を一へん湯がきたるやうなり黒人は文覺を油揚にしたるが如しといへり

○東涯先生の名物六帖に蒼妓の字をトシヨリノユフヂョと訓せり平賀鳩溪(名國倫字士彝戲號風來山人稱源内)見て笑て曰たトシマといふべきを先生の訓笑ふべしといへり

○平賀源内は讃岐の人なり浪花にありて年を経しが江戸に出で學校を建んと思ひて出來りしが寶曆の末の風俗を見て其事の行れざるをしれり性質物産

を好みし故田村元雄(坂上登)につきて物産の事を講究し物産會をなす凡物産會は寶曆七年丁丑田村元雄はじめて江戸湯嶋にて興行翌年戊寅又神田に會し同九年己卯平賀氏湯嶋に會し同十年庚辰松田氏市谷に會し同十二年壬午平賀氏又湯嶋に會す亭主方より出すものを主品とし諸子の携へ來るものを客品とす凡三十餘國の物産二千餘種の品の内にすぐれたるを撰みて一書とし物類品鑑と名付く寶曆十三年癸未の板也當時躋壽館の物産會も是にならへるなり

○平賀源内名國倫字士彝鳩溪と號す狂名は風來山人又號天竺浪人讃州志度浦の人也寶曆の末始て江戸に來り聖堂に寓居す官醫田村元雄ともにも物産の學をつとむ火浣布を考へ出して御勘定奉行一色安藝守殿につきて公に獻り上覽に入る後神田白壁町の裏に住居す又藤十郎新道にうつり又柳原細川玄蕃殿屋敷前の町に移り(此頃門口に柳一本を植たり)終に馬喰町の町屋にうつる(檢校の住居を買て移る凶宅也)是より前明和七年癸辰の頃長崎に赴き大通辭吉雅幸右衛門が家を主とす阿蘭陀本草

を學びエレキテルセイリタイトといへる奇器(人の身の火を取て病をいやす器なり)を造る事を學び得てかへり専ら醫學をなす或は伽羅の櫛(銀むね象牙の齒月に時鳥などの細工あり)をつくり或は金から革等をつくりて常の産とす安永八年己亥十一月廿日の夜病狂喪心して人を殺し(としま町米屋の子なり鳩溪門人也)獄に下る同十二月十八日病で獄中に死す屍を従弟某に給ふ橋場總泉寺のうち左の方に葬す其友杉田玄伯私財を以て墓碑を建て表とす墓表に

智鑑靈雄居士。○紋あり
是は一語一言にみへたるを鈔出す
○俳諧師のつくれる海の幸といふ書あり魚の正うつしなり平賀鳩溪是を日本魚譜と名づけて阿蘭陀人に贈りし事あり魚の圖の上に發句あり彼人形狀をともし事とおもひしや

○鳩溪みづから風來山人又は天竺浪人と號して狂文を書しは根なし草志道軒傳をはじめとす明和のはじめなり其のち根なし草後編放屁論同後編瘞陰逸傳里のをだ巻飛んだ噂の評天狗欄樓鑿定縁起苦

堤樹の辨等を書しなり皆不遇のあまりに鬱懷を吐しなり

○鳩溪儀太夫本を初めて書しは神靈矢口の渡なり三段目南瀬六郎由良兵庫の段は曾我物語の引き事にある杵臼鄭嬰が事にて書しなり四段目の口渡し守り頼兵衛が所の文をはじめ稻毛や東作よみて見て此義岑臺とも今の六郷通りを來れば矢口の渡しにかからず此いひわけなくてはいかいと難せし時直下に筆を採りて六郷は近き世よりの渡しにて其水上は弓と弦矢口の渡しにさしかかりと書しを見てさすがに東作も稱嘆せしなり

○風來淨るり本の名は福内鬼外と稱す矢口の渡の名文は忠臣義士のためなみた天に通せはあまの川つつみもきれて流るらんといふ文句を自讃せり琥珀のちりや磁石の針粹も不粹も一樣に迷ふが上のまよひなりといふ文句は例の物類品鑑の餘習いまだぬけず舊癖のをこりたるもをかし

○十六羅漢は寶雲經第七に見えたれど黃蘗の十八羅漢は第一の賓頭盧尊者と第十七の尊者は同じとせんやといふ事谷響集に見へたり江戸にて十六角豆

といふ物を大坂にては十八さへげといへり十六と十八の數いづれにもかよふものにやとをかし(按に李卓吾が梵書にも十八羅漢とあり)

○重謠にはづき程な血のなみだ落ちて松露になりやしよまい近松門左衛門作の心中宵庚申にはづき程な血のなみだはら／＼こぼせば走りよりわしも病者なとく様をささへおくるがじゆんさいをかへつてうきめみせする是も何ゆゑ相生の松だけゆゑといだきつき木末にしらぬ松の露おちて松露になりやせんといへる文句を中畧したるなるべし

○筋違御門の内柳原に茶店あり般若面をかへげてしるしとす是宇治の橋姫によれるなるべし其ならびに翁の面をかへげし茶店ありわらふべし

○むかしは蕎麥振舞の跡にはかならず角きりがくの豆腐を味噌に煮て出せしが近頃はなし豆腐は蕎麥の毒をけすといへり

○近頃まで市の温飩に胡椒の粉をつゝみておこせしが今はなし檢校勾當は衣きてありきしが今は羽織着てありくもをかし

でけるに神にさへげし行燈あり

十三娘とかけてはなちんちく小やぶとときまする其心はなまだけがはえぬじやないかひなとかけるもおかし

因に曰稻荷の社關東に多し大坂より西には稻荷なしたや安藝路にて一社ありしとおほへし長崎にもたゞ一社なりすべて西國に多きは八幡宮と天満宮也富士を見ぬ故か淺間はなし大師は弘法大師のみにして元三大師はなし天王寺に元三大師あるのみなり

○木曾道中の髪結床の障子にそるは千年髪は萬年と書しもをかし

○木曾道中には二十三夜と庚申塚の石表多し淺間山の麓に小社あり楷書に遠近宮と書し額を鳥居にかかぐをちこち人のみやはとがめぬの歌によれるなるべし

○芝居ものみてのみやといふ神を信するよしかたをなみは片男波となり伊吹山のかくとだにといへる谷の艾よしといふも大笑なりおしつけさなきだといふ新田もひらくなるべし

○天明の頃まで橋町樂研堀の藝者座敷に出るに振袖着て來り留袖に着かへ又歸る時は必ず振袖を着しが今振袖を着るものなし夫より柳橋同朋町本町日本橋とうつり來て眉を落し齒を染たる藝者多くなりぬ

○女藝者の事を昔はをどり子といふ明和安永の頃より藝者とよび者などしやれたり辨天おとよ新富などいひ橘町に名高し妓者呼子鳥といふ小本(田にし金魚作後に虎の巻と改む)此二人の事を記せり橋町大坂屋平六といへる樂種屋の邊に藝者多し俳諧の點者祇徳其邊に住しゆゑに祇王祇女がほとりに祇一祇徳などいひし白拍子の名にたぐへて祇徳とはつきたり辨天おとよ追善の句に
蛇は穴に辨天おとよ土の下 祇 徳

といひしもをかし

○むかしの藝者は娘ゆるまはし方にお袋の付來る事多し今は眉なく齒を染めたる藝者多くなりし故お袋の來るを見ずお袋の役を兼帶するなるべしこれもまた流行の變を見るべし

○乙丑の年の初午に長崎にありし時稻荷の社にまう

○九州にて石地藏のかはりに石のえびすの形あるもをかし天道の宮といふあり大日如來にや

○青樓にて客人權現の宮を信するもをかし山王廿一社の客人權現は女神なり青樓に女客は入らぬ事なり
○鰻うなぎに酢は毒なりと關東にてはいふに長崎にて浦上のうなぎを酢味噌にてあへて喰ふもをかしうなぎを一斤二斤とて死うなぎをさげて來るをみしなり

○長崎は暖國にてすべて柑類よろし橙など九年母の味ひありてよろし豊後梅に星なくして大なり蜜柑の味よろし

○安永三甲申年四月十日或日記

宮内卿殿郡奉行

御裏門切手番之頭

日野小左衛門

眞方小平次跡
右被仰付旨於御右筆部屋縁類老中列席右近將監申渡之

此時小普請方木室庄左衛門(卯雲)跡役を願ひしが叶はずとて述懐の狂歌あり今日はからす此日記を

見て此時の事なるをしれり(八月二日死)
けなげなりなるも尤さねかたの

あいたところへ日の小左衛門

○元飯田町中坂にすめる薬店剃髮して百龜といふ若
き時より春書を好みて西川祐信のかける書本春書
ともにことごとくおさめおけりその自ら繪がける
春書板行になりしは肉薄團ぬくめ夜具此外も猶あ
るべし落し咄しの本も多し小本に書しは卯雲の鹿
の子餅をはじめとして百龜が聞上手といふ本大に
行れたり其後小本おびたくしく出しなり

○小松百龜が若き時元飯田町に小紋の羽織を持しも
の一人もなし百龜など外へ出る時小紋の羽織を懐
中して護持院の原のあたりにて着たりといふ町内
をは遠慮せし也今はいかなるいやしき裏店にても
羽織もたぬもの有るべきや

○文武丸といへる丸薬は小松屋が秘方なり老人など
大便秘結するによろし委くは予が板下をかける功
能書にみゆ

○安永六年丙申日光御社參の時道中にてみし駄菓子
に五荷棒といふものあり其頃駄菓子に達磨糖とい

ふものに似て一口も味ふべきものにあらず三間梁
の餡とよき對なりと思ひしが今年庚辰ある友のも
とより武州忍領北秩父の邊の菓子とて五かぼうと
いふものを贈りしを見しにむかしみしよりは形大
にして其質もまたおこし米をもてつくりたり其形
は野鄙なれど四十年のむかしにくらぶれば味ふべ
し其頃千壽より先には干菓子なし駄菓子の中にも
粟焼といふものなど丹緑青もて彩れり今は左にて
はあるまじ

昔駄菓子達磨糖安永道中満日光秩父長傳五

荷棒大餡猶唱三間梁

紅屋越後や船橋などは五十棒

○品川の飯賣女の價茶屋よりの勘定は歳暮は事多け
れば毎年正月十日の勘定なり小錢にて十匁を一貫
文七匁五分を七百五十文と定て兩替屋三軒にて是
を賣るなり一とせ何とやらんいひし兩替屋一軒是
を賣んとせしを三軒のものむづかしくいひて車に
積しに錢を通さず然れども大道は天下の大道なれ
ば通すまじきともいひがたした青樓に賣る事を
禁せしをいかりて右の車をわざと三軒の見せ先

山口七郎右衛門内

やりて

はる

洞房語園(元文三戊午板)

イツチよく咲たおむらか櫻哉

かしく

あまたの中に此二の發句を以て歴巻とすべし續江
戸砂子に往し丑年藪をひらきて櫻樹を多く植て寅
の春をまち顔なりとあり又洞房語園淺草寺蘭若の
後園に往し年櫻を植られし事のはじめは鷹叟の歳
旦輯の序に述べられたる千株にこへたる櫻の枝こと
に遊君が名の札をつけたるをそれかあらぬか木の
下陰にのみあたりたる其名には心の花ひらけとう
たふもありけり(下略)

○つらく思へば老病ほどみたくでもなくいま
しき者はあらじ家内のものにはあきらまれてよく取
あつかふものなしわれ四年前戌寅きさらぎ十八日
登營の道すがら神田橋のうちにてつまづきころび
し後はづき十日に血を吐しよりもとの健にたちか
へるべくもあらず酒のみても腹ふくるゝのみにて
微醺に至らず物事にうみ退屈して面白からず聲色

を廻りて通りしもをかすべて所々のならひにて
曹司谷にては十月の晦日を以て大晦日に比するも
かの會式の賑ひゆるなるべしことし(文政四年辛
巳)正月十日品川宿ことごとく焼失してかの勘定
の日にあたれり(本宿新宿ともことごとく焼失御
代官支配計も千八百と云寺社門前地町方支配あま
たなるへし)

〔此火に品川妙國寺の門の二王焼失たり古きもの
にて惜むべし〕

○新吉原京町大文字市兵衛が狂名をかば茶元成とい
ふ妻を秋風女房といひ隠居の姥を相應内所と稱す
一とせ此内所にて狂歌會ありし時持佛堂をみるに
先の市兵衛が位牌あり釋佛妙加保信士とありしも
をかしかりき此市兵衛河岸にありし時かばちやと
いふ瓜を多く買ひおきて妓の惣菜に用ひ産業をつ
めて此京町へ出しとぞ皆人かばちやと異名せ
しなり顔色も童の謠ふうたのごとく背ひきくで猿
まなこなりしとぞ自ら此歌うたひ人を笑せしとな
ん寶曆の初め頃となり

○さくら鏡に(享保十九甲寅板)

の樂みもなくたゞ寝るをもて樂とす奇書も見るに
たらず珍事もきくにあきぬ若き時酒のみでとろ
とろ眠りし心地と狎たる妓のもとに通ひし樂は世
をへだてたるごとくなりき

なからへば寅卯辰巳やしのばれん
うしとみし年今はこひしき

こは南畝翁の書つめおかれし草稿にてその弟子
文寶亭といへるものゝつたへもてりしをゆくり
なくおのれが所藏となりてよりある人せちにこ
ひけるにいなみがたくてゆづりあたへつされど
をかしきさうしなれば友だち某にうつさしめい
さゝか補訂してわかふみむふるにをさめおきつ

待賈堂主人識

戯作者小傳端書

是の小傳は或人に借りえし戯作者撰集の中より鈔出
せる也其の撰集は誰會られしに歟撰風を視るに吾に
等き幢者の所爲にやあらむ將寫傳し人の書僻けむ誤
れる字脱たる字などは更なり詞不調にして事の前後
に成れど素事實を主と爲書にし在ば文なせる歌物語
りぶみの類ならずと假字天爾遠波の違有をも皆悉に
令寫たるを一日朋友某に見せしかば越なく愛て是
かで世に弘く欲爲と云ふに許諾と答つ然ば一度勘て
よと請る是に因て原書の儘にてはぐらがりのはちを
あかるみへと歟云へる俗語の如くなれば人笑ながら
むやうにと眞實だちて如是は物しつるを若撰者の見
ましかば然こそ歎しう思ふべけれ然而撰集の檢名に
も似ず好は寡く悪が多し且他に令爲て自作と矜て虚
名を揚しも有る彼是省べけれど然ては名立るは威人
傑と思へる習俗にて耳を貴ふ世人は不諾又撰者も猿
所爲とや云ふべからむ雖然近く式亭主人が所著臆説
年代記にも見えたる和洋龜遊益信(中古まで自畫作
をする人)丈阿(中古まで自筆自作の人)其餘撰集に

載在も傳記品ならぬは嗣にとて略つ且題號の撰集の
名目は不相應とて私に小傳と改たるになむ

安政三年十二月下旬是が端書をと乞るは吾弟子活東
子と云ふ書農なり渠が云言の隨意彼に代りて題せる
も此在處の大城の東なる四日市場の於小店珍書販く

無物老人覺 印

戲作者小傳

目次

- 一 岡清兵衛
- 一 風來山人
- 一 戀川春町
- 一 芝全交
- 一 喜三二
- 一 萬象
- 一 唐來三和
- 一 通笑
- 一 四方山人
- 一 唐衣橘洲
- 一 朱樂菅江
- 一 平秩東作
- 一 六樹園
- 一 戀川好町
- 一 紀定丸
- 一 萬唐丸

- 一 黑鷺式部
- 一 黒木
- 一 歸橋
- 一 田螺金魚
- 一 窪田俊滿
- 一 楚滿人
- 一 振鷺亭
- 一 梅暮里谷峨
- 一 櫻川杜芳
- 一 樹下石上
- 一 鬼武
- 一 二代目喜三二
- 一 竹塚慈悲成
- 一 內新好
- 一 櫻川慈悲成
- 一 二代目萬象
- 一 可笑
- 一 戀川行町
- 一 小枝繁
- 一 高井蘭山

- 一 自惚山人
- 一 橘香保留
- 一 祭和樽
- 一 黃金厚丸
- 一 全亭正直
- 一 西來居未佛
- 一 關亭
- 一 東里山人
- 一 北靜廬
- 一 壽阿彌
- 一 鶴屋南北
- 一 瀬川如臯
- 一 白頭丸柳漁
- 一 葛葉山人正二
- 一 松島半二
- 一 寶田千町
- 一 向榮樓欣堂
- 一 花笠文京
- 一 林屋林泉
- 一 式亭門人拾四人

- 一 十返舍門人九人
- 一 櫻亭琴魚
- 一 嶺松亭琴我
- 一 琴川
- 一 爲永春水
- 一 岡山鳥
- 一 瀧亭鯉丈
- 一 千代春道
- 一 晋朱齋玉粒
- 一 東西庵南北
- 一 神屋蓬洲
- 一 鬼卵
- 一 楊春亭慶賀
- 一 江南亭唐立
- 一 忍岡常丸
- 一 二世戀川春町
- 一 玉樓花紫
- 一 美岡垣笑顏
- 一 一筆庵英泉
- 一 三亭春馬

- 一 五柳亭徳升
- 一 式亭小三馬
- 一 山東京山
- 一 岳亭丘山
- 一 松亭金水
- 一 鳥亭焉馬
- 一 雪麻呂
- 一 夷福亭宮守
- 一 乾坤亭良齊
- 一 笠亭仙果

戯作者小傳

岡清兵衛

和泉太夫の淨瑠璃作者也「黄昏日記」(寶曆十年紀逸著)に曰岡清兵衛は金平本の作者也とあり「故郷歸の江戸ばなし」(貞享十四年印本六の卷上十一丁目)に曰(上略)扱又和泉太夫が淨瑠璃は岡清兵衛と云もの作るいつぞの程にか金時が子を金平也と云廣めわたなべのつなが子をたけつなと云はやらしてよりむかしがたりに云つたへたるべんけい時宗あさひななど彼金平が片手にもたらぬやうにきこえければくわいりよくらんしんをこのむものとも金平をかたるをききてそばにてこぶしをにぎりきばをかみてよろこぶ程に金平といふ者をは三才の童までもしりて日本國へひろまりたり彼金平作りの清兵衛は生れつき才發にして物覺つよく太平記盛衰記あづまかみなどをそらにおぼる備釋歌道をも少づはこゝろ得ければ古事來歴を引事得もの也とかや此清兵衛が近比病死したるとき哀にもをしくもおもひければ「金平

を作り岡清びやう死して惜や思へば學もたけつな」斯あれば貞享年中に死去せしと見へたり此人の墓所いまだ不知金平上るり本予が文庫に三十程あり此岡清兵衛死去の後は新作の上るりも無くて有きたりの狂言而已興行せしならんそれ故金平節廢りし處へ近松門左衛門が名作出て其比の人氣にかなひ此が爲に古淨るりはみな廢れり然れども享保より寶曆の比までは赤本黒本にもまゝ出板し金平ぶしといふはやり唱歌などもありしが天明の比より絶たり今に金平の名のみ残りしは晒木綿足袋底を用るをしかいひ又金平煙草あり今はなし又金平糊金平午莠などいへるは皆強しといふ意なるべし

(此淨るり太夫の事操座元に委し)

(補○四野宮彌四郎是も金平淨るり作者也丹波少將正本に見ゆ外題四天王とあり岡清兵衛比なるべし)

風來山人

名は國倫字は士彝鳩溪と號し紙齋堂又天竺浪人と戲號す通稱を平賀源内といふ初め森羅萬象といひしが後其號を門人森島中良(竹杖爲輕)に譲る又院本に福

内鬼外の名あり讃岐の人にして物産の學を好み江戸に來りて官醫田村元雄を師とし學びて出藍の譽れ高し且火洗布を製しゑれきてるを造り風砲風船なども作る精好よく人の知る所也戯作はたゞ一時の戯れなりとぞ安永八己亥年十二月没すといふ橋場の總泉寺に墓あり友人杉田元白建る

法號 智見靈雄

著述

○風來六部集○根なし草○同後編○志道軒傳○菩提樹の辨○仙術金のなる木○蛇腹青大通○飛花落葉○男色菊の園

此餘略之

院本著述

○神靈矢口の渡○荒魂新田神徳
○忠臣いろは實記○前太平記古跡鑑
○嫩松葉相生源氏○實生源氏金王櫻
○弓勢智勇の湊○源氏大草紙○長枕褥合戰
戀川春町

姓は源名は格通稱を倉齋壽平といふ狂歌を好みて其名を酒の上の不埒又壽山人と號す戯作に戀川春町と

名のある駿州小島侯の家臣にして小石川春日町に邸あり戀川といふは住居する名によれる也繪を島山石燕に學びて自畫作の冊子多し他の冊子をも畫けり一説に勝川春章に學ぶともいふ安永四未年の著述「金銀先生榮花夢」二冊と題號し邯鄲の趣向大に行れ同五年「高慢齋行脚日記」是又大當りにて寶曆已來の雙紙は爰に至りて一變す是より春町の名大に鳴る寛政己酉年七月七日没す四谷新宿裏通り淨覺寺（大宗寺横町）に葬る（本堂前六地藏のならびに墓あり）

法名 寂靜院廓舉湛水

墓の左傍に辭世の語あり曰

生涯苦樂四十六年即今脱却浩然歸天

著述 神文當り物

○花鳥かくれん坊（文軒先生云此書は自隋落先生の傳に擬して作れり）
○三升増鱗のはじめ○鼻峰高慢男
○三幅對紫會我○問違曲輪遊
○芋太郎尻日記はなし
○詞戰あたらしいの根（鯛の味噌づ四方の赤木口の切口太いの根ときたなどいふ口合を戯作

草紙也

○夷大黒若氣の誤○酒天寶易占（卷中に其比はやりし朝鮮のこうけいしふくりんたふなどありて考になる事多し）

此餘は略す

又洒落本あり

○無頼通説法（其ころの遊びのこんたんを面白く書あらはせり）

○女風俗通（男女の衣類小道具髪の風俗貴賤まれまれの畫盡せり其比の風俗を今見るが如し）
（稗史あたりもの金々せんせいゑひぐわのゆめかうまんさいあんぎや日記はながみねかうまんおとこさんふくついでらさきそがおやのかたきうてやはらつみくすのきむだいきあふむがへし文武二道よろこんぶひいきのゑぞうし右は焉馬が臆説年代記より其まゝに抄出す 活東子記）

芝全交

通稱山下藤十郎といふ大藏流の狂言師也西の久保神谷町に住居す寛政五癸丑年 病で没す行年 戯作上手にして尤當りもの多し其中にも能く人の知

戯作者小傳

れるは

○御手料理大悲千録本（一冊物五丁袋入）
○合羽大佛縁起（半紙本）
此書より戯名大に發す天明元年辛丑年より開作歟
○煙篋蕎麥の薪○南無大通佛開帳○通一聲女暫是等初作なるべし
（稗史當り物大ちがいたかうぶね女郎のま事と玉子の角文字はなの下長ものがたり大悲の千六ほんおかみんす仁王さん十四けいせいはらのうち○右同上鈔録）

喜三二

秋田侯の士通稱平澤平格といひ明誠堂と號す戯名喜三二又龜山人といふ狂歌に手柄岡持の名あり俳諧に月成狂詩に韓長齡また天壽といふ晩年仕を辭して剃髮して後苦なき人となりしと戯れて自ら平荷と名づく喜三二の稱號は芍藥亭に譲らる又文化十癸酉五月廿日没す行年七十九深川淨心寺に墓あり

著述

○古朽木（半紙本五冊靜觀坊が下手談義の意を

とりて春町書風來が根なし草の文體にならへり

(稗史あたりもの三升増うろのはしまりかね入七人けしやう桃太郎ごにちばなしうそしつかり雁とり帳ながいきみたいき文武二道萬石通し 同上 鈔録)

萬象

姓は中原名は中良字は虞臣號桂林初稱森島甫齋といふ桂川甫周法眼の舍弟也天明四年より稗史の作あり平賀源内の門人にして森羅萬象の號を譲らる又二代目風來山人と號し天竺浪人とも號す狂名を竹杖の爲輕といふ蘭學の業餘已にまさるの戯作をなす悉皆巧手にして師の風來と伯仲せり

著述

○田舎芝居(小本壹冊妙作也) 太平樂卷物(同上)

(稗史あたりものそれからいらいき是も彼年代記より抄出)

唐來三和

加藤氏伊豆亭と號す本所松井町の妓院にて和泉屋源

藏と稱す或人云原武家也しが書肆葛屋重三郎が弟分になりて彼家へ入夫せしといふ没年未知深川淨心寺に墓あり

辭世の歌

かりの世の地水火風をもとす也

これで五輪の淋しきはなし

著述

○善惡邪正大勘定○忠臣一心の藏

○通神三教色(小本一冊) ○和唐珍解(同上)

(稗史當り物きるなの根から金のなる木 廻文の外題なり天下一面鏡の梅鉢 同上)

通笑

市場氏名寧一字子彦橋雫が俳號也俗稱小平次といふ通油町に住居し一生を無妻にして市中の仙たり稗史を作らる安永年中より寛政の初まで若干卷を著述す其趣意教諭を以て專とす故に世の人教訓の通笑といふ文化九申年八月二十七日没す行年七十四淺草祝言寺に葬る

法名 覺法全心

雪隱云(岡附鹽町に住し表具屋某といひたるよ

し友人著作堂が話也名は道寧字子彦といふ著述大旨世の人の常にする處の穴を探して書事妙なりといへり

(著述大朝補御物好茶臼藝通駕籠奢半勘女天狗一升酒底抜男芝居好めくら仙人め明仙人にくまれ口御代參午時詣)

四方山人

名單字子相南畝と號し又蜀山と號杏花園石楠齋遠樓山人等は別號也通稱太田七左衛門(初曰直次郎)と云ふ牛込に住居し後駿河臺に移る初め狂名を四方赤人といひ後赤良と改む唐衣橋洲と共に狂歌の旗上して海内を風靡す文政六癸未年四月六日没年七十五白山本念寺に葬る

法號 杏花園心逸日休居士

辭世歌

時鳥なきつる片身初松魚

春と夏との入相の鐘

著述

○かさねくめてたい春參り

稗史の作猶あり追て記すべし

唐衣橋洲

名は恭字温之後謙之と改む醉竹庵と號す通稱小島源之助といふ小石川御簞筒町に住居す田安家の小十人也初め内山椿軒(名淳時稱傳三)に就て詩を賦し歌を詠す後四方赤良と共に狂歌を中興して其名一時に鳴る享和二壬戌年七月十八日没す(寛保三癸亥十二月生る) 赤坂一つ木淨土寺に葬

法號 心眼院開譽得聞居士

著述

○若葉集(天明中狂歌集二冊江戸にて狂歌集板本の始也)

朱樂菅江

名景貫初名景基字道甫淮南堂と號す通稱山崎郷之助といひて四ッ谷廿騎町に住る御先手與力也初め漢學及和歌を内山淳時に學ぶ後赤良橋洲に次で狂歌をもて名聲籍甚たり元文五申年十月廿四日に生る寛政十二申年十二月十二日に没す青山久保町青原禪寺に葬

辭世

法號 運光院泰安道父居士

執着の心や娑婆に残るらん

吉野の櫻さらしな月

著述

○大抵御覽(中洲に町家出来し時の洒落本也小本壹冊) ○故混馬鹿集(狂歌集なり半紙二冊)

平秩東作

名嘉穂號東蒙山人通稱稻毛屋金右衛門といふ四ッ谷内藤新宿に住し煙草を鬻て業とす狂歌の古老也寛政元年七月没す年 まんぢう谷善慶寺に葬

著述

○水のゆくへ(半紙本五冊)

(南畝翁假名世説に姓立松立慎之とありいづれか是なるか後の考をまつ)

六樹園

名雅望字子相五老と號し又蛾術齋と號す通稱石川五郎兵衛と云狂名を宿屋飯盛となゆる小傳馬町三丁目の旅人宿糠屋七兵衛(畫名石川豊信が男也)四ッ谷内藤新宿へ移住し靈岸島東湊町中村屋梅太郎(清澄が男六樹孫なり)が家に寓居す六樹園の號は往昔小傳馬町三丁目を六本木と云るによりてしかなづけられたる也文政十一年眞顔と共に京都より宗匠免許あり

文政十二年庚寅三月二十四日

孝子石川清澄謹建

柳橋大のしにて其號を披露せり文政十三庚寅年閏三月二十四日病て没す行年七十八淺草黒船町池中正覺寺(かや寺)地中哲相院へ葬る男清澄(號塵外樓)墳墓の傍に碑を建つ其文に曰

君諱雅望字子相姓石川氏號六樹園又號五老齋名蛾術江戸人君天質聰敏才藻優靡學莫所不窺尤覃思和歌格調俊邁詞彩粲爛一時專門名家皆出於其下風四方贊謁乞業者不可勝數海内推之爲一世宗盟焉其所著數十種正梓布世如源注餘滴雅言集覽所尤致思也足以觀其洽聞博覽之學筆鋒超倫之文矣文政庚寅閏三月廿四日罹病而卒享年七十八葬淺草正覺寺子院哲相院法諡曰六樹園院號譽五老居士京師縉紳之家嘗覽君之著書感歎不措授以宗匠之號叙之法眼没之後 宣文始到于東都識者憾焉嗣子清澄謹乞余文勒石建之墓門余與君相知者久矣義不可辭也系以銘々曰

子嗟乎死而朽者形骸不可漸滅者名一世執文騷之柄千載享法眼之榮淺草山山靜地靜以固其塋

著述

飛驒内匠物語(半紙本五冊北齋畫)

近江縣物語(半紙、五、重政畫)

通俗排悶錄(十二、英泉畫)

しみのすみか物語(半、二、)

都の手ぶり(大、一、)

梅か枝物語(同)

あづまなまり(半、二、狂言集也)

補 吉原十二時(二冊北溪畫)

戀川好町

紀氏名眞顔狂歌堂と號し又四方歌垣と號す通稱を北川嘉兵衛といふ數寄屋河岸に住して家主也世々汁粉餅を鬻て業とせしが(今鯨汁を賣れる家あり其跡なり)意に廢す初め戀川春町に就て稗史を作る故に師の名に擬へて好町と號す寛政年中鹿杖山人と署名して青木の作あり四方赤良に狂歌を學びて其名を鹿津部眞顔といふ後年俳諧を中興して大に行はる因て俳諧歌場の號あり又茶番をよくして好屋翁といふ乗物を段がへしにつかふ事は此翁より始るといへり文政

吉田勇雄識并書

十一年子五月二條家より宗匠號を免許せられ并に折鳥子葛袴を給はる文政十二年乙丑六月病て没す年七十七小石川三菟坂極樂水上光圓寺に葬る

法號 俳諧歌場壽譽福阿眞顔

辭世

味く食ひ暖かく着て何不足

七十七南無阿彌陀佛

著述

○元利安賣鋸商○長者のましくはふ

これは天明五乙丑年初刊行

○涎線當字之清書袋入

○金太郎むかしく(嘶問屋袋入)

○桃太郎むかしく(嘶問屋袋入)

右戀川好町作とあり何れも妙作

○大仕掛三界會我(寛政五癸丑年秩父屋板豐國

畫鹿杖山人としるして序文に眞顔の名あり) ○狂歌堂常に六樹園と其中むつまじからずときに文化十四丁丑年中村座眞顔見世狂言大名題看板「花ノ雪和合太平記」に故坂東三津五郎岩井杜若是まで其中不和にて文化八年辛未年より當年まで七ヶ年の間一座の勤めなかりし處雙方の連中より勸めにより終に

熟談整ひ一座の勤めとなる故に大名題に和合の二字を加へしと見えたり(是もむかし海老藏と宗十郎の例を引しなるべし)其節蜀山人其狂言見物のをりから飯盛眞顔常に其中睦しからざりしを風と思ひ出し彼方へ使をはせしに兩人が何心なく戯場に來れるに山人申けるは秀佳杜若の中直より思ひ付其方達も常常其中宜しからざれば今日より以前の如く水魚の交りにいたすべしと和睦の盃事ありしと云其節互によめる狂歌

是までのだんまりの幕引かへし

氣も相肩のものと棒組

眞顔

膝とひざよい中むらの下棧敷

二間續きの隔てだになし

飯盛

(活東子曰 飯盛は門人にあらず後人虚に吼て實を傳ふる事なかれ)

紀定丸

初號野原の雲輔といひ通稱を吉見儀助といふ牛込豆腐屋敷に住す狂歌を詠して其名高し草雙紙の作は天明四年同五年兩年のみ二三部あり

○活東子嘗聞表御右筆也天保年間齡八十餘にて没

せりと
辭世

狂歌師もけふかあすかとなりけり

紀の定丸もさだめなき世に

喜多川氏

(本姓丸山)名柯理號を耕書堂といひ通稱を萬屋重三郎といふ初め吉原大門口に住して吉原細見を嚮て後通油町へ移りて書肆となれり逸人書史に云寛政八年巳三月六日行年四十八歳とあり山谷正法寺に葬る碑文あり石川五老が撰なり

著述

○本樹眞猿浮氣嘯

○雪麿云唐丸は頗俠氣あり故に文才ある者の若氣にて放蕩なるをも荷擔して又食客となして財を散するを厭はざれば是がために身をたて名をなせし人々あり蜀山老翁うた鷹馬琴杯其中也又己が名あらはれたるも其人によりてなりとぞ寛政九年六月三日没すといふ

黑齋式部

山東京傳妹なり狂歌を詠し戯作の草紙二三部あり天

明の末早世す

著述

○人不知思染井 ○三國一大通本地

黒木

北齋翁(爲一)云京傳方に寓居せし黒山人といふもの也學者にて京傳の片腕なるものよし後東海道三島驛に住居し頓死すと云ふ

著述

○女莊子小蝶夢(天明三年京傳序文)出版は此一部のみか

歸橋

蓬萊山人と號す高崎侯の家臣也俗稱河野 安永年中より洒落本の作に當り多し草雙紙は天明年中に五六部もあるべし其後主君より戯作を禁せらるといふ

田螺金魚

神田町醫の子なり

傾城虎の巻といふ小冊大に行れたり草雙紙の作見えす

○一事千金(小本二冊)

窪田俊滿

尙左堂と號し安兵衛と稱す作名を南陀加紫蘭といふ神田富松町に住居す狂歌をよくし書をも能くす爲一翁いふ回向院前猫茶屋の事を戯作して「通りけり猫のわざくれ」といへる草雙紙あるよし予未見

楚滿人

南仙笑と號す通稱楠彦太郎と云て芝宇田川町の書肆なり敵打の草紙を中興して其名を發す文化四丁卯年三月九日没西の久保心光院に葬る

法號 只但受樂翁居士

墨川亭は芝神明宮の邊に住居し醫を業として仙白と稱すといひ北齋翁は板木師なりといふ

著述

○新錢戲樂通寶

振鷺亭

猪荊氏名貞居通稱興兵衛といふ本船町の家主也初め濱町に住居す畫は鳥居清長に學ぶ後年流浪して川崎在大師河原に僑居して手跡指南して業とせしが沈酔の上堰に落はまりて没すといふ

著述

○自惚鑑(小本天明發)○客衆一の華表(小本)○意妓之口(小本)○翁曾我(中本)○見通し(三三三)○翁後へん(中本)○伊呂波醉語傳(中本)○人雅話(中本)○千代蕨七變化物語(五冊北馬書當り讀本五冊)○春夏秋冬(五冊豊國書)○臥臥妹春山(六冊北馬書)○後徳丸(五冊北馬書)○復讐猫股屋舖(中冊北馬書文化五)○今西行東下り(二)○成田道中金駒(二)○千社詣(二)○巳の日待(二)○振鷺亭咄日記(小)○玉の蝶(小)○格子戯語(小本)

梅暮里谷峨

蕪亭と號す久留里侯の藩士にて(本所埋堀邸住居大目附役を勤むと云)通稱反町與左衛門(初三郎助といふ)

著述

○金花夕映(五北齋書文化)○山莊太夫(五北齋)○傾城買二筋道(同二編)○廓之癖同(三編)○霧之程(契情)○夢之盜汗(享和)○同(後編)○妓情返夢解○契情買言告鳥(同二編)○廓之櫻○白狐通○甲子夜話○貞操小笹雪(二、北高文化五)

○江戸氣質浪花櫻(英泉文政五)

櫻川杜芳

岸田氏俳諧をもよくして言葉綾知といふ芝神明前に住す

著述

○大通記○こぢつけ千本櫻
樹下石上

市中山人と號す羽州山形の藩士にして梶原五郎兵衛といふ作風は楚滿人に似たり後年目出度ことのみを著述す子孫を梶原平左衛門といふ

鬼武

感和亭と號す(初號曼亭)通稱前野曼助といひて或藩士也とぞ算術に通じ擊劍に達す後仕を辭して市井に隠れ戯作を以て業とす書は寫山翁に學ぶと自ら語る淺草姥が池近邊に住居し後新寺町へ移る
墨川亭云寛政中飯田町に居し歟作名の傍に飯頼山とあり

著述

○自來也物語(讀本十冊北馬書)大に行はる文化四卯年大坂にて歌舞伎狂言にしくみて興行せし

に古今大當り也(三代目市川團藏自來也の役大出来)是一世の譽れといふべし且義太夫の一節にも残れり

(豊芥按に書入讀本を歌舞伎に仕組しは是れを初とす或人云此自來也物語はある人の著述せしを鬼武添削して自らの著述にせしよしへり)

○天城錦(北馬書)○函嶺復讐談(二中本北馬書)

○舊觀帖(初三三三三、長喜書村田板三編十返舎

合作)○異療癡癡種(享和二酉年は草雙紙の初作

にて十返舎一九書なり)○慎道迷盡誌(同三亥春

亭書三冊)○三國和漢蘭物語○嗚呼唇氣樓敵

打磐手躑躅(文化元子年三冊)○返吟八重之仇討

(文化二丑此作より感和亭といふ)○悟迷惑心之

鬼武(二冊文化二)○執仇響數千里虎尾峠(六冊)

○四十八手 京傳居士談(馬鹿山人作文化十四年同

十五年の新版なるべし巻中に假宅の事あり文化

十三子五月三日新吉原焼失す此年山東京傳九月

死去す此巻中尾上伊太八と山東京傳出て教訓あり

(其條に京曰「わたしもあつちへいつておほきに

心ほそかつたが淺草の鬼武竹の塚の東子といふものこのごろあつちへきて又はなせやす」おにたけ東子去年た人となるとあれば淡三十日文化十四五兩年のうちなるべし)

○墨川亭所藏の戯作者其外諸先生の書畫帖に牡丹のかたを自ら書きて其賛に

福牡丹團十郎が株の紋

二代目

喜三三

姓菅原名長根芍藥亭と號す初め潜亭といひ三橋とい

ひ狂名を淺黄裏成といふ後芍藥亭長根と署名す本阿

彌光悦七世の孫にして下谷三枚橋邊に住居す故に三

橋の號あり戲號喜三三の名は手柄岡持より譲らる又

通稱にも用ふ世に二代目の三橋喜三三とよぶ

竹塚東子

武州足立郡竹塚の(千住の先)農夫といふ文化十四丑

十五寅(兩年の内の死去なるべし)

○高慢 至無我人鼻心神(三冊寛政三辛亥初作也然

れ共終りに京傳作とあり自分の名は懸ものに竹

塚翁とありて狂歌を持し人物も京傳なり政

よし書

書姿にせしは高名をかりて多く賣ん板本の手管なるべし

我なくば余の木にあらす青柳の

糸すなほなるふりを見ならへ

とあり是より享和元辛酉まで著述を見ず

○雲飛脚二代羽衣(三冊享和元年つるき板)○はしかの戯文(同三癸亥)○敵打名譽一文(三文化元甲子豊廣書)○敵打岩手の梅枝(前三つるき後三文化二丑)○敵現腹鼓(前三後二文化二)○他力之焼繼(前後文化三寅)○豊のいろは(國安書文化九)○復讐浮木之龜背(五國長文化五)滑稽美談尾笑草(三美丸文化八)

内新好

墨川亭曰魚堂と號す印章に内田とあり氏なるべし我師墨亭云一に白銀臺一丸ともいひけるよしまた新江と作名を下したるあり別人か否を不知先年小柳町に内魚堂といふ表札ある家を見し事有彼處に住居せしかはた外人なるかといへり
壽阿彌老云内田屋新太郎といふ表茅場町に住居し帆

布櫓木帆網の類を嚮て大家なりしが零落して後小林筑後(御用達)の養子と成しが離縁して本所石原町に住し俳諧宗匠となりて魚道(又堂とも云)と改む其後鹿島屋へ引取られ病死すと云其年月不知

著述

○振袖心中

櫻川慈悲成

芝樂亭と號す通稱大助といふ或書に鋤屋大五郎とあり芝宇田川町に住居す岸田杜芳門人也天明年間より戯作をはじめ青本落話の小本多し餘り行はれず又茶番狂言を好みて高名也寛政年中世に行れし一枚摺といふ戯作に當りあり其一二を爰にしるす

○口合兄弟○繁升増つなぎ○嘘字盡し(此餘略)

墨川亭云初號親の慈悲成といふ櫻川杜芳が門に出づ戯作狂歌の道にあそぶ事久し傍茶事をよくし諸侯方より召るゝ事まゝあり又書をよくす故焉馬翁と俱に中興せし落語の祖なり五代目白猿及七代目白猿と友たり芝樂亭の號はそれらに據たるなるべし
或人云初め輔師なりしが後落咄しをして業とせしといへり

著述

○持來餅者餅屋○天筆阿房樂

二代目萬象

森羅亭又南湖子と號す初號二代目竹杖爲輕また七珍萬寶と號す通稱禰原屋仁左衛門と云櫻田善右衛門町菓子屋也天保二辛卯年七月廿六日没す年七十西本願寺中妙延寺に葬る

法號 釋玄運信士

著述

活東子云萬象孫あり樋口氏名晃一露窓と號す幼名徳次郎といひ後相續して仁右衛門といふ稟性篤實温厚也讀書を嗜み俳諧を好む俳號を錦雲庵三雅といふ今(安政丁巳)現存す猶櫻田に住居して菓子舖(錦泉堂と號す)なり

七珍萬寶門人

芝増上寺門前翁屋といふ餅菓子鬻く家主也後二代目森羅萬象に改名せしが世に行れず故に狂歌師となり四方眞顔の弟子となれり

著述

海中箱入娘(天明八午三冊)○酒管卷太平記(上

戯作者小傳

同二冊愚一心通看板)○苦者樂元(上に同二冊)

可笑

伊庭氏猪與八と稱す天明三癸卯年六月三日没す行年七十七四ツ谷大木戸理性寺に葬る

法號 玄如院要山

雪麿云大木戸より右側にて日蓮宗也法號玄如院要山日昭とあり寺僧云今の伊庭氏は小石川鷹匠町に住居すといへり

戀川行町

春町門人天明より李庭亭と號す著述の書多からず

○落し咄○百福物語(小本俗に油揚本と云ふ)春町喜三二ゆき町掛合の作あり(序春町同行町跋

春町口書歌麿なり三人の像なりし)

紫色主

俗稱不知品川邊に住居して書をよくせしといふ當りは南門鼠と題號せる洒落本也品川の穴を著述して絶板となる後また南門歸と題して出板せしものあり前板より大におとれり

著述

○艶次郎生日記○見物左衛門

小枝繁

絳山と號す又歙齋陳人と號す通稱露木七郎次といふ
擊劍に長じト筈にも委し水府の御主殿付にて初め青
山燗硝藏に住し後四ッ谷忍原横町(傳馬町三丁目横
町)うつる

著述

○東嶽錦(五北齋書)○柳之家(五北馬)○玉落穂
(十北齋文化三)○催馬樂奇談(六北馬)小栗外傳
(三編共十五北齋)○古能花草紙(四北岱)○景清
外傳(國直)○橋供養(國直)○玉廻露(五英泉)

高井蘭山

名伴寛字思明通稱文左衛門といふ芝伊皿子御組屋敷
與力鐵之丞父也或人云原御旗本某の用人なりとぞ著
述は教訓の書又有益の物多し又讀本のみを編述して
草雙紙合卷の作なり

著述

○三國妖婦傳(十五北馬書享和三より文化三)○
孝子嬾物語(五北馬)○那智の白糸(五同上)○星
月夜顯晦録(十同上文化六)○應仁記(二十大本

英泉書○水滸傳(二編より北齋)

自惚山人

横山町一丁目池田屋久三郎といふ煙管屋也産業を廢
して淺野幸右衛門と改む後に北水と號し天文曆學十
日の内に指南すと云て諸國遊行せし由終を能くせざ
りしと北齋翁の話なり

橘香保留

蘭奢亭又奇南樓と號す家號三河屋といふ飯田町堀留
に住居して煙草を鬻て業とし狂歌をよくす戯作は二
三部なり

祭和榜

鈍々亭と號す通稱武藏屋新六といふ神田小柳町に住
し狂歌師也或人云もと髮結なりと

著述

○御手遊達摩心學(三冊岩戸屋板)○福神金大帳
(二冊)是戯作の初なり(寛政十二庚申年)此外中
本の作もあり

黄金厚丸

神田鍋町に住居す伊勢屋吉兵衛といふ紙問屋なり
著述

○北廓内所圖會(中本一冊)

全亭正直

麻布に住藥品を商ひて業とす五側(六樹園)の狂歌師
也

著述

○金鈴橋雙紙(讀本五冊英泉書)○嬾髮蛇物語
(五英泉書)○狂歌今昔物語(五文政十亥發行)

西來居未佛

尾州侯藩士中にて毛受善喜といへる人也初號瓢箪園
一寸法師といふ是又五側の狂歌師也

著述

○忠臣藏合鏡(馬馬校文政十二己丑年發行)

關亭傳笑

築地御堂裏門前本多侯の藩士也通稱關平四郎といふ
山東京傳が門人といへり

著述

○孝行娘妹春仇討(六冊豊廣書文化五泉市板)○
復讐猿田か淵(六春翁同上)○新撰生妻市の始
(豊廣書)○運輝長者萬燈(二國長書文化九)

東里山人

九陽亭と號し又鼻山人と號す麻布三軒家に住す公の
典事たり通稱を細川浪次郎といふ 如斯印章あり
俗に京傳鼻といふ山東庵が門人なり

著述

○美談離の花○契情肝粒志 此外數多あり略す
○活東子云吾師無物老人話に浪次郎晚年漂泊して芝
切通しにて傳授屋といひて奇方妙術などを小さき紙
にしるして賣れり予も流離して曝書繪となり俱に相
隣りて活計せしが後に江戸橋四日市の小店に移りて
より聲聞せざれば其淵瀬をしらす云々

靜 廬

名慎言字有和一號梅園といふ通稱北三右衛門といひ
て家根音なり初め網の破損針金といふ戲號を元の木
工阿彌より譲られて狂歌を讀みしが後其を廢して學
に耽り博洽となる世にいふ三三右衛門の一人なり嘉
永元戊申年三月二十九日没す芝天德寺地中教受院に
葬る

法號 高岳院圓照信士

○活東子云三三右衛門は津輕屋三右衛門(號掖齋住
湯島)市野屋三右衛門(號迷庵住辨慶橋)家根屋三右

衛門なり

壽阿彌

俗稱真志屋五郎作といふ神田新石町に居住せし御菓子屋也後業を他に譲りて剃髮して壽阿彌と改む戲場狂言作者實田壽來が名を請て二代目戲神仙と云淨り長唄の作多し嘉永元年八月二十九日寂す年八十小石川傳通院地中昌林院に葬

法號 東陽院壽阿彌陀佛曇大周和尚

○活東子嘗聞和尚年七十九になりける歳暮に「あすは見む八十のちまたの門の松」又翌年歳旦に「けふぞ見る八十の街の門の松」と發句せしとぞ儒學は北山先生の門人なり

(毎年連歌の執筆廿五勤つるある年の八月十五夜に病重く既に終らんとせしに快くなりければ「月こよひ枕だんごをのがれけり」と云ふ句を扇に書て孫に遣りけるとぞ)

鶴屋南北

稗史の作名を姥尉助といひ高砂町に住み又本所龜井戸にすめり元濱町紺屋の男にして幼名を勝次郎といふ後戲場狂言作者となれりと北齋爲一翁の話也南北

の名は俳優の諱名鶴屋南北が名跡を繼で四代たり此南北は舞臺へ出勤なし狂言の作のみ業とせり三戲場を勤る事五十餘年文政十二乙丑年十一月廿七日没す時に齡七十五歳本所押上長養寺山春慶寺に葬る

法號 一心院法念日遍

○或人曰南北が葬式は四ッ谷の磨丸太にて差しになひにて寺に至り地内に腹篋のかけ茶屋を補理て爰に門弟等赤き前垂をかけ團子を竹の皮に包みそれに「寂光門松後萬歳」と云本一冊づゝ葬送の人々へ出せしとぞ(中本にて紙頁五丁)此書南北存生に著述せし由又日比遺言に己狂言を作り葬禮の場を出せし事度度也然れ共皆さし荷ひ故我死去致しなばその如くして寺へ遣すべしと言けるよし又南北二周忌の節「しばらくのつらね」に戲作せし物出板す是は南北の孫鶴屋孫太郎が著述と云

男あり俳優者坂東鶴十郎と言しが舞臺を辭して深川仲町に住居して直江屋甚兵衛(又子供屋を業とし又狂言作者もせしが天保二卯年みまかりぬ云々)と云本所押上春慶寺に建る所の墓碑の表

一心院法念日遍 鶴翁南北家

ゆづりあたへずとなり

右は六樹園が作文自筆をもて是を記し窪世祥これを刻す文政十三庚寅年閏三月建之直江重兵衛勝田龜岳鶴屋孫太郎と連名あり

草ざうしの著述は男重兵衛又は孫太郎が綴れるを南北が名にて刊行せしといへり

○墨川亭云文化の初高砂町の姥尉助といへる戲名にて著述たる松録高砂話と云冊子あり是南北が作也と云或は外人ともいへり

孫は勝田龜岳とよばれ幼より書をよくす向島料理屋武藏屋權二が子なりと香蝶樓物語ぬ

瀬川如阜

芝居狂言作者也狂言堂と號すまた新濱村屋といふ瀬川路考の親族也とぞ近比戲場を辭せりと云

著述

○總撥僭語(英泉)○木曾義仲鼎臣錄(初五二五英泉)○七小町(中本英泉)

白頭丸柳漁

狂言作者濱村助が事也と云著述の冊子に柳漁庵と名をくだせしともあり又後の楚滿人門人驛亭駒人と

○鶴屋南北はじめの名は勝儀藏故ありて鶴屋氏を犯しぬうまれつき滑稽を好み人を笑はすことをわざとす終に歌舞妓の作者となりて一世のあいだ大に名をあらはす安永四年はじめて堺町へ出勤す歌舞妓作者の中にも抜群の才あつて十種曲などのふりをうつして人の心かなはんことを要とすされどふみよむことをきらいて文盲なりといひてみづからはこることなし文政十二年己丑霜月二十七日年七十五歳にてみまかりぬ三の戲場の作者たる事五十四年なり死うせなんずるさき子弟等をよびていひけらく我に一大事因縁有枕がみなるくしけのうちにいれてありながらんのち開きてみるにおもふすぢくはしうしるしてありしぞくの人々よみ見て是を守るべしといひて目を眠りぬさてのちしぞくうちよりて箱を開らきて見ればうら書に死出の門松後萬歳とかきてありよみて見れば萬歳唱哥を葬送によせて正本のやうにしてありみなくあきれてこれぞ最後の滑稽なるべきとてみそかにわらひてさりぬ其後むつき十三日押上なる春慶寺にてはうむりのことありけるとぞ但南北といふ名はおのれ一代なりのりてなきあとにて人に

名のり或は戯子瀬川路考が名を假りて著述すともきけり

葛葉山人正二 (男を篠田順藏と云)

戯場の狂言作者にて初め篠田金治といひ後二代目並木五瓶といふ改名して程なく没す文政二己卯年七月七日なり下谷池之端 寺に葬る

法名 並木舍葛葉居士

又梅柳山木母寺境内に辭世の發句の碑あり

秋や今清しと桐の一葉ちる 二代目並木五瓶 葛葉山人

菩提所并梅若の地内二ヶ所の碑は狂歌堂眞顔山東京傳歌川豊國三大人世話人となられ勸化帳へ右狂文を書して江戸中へ配り無程成就せしといへり

松島半二

狂言作者なり俳優者坂東秀佳(二代目三津五郎)が名を假りて戯作す

寶田千町

狂言作者也名恭里通稱中川金兵衛と云下谷長者町小倉侯の藩士といへり

向榮樓欣堂

神田白壁町にて質屋なりしが竟に産業を破りて戯作

者となる欣堂間人と號し又本蝶山人と別號す又狂言作者となりて寶田壽助といふ天保七申年冬病て没す(柳島妙見境内に辭世の狂歌の碑あり右は中川憲齋なり其歌 夫辭世さる程に又是までもむかしの人の口眞似をして)

花笠文京

初め柴井町に住居し書を嚮て活業とせり中比日本橋室町に住す鶴屋南北が門に入て狂言作者となり花笠魯助といふまた住吉町に居を移せり一年俳優者尾上梅幸と俱に浪花に登り暫彼地に止りて代作屋大作と名のり代作を業とせりと自ら話也其後江戸に歸りしが聊障れる事ありて戯場を辭す去年の秋八月此大作のことを世に弘めんとて引札につり所々へ配れり又書畫會を催し代作舎大作の名を披露す冊子の著述はみな梅幸が名を假りていたしぬ儒生東條琴臺文左衛門が兄なり

(文朝云再狂言作者となりて豊島新藏といふ)

林屋林泉

本所林町に住居す初め林屋正藏といふ中比二世鹿野武左衛門(元祿年間の落咄の名人)と改名す怪談癖の

元祖にして上手なり頗文雅あり書もかけり狂歌も詠

す又上るり義太夫の一曲をよくす天保六乙未年正月剃髮して林泉と改めしが又俗となりて舊名林屋正藏と改名す天保十三年二月没す

著述

○先開而三升の世界(文政七申年國直書)○帶屋於蝶三世談(六文政八酉國貞西寺板)○敵討鴉權兵衛(六重政書種彦校文政十二丑)○怪談春雜鳥(初二天保十一貞房三四同十二國貞當り)

式亭門人

樂亭馬笑 樂山人とも號す淺草田町土手下に住す四代目竹本倉太夫といふ

著述 ○手管早引廓節用 三馬補正并序文あり

古今亭三馬 淺草東仲町に住樂種中買也俗三河屋吉兵衛といふ後剃髮す

一亭三生 居所不知

此三人は式亭舊門人といへり

福亭三笑 日本橋邊の人と云へり詳ならず

益亭三友 日本橋通一丁目藤丸膏藥を商ふ人の弟也芳町に住す後惣登

二代目 福亭三笑 半込に住す手跡の師たり著述は仇の字からし留書文政四年出版

一亭三子 藤丸膏藥を製く業とす

德亭三孝 小石川に居て米を商へり狂歌を嗜て初號を一徳齋桃種成と云後業を換て新川邊に

住居す七代目三升か助六の初役を辭てよめる狂歌 異國までひく上手に成田屋か 出端がかとうの蛇の目余 虎の御門邊の人と云り 盡語樓内匠といふ狂歌師也

雪亭三冬

匠亭三世 齋工國貞か兄なり

春亭三曉

二代目 春亭三曉 齋工國貞か兄なり

一亭三樂

二驚 爲永春水也 姫路侯藩中にして通稱石川郡作と云へり

十返舎門人

大原市女 享和より文化年間迄と云

東寧舎一阿

東情亭一瓜

五返舎半九

金鈴舎一寶

九返舎一八

半返舎一朱

愚舎一得

唐立也別にあり

十字亭三九

大傳馬町に居住せしが今行方不知故人
一九に隨身して三九といひ俗稱を糸井
關助といふ下野國の産也

一九没後其男に乞て二代目十返舎一九の
戯名をゆづらる

○牛島長命寺境内にある所の碑は故一九の男又此
一九其餘の門人等が建しものなるべし

○碑銘 なへての人のいかに異なりとおもふことも常となり
てはめつらしかられどいつにてもあかぬものは月の
夜と米の飯さてはいると酒なるべし

内様は腎虛とわれはねがふ也

そが百年も生延しうへ

十返舎一九

碑陰 應需憲齋書

曲亭門人

櫟亭琴魚

勢州松坂の人なり著述は京山子が編述せし小櫻姫風
月奇観につきて風月後記といふものあり又馬琴が著
述の青砥藤綱摸綾案の三輯を作る天保六年卯十一月
二十一日没す年四十四松坂寂光山願證寺に葬る

法號 櫟亭道香

嶺松亭琴我

贈京傳先生文○曲亭記○戲贈利倉屋件衆文○贈上
戸文

此四條板下に迄なりて刻ならず

琴川

敵討甚三絹(五文政五午年)

眞亭驥徳

琴語規矩

節亭琴驢 岡山鳥也

爲永春水

名真高狂訓亭と號し鶴鶴正輔と稱す原書買にして青
林堂越前屋長次郎といふ初め式亭の門に入て三驚と
號し後二世振鷺亭と號す又故人楚滿人が女に乞ひて
二代目楚滿人となりしが故ありて其名を返し文政十
一子年春水と改む居所數多かはれり初め橋町或は通
油町に住し又辨慶橋に居す又牛島へ移り下谷池之端
に移る因て蓮池庵の號あり竟に神田多町に住り中比
糶書となりしが廢て舌耕となり金龍山人(淺草境内
に住てしかいふといへり)と號す著書次第に行はる

るによりて又廢て專戲述をなし、が時好に合ひて大
に流行せり其書を人情本と唱ふ天保十二壬寅年公よ
り絶板仰付られ重き御咎を蒙りしが程なく没せり
(著述あたりもの ○梅こよみ 此外人情本あま
たあり築地本願寺中妙傳寺に葬る 龍音信士)

岡山鳥

名長盈字は哲甫號を竹の戸又丹前舎といひ通稱を鳥
岡芳右衛門(舊名權六)といふ神田四軒町近藤君に仕
ふ一度浪人して駒込大番町に住し大街の卒と也再又
舊主に歸參す初め曲亭翁の門人に入節亭琴驢といへ
り狂歌を嗜みまた書をよくして備書するもの多し古
人式亭と交り深くして門弟のごとし

著述

- 驛路春鈴榮譚(二文化四卯豊廣宗理)○廿三夜
待(二文化十一戌國貞眞繁堺國)○善光寺詣(二
貞房堺國文政四)○如月初午(英泉堺國文政七)
○水中魚論丘釣話○揚弓一面大當利○江戸名所
花曆(四冊文政十年刊行雪旦畫)

瀧亭鯉丈

下谷廣徳寺門前稻荷に住し櫛を鬻て業とす新内節の

三絃上手にして其名を八藏といふ居を轉して淺草傳
法院裏門前に住し再駒形町河岸通りに移る著述は滑
稽本のみ也女あり一中節を能くす都一美世といふ

著述

- 花曆八笑人(初編二三追加文政四巳英泉合刻)
○大山道中栗毛駿馬(初二三)○滑稽和合人(六)
○牛島土産○伊勢道中三方唐人(六)其外○人間
萬事嘘計(後編前は三馬作也)○串戲二日醉(後
編前は一九作也)

猶あるべし

千代春道

元岩倉町に往て後に馬喰町に移れり板下書稿本徳瓶
也又浮世喜樂といふ戯名をもつて編たるもあり俗に
云義太夫節の稽古本の板下を書こと十八歳の比より
して能熟したりとぞ文政八酉年病て没す

著述

- 複響縁小車 文化五濱幸春亭書
晋米齋玉粒
姓藍庭名林信號を藍亭又米齋とも云り備書を業とす
馬喰町四丁目に住し後大傳馬町新道に移る文政七申

年十一月剃髮す其節六樹園より狂歌を贈らる同八酉年芝全交が親族より名を乞受て二世司馬全交と改名す同十亥年五月二日没す男あり前豊國門人にて國景と云ふ

東西庵南北文化三(一書に朝倉力藏とあり)芝金杉町に住せり原は吾妻橋手前竹町に住せし割闕氏にて朝倉藤八といへるよし畫工春翁(後春好)物語と墨川亭の話なり文政十丁亥年没せりといへり

神屋蓬洲

小石川に住せり後花洛に移住せし由自ら書きみづから書し又彫刻をもせしとぞ

著述

○天縁奇遇(三)○口八丁(中本)猶あるべし

鬼卵

栗枝亭と號す東海道日坂の人也著述の本數多あり京師浪花の書肆にて發行せり煙草を鬻て業とするが故に表の障子に

世の中の人と多葉粉のよしあしは

煙となりて後にこそしれ

斯詠じたる狂歌を自筆にてかきつけ置けるに或年白

○金成木後看與蘇和歌(文政七甲申年印行國直書榮文堂板)

戀川春町

下谷坂本町に住居と聞けり文壽堂言房なりし頃の話に貴家の髮剃して隠居し給へるともいひ又醫師なりともいふ何れか是ならん故春町が門人にて戀川幸町といひける由自らいへりとぞ

玉樓花紫

北廓玉屋山三郎が抱の妓也紋所三つ兔にて其形斯の如し是を冊子の表紙の模様用ひたり

著述

○宿縁奇遇梓物語(文政中刊行英泉書龍威堂板)

是は其客が戯に代作せしとある人いへりされど遊女の著述といふが珍しければ載せつ

美圖垣笑顔

愛亭と號す通稱美濃屋甚三郎といふ初め加賀町の質屋也後書肆となり涌泉堂と號す原狂歌を嗜み眞顔が弟子となりて涌泉亭直清といへり晩年芝田町に移住して合巻を作る

著述

河侯樂翁御通行の節此狂歌を御覽ありて御褒美被下しといふ此事根岸君(町奉行)か隨筆耳袋にくはしく記しあり一時柳亭へ消息して門人たらんことを乞ひしが柳亭固く辭せしときけり

揚春亭慶賀(今泉戸寺)

下谷池之端妙恩寺の裏門筋向一丸なり

著述

○一子に二子の對面三わたし四めこのとらはれ五つ夜六さしの旅衣七のふ薬師の鐵輪九のヤ十の男逢

噓初昔今川

江南亭唐立

通稱中田慶治といふ原市街に住て幼より狂歌を好み故十返舎に隨て愚舎一得といふ濱町安藤侯の邸にあり又は田沼侯の邸にも居たりといへり近比戯作を廢たれば著述を見ず初作は文政七年刊行す

○詭染紫色揚(四冊國安書つるき板)

忍岡常丸

下谷上野町に住居して常陸屋甚兵衛といふ吳服屋也故人一九が好の浴衣地を年毎に例として新形を染出せり

著述

○自來也豪傑譚

一筆庵英泉

名義信字英泉漢齋と號し又無名翁と號す通稱池田善次郎といふ茅場町植木店に住居す書を能くすまた戯作をなして一筆庵の號あり嘉永元戊申年七月二十三日没年五十九

三亭春馬

淺草山谷町に住居す初め新吉原京町一丁目の妓樓にて大文字屋市兵衛(養子にて後離縁す)といふ今業を替て質店となる狂名を加保茶浦成といひ後元成といふ淺草庵春村が弟子也また故十返舎一九の門人にて九返舎一八といひける由後は八文字屋自笑となり又二代目十返舎一九となる

著述

○松竹梅多氣競(小本天保十年刊行當り國貞書初

五柳亭徳升

本所法恩寺前町に住せしが後本石町一丁目に移る初は鎌倉河岸にて紙を鬻き豊島屋甚藏といひしが後衰へて貸木屋を活業とす故に人呼て本徳といふ文政五

年の頭軍書讀典山が門人となり舌耕す（今本家の客たり）初めは俳優者市川三升の名をかりて著述せしかば徳升の名を知るもの少し文政十一年春名弘めの會を催せしが近曾戲作を廢して四日市御魚役所の書役となれり嘉永六丑年七月廿五日没す年六十一牛込宗伯寺に葬る

法名 五柳院徳升日輝

式亭小三馬

本町三丁目に住居す故三馬が男にして家傳の製菓を商ひて業とす俗稱虎之助といふ文化九壬申年生れ文政十二己丑年十八歳にて初て著述あり卷末に式亭虎之助と記せしが天保五甲午年より小三馬と改名し父の性を受繼て文才に長じたり久しからずして二代の名を輝かす事とおもはる

著述

- 喜怒哀樂堪忍袋（六文政十二國安畫つるき板）
- 娘曆振袖始（山口板）
- 花紅葉吉野龍田（同年豊國）
- 本朝班猫傳（四同年重信）
- 仇薙竟氣地
- 鮫鞘（六同年重政）

山東京山

岩瀬氏名百樹字鐵梅鐵筆堂と號し又方半居士と號す一號を覽山といふ初め利一郎と稱し後剃髮して涼仙と改む原篠山侯に仕へしが辭して京橋太刀賣に住し再亡兄京傳が舊宅に移りて家才の製菓を嚮ぎ又印刷をなして産業とす天保九戊戌年六月三十日齡七十に及びて剃髮し年賀の書畫會を催せり

剃髮辭

人は四十にといひし兼好も六十八の歳の豆を數へしはいかにめでたしとはおもはざりしかやつかれことし七十の春にあひてめこらはめでたしと喜びぬれどなにを一ツなしえたる事もなければつれづれに見えたるむく犬のおいたる也けり此水無月の中の五日は我がうまれたる日也世に數まへらるる人にもあらば詩の歌のと長生の賀盃をもめぐらすべきに多病つかへをしせしものは士商のひあはひに疲浪人の桃の木なればいかでかこうかのはえをとるべきされば古稀を壽く盃をらくと名をよぶ茶碗にかへ釜のにえ音を千とせの松風と祝ひの白を薄茶にのみつゝひとりざばうの樂しみをとりたるをかしも庭に咲たるけしの花かをりし風にそり

おとりたる坊主なりの清くなるがうらやましく我も又百歳にみそぢたらぬまでにおいしれたるを世間の申わけにかしらを丸めむつかしきはかまをたたまば心たひらかにして壽おのづから長袖の老をやしなはんと此句の樂天を師としてそる事にぞさだめけるさておもふに夏の行水にあたまからの涼しきあり秋の月見の團子の影法師もをかしからんと友人に語りければ張三李四のでも坊主にもあらねば剃髮と年賀とをこきませて一世一代まうせん

の書畫會をもよほし給へわれも力をそへんと玉たすき心にかけし舊友のすゝめにまかせて草庵はせまきゆるゑ人の家をかりたればその所と日限とは別にしるしつ此所語落たるべし○諸君の光駕を松にとりつくつくばうしをあはれみたまわれかし

十徳をけふ羽衣や松のせみ

天保九年水無月朔日採筆

七十野史 山東京山

岳亭丘山

通稱を斧吉といへりもと戯名を堀川太郎春信といひ中頃岳亭定岡といふ狂歌を窓の村竹に學ひ畫を堤秋

戯作者小傳

榮（住茅場町）に學ぶ後北溪の門に入り又北齋に隨從す初め青山邊に居て後大傳馬町に住し今浪花に在り

著述

- 狂歌奇人傳
- 水滸太平記（英泉畫）
- 忠孝水氷川（二百畫文政八伊藤板）

松亭金水

名定保通稱中村源八といふ備書也初め神田大和町に住して手跡の師たり中比淺草寺中に在り後小傳馬町三丁目北新道に住す又本郷附木店に移りて戲作を專とす

著述 中本合卷等數多あり

二世 烏亭焉馬

通稱菅次郎といふ町與力山崎助右衛門が男也深川古石場に住居す其家を七國樓と號せるは武相甲豆驛房總の七州を見渡すが故也狂歌を嗜みて伯樂舎に就て松壽樓永年といひ後六樹園に學ひて蓬萊山人といふ又角觥を好みて吉田退風に行司の業をならへり文政十一子年二代目焉馬となる又弘化三酉午年三月近松門左衛門と名のりて中村座の淨るりの文作あり

著述

○當世金剛傳(二國貞壽)○相撲取組圖繪(一同上)○關取名所圖繪(同上)○茶番一夜附(二國直文政六)○懷中鏡山開(六國貞岩戸文政十二)○忠前之孝記(六國貞西與文政十一)○角力水滸傳(國安森治文政十二)○刈萱桑門筑紫寫繪(六國貞芝吉文政十三)○戲場稿本當現建(十六國貞西與文政十四)○活金剛傳(前後四冊)○妖狐天網島(六國貞泉一天保三)○俳優畸人傳(前後四冊山口)○兩顔忍夜櫻(八國安國芳天保四)○大和染對之振袖(八國よし森治天保五)○返咲難波裏梅(中國貞天保五)○芝居細見三葉草

雪麻呂

墨川亭と號す高田侯藩中にて通稱田中善三郎といふ墨川亭月磨が門に入て書を學び後戯作者となれり作風は柳亭に似たり

夷福亭宮守

夷福山人と號し又福亭祿馬と號す今樂亭西馬と改む西宮新六といへり本材木町一丁目の繪雙紙間屋也文政十二丑年の火災にかゝりて家衰へ後水谷町に移徙し家主となりて久兵衛と改名す傍備書をなし又戯作

をなす俳優者瀬川路考又岩井紫若か名をかりて出せり
乾坤坊良齋
通稱良助神田松田町の貸本屋梅澤勘平が男也初め三笑亭可樂に隨ひて落咄をなして管良助といひ後軍談書讀となりて今の名に改む

著述 ○黒雲太郎雨夜譚(初編二編)

柳亭門人 笠亭仙果

姓大宅名廣通字轍齋と號し又狗々山人松祿翁等の戲號あり通稱を彌太郎(幼名龜三郎)と云ふ父は高橋彌右衛門(名敬義字民則號小有軒呂川嗜俳諧)といひて世々尾張國愛知郡熱田驛に住し三代熱田大神宮神領の里正たり幼き時所謂祠官磯部右近(名政春)を師とし手習素讀をなし長なりて離屋翁(明則字叔甫通稱鈴木常介尾張家儒臣明倫館教授)が弟子となり和漢の學を研究し又芳蘭主(名春村通稱黒川次郎左衛門堀長門守藩中もと三世淺草庵也)に就て學ひ狂歌をよみ四世淺草庵の號を讓らる又和歌をよむ高橋家

戯作者小傳後序

(中納言)の門人也薄枯にして家衰へ竟に産を亡ひ江戸(寓居淺草新はたご町)に來りて著述をなして活計とす自らいふ戯作は本意にあらずと號未如之何也已矣又いふ笠亭の號は清人李笠翁が情性を欽慕ひ又師翁(種彦)が亭號の通音をとれり又仙果と名告る縁は予十歳ばかりの比熱田神宮寺の住侶金幢法師余を愛して大なる桃一顆を贈らる高三寸圍六寸餘にして寶珠の勢に似たり崑崙山の種なりといふ古人早魃に雨を得大に喜びて亭號とせり則其に倣ひて云爾といへり

名を取より得を資とは好く言得たる謔なる哉己物部の家に生れ幼き時父は先だち後るゝ母は三遷の情なく一向書見を禁せられ長成ても孟軻が才は固あらねば志を不遂して終に貧商とは變る也然ば活計の百事百憂交與りて意穩ならず且藏書若干卷は贖ふ人に任すれば徒に耳取り扱ひて一行を尙讀ことなし故に師に學べき間も無く友と齋らふ暇も有らで空く過し年月を毎に歎じてやまざるの尻の赤耻輝くも代作などを徴は爲しが攻らぬ戲述に功隙缺て少の賃をえんの下の方もちつと學文なくして七八名の糊口が附かず八斗の才も有ざれば五斗米に腰を折る徳なき身にも昨の非を今覺れども淵明と表裏にして田園も無く飛走も有ねば未如何也白痴に手を突き臍脱に蹲居ひ陋めらるれば家産を破らず妻や子等に飽まで食し暖に着するを主と爲しかば其相應に利潤が有りて親へは孝行他へは義理がかけない故の負と若いふ人も有べけれど本錢の薄い小店賈人いかで大家に立竝ては花の傍の太山木の青本位の戯作屋が丁度似合の身上

ながく兒女童蒙を願主にして儲けた所が續に不成と
 發て過しは廿餘年の昔取つたる杵づか也と得意の人
 に佇まれて狂文狂歌の出たらめを一ツ二ツと書投し
 が其からそれへ傳はりて何暇虚名がしれものを詢來
 れるは家公に仕へし時の朋輩同志往日出店の主人と
 化れど予にも目下の活東子と云ふ同職同癖相共に彷彿
 の男也是から一二々々檀那向せど年季野郎の變騰
 は未ダ僮僕の面影を人もしりへに垂準るれど商客文
 人兼二員を一身で濟す奴ながら是も糶が不足がちに
 て意ほどなる世間をふる本屋とて賤く見る目を卑れ
 ど板が好く紙の佳のが無にしもあら本屋にて高き名
 を聳く耳ばかり尊めど磨滅の書に落帳本雖有人は不
 知火の熟我身を省みよと彼を諭して云けらく曾々毛
 々舊塵の商賈でも新に店を開きし時は低賈を爲し景
 物そへて心機身上と謂るゝ至は數月日をへた乍に年
 を積ねば願主が來らず然ば氣性の高賈を散落雖と已
 て愛敬專一隨分腰を下し鼻書いたる人の所作を見效
 ひ俗賞を不厭は竟に名家と成らるべく貨物多くて儲
 ぬは心の瞑物あるから也代物寡て射利は意の明物あ
 る故也雅中の俗と謂れん與は俗中の雅と稱るべしと

己が田へ引く水莖の迹に誇りやえん人の石には有ら
 で玉に類へて仲間の櫃に糞たりしを糶物にして持來
 り善賈を待には蟲食あり破を窒て修補は正中不沾
 ことやは有べき何如刻飾をしてくれの忙中に繕て一
 枚二葉披いて閱れば餘ほど穴が大きなおせわと撰者
 が見たらば言べけれど爲入字こそ估も山上復有山れ
 又待まるゝに否とも云れず首尾整て造次に綴付る縫
 目の半風の見零あらば目のよい人に拾はせよと投興
 へぬる此冊子抗と成らで暴店の排に集る素見人が王
 充養に捻くらんかし

安政三年丙辰十二月下泮

達磨屋無物翁門人

書農

脅肩病夫蝸齋戲題

戯作六家撰自序

是の六家撰にはやく六人の似顔繪をえたりしかば戯
 作小傳よりえりいだし、也此うはがき六歌仙のひ
 きあるによりて其きたあらまほしとそのかす人あ
 れどかの古今集の序なる歌人とかけてもなすらふべ
 き人たちにはあらず且むげにつたなきもまじれ、ば
 はぶかまほしくおもへどさても年久しき聞え人なれ
 ば耳をたふとむ俗人はうけひかじとしぶくかすま
 へてすべて六人となせるからかく名をばおほせつる
 になむされどかのさまをふくめてこそをかしからめ
 などとにかくにしひらるればさのみはえすまひあへ
 ずていさゝかされたせむとすいでや此むたりの人たち
 はそのころのなだゝるもの也されどこれかれえたる
 ところえぬところたがひになむあるすなはち京傳は
 そのころあまりてことばたらねば業平にや似たら
 む三馬はつくりさまはえたれどまことすくなし遍照
 にやよせつべき馬琴はことばたくみにしてそのさま
 身におはす康秀にやとりなすべく一九はそのさま
 やし黒主にやとりいでつべからむ種彦はあはれなる

やうにてつよからず小町にやたぐふべき馬ははじ
 めおはりたしかならず喜撰にやひとしからむかくを
 こめきいへるは人きゝはづかしくかつはつみさりと
 ころなきわざにこそ
 安政みとせといふとしのしはすのみそかの日吾師無
 物老人が書きさまにならひてしるせるは此大江戸の
 ふみあき人 活東子といふしれものになむ

戲作六家撰

附錄畫家三人

在處書農 蛭蠶子補訂

山東京傳

名は醒字は酉星醒々齋と號す又山東庵菊花亭等の號あり通稱を京屋傳藏といふ京橋銀座一丁目に住して烟管煙包竝に家製の讀書丸其餘製樂をひさぎて業とす初め北尾政美に學びて書に葎齊政演と名のり又狂歌をよみて身輕の折助と名のる後著述を専とせり中興戲作者中の翹楚也文化十三年丙子九月七日病て没す年五十六兩國回向院に葬る法號辨譽智海京傳

○淺草寺中人丸の祠の傍に建たる碑の銘ならびに本所回向院の墓誌を摹し得て其姓氏の精を知り且平常の戲編の巧なるが猶現れぬば左に擧ぐ

明和六年といふとしの二月ばかり齡九歳といふに師のかどにいりたちていろはもじ習ひそめし時親のたまはりしふづくゑなむ此つくるにとありける

山東京傳肖像



香蝶樓 國貞画國貞

さればつくりさまもおろそかにてみやびたるかたは露なけれどはふらし捨すとし頃たのもしくてかたはらをさらすひとり愛つゝありへしとしは五十にちかく何くれとつくれる冊子は百部をこえたり今はおのがこゝろたましひもほれくしうまなこもかすみゆくにつしかこれまたじろきがちにゆがみなどしてもおひに老しらへるさまなるはあはれいかいせむ

耳もそこねあしもくじけてもろともに

世にふる机なれも老たり

山東庵京傳

文化十四年丁丑春二月

愚弟

京山磐瀨百樹書并家額

同碑背面

翁諱醒字酉星號醒齋又號山東庵稱傳藏以其所居近京橋一字京傳故其爲京傳最著磐瀨氏其先出自磐瀨朝臣人上近世資詮者仕太田道灌爲謀臣道灌亡世隱於勢州一志祖信篤考信明仕某侯多病辭仕隱於東都市娶大森氏生翁及百樹翁少好稗史小說數百著作口富戲文幼說謬悠無根能令人悲能令人喜坊間書賈進

於劔者利市三倍於是兒童走卒莫不知京傳者晚悔少作無益於世改勵刻苦搜索奇秘著近世奇跡考及骨董集二百年來奇談逸事考據精確可以補小史矣文化十三年丙子九月七日沒歲五十六葬國豐山回向院弟百樹埋翁幼時寫字案於淺草寺中柿本祠側以遺財建碑刻翁國字記言以告後之讀其書而不知其人者爾

文化十四丁丑春二月 江戸 南畝草撰

京山磐瀨百樹再書 窪世祥鐫

回向院中墓誌

亡兄諱醒字酉星一字京傳號醒齋號山東庵磐瀨氏其先出自磐瀨朝臣人近世資詮者仕太田道灌爲謀臣道灌亡世隱於勢州一志祖父信篤父信明仕某侯多病辭仕隱於東都市娶大森氏生二男二女亡兄爲其長自幼好文十歲縮寫孟子今尙存家自十九始有稗史之作上梓者百五十餘編因茲其名聞海內王公妾婦牛童馬走無不知矣今茲文化十三年丙子九月七日病沒歲五十六矣予弱出仕篠山藩病辭仕與亡兄同筆研有年無常風來玉樹碎痴心月照兼葭嗚呼悲哉

愚弟

京山磐瀨百樹謹撰并書

窪世祥鑑

岩瀬百樹字鐵梅號京山岩瀬朝臣人上之遠裔也父信明勢州一志之地士來江戸娶大森氏生京傳翁百樹及二女百樹自幼嗜文武弱出仕笹山侍從多病辭仕以及鐵筆之技爲業自戲有稗史之作乞梓者隨至編作日富與兄齋時鳴雖然少作之名爲大方所耻也時五十三已過上壽之半故建壽藏自記名聊省亡後之勞爾

京山岩瀬百樹誕辰之醉後撰

井書

于時文政五年壬午夏六月十有五日也

墨水石匠窪世祥鑑

寛政二季庚戌秋八月

岩瀬氏之墓

岩瀬傳左衛門信明

男 傳藏有濟 建

○翁の戯作海内に行れて遠境遊地の者老若男女その名をしらざるなし斯れば其風を慕て戯作の業を學ばんとて門人たらんことをいひ入る者しばし有れども許諾する事なしときく是も自作の冊子「綾染五郎

剛勢談」および「萬福長者榮花譚」兩種共に文化五年刊行に斯の如くあり「なにとかをこがましく候へとも京傳かたへ戯作の弟子入かたく御断申上候」と見えたり翁が門に遊べるもの近くは唯關亭傳笑のみとある人いへり

○或説に本姓は拜田といふよしをいへり又舊號を寶山といひしが古き冊子の印章に寶山の兩字を用ひたるあり且祿野園藏本「浮世繪師考」といふ寫本を見るに寶山と號すとあり前にもいへる如く翁に近年は門人なし舊くは門人ありと見えて京傳門人龜毛と物に見え又文化中には門人拜田佐平といふ名も見えたり古き冊子「鶴岡御當興行會我」といへるに山東鷄告「ホセカ」といふ名を記し京傳二十五の曉に序す政のぶとありまた山東唐洲といへるも門人なり

(活東子云龜毛は三教指歸にも所謂有名無實なり怪牛又鷄告などもいかにあらん其人あるにはあらじ猶たづぬべし)

○翁が生誕没年をもてかぞふるに寶曆十一年巳年也(深川木場に生ると柳亭のはなし也)また自作の冊子「作者胎内十月圖」文化元甲子年三冊鶴喜板)にその

年にて二十七年戯作なすよしいへれば安永七戊戌年に當り十八歳にて初作なり京山子が撰べる墓誌には十九より始て稗史の作ありといへりされば安永八年刻成て發市に及べる時の事をいふにて胎内十月の圖に自ら書るは稿本の成たる時をいへるなり

○翁が著述せる草冊子又讀本共に文體一風にてすらすらとして女童にも讀得やすく尋常は聞もなれざる奇語見も習はざる僻字をおほく用ひず畫刻の工風おもしろく目前かはりたる事を専らとして粉骨もまた格別なれば行はれしも宜なり

○近ごろ何人の筆すさみにか「後言」といへる冊子あり評者名を隠し、かば其人はしれずその中に翁が撰せる骨董集の説をある人奪ておのれが説の如くしたるを翁ある會席上にて其人に對ひて「かの説は子が發明なるを足下自説として唱らるゝことはなほだ遺憾なりといひしとき或人まさしく大音に我いかでか足下の説を奪はん何ぞ證據ありやと居丈高になりて説破したりしかば京傳はなほだ逆上て論議するうちに持病の喘息大いに發して痰血を吐し盤輿にたすけられて家に歸りしがこれより病て起ことあは

すつひに病床に横死したりき是其方が氣死せしめたる事人あまた知れることなり(以上後言の文なり)と述たるは然るや否はしらす予書賈文壽堂の話に聞おけるはさる類に非ず翁は病こと兩三日にして何ごともなくて没ぬ遺跡は家弟京山子繼たりといひき

○世俗己を善とこゝろ得たる者をさして自惚といふ自惚をまた艶次郎といふこの詞はかほよき男を思ひ誤るかたし艶次郎などいふをもて自をよしと心得がほなる弱氣男をいふ歎此言の起りは翁が著述せし江戸生空氣の蒲焼といふ冊子に自惚なる若者の名を艶次郎と號たり然るにこの草紙大に世に行れたれば廊中までも此艶次郎といふ詞行れて今も猶人口に残りし今嫉妬を甚助とよぶ詞はやるが如し右の冊子は寛政九年の刊行なりその翌年に三和が著したる冊子を又繰返す艶物語といふを翁(政演)書きぬ是前年に空氣の蒲焼流行たるに依ての作意ならん左あれば自惚を艶次郎といふ事翁より始る歎とおもはる又洒落本の中に自惚をさして鹽屋といふ如何なる故かしらす洒落本の作者に鹽屋艶二といふ名あるは前にいふ自惚の名二つに據て名づけたる戲名歎かゝる事を

穿鑿するはをとなげなき業ながらまた／＼をかききふしも多かり

○文化五戊辰年發兌せし冊子「綾染五郎強勢談」に辻君をおほく書きたる繪様ありて或は偏盲鼻缺または鼻より頬へかけて膏藥をひたとうちたる様なんどのいと見苦しき姿に畫なしたるを實の夜發らこれを見ていかに吾々なればとて斯まで見苦しき様にはあらぬをかやうに畫きひがめたるはみなこれ作者のしれ業なり京傳といふえせものをもし途中にて見る事あらば捕へて此由を恨んものとかねて相譚あはせて置つるがある黄昏にうち連だちて某場所に行んとするをりから不圖翁に行逢ひたりその中に翁を見知りたる者ありて彼れこそは京傳なれいでおし捕へて怨をいへと下知するほどに伴ひ連れたる辻君らが翁を中に取圍て口々にたけり嘗り吾々をなど彼のごとく悪ざまにかきなしたるやなど、姦しく恨るに翁は思ひかけぬ事なれば駭くこと大かたならずそのうへ外視も甚あしくまたむさくけがらはしきこと限なければ言を盡していひなだむれどもかの輩は猶聞いれずきたなきを厭ふを見て故に取附こたかするもありてほと

ほと難儀に及べるがこれ乞巧に棒うちなれば翁は左に右にいひこしらへて吾後日にこの詭言の驗をみせん今は放ち返らしめよと怠狀乞してわびければやうやくに怒ををさめて後日の事をかたく約し頓てみなみな散ゆきたれば其場を漸運れかへり後に人して彼黨に前日の謝物として聊の金を與へて其事をすましけり翁が名是より彌増に弘まりしと或人の物がたれり又一説にかの辻君を多く書きたる冊子は寛政の初年の著述なりといふ然れども予は其頃の冊子に辻君を多く書きたるものを見ず後の説に従ふべきは草紙の表題あきらかならず寛政の初といへる強勢談よりは遙に前の事にして年に甚たがひあり何れを何れと定めがたく又話の虚實をも辨へがたし

○戯作者常に稿本を草するときは物さわがしきは更なり甚しき寒暑を惡み來客の長座をいとふ事も皆然り胸にうかみたる筋を書とめんとするときは恭に打入たる人の如く他念なくして食をも忘れ又ようたしにたつことをすら惜むことありこは予も覺へあることにてみな人斯の如くなるべし翁平常種本綴れるをりは食器をも傍近くとり調へおきて時を定めず欲と

おもへるをりは食しまた溺器をもその一間に置いて小便をたしぬと聞り虚實のほどは知らざれども吾身にくらべてさもありなんとおかし

○文化十二年乙亥の春予諸名家の書畫を乞て秘藏し老後の樂に備んとて書畫帖一卷を製したれば一日翁の許を訪ひてその染筆を乞しに翁は常に天満宮を信じぬれば此日は湯島の御社に詣で家に在すと舖の主管のいへりければ彼の一卷を主管に頼みきこえて異日ふたゝび訪ひしに其日もまた障れることありてか面會せざれど彼の書畫帖に自詠のざれ歌をもつて贈られたる其され歌は詩佛翁が畫る竹の繪のかたはらにかくなむ

鬼かはらすみかにすれどかたつふり
角を自慢に身をなたのみそ

○舖上にて自書贊の扇短冊なども鬻ぎぬれば自詠の狂歌發句のたぐひは多く世人の知るところなれども其一ツ二ツをこゝにあぐわきて妙なりとおぼゆるは釣鐘を畫きて

家業夢中 始終滅亡 正直律義 格別氣樂
佛子如意を畫きたる贊

如何是通子再來の意夜前のかしはもち猪牙舟にね

雪解むる

山々の一度に笑ふ雪解に

狂言は秋の半でござり升

仲秋の月にめては今川か

柴のオモヒとがきに月のオモヒ

をしへももとく酒宴遊興

餘は三馬が撰ひし狂歌觸に載たる故に略す

○文化三丙寅發行せし讀本昔語稻妻表紙(五冊)は書賈文龜堂伊賀屋が藏板なり又同年印行の善知鳥安方忠義傳(六冊)は書林仙鶴堂鶴屋が藏板にして二書ともに世に行れたる事其頃知らざる者なし然るに其翌翌年文化五戊辰年の春浪花の芝居兩座において稻妻表紙の旨趣を狂言にしぐみてせしが大に流行たるよし也右につきて稻妻表紙の後編本朝醉菩提(六冊)また發行せり同書の簡端に在ところをこゝに摸しいだせり

不破名古屋傳奇考

貞享二年の印本に菱川師宣の筆の繪草紙二冊あり名

古屋繪盡と號す詞書ありて往古山城國小幡の里に住む名古屋山三郎といふ者父三郎左衛門正春の仇同國伏見の里に住む不破伴左衛門といふ者を討たる事北野のほとりに住む梅津嘉門并に遊君高間の葛城等が事をしるせりいとおぼろげにて實記ともおぼえず又英一蝶の筆に名古屋山三郎仇打の繪卷物を世につたふるといへども詞書なければ殊に詳ならず僕案するに延寶天和のころ土佐掾が淨瑠璃節に作てかたりたるが自然兒女の耳に残りて漸世に傳へしと覺ゆ山三郎が僕に鹿藏猿次郎といふ者ありしといふは貞享の印本舞曲扇林といふ草紙に記せる説也又名古屋山三郎左衛門趣所の娼家の奴僕に小猿といふ者ありと雍州府志に記せり延寶八年江戸市村芝居に於て遊女論といふ狂言に原祖市川團十郎始めて不破伴左衛門に扮作す時に三十歳也山三郎に扮するもの村山四郎次葛城に扮する者伊藤小太夫也其狂言大におこなはれて其一年のうちに同狂言を同戲子にて三度まで興行しけるとぞ其刻伴左衛門に扮する衣裳に始めて雲に稻妻の形を摺ぬ是をだまきといふ俳書に載たる稻妻のはじまり見たり不破の關といへる荷翠の句にもとづ

きて團十郎自己の物このみなる由しかりて後伴左衛門に扮するにはかならず雲に稻妻の形をつくる事になりぬ團十郎前には如斯の紋をつけたるが伴左衛門の狂言の後稻妻の一ツを轉して如此に更けるよし然ば則ち三升の花號は如斯稻妻の形雷紋也一説に草履打の事は元祿の末年花井三郎といふ戲子と不破某が事より起れりといふ名古屋山三郎に扮する衣裳には昔より定たる花形なし僕稻妻表紙前編著述の刻稻妻の花紋俳諧の句にもとづきぬれば山三郎の衣裳も俳諧の句にもとづきてこそと思よせて傘にねぐらかさふよぬれ燕といへる晋子の句意をとりて出像の花紋に春雨に燕の飛かふさまを畫しむこれによりて這春浪速の芝居兩座ともに山三郎の衣裳に濡燕を繡しつる由雲に稻妻雨に燕よき一對にしてしかも濡といふ詞口生に似合しかるべし稻妻表紙の傳聲につきて浪華びとぬれつばめといふ小曲をつくりてもはらうたふ其文左に記せる如し

いとせの契りたがへぬつはくらは人のゝきばにせたいをまふけやゝをばうんで西よ東とるはみをもとめさもうれしげに其日をおくるわれらふたり

はいつしかに不破のせきやの關の戸にせきとめられていなづまやありとは見えて夫ぞともあけていはれぬむねのうちつゝむにあまるそでのあめもんは三ツ傘にねぐらかさふよぬれつばめ

右なには人團好つくれり咲藤のはなふさながき某ふしはかせをくだせり

同

各位の主顧に告たてまつる文化丙寅の冬本坊發兌せる醜々先生の神史稻妻表紙前編六卷幸に行れ今春(文化五辰の春)浪華の戲場兩坐におゐて那書の旨趣を傳奇に翻案して二艶段とし大に看官の耳目をおどろかすに到りておのづから後編渴望の人多しおもふに清朝康熙二十六年の春百花坊の雜劇に演義三國志を翻案して「千里柳塘假月刀」をつくり水滸傳を翻案して「千字文西湖柳」をつくりしより那兩書の世に行るゝ一段をませりといふ稻妻表紙における和漢同日の談といふべしこれによりて再又先生に乞ひ後編一部を得て上木せり四方賜顧の君子各地縁分の的書舖に就て索て一覽を賜ふの後好判語を所請寄也則那兩座傳奇の標號打扮の圖を

翻刻して左にあらはせり

辰正月廿五日より道頓堀角の芝居二のかはり狂言

座本藤川辰藏
きのふは不破の關さままいるけいせい輝州紙校合
 けふは名古屋の山さままいるけいせい輝州紙校合

右狂言作者

奈川七五三助

近松徳三 圖あり略之

市岡和七

狂言

辰正月廿九日より道頓堀中の芝居二のかはり新

座本 小川吉太郎

稻妻表紙姿の彩色
 十帖源氏に意の寫繪けいせい品評林九册

右狂言作者

並木三四助

圖略之

奈川篤助

○近年江戸堺町中村座にても右稻妻表紙の趣を狂言に仕組てせりまた安方忠義傳は近年天保七丙申夏狂言に中村座にてせり名題は「世に善和相馬衛殿」といへり二番目は世話にてお房綱五郎等を入れ六月七日初日にて興行す作者中村重助室田壽助三升屋四郎等也この狂言見ざらんは残念にて七月廿九日見物する

に役割の瀧夜及姫後如月尼(二役うとふ安方)三役十太丸藤浪五やく九郎兵衛六やく藤内七役権兵衛八やく純友靈右市川九藏勤む良門二役頼信三やく二の瀬源吾四やく綱五郎五役大宅太郎右市村羽左衛門勤む鷺沼六郎二やくかけちか三やく左近四やく佐五郎今一役名を忘る右市川團三郎勤む小蝶前二やく錦木三役お房四役小糸右市川玉三郎也荒猪丸三役老熊三役佐七右大谷友右衛門なり大當りにはあらねども此狂言評判ありしなり斯の如く彼物語の趣向を今に至るまで狂言に仕組看官の目を悦ばする事翁が譽れといふべし

○ 肇に出せし京傳翁の像は姿の蛇柳といふ草紙の圖を摸寫せしなり其序に

櫻木にのぼるすがたは山王の

猿に三本たらぬ戯作者

京傳とあり

式亭三馬肖像



式亭三馬

名泰輔字久徳本町庵と號す通稱を菊地太助といふ遊戯堂洒落齋彫囉哩樓四季山人遊戯道人戯作舍滑稽堂等の數號あり本町二丁目に住して家製の薬を嚮きて業とす古今戯作者中の英才子なり
○墨川亭云三馬大人の父は八丈島なる爲朝大明神の祠官菊地壹岐守か妾腹の男子也割闕氏にて菊地茂兵衛といへり安永四乙未淺草田原町三丁目に住れ文政五子午年閏正月六日没す時年四十八深川雲光院に葬る

法號 歡譽喜樂奏天信士

辭世

善もせず悪もつくり死る身は

地藏も譽す煽魔しからず

○活東子云予往年柳島なる妙見の境内に建たる碑面を見し事有其か他は辭世の歌を代作にて「善もせず悪もつくり死る身は佛もほめず煽魔しからず」とありしやうなれどろおほへゆる再尋ぬべし
又云此辭世は須藤田宮といへる醫師が歌にて三馬に書しめて彼の境内へ建し碑也式亭が高名なるにより

て人皆さ思へると彼人自ら語られしと友人燕栗園(兩國橋吉川町書林山田佐助)の話也

(文政二年己卯三月上院建之○七十五翁○須藤多宮自詠○應需本町庵三馬書○碑の裏面に如此あり
安政七庚申年閏三月一日記活東子)

○中橋の書賈北林堂一年予が庵を訪ひし事あり物語の序にいふ三馬幼きより僕が家に仕へ長するに従ひ頗る奇才あり十七八歳の頃始て戯作をなしぬ後山下町なる書賈萬屋太治右衛門(號蘭香堂)が家の婿となりしが配偶の女病てみまかりし後彼家を出て四日市に古本類を商ふ小店をひらきしに其頃より専ら戯作をなしき石町新道に卜居せり近く本町へ移り住り西宮を名のるは春松軒西宮新六と懇意にてもらひたるとの話也

(活東子云予がきけるは本石町四丁目の書賈統月堂(堀野屋)が小僧也と或人云り北林堂か話も虚説なるべし)

○文政三壬辰年正月十六日子肇て本町庵に面會し知己となる前年(文政二己卯秋)淺草寺中におゐて諸人の競ひ視たる籠細工の觀物よりおもひ得たる戯作あ

るを號て時の花といへり梓に上さんとの心ならねど綴て小冊となし是を大人に見せたり大人一覽の後に云御作まことに感ずるに餘りあり吾門人三馬が梓にしたる籠細工見物譚には勝たる趣向といへども惜かな文辭古びて當世の風ならずと笑しのも種々の物語に及びしがその日は彼小冊をしばし貸せといはるゝによりて大人にかしたりそのゝちかの許を訪たりしが當時は世俗の流行詞にいつもお若いねといふこと専ら行れしなり大人は素より狂歌をよくして好屋翁をはじめとして其餘諸大家に交り厚く撰集の狂歌集ありてこの道にも長じたれば大人は笑種にもとて予もかの流行詞をとりて一首の腰折をものして見すがされ歌に

はやり詞さとりちかへて達磨さん

いつもお若いねといはるゝ

大人子にしめされしは此狂歌は書畫會席上にてものに贊など乞れて即興にするにはよしといへども近體の狂歌には得ならずと笑れしが後五七日を隔て面會のをり大人云おのれいぬる日さる席上にてかくぞ詠つると聞されたるざれ歌に

すだ堤老木もときにおくれずて

いつもお若い花のかほばせ

予また青柳といへる題にて

さえかへり山も霞の頭巾きて

めばかり出す峯の青柳

といふをかきつけていだしたるにさえかへりの五文字おだやかならねばうらゝかとし給ふべしといはれたるにつけておもへばいかにもそれにて山も霞の頭巾といへるがよく聞ふる様におもへりこの日大人が狂文にてもせられたる諸店報條といふもの五ひら六ひらまただうけ百人一首といふ小冊に序文を書れ一冊をおくられて日外貸おける予が拙著を返されき

(活東子云峯の青柳とは僻事也柳は山に生るものならず萬葉集卷四に青柳の葛木山爾云々とあれど

是は發話也此事既に加茂翁も説れたるをやかゝる事は誰もしりぬべけれどまだ知らぬ人もまれには

あるらむ故いさゝかおどろかしおく)

○一年彼書畫帖にかきてもらへる歌

爺か山の東方朔婆は川の西王母三千年のむかし昔還齡延壽の一期榮えし仙家の桃は有たとさ

その桃の根どひ葉どひのそれからは

のちもはなしの種ぞ残れる

○文政四辛巳の夏本町庵を訪ひてはなしのついでに己れ去年の夏寫山樓に遊しとき文晁翁の内室が物語にこのごろの流行唄にてふゝしづかにさしこめといふ囃子ありしを本町庵三馬がしかんゝのざれ歌に詠たりとてある人の來て物語きとてはなされしかどもそのかたはしも覺侍らずと大人にものがたりしかば去年の春の事なりその狂歌かきつけて進せんとして傍に在たる薄美濃の紙にとりあへずかきつけて送られたるざれ歌ども

榮之翁の書畫會ありける時隅田の櫻のかた書たるに

隅田堤老木も時におくれずと

いつもお若い花の顔ばせ

狂歌堂眞顔翁傍におはしけるが我も流行におくれじとて文晁翁が蝶のかた書たる扇に

今はやる人のかきたる繪扇は

蝶し静に腰にさしこめ

時は文政の三とせ彌生のはじめつかたなりき

式亭書

○書畫の會席に於て畫のかたに應じとりあへず贊のざれ歌をたゞちにあんじ書て人にあたふるものは三馬と故馬馬のみ大かたは雙ぶものなかるべし當意即妙奇といふべし

また一時大人みづから物語ていへらく己幼きころ伯母なるもの其大守公の奥殿に仕へまゐらせければおりゝ伯母へ對面のため奥殿へ至るごとに好む所なれば傍にありおふ冊子をとり讀むを其席へ來あはず仕女たちこの童は歳にも似氣なく書を讀ことゝの拙からず今の程よりかく文才に長じたれば後はいかなる者にかならんずらんなどいはれしが十三五歳の頃までに數多の戯曲本をもことゝく覽讀し十六七歳のころ戯作の志あり十八歳にして獨立にて始て天道浮世之出星操(三冊豐國畫西宮板寛政六寅年刊行)といふ黄表紙を著し出板しぬ此冊子を作るのはじめ夜寝るにも衾の袖より手をいだして稿を成たり草成てのち自ら戲號をなづけんとてさるべきと思へる兩三名を小さき紙にかきつけその紙を小さくおし捻て手づから傍に投てこれを又拾ひとりて得たる所の捻紙にか

きつけありし戯號は則式亭三馬にて有しかば是にて心を決し遂にこの號を用ひたりおしつゝきて年毎に一兩部づゝ著作せるうち寛政十二己未年俠太平記向鉢卷(三冊西宮板)といへるを著したるに人の嫌疑を得て其怒にふれ遂に公に訴られ輕からぬ御咎を蒙り書賈をはじめならびに父にもいたく劬勞をかけしかどもやがて賢き御惠をもて赦免を蒙りし後は父のしはば戯作の業を廢せよと諭どもかつてその道を捨す間ひとゝせを隔てまた著述をなしぬるがかの事よりして愚名ますゝ高く近頃に至り雷太郎の一作大に行れしより幸にして年々評判つよく世人にもてはやさるゝ事になりきといはれつ

(或る人云三馬はおかしきての歌なるべけれど馬馬は戯名の如く誤り多かるべし)

○大人が撰たる讀本に阿古義物語といへる五卷あり稿成て故一陽齋豐國が許に稿本わたりしかども一陽齋いかなる故ありてか繡繪半にして其後をふつに書れずやうやく遲滞に及びしかば(其故が半より末國貞が筆也)式亭憤を發しひごろ刎頸の交り厚きをかくまで己を蔑如にするその心根こそ悪けれとて自

ら一陽齋にいたりまのあたりにこのことをもて罵りその怠慢を責しかば豐國ぬし言を盡して詫たれども式亭が怒解けずこれより何となくたがひに隔心いできて此方にては吾作意する冊子には向後彼をして書しめじといへば彼方にても彼が作りたる冊子には吾ふつと書くまじなど罵りあひしが書賈伊賀屋文龜堂があつかひにて雙方和解し文化七庚申年文龜堂が上木せし一對男時花歌川といへる冊子は三馬子が編述するところにて前編六卷を一陽齋書きてこれを初日と稱へ後編六卷を一柳齋豐廣子書きてこれを後日と呼び初日後日二日替りの狂言のごとく執なしどころどころ兩子あひ書にせられたる所もありて一入興ふかく彫刻も細にいできて是をもて式亭と一陽齋が和睦の媒となし文龜堂發市に及びしかばめさき殊に變りて美しく面白き冊子なりとて看客の評判つよく行れたりきと云友一鳳齋國安子存生の内物語りぬ

○文政九戌年刻成たる梅精奇談魁雙紙といへる讀本五卷は浪速の書肆文金堂河内屋太助江戸の書賈仙鶴堂鶴屋喜右衛門とはかりて合梓にて發市に及べり繡繪は國安ぬし書けりいぬる文政三年辰の秋三馬子が

の草稿五卷を予に託して淨書せしむおのれ拙筆をもてしたゝめんも本意ならねば固辭しつれども許さず遂にその意に隨ひ毫をとりたれども遲筆にしてやゝ翌春におよび辛じて落成しぬ大人子にいへるは原この草紙のさしるは豐廣が男豐清をして畫しめたれども彼れ不幸にして世を早うしその畫半にも至らずしてその畫さしの繡繪三五丁を出し見せらるるさて其後國直に畫かせんとて稍久しく彼方へ遣し置たれども出来ざれば取戻したりとのはなしなりしこの春予か淨書畢てよりおよそ間ひとゝせを経て戌の春國安子が筆にて出たり又一時おのれ大人に語りていふ頃日我友なる光房といふが講釋にて源氏物語末摘花の卷を聴つるがこれはいさゝか戯作の扶助にもなりなやと問たれば大人こたへて素物語ものゝ隨一なれば諸人おほく和文辭をつらぬるにたすけとせざるものなしといへども戯作者の素意はさるむづかしきものにあらず貴君今より戯作をなして心を慰んどのおもひあらば源氏一部の講釋をもらさず聴にも及ばず源氏のこと水滸傳の事もすこしづゝ聞はづりしことあらは似つこらしきことをとりなして知たるふりに

書んこそ戯作者の専らとする所なれば餘り源氏にこり過てかやゝと笑ひさやゝと線ひじきなどの類なまごなしの源氏ぶりは聞もうるさしと戯作者の腹といふものはたゞ屋臺店の賣物にひとしく手裏劍うちたる唐茄子菟蕪の田樂も口はせもなんでも四文四文とり難ておかんこそ本意なれとて手を拍て笑れたりこの言いまおもひあたりてをかし

○また大人が冊子の稿を草する時三日三夜にして凡六七卷或は八九卷の物を脱成するはしばゝあり故に巻尾に三日三夜急案とことわりたる冊子も多かり文化のはじめ合卷讀本俱に流行し頃は三馬豐國等は諸方の書肆に種本寫本を乞需らるゝにその約束の期に後れ謹らるゝに苦しみて五日或は七日ばかりづゝ書肆の許に至り一間を借りて草稿を成しまたは繪を畫きぬとなりたとへば今日まで某甲が二階に在ば翌日は某乙が離舎に行きかなたこなた廻りゝて尙それにても手の届かたで約束の期におくれたる書房には責らるゝを苦みて其行先を知らせず後にやうやくにしてそれが方に廻り行ほどなりしといへり昔は今の如く作者の作料染賃などゝなづけて潤筆を取事なか